国道485号線道路改築事業（松江第五大橋道路）建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

南外２号墳・勝負遺跡

2007年12月

島根県教育委員会

国道485号線道路改築事業(松江第五大橋道路)建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ

南外2号墳・勝負遺跡

2007年12月

島根県教育委員会

序

島根県教育委員会では、島根県土木部の委託を受けて、平成17年度から国道485号道路改築事業(松江第五大橋道路)建設予定地内に存在する発掘調査を実施してきておりますが、このほど、初めての報告書を刊行する運びとなりました。

本報告書は松江市東津田町に所在する南外２号墳及び勝負遺跡について調査成果をまとめたものです。

南外２号墳は、一辺約12.5ｍの小規模な方墳ですが、古墳の造り方や古墳時代中期末における古墳の様相がよく分かるものとして注目されるものであります。また、勝負遺跡では、縄文時代後期前半、弥生時代後期、古墳時代中期の住居跡が数棟見つかり、当時の生活や文化の一端が明らかになりました。

本報告書が、地域の歴史を解明する手がかりとなり、郷土の歴史と埋蔵文化財に対する理解と関心を高める一助となれば幸いです。

最後になりましたが、本書を刊行するにあたりご協力をいただきました地元の方々、松江市教育委員会、島根県土木部高規格道路事務所、その他関係機関、関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成19年12月

島根県教育委員会
教育長　藤　原　義　光

本　文　目　次

第１章　調査の経過 ……（川原）…… 1
　１．調査にいたる経緯 …… 1
　２．調査の経過 …… 1
　３．整理作業の経過 …… 2

第２章　遺跡の位置と環境 ……（由利）…… 3

第３章　調査の成果 ……（川原）……11
　第１節　調査の概要 ……11
　第２節　南外２号墳の調査 ……14
　　１．墳丘の構造 ……14
　　２．主体部 ……20
　　３．箱式石棺 ……20
　　４．出土遺物 ……21
　第３節　勝負遺跡の調査 ……（川原）……23
　　１．住居跡（ＳＩ、ＳＢ） ……23
　　ＳＩ０１～ＳＩ０５、ＳＢ０１
　　２．段状遺構（ＫＤ） ……76
　　ＫＤ０１～ＫＤ１０
　　３．溝状遺構（ＳＤ） ……86
　　ＳＤ０１～ＳＤ０７
　　４．土坑（ＳＫ） ……89
　　ＳＫ０１～ＳＫ０６
　　５．その他の遺構 ……93
　　土坑・ピット群
　　土器溜まり１、土器溜まり２
　　６．包含層 ……100
　　１区～３区の出土遺物
　　４区の出土遺物
　第４節　総括 ……（川原）……118
　　１．南外２号墳の調査 ……118
　　２．勝負遺跡の調査 ……125

例　言

1．本書は島根県土木部の委託を受けて、島根県教育委員会が平成17年度に実施した国道485号道路改築事業(松江第五大橋道路)建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．本書で扱う遺跡は次のとおりである。

島根県松江市東津田町2128－１番地他　　南外２号墳
同　　2140－５番地他　　勝負遺跡

3．調査組織は次のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会

平成17年度　　現地調査

［事務局］卜部吉博（埋蔵文化財センター所長）・永島静司（同総務グループ課長）
塩野由美子（同主幹）広江耕史（同主幹）

［調査員］川原和人（同調査第１グループ課長）松崎恵美子（同調査補助員）
油利崇（同調査補助員）

［遺物整理］河野真由美（同内業作業員）松島春恵（同内業作業員）

平成18年度　　報告書作成

［事務局］卜部吉博（埋蔵文化財センター所長）坂本憲一（同総務グループ課長）
塩野由美子（同主幹）広江耕史（同主幹）

［調査員］川原和人（同調査第１グループ課長）油利崇（同調査補助員）

［遺物整理］土谷美鈴（同内業作業員）

4．現地調査・資料整理に当たっては、以下の方々の指導・助言を受けた。

田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）
渡辺貞幸（島根大学法文学部教授）山田康弘(島根大学法文学部助教授)
岡村道雄(奈良文化財研究所企画調整部長）中村唯史（財団法人三瓶フィールドミュージアム学芸員）
千葉豊(京都大学大学院助手）渡辺誠（名古屋大学名誉教授）

5．挿図中北は測量法による第３座標系Ｘ軸方向を示す。平面直角座標系ＸＹ座標は日本測量地系による。レベル高は海抜高さを示す。

6．本書の第２図は大正４年帝国陸地測量部作成1／2500地図を使用して作成したものである。

7．本書掲載の第８表･第10表･第11表・第12表は報告書を参照して作成したものである。

8．本書に掲載した写真のうち空撮は株式会社ワールドが撮影し、その他の写真は調査員の他、是田敦(埋蔵文化財調査センター文化財保護主任)が撮影した。

9．本書に掲載した実測図の作成･浄書は調査員が行なった。

10．本書の執筆は川原、油利が分担して行い、その文責を目次に記した。編集は川原が行なった。

11．本書掲載の遺跡出土遺物及び実測図、写真などの資料は島根県教育庁埋蔵文化財調査センター(松江市打出町33番地)で保管している。

表　目　次

第１表　南外２号墳・勝負遺跡と周辺の遺跡…… 6
第２表　勝負遺跡の調査一覧表…… 7
第３表　石台遺跡の調査一覧表…… 7
第４表　ＳＩ０１出土土器数量表……29
第５表　ＳＩ０１出土石器数量表……30
第６表　ＳＩ０１出土ピット・土坑計測表……30
第７表　ＳＢ０１ピット計測表……30
第８表　出雲地方における前期～中期古墳の墳丘築造一覧表 ……123
第９表　ＳＩ０１出土粗製土器一覧表 ……126
第10表　島根県における縄文時代後晩期の住居跡一覧表 ……129
第11表　出雲東部における弥生時代中期～後期の集落形態一覧表 ……132
第12表　出雲東部における古墳時代中期の住居跡一覧表 ……136
第13表　南外２号墳・勝負遺跡出土土器観察表 ……139
第14表　南外２号墳出土古銭観察表 ……145
第15表　勝負遺跡出土鉄製品観察表 ……145
第16表　勝負遺跡出土玉類観察表 ……145
第17表　勝負遺跡出土石器観察表 ……146
第18表　南外２号墳・勝負遺跡遺構一覧表 ……148
第19表　勝負遺跡出土石材数量表 ……148
第20表　ＳＩ０２ピット・土坑計測表 ……149
第21表　ＳＩ０３ピット・土坑計測表 ……149
第22表　ＳＩ０４ピット計測表 ……149
第23表　ＳＩ０５ピット・土坑計測表 ……149
第24表　ＫＤ０６ピット計測表 ……149

挿　図　目　次

第１図　南外２号墳・勝負遺跡位置図…… 2
第２図　南外２号墳・勝負遺跡と周辺の遺跡…… 4
第３図　勝負遺跡・石台遺跡調査区配置図…… 6
第４図　南外２号墳・勝負遺跡全体図…… 9 ・10
第５図　調査前地形測量図……12
第６図　調査後地形測量図・遺構配置図……13
第７図　南外２号墳調査前墳丘測量図……15
第８図　南外２号墳調査後墳丘測量図……15
第９図　南外２号墳墳丘土層図……16
第10図　南外２号墳墳丘構造概念図……17

第11図　南外２号墳主体部実測図……18
第12図　南外２号墳須恵器出土状況図……19
第13図　箱式石棺実測図……19
第14図　南外２号墳出土遺物実測図……22
第15図　勝負遺跡ＳＩ０１実測図……24
第16図　勝負遺跡ＳＩ０１断面図……25
第17図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器分布図……26
第18図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器接合関係分布図……26
第19図　勝負遺跡ＳＩ０１出土黒曜石分布図……27
第20図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器分布図……27
第21図　勝負遺跡ＳＩ０１中央ピット実測図……28
第22図　勝負遺跡ＳＢ０１実測図……29
第23図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図１……31
第24図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図２……32
第25図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図３……34
第26図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図４……36
第27図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図５……38
第28図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図６……40
第29図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図１……41
第30図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図２……42
第31図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図３……43
第32図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図４……45
第33図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図５……46
第34図　勝負遺跡ＳＩ０２・ＳＤ０１実測図……49
第35図　勝負遺跡ＳＩ０２・ＳＤ０１出土遺物実測図……50
第36図　勝負遺跡ＳＩ０３・ＳＤ０２実測図……51
第37図　勝負遺跡ＳＩ０３遺物出土状況図・土層図……52
第38図　勝負遺跡ＳＩ０３土器出土状況図……53
第39図　勝負遺跡ＳＤ０２実測図……54
第40図　勝負遺跡ＳＩ０３・ＳＤ０２出土遺物実測図……55
第41図　勝負遺跡ＳＩ０３出土遺物実測図……56
第42図　勝負遺跡ＳＩ０４実測図……58
第43図　勝負遺跡ＳＩ０４炭化材及び土器出土状況図……59
第44図　勝負遺跡ＳＩ０４出土遺物実測図……61
第45図　勝負遺跡ＳＩ０５実測図……63
第46図　勝負遺跡ＳＩ０５遺物出土状況図……64
第47図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図１……66
第48図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図２……68
第49図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図３……70

第50図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図４……73
第51図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図５……74
第52図　勝負遺跡ＫＤ０１実測図……76
第53図　勝負遺跡ＫＤ０２～ＫＤ０５実測図……77
第54図　勝負遺跡ＫＤ０２～ＫＤ０５出土遺物実測図１……79
第55図　勝負遺跡ＫＤ０２～ＫＤ０５出土遺物実測図２……80
第56図　勝負遺跡ＫＤ０６実測図及び出土遺物実測図……82
第57図　勝負遺跡ＫＤ０７実測図……83
第58図　勝負遺跡ＫＤ０８・０９及び出土遺物実測図……84
第59図　勝負遺跡ＫＤ１０実測図……85
第60図　勝負遺跡ＳＤ０３及び出土遺物実測図……86
第61図　勝負遺跡ＳＤ０４・０５及び出土遺物実測図……87
第62図　勝負遺跡ＳＤ０６実測図……88
第63図　勝負遺跡ＳＤ０７実測図……88
第64図　勝負遺跡ＳＫ０１～０３及び出土遺物実測図……90
第65図　勝負遺跡ＳＫ０４～０６及び出土遺物実測図……91
第66図　勝負遺跡土坑・ピット群及び出土遺物実測図……93
第67図　勝負遺跡４区土器溜まり１出土遺物実測図……94
第68図　勝負遺跡４区遺構全体図……95
第69図　勝負遺跡４区土器溜まり２出土遺物実測図１……97
第70図　勝負遺跡４区土器溜まり２出土遺物実測図２……98
第71図　勝負遺跡１区～３区包含層出土遺物実測図１……101
第72図　勝負遺跡１区～３区包含層出土遺物実測図２……102
第73図　勝負遺跡４区北西壁土層図……103
第74図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図１……105
第75図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図２……107
第76図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図３……109
第77図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図４……111
第78図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図５……113
第79図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図６……115
第80図　南外２号墳墳丘築造工程図……119
第81図　出雲地方における前期～中期古墳の墳丘築造方法１……121
第82図　出雲地方における前期～中期古墳の墳丘築造方法２……122
第83図　出雲東部における弥生時代中期～後期の集落形態１……133
第84図　出雲東部における弥生時代中期～後期の集落形態２……134

図　版　目　次

図版１　南外２号墳･勝負遺跡　遠景（南から）……151
南外２号墳･勝負遺跡　遠景（南東から）……151
図版２　南外２号墳･勝負遺跡　遠景（北西から）……152
南外２号墳･勝負遺跡　遠景（真上から）……152
図版３　南外２号墳墳丘（南から）……153
南外２号墳墳丘土層（北西から）……153
図版４　南外２号墳墳丘南北土層（北西から）……154
南外２号墳墳丘東西土層（南から）……154
図版５　勝負遺跡ＳＩ０１炉跡検出状況遠景（北東から）……155
勝負遺跡ＳＩ０１炉跡土層（北から）……155
図版６　南外２号墳･勝負遺跡　遠景（北西から）……156
南外２号墳･勝負遺跡調査前近景（北から）……156
図版７　南外２号墳調査前近景（北から）……157
南外２号墳墳丘（南から）……157
図版８　南外２号墳主体部検出状況（南から）……158
南外２号墳主体部内須恵器出土状況　遠景（南から）……158
図版９　南外２号墳主体部内須恵器出土状況（西から）……159
南外２号墳主体部内須恵器出土状況（南から）……159
図版10　南外２号墳主体部内須恵器出土状況　近景……160
南外２号墳墳丘土層（南東から）……160
図版11　南外２号墳墳丘土層（北西から）……161
南外２号墳墳丘南北土層（北西から）……161
図版12　南外２号墳墳丘東西土層（北から）……162
南外２号墳墳丘東西土層（南から）……162
図版13　南外２号墳南側墳裾土層（東から）……163
南外２号墳西側墳裾土層（北から）……163
図版14　南外２号墳東側墳裾土層（南から）……164
箱式石棺（北から）……164
図版15　勝負遺跡３区完掘状況（西から）……165
勝負遺跡３区完掘状況（北西から）……165
図版16　勝負遺跡４区完掘状況（東から）……166
勝負遺跡２区完掘状況（南から）……166
図版17　勝負遺跡ＳＩ０１完掘（北西から）……167
勝負遺跡ＳＩ０１完掘　近景（北東から）……167
図版18　勝負遺跡ＳＩ０１遺物出土状況（北東から）……168
勝負遺跡ＳＩ０１土層（東から）……168
図版19　勝負遺跡ＳＩ０１炉跡検出状況遠景（北東から）……169
勝負遺跡ＳＩ０１炉跡検出状況近景（北東から）……169
図版20　勝負遺跡ＳＩ０１炉跡土層（北から）……170

勝負遺跡ＳＩ０１炉跡完掘状況（北東から）……170
図版21　勝負遺跡ＳＩ０２完掘状況（北西から）……171
勝負遺跡ＳＩ０２遺物検出状況（北西から）……171
図版22　勝負遺跡ＳＩ０２遺物検出状況　近景（南から）……172
勝負遺跡ＳＤ０１土層（西から）……172
図版23　勝負遺跡ＳＩ０３完掘状況（北西から）……173
勝負遺跡ＳＩ０３東西土層（南から）……173
図版24　勝負遺跡ＳＩ０３南北土層（南東から）……174
勝負遺跡ＳＩ０３中央ピット遺物出土状況……174
図版25　勝負遺跡ＳＩ０３中央ピット土層……175
勝負遺跡ＳＩ０３中央ピット完掘状況……175
図版26　勝負遺跡ＳＩ０３土器出土状況（北西から）……176
勝負遺跡ＳＩ０３壁際土器出土状況　近景……176
図版27　勝負遺跡ＳＩ０３鉄器出土状況……177
勝負遺跡ＳＤ０２土層（東から）……177
図版28　勝負遺跡ＳＩ０４遠景（東から）……178
勝負遺跡ＳＩ０４（西から）……178
図版29　勝負遺跡ＳＩ０４（北から）……179
勝負遺跡ＳＩ０４遺物出土状況（北から）……179
図版30　勝負遺跡ＳＩ０４土層（南から）……180
勝負遺跡ＳＩ０４土器出土状況……180
図版31　勝負遺跡ＳＩ０４炭化材出土状況（西から）……181
勝負遺跡ＳＩ０４炭化材断面……181
図版32　勝負遺跡ＳＩ０５完掘状況（西から）……182
勝負遺跡ＳＩ０５完掘状況（北から）……182
図版33　勝負遺跡ＳＩ０５遺物出土状況　遠景（北から）……183
勝負遺跡ＳＩ０５遺物出土状況　近景……183
図版34　勝負遺跡ＳＩ０５遺物検出状況　近景……184
勝負遺跡ＳＩ０５遺物検出状況　近景……184
図版35　勝負遺跡ＫＤ０１完掘状況（東から）……185
勝負遺跡ＫＤ０１土層（西から）……185
図版36　勝負遺跡ＫＤ０２～ＫＤ０５完掘状況（北西から）……186
勝負遺跡ＫＤ０４袋状鉄斧出土状況……186
図版37　勝負遺跡ＫＤ０６完掘状況（北西から）……187
勝負遺跡ＫＤ０６土層（北西から）……187
図版38　勝負遺跡ＫＤ０６土器出土状況（北東から）……188
勝負遺跡ＫＤ０７土層（北西から）……188
図版39　勝負遺跡ＫＤ０８・０９完掘状況（南から）……189
勝負遺跡ＫＤ０８土層（南から）……189
図版40　勝負遺跡ＫＤ１０完掘状況　（北から）……190
勝負遺跡ＫＤ１０土層　（南から）……190

図版41　勝負遺跡ＳＤ０３完掘状況　遠景（北東から）……191
勝負遺跡ＳＤ０３完掘状況　近景（北東から）……191
図版42　勝負遺跡ＳＤ０４・０５完掘状況（南から）……192
勝負遺跡ＳＤ０４・０５土層（北から）……192
図版43　勝負遺跡ＳＤ０４土器出土状況……193
勝負遺跡ＳＤ０７完掘状況（西から）……193
図版44　勝負遺跡ＳＫ０１土器出土状況（北西から）……194
勝負遺跡ＳＫ０１完掘状況（北西から）……194
図版45　勝負遺跡ＳＫ０２石器出土状況（南東から）……195
勝負遺跡ＳＫ０２完掘状況……195
図版46　勝負遺跡ＳＫ０３土層……196
勝負遺跡ＳＫ０３完掘状況……196
図版47　勝負遺跡ＳＫ０４土器出土状況（東から）……197
勝負遺跡ＳＫ０４完掘状況……197
図版48　勝負遺跡ＳＫ０５土層……198
勝負遺跡ＳＫ０５完掘……198
図版49　勝負遺跡ＳＫ０６土層……199
勝負遺跡ＳＫ０６完掘……199
図版50　勝負遺跡土坑・ピット群完掘状況（南東から）……200
勝負遺跡土坑・ピット群完掘状況（北西から）……200
図版51　勝負遺跡４区土層（北西から）……201
勝負遺跡４区土器溜まり１……201
図版52　勝負遺跡４区土器溜まり２（遠景）……202
勝負遺跡４区土器溜まり２（近景）……202
図版53　南外２号墳出土須恵器……203
図版54　南外２号墳出土須恵器……204
南外３号墳出土古銭……204
図版55　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……205
図版56　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……206
勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……206
図版57　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……207
勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……207
図版58　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……208
勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……208
図版59　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……209
勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……209
図版60　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器……210
図版61　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器……211
図版62　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器……212
勝負遺跡ＳＩ０１出土石器……212
図版63　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器……213

勝負遺跡ＳＩ０１出土石器 ……213
図版64　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器 ……214
図版65　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器 ……215
勝負遺跡ＳＩ０１炉跡出土炭化物 ……215
図版66　勝負遺跡ＳＩ０２・ＳＩ０３出土土器 ……216
図版67　勝負遺跡ＳＩ０３出土遺物 ……217
図版68　勝負遺跡ＳＩ０４出土土器 ……218
図版69　勝負遺跡ＳＩ０５出土土器 ……219
図版70　勝負遺跡ＳＩ０５出土土器 ……220
勝負遺跡ＳＩ０５出土土器 ……220
図版71　勝負遺跡ＳＩ０５出土土器 ……221
図版72　勝負遺跡ＳＩ０５出土土器 ……222
図版73　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物 ……223
図版74　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物 ……224
図版75　勝負遺跡ＫＤ０２～０５出土土器 ……225
図版76　勝負遺跡ＫＤ０２～０６出土遺物 ……226
図版77　勝負遺跡ＫＤ０６～０８出土土器 ……227
勝負遺跡ＳＤ０３・０４出土土器 ……227
図版78　勝負遺跡ＳＫ０１～０４出土遺物 ……228
勝負遺跡土坑・ピット群、土器溜まり１出土土器 ……228
図版79　勝負遺跡土器溜まり２出土土器 ……229
図版80　勝負遺跡土器溜まり２出土遺物 ……230
図版81　勝負遺跡１～３区包含層出土土器 ……231
勝負遺跡１～３区包含層出土土器 ……231
図版82　勝負遺跡１～４区包含層出土土器 ……232
図版83　勝負遺跡４区包含層出土土器 ……233
図版84　勝負遺跡４区包含層出土土器 ……234
勝負遺跡４区包含層出土土器 ……234
図版85　勝負遺跡４区包含層出土土器 ……235
図版86　勝負遺跡４区包含層出土土器 ……236
図版87　勝負遺跡４区包含層出土土器 ……237
図版88　勝負遺跡４区包含層出土土器 ……238
勝負遺跡４区包含層出土土器 ……238
図版89　勝負遺跡４区包含層出土土器 ……239
図版90　勝負遺跡出土石器 ……240
勝負遺跡出土石器 ……240
図版91　勝負遺跡出土石器 ……241
勝負遺跡出土石器 ……241
図版92　勝負遺跡出土石器 ……242
勝負遺跡出土石器 ……242

第１章　調査の経過

１．調査にいたる経過

松江第五大橋道路は、松江市の都市機能の強化や渋滞緩和等を目標とした地域高規格道路で、国道431号川津バイパスと国道９号松江道路とをつなぐ延長5.2kmの道路である。この道路は昭和62年に松江市総合交通体系調査で東循環道路の位置づけがなされ、平成７年に「松江第五大橋(仮称)計画検討委員会」が設置され本格的に取り組むこととなった。６回あまりの検討委員会をへて平成11年に基本ルートが発表された。埋蔵文化財の調査については、平成12年２月４日付で県土木部から遺跡の分布調査の依頼が県教育委員会にあり、同年２月28日から３月10日にかけて現地踏査を実施し、ルートの周辺に50あまりの遺跡が存在していることが分かった。その中で松江ジャンクション付近から見つかった前方後円墳は、最終ルート決定を行なう上で重要な鍵をにぎるものであることから、平成12年７月31日～８月４日にかけて調査を実施した。その結果この古墳は全長20ｍあまりの前方後円墳であることが判明したが道路予定地から外れていることも分った。遺跡分布調査及び古墳調査の結果については、平成13年４月11日付けで県土木部に正式に回答し、これを受けて同年９月には県土木部、県教育委員会、松江市教育委員と遺跡の取り扱いについて協議を行ない、調査の対象遺跡は18あまりとなった。その後、地元説明会や都市計画決定の準備を行ない、平成15年９月に整備区間の指定があり新規事業として採択された。県土木部は文化財保護法に基づく発掘届けを平成17年３月24日付で提出し、本格的に埋蔵文化財の調査を実施することになった。そして、松江ジャンクションに存在している松江市東津田町の勝負遺跡、南外２号墳等について平成17年３月24日付けで調査の依頼があり、平成17年度から調査を実施することとなった。

２．調査の経過

平成17年度の松江第五大橋道路に伴う発掘調査は調査員１名、調査補助員２名の計３名の調査体制で行なった。調査はまず５月12日から25日にかけて54本あまりのトレンチを設定して行ない、全面調査の範囲を4300㎡あまりとし、７月８日から翌年の１月10日にかけて本調査を実施した。以下、調査の経過を記述する。

平成17年

４月28日　調査事務所設置
５月10日　調査の準備作業を開始
12日　トレンチ調査を開始
25日　トレンチ調査終了　全面調査4300㎡確定
31日　伐採開始
６月21日　地形測量終了
７月５日　全面調査に伴う土木部との協議を行なう。
８日　全面調査開始　南外２号墳から開始
29日　重機による表土掘削終了
８月８日　勝負遺跡谷部の調査に入る。
17・18日　勝負遺跡北側の畑地のトレンチ調査を実施

9月1日　弥生住居跡ＳＩ０１を検出
9日　弥生住居跡ＳＩ０２を検出
10月3日　縄文住居跡ＳＩ０３、弥生住居跡ＳＩ０４を検出
19日　南外２号墳主体部の輪郭確認
21日　谷部から古墳時代の住居跡ＳＩ０５を検出
11月9日　島根県文化財保護審議会委員田中義昭氏、島根大学助教授山田康弘氏から指導を受ける。
12月1日　調査の成果について県庁記者室で記者発表を行なう。
4日　現地説明会を行なう。
5・6日　勝負遺跡北側の水田でトレンチ調査を行なう。
9日　遺跡全体の空撮を行なう。
21日　作業員作業終了

平成18年
1月10日　調査終了

3．整理作業の経過

平成18年度の松江第五大橋道路に係わる埋蔵文化財発掘調査は松江市西尾町に所在する遺跡を行なう予定であったが、用地取得が遅れ、一部のトレンチ調査しか入れない状況になったので平成17年度に調査した勝負遺跡及び南外２号墳の整理作業を行なうこととなった。整理作業は調査員１名、調査補助員１名、整理作業員３名で行った。

第１図　南外２号墳・勝負遺跡位置図

第２章　遺跡の位置と環境

南外２号墳・勝負遺跡は松江市東津田町字南外に所在し、茶臼山から派生し、馬橋川の東側に広がる丘陵上に立地する。遺跡から北には平野が広がり、大橋川までの一帯を見渡すことができる。当地域は国道９号バイパス松江道路や内陸工業団地の建設などで地形が大きく改変されているため、大正期の地形図で周辺の遺跡を紹介していきたい（第２図、第１表）。

この周辺の遺跡としては、縄文時代には石台遺跡、保地遺跡などがある。石台遺跡は、後期～晩期の土器、石器が多く出土しており、遺構は炉跡の可能性のある集石遺構や、晩期の炭化米が出土した土坑などが見つかっている。保地遺跡では後期の土器や石鏃などが採集されている。勝負遺跡でも今回、後期の竪穴住居跡や土坑などが見つかり、これらの遺跡間の関係から当時の生活の様子を窺い知ることができるかもしれない。

弥生時代には台地上や丘陵斜面に集落が営まれ、勝負遺跡をはじめとして石台遺跡、平所遺跡などの集落遺跡がある他、古志原遺跡では石斧など弥生時代と思われる遺物が採集されている。平所遺跡では玉作工房跡も見つかっている。また、墓としては間内越墳丘墓や来美墳丘墓などの小型の四隅突出型墳丘墓が造営されている。

古墳時代の集落は、勝負遺跡の他にタルミⅣ遺跡、寺山小田遺跡がある。寺山小田遺跡は古墳時代中期の集落で、丘陵斜面に竪穴住居跡２棟と掘立柱建物２棟などが出ている。住居の廃棄に多数の土器を投げ込んでいることや、高坏の割合が非常に高いなどの特徴が勝負遺跡と類似している。そこでは鉄製品、玉類の出土が多く、床面で滑石製臼玉がつながれた状態で出土するなど良好な出土状態で見つかっている。

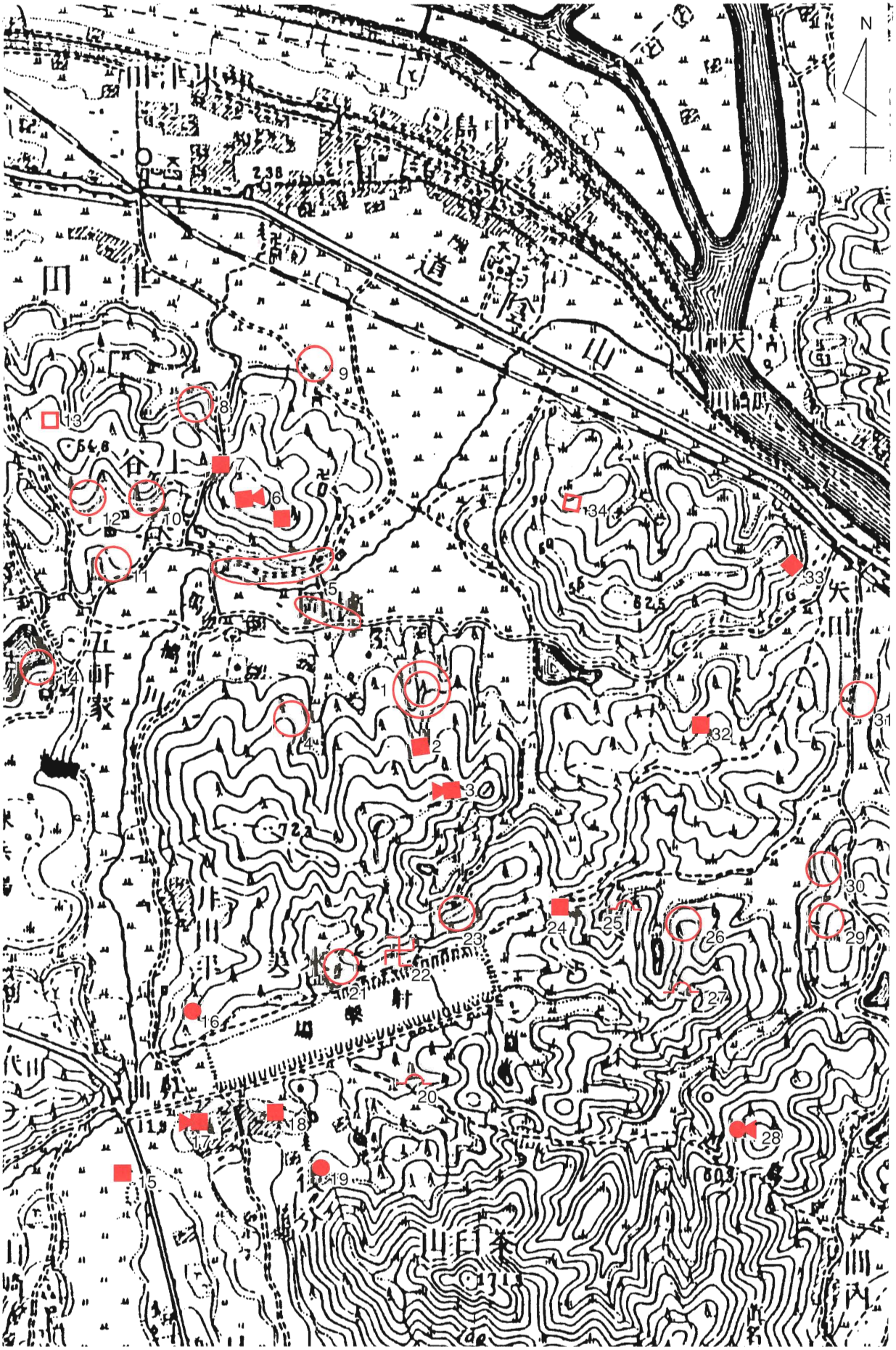
馬橋川流域には、丘陵上に多くの古墳が存在する。石屋古墳（方墳40ｍ）、大庭鶏塚（方墳42ｍ）、山代二子塚（前方後方墳92ｍ）、山代方墳（方墳55ｍ）など大規模古墳が密集する地域である。

その一方で今回調査した南外古墳群のような中小規模の古墳も台地ごとに造られていることが分かる。東光台古墳群、高杉古墳群、井出平古墳群、喰ヶ谷古墳群等があり、特に高杉古墳群は南外古墳群と馬橋川を挟んで対岸に同等規模の前方後方墳と方墳があり、その関係は興味深い。ほかにも、室藤古墳群や才ノ峠古墳群など類似した古墳群は多くあり、それらとの関係も論じていく必要があろう。東光台古墳群は工事中の発見で、墳丘は不明であるが箱式石棺内部には額に赤色顔料の付着した成人骨があり、２枚の板石をＶ字形に側壁に立てかけて枕にしていた。また、喰ヶ谷１号墳では石棺内に須恵器蓋坏が２個ずつふせて重ねて安置しており、南外２号墳と同じく枕の役割を果たしていたと推定される。

横穴墓群も十王免横穴墓、狐谷横穴墓、勝負横穴墓等があり、横穴墓密集地域であるといえる。その付近の丘陵は新第三紀中新世に属する砂岩を主とした地層から成っており、横穴構築には格好の地質をしている。特に十王免横穴墓群や狐谷横穴墓群は出雲のなかでも大規模な横穴墓群であり、隣接した丘陵で時期的にも並行しているため相互に密接な関係があったのであろう。これらのなかには石棺を内蔵するものや、壁に線刻画が認められたもの等があり、バラエティ豊かな様相が見られる。

律令時代に入ると、山代郷北新造院として来美廃寺といった氏寺が建立されており、出雲国庁、出雲国分寺のある意宇平野周辺は出雲国の中心といえる位置にあった。

これらの遺跡の中でも勝負遺跡と石台遺跡は、隣接した位置にある集落跡としてとくに密接な関



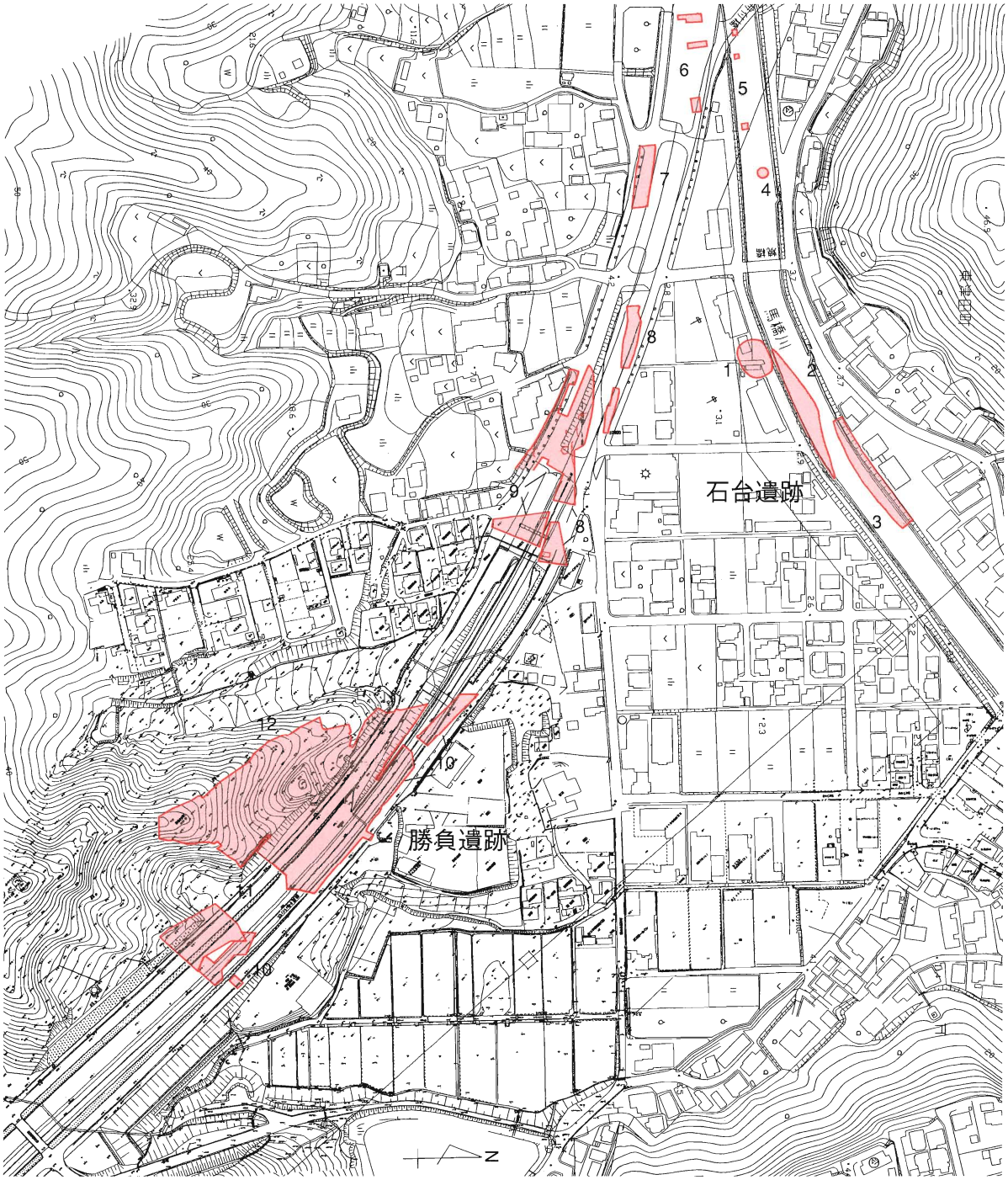
第２図　南外２号墳・勝負遺跡の位置と周辺の遺跡（1：12500）

第１表　南外２号墳・勝負遺跡と周辺の遺跡

No	遺跡名	種別	主　な　遺　構	主　な　遺　物
1	勝負遺跡	集落跡	竪穴住居跡	須恵器　土師器　鉄器
2	南外2号墳	古墳	方墳（一辺12.5ｍ）	須恵器蓋坏
3	南外1号墳	古墳	前方後方墳（約20ｍ）	
4	上谷遺跡	散布地	横穴墓	須恵器　管玉
5	石台遺跡	散布地	縄文集石遺構 弥生竪穴住居跡	縄文土器　弥生土器　石器
6	高杉古墳群	古墳	１号墳：前方後方墳（26.5ｍ） ２号墳：方墳（一辺11.5ｍ）	
7	伝兵衛山古墳	古墳	方墳	
8	伝兵衛山古墓	墓	五輪塔２基以上	
9	鷹日神社前遺跡	散布地		石斧
10	タルミⅠ遺跡	散布地		黒曜石
11	タルミⅢ遺跡	散布地		須恵器　土師器
12	タルミⅣ遺跡	集落跡		須恵器　土師器
13	根屋古墳	古墳	前方後方墳？	
14	古志原遺跡	散布地		石斧　石鏃
15	大庭鶏塚	古墳	方墳，一辺42ｍ	
16	井出平古墳群	古墳群	１号墳：円墳（14.8m×13.7m） ２号墳：方墳（9.5m×9.5m）	玉類　須恵器　土師器高坏 埴輪　須恵器坏
17	山代二子塚古墳	古墳	前方後方墳（92ｍ）	
18	山代方墳	古墳	方墳（45ｍ×40ｍ），石棺式石室	
19	永久宅後古墳	古墳	石棺式石室	
20	狐谷横穴墓群	横穴群	40穴以上	
21	来美遺跡	散布地		
22	来美廃寺	寺院跡	基壇　礎石	瓦
23	来美東遺跡	古墳群 集落	方墳２基 住居跡推定地	
24	来美墳丘墓	墳丘墓	四隅突出型墳丘墓（13.5m×10.5m） 墓坑７基	弥生土器
25	勝負横穴墓群	横穴群		
26	寺山小田遺跡	集落跡	竪穴住居跡，掘立柱建物	土師器　鉄製品　玉類
27	十王免横穴墓群	横穴群	38穴	金環など
28	廻田古墳群	古墳群	１号墳：前方後円墳（59m）ほか	土師器
29	平所遺跡	集落跡 窯跡	竪穴住居跡 埴輪窯跡	
30	間内越墳丘墓	墳丘墓	四隅突出型墳丘墓（8.8m×6.7m）	
	間内越遺跡	集落跡？	加工段	
31	保地遺跡	散布地		縄文時代後期土器　弥生土器　石鏃
32	保地古墳群	古墳群	４基（詳細不明）	
33	石屋古墳	古墳	方墳　40ｍ×40ｍ	
34	東光台古墳群	古墳群	墳丘不明（箱式石棺） 横穴墓（家形、内部に箱式石棺）	成人骨1体（前頭部に赤色顔料付着）

係にあることが想定されるため、それぞれの調査歴をまとめておきたい（第３図、第２・３表）。

石台遺跡は北流する馬橋川が急激に東に流れを変えた地域の、中洲から低丘陵までの一帯を占め、丘陵部は勝負遺跡と150ｍほどしか離れていない。馬橋川改修工事にともなう調査では中州などの沖積地を、国道９号松江道路建設工事に伴う調査では主に丘陵部を発掘している。まず、沖積地の調査として、石台遺跡の北側にあたる馬橋川改修工事に伴うものをみていく。石台遺跡は、1976年馬橋川改修工事中に恩田清氏によって多くの縄文時代後期～晩期の土器、石器などが採集されたことがきっかけで知られることとなった。その後すぐに調査が行われ炉跡状遺構なども確認される（第３図１）。とくに大型打製石斧や縄文時代晩期の籾圧痕のある土器は縄文農耕の存在を示す資料として大きく議論された。同じころ、片岡義貞氏によって焼橋上流約50mの位置では、南関東の弥生時代中期の土器である須和田式土器も採集されている（第３図４）。その後の1982年の調査でも、集石状遺構が確認され、この周辺に縄文時代の生活跡の存在が想定される（第３図３）。しかしこの地点の遺物は大半が中世に属するもので、縄文～弥生時代の遺物は少ない。1983年にも同じ地点



第３図　勝負遺跡・石台遺跡調査区配置図（S=1/4000）

第２表　勝負遺跡の調査一覧表

調査年	発行年	調査地点（第３図）	概　　要	文　　献
1980	1983	10	弥生後期の竪穴住居跡２棟 古墳中期の竪穴住居跡２棟など	柳浦俊一1983「勝負遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』
1989	1992	11	弥生後期の竪穴住居跡５棟 古墳中期の竪穴住居跡13棟など	広江耕史・藤井和久1992『一般国道９号松江道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅸ（勝負遺跡）』 建設省松江国道工事事務所　島根県教育委員会
2006	2007	12	縄文後期の竪穴住居跡１棟 弥生後期の竪穴住居跡３棟以上 古墳中期の竪穴住居跡１棟以上など	今回報告

第３表　石台遺跡の調査一覧表

調査年	発行年	調査地点（第３図）	概　　要	文　　献
1976	1977	1	馬橋川改良工事に伴う調査 縄文晩期（突帯文）の籾痕土器など	前島己基1977「籾痕のついた縄文土器の破片」『季刊文化財』第31号　島根県文化財愛護協会 岡崎雄二郎・恩田清1978「石台遺跡について」『松江考古』創刊号
	1991	4	須和田式土器採集	江川幸子・中村友博・松本岩雄1991「松江市石台遺跡採集の須和田式土器」『島根考古学会誌』第８集　島根考古学会
1978		5	馬橋川改良工事に伴う調査 遺物なし	
1980	1981	6	国道９号バイパス建設工事に伴う調査 遺構・遺物なし	内田律夫1981「石台遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ』 建設省松江国道工事事務所　島根県教育委員会
1980 1981	1983	7,8	国道９号バイパス建設工事に伴う調査 掘立柱建物や住居跡状遺構など	足立克己1983「石台遺跡」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』 建設省松江国道工事事務所　島根県教育委員会
1982	1983	3	馬橋川改修工事に伴う試掘調査 集石遺構？ 鎌倉初期の陶器、土師質土器多数	足立克己1983「松江・石台遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書第Ｘ集』島根県教育委員会
1983	1986	3	足立1983の結果を受けて本調査 主に平安末～鎌倉の土器出土	片岡詩子1986『石台遺跡－馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告－』島根県教育委員会
1987	1988	2	馬橋川改修工事に伴う試掘調査 縄文晩期の土坑から炭化米出土	江川幸子・内田律雄1988「石台遺跡の試掘調査－炭化米を出土した縄文晩期の土壙」 『季刊文化財』第62号　島根県文化財愛護協会
1988	1989	9	国道９号バイパス建設工事に伴う調査 足立1983の隣接地点の調査 弥生後期初頭の竪穴住居	広江耕史他1989『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ』 島根県教育委員会
1992	1993	2	馬橋川改修工事に伴う試掘調査 江川・内田1988を受けて調査 弥生中期中葉の竪穴状遺構 縄文晩期前葉の籾痕土器	柳浦俊一・守岡正司編1993『石台遺跡Ⅱ－馬橋川河川改修に伴う発掘調査報告－』島根県教育委員会

で調査がされており、時期不明の礫群、杭列が検出されたものの、遺物に関しては1982年と同じ傾向を示している。また、1987年の試掘調査では縄文時代晩期の土坑から16粒の炭化米が発見されている（第３図２）。土坑内には、多量の土器片、石鏃、石錘、打製石斧、磨製石斧、剥片などが入っており、不用品廃棄場のようなものとされている。住居跡の一部である可能性も考えられるが２ｍ四方のトレンチであったため、その性格ははっきりしない。1992年の調査では縄文時代の遺構は確認されなかったが、恩田氏の採集地点に近いこともあって、後期～晩期の遺物が多く出土している（第３図２）。さらに弥生時代中期中葉の竪穴住居跡状の遺構が確認されているが、不整形で床面の凹凸が激しいため、住居跡とするにはためらわれる。

その他、焼橋上流部分の調査も行われたが（第３図５）、遺構、遺物は確認されなかったため遺跡の中心はその下流になるものと思われる。これらのことから、焼橋の下流50～100ｍにかけては縄文時代後期～弥生時代中期を主体としており、100～200ｍの地点では中世を主体とした遺跡であることがわかる。

国道９号松江道路建設工事にともなう調査では、主に勝負遺跡に近い丘陵部から弥生時代中期～後期の遺構、遺物が出ており、沖積地とは性格が異なる。丘陵部では、1983年と1989年の調査で集中して遺構、遺物が確認されている（第３図８、９）。両調査では時期不明の掘立柱建物２棟と弥生時代中期～後期初頭の竪穴住居、加工段、土坑などが確認されており、勝負遺跡に先行する集落として考えられている。遺構は弥生時代中期中葉の土坑が３基確認されているが、住居は中期後葉からしか検出していない。土器は縄文土器、弥生前期の土器も出土しているが弥生時代中期後葉がもっとも多く、後期には激減するため遺跡のピークもこの時期と考えられる。中期後葉の住居跡は、斜面に加工段をつくり、そこに掘立柱建物を数回にわたり建てなおしている。後期初頭には、円形の竪穴に主柱穴４本と中央ピットをともなう形となり、その後勝負遺跡へと移動していく。

西側の地点でも1980年に調査されているが、ほとんど遺物は出土せず、植物質の黒色有機質土が厚く堆積していたことから、その地区は入り江状になっていたと考えられる（第３図６）。

勝負遺跡は、国道９号松江道路の建設にともなって過去２回の調査があり（第３図10）、弥生時代後期と古墳時代中期の集落跡として多くの竪穴住居跡が発見されている。弥生時代後期の住居は、二股に分かれた尾根のそれぞれ少し下った斜面につくられ、そのほとんどには丘陵の上方に溝をともなっている。その配置は丘陵の先端に１棟つくられてから、一定の距離を保ちながら１、２棟の住居が規則的につくられており、古墳時代中期になると谷部に集中して切り合いながら構築されるという特徴がある。平面プランは石台遺跡で弥生時代後期初頭に円形の住居がつくられてから、勝負遺跡の尾根に移動して隅丸方形に変わり、途中五角形、六角形といったものもつくられながら古墳時代中期に隅丸方形から方形の住居へという変遷をたどることができる。

弥生時代後期の各住居跡をみていくと1989年調査のＳＩ-01は焼失住居で炭化物が多く堆積し、中央ピット脇からは完形の甕が出土している。1989年調査のＳＩ-02、03はそれぞれ柱穴配置から５本柱、６本柱と考えられるもので、多角形を呈している。今回の調査区にも一部かかっていたＳＩ-14に伴う溝は最も高くなる位置で途切れており、住居に向かって階段状になるようにピットが掘られていることから出入り口の可能性が指摘されている。同じように考えると1980年調査のＳＩ-03、ＳＩ-04、1989年調査のＳＩ-01、ＳＩ-02に伴う溝も丘陵上部側の中央で途切れており、出入り口であったとも考えられる。

古墳時代中期の住居跡では今回のＳＩ-05のように、壁際ピットの両脇に溝を伴うものがあり、1989年調査のＳＩ-08でも同じようなものがみられる。この２棟は勝負遺跡の中では大型の住居であり、いずれも住居内の南側に溝を伴う壁際ピットがあることは注目される。こうした住居は米子市青木遺跡では集落の中で１世代に２棟ずつ存在していたことが指摘されている（石野1988）。
時期ははっきりしないものが多いが、谷部を取り囲むように斜面に浅く長い溝が掘り込まれており、一連のものである可能性も考えられる。

また、勝負遺跡では中世の遺構、遺物もあり、東側斜面では竪穴状遺構やピット群が検出されている。しかしさらに東の隣の丘陵では遺構、遺物は確認されていない。

参考文献（勝負遺跡、石台遺跡については表を参照）

山本清1972「松江・東光台古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅳ集　島根県教育委員会

山本清1972「松江・井出平山古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅳ集　島根県教育委員会

松本岩雄1976「平所遺跡（１）」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　島根県教育委員会

前島己基・松本岩雄編1977「平所遺跡（２）」『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅱ
島根県教育委員会

横山純夫編1977『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅶ集　島根県教育委員会

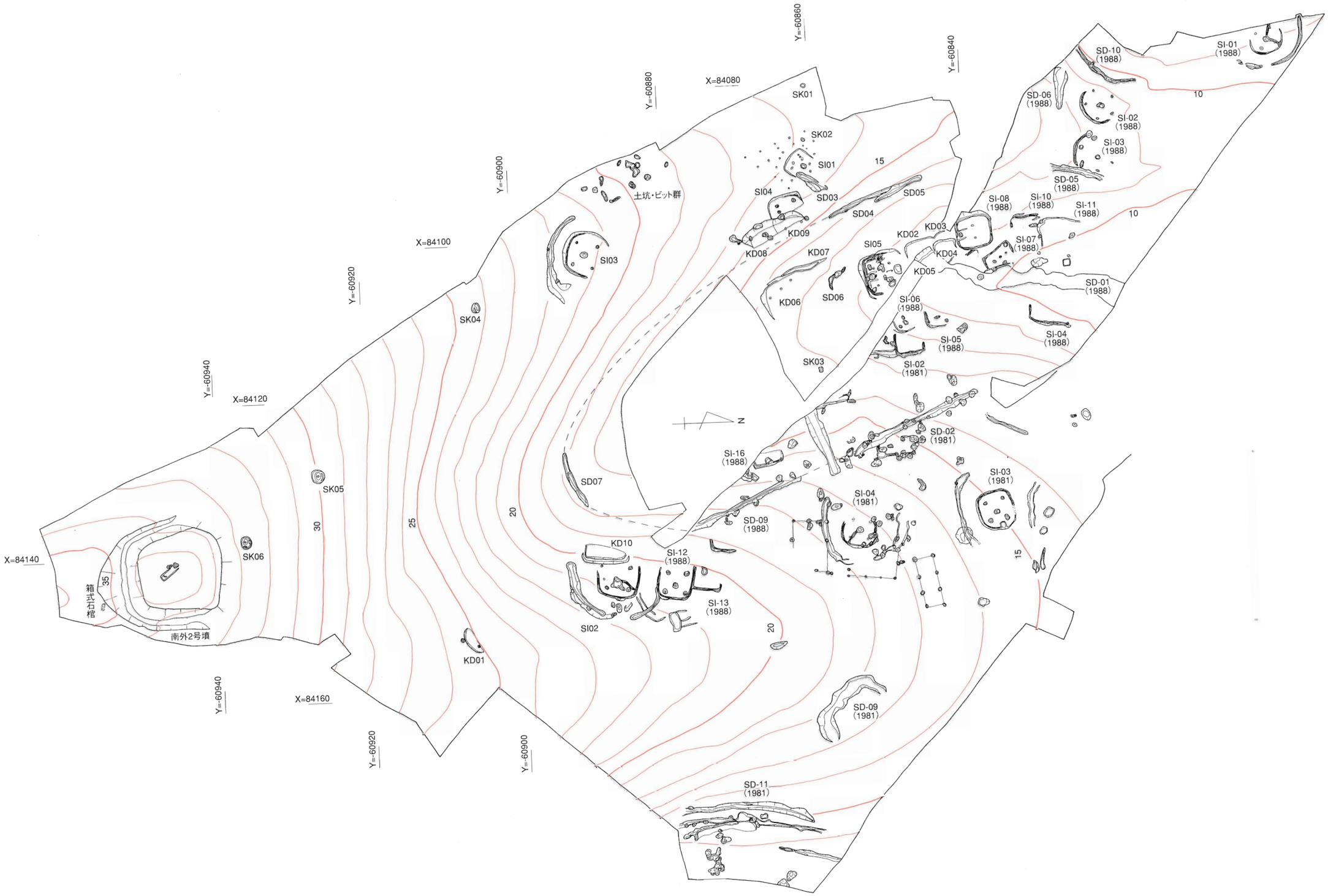
丹羽野裕1987「松江・狐谷横穴群Ⅱ」『島根県埋蔵文化財調査報告書』第ⅩⅢ集　島根県教育委員会

中尾秀信・寺本康編1989『間内越1号墓　間内越遺跡』松江市都市整備部計画課　松江市教育委員会

山本清1989「松江市矢田町来美の四隅突出型方形墳丘」『間内越１号墓　間内越遺跡』松江市都市整備部計画課
松江市教育委員会

江川幸子編1996『寺山小田遺跡発掘調査報告書』松江市教育委員会　財団法人松江市教育文化振興事業団

石野博信1988「弥生・古墳時代住居の屋内区分施設」『橿原考古学研究所論集』第十　橿原考古学研究所



第４図　南外２号墳・勝負遺跡全体図

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

南外２号墳及び勝負遺跡は、馬橋川が大橋川と合流する地点から約１㎞上流の南側丘陵地に存在する遺跡で、北側には松江道路が通り、南側には標高72ｍあまり山塊が聳え立っている。遺跡はこの山から北側に伸びている丘陵の先端付近の尾根や谷斜面に広がっている。調査前の遺跡分布踏査で尾根上から２基の古墳を確認しているが、その内、下方に築かれた方墳（南外２号墳）が工事区域にかかることになった。また、1980年・1992年に松江道路建設に伴って実施した発掘調査では弥生時代・古墳時代の住居跡が数棟見つかっていることから、この遺跡（勝負遺跡）が南側に広がっている可能性が高く調査対象となった。

調査は先ず調査対象地全体に54本あまりのトレンチを設定して行った。このトレンチ調査では南外２号墳東側の谷や尾根、それに古墳から北西に伸びる尾根の西側斜面では、遺物がほとんど出土せず、松江道路に接した北側から主に遺物が見つかった。その結果、全面調査は北側の尾根及び谷部の約4,300㎡を実施することになった。調査は尾根の最も上方に築かれている南外２号墳、そこから北西方向の伸びている尾根及び斜面を上方から１区、２区とし、谷部は上方を３区、下方を４区として実施した。

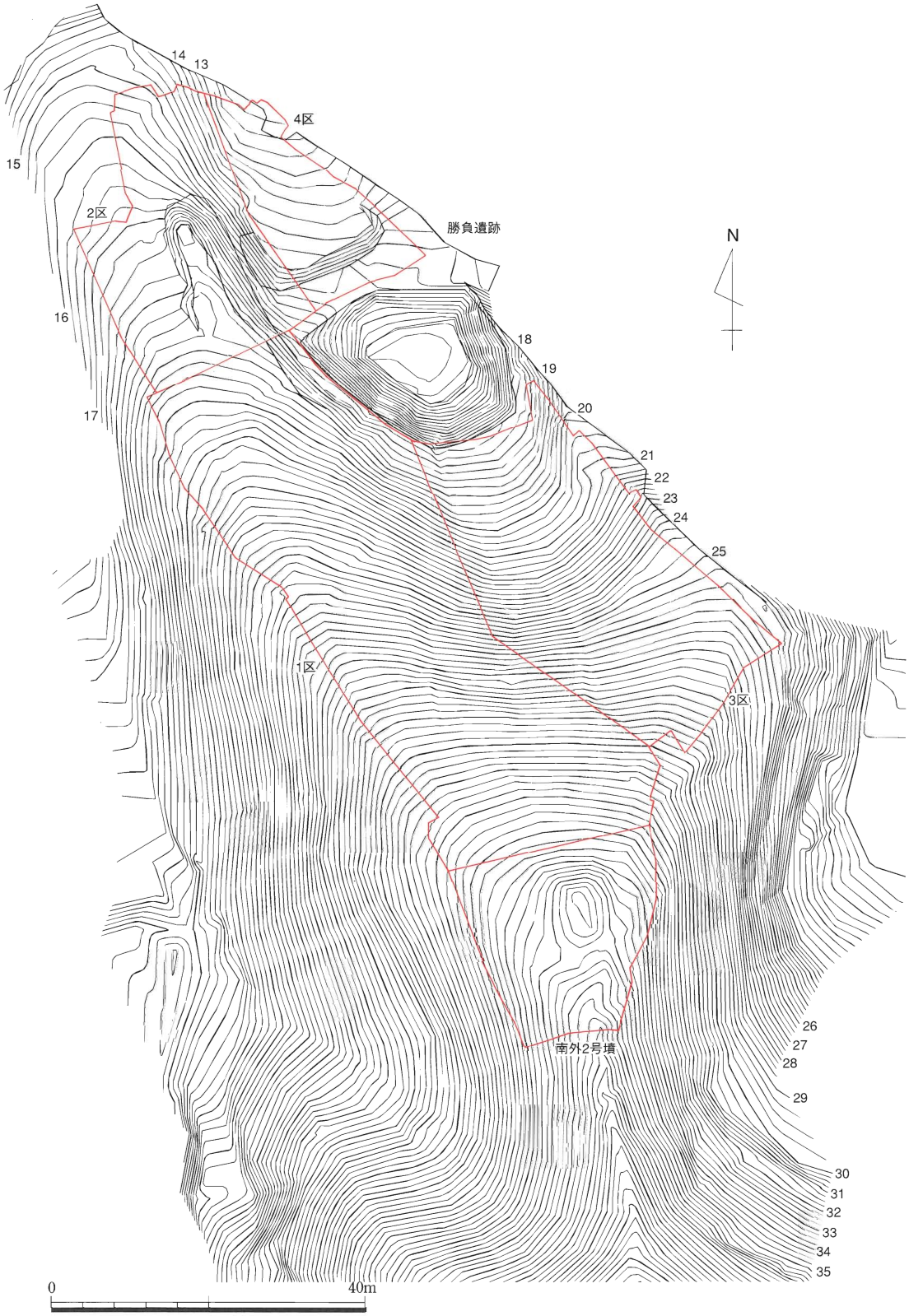
南外２号墳は一辺12.5ｍ、高さ1.0ｍ～2.2ｍあまりの小規模な方墳で、コの字形に周溝が廻り、墳頂部には、長さ約2.7ｍ、幅0.75ｍの細長い土壙の主体部が存在していた。主体部は墳丘の対角線上に築かれており、頭部と思われる付近から須恵器の蓋坏が３セット副葬されていた。ただ、土壙の北西側は後世に破壊を受けていた。築造時期は副葬品の須恵器から、５世紀末～６世紀初頭と考えられ、墳丘から宋銭及び寛永通宝が見つかっていることから後世に祭祀の場として利用された可能性がある。また、南側の周溝外の斜面から長さ0.95ｍ、幅0.5ｍを計る小型の箱式石棺１基を検出した。

勝負遺跡では竪穴住居跡５基、段状遺構11基、溝状遺構７基、土坑６基等の遺構が見つかった。尾根に近い緩やかな斜面から縄文時代・弥生時代の住居跡等が主に見つかり、下方の谷部からは古墳時代中期の住居跡､段状遺構等が出土した。縄文時代の竪穴住居跡は 3.6ｍ×2.9ｍ以上の方形を呈したもので、縦穴の周囲には柵列の柱穴が廻り、壁際に沿って小ピットが多数存在していた。また、中央には炉が築かれており、住居内からは土器や石器、石材が多量に出土した。これらの遺物から、この住居跡は縄文時代後期のものと考えられ､当時の人の生活を知る上で重要なものである。

なお、その他の縄文時代の遺構としては、石皿や土器を伴う土坑や獣の落とし穴と考えられる土坑が見つかっている。

弥生時代の住居跡は３基検出したが、これらはいずれも隅丸方形を呈しているもので、築造時期は後期前半である。竪穴の上方に溝を伴うものが多く、ＳＩ０３からは鉄器、ガラス玉等の貴重な遺物が出土するとともに、甕が立った状態で見つかった。また、ＳＩ０４は焼失住居で、壁際に甕が伏せてあった。古墳時代中期の竪穴住居であるＳＩ０５は6.0ｍ×5.5ｍの方形で、床面には長方形の土坑が多数掘られていた。

このように今回の調査では、縄文時代～古墳時代にかけての住居跡や古墳時代中期末の方墳、それに弥生時代のガラス玉等、重要なものが出土し、当時の様相を知る上で貴重なものとなった。



第５図　調査前地形測量図

第 6 図　調査後地形測量図・遺構配置図

第２節　南外２号墳の調査

南外２号墳は、松江市東津田町2128－１番地他に所在する方墳である。ここは、馬橋川の南側に存在している標高72ｍあまりの山塊から北側に延びている丘陵の先端部にあたり、二つの尾根がぶつかった標高約36ｍの谷頭に築かれている。この古墳は、一辺12.5ｍ、高さ1.0ｍ～2.2ｍを計る小規模な方墳で、コの字形に周溝が廻り、墳頂部に細長い土壙１基が存在していた。以下調査の概要を記す。

１．墳丘の築造

古墳の墳丘は、西側及び上面の土がやや流失していたが、調査の結果、５段階に分かれて築造されていたことが判明したので、築造順に記述することにする。

第１工程

この古墳が築かれた場所は、緩い勾配を持つ尾根上で、築造は溝を掘削することから始まる。溝は前方がやや開いた「コ」の字形を呈し、右左の溝間の幅は山手側12.0ｍ、谷側で15.2ｍである。溝はまず山手の尾根をカットし、その両脇から下方に掘削して築いており、古墳の範囲を確定する目的で造られたものと考えられる。山手の溝は、下方の墳丘側が直線的であるのに対し、上方は円弧状になっており、平面は半円形、断面はＵの字形を呈する。深さは１ｍあまりで、幅は古墳の主軸線上が最も広く、約5.8ｍを計る。両側の溝は、2.0ｍ～2.7ｍの幅を持ち、下方に行くに従って浅くなり、谷側の墳裾線付近で消滅する。また、西側の溝が消える付近はやや平坦になっており、ここが、通路の出入り口として利用された可能性がある。なお、第２工程の盛土の状況から溝を掘削した土は、そのまま墳丘に盛ったものではなく、表土の黒色土と地山の土と分けて仮置きし、用途に応じて使用したものと思われる。さらに、前方がやや開いた「コ」の字形の溝は、墳丘の頂上部が方形で平らになるよう低い部分の溝間の幅を広くとっているものと考えられ、計画的に墳丘を築造しているものと思われる。

第２工程

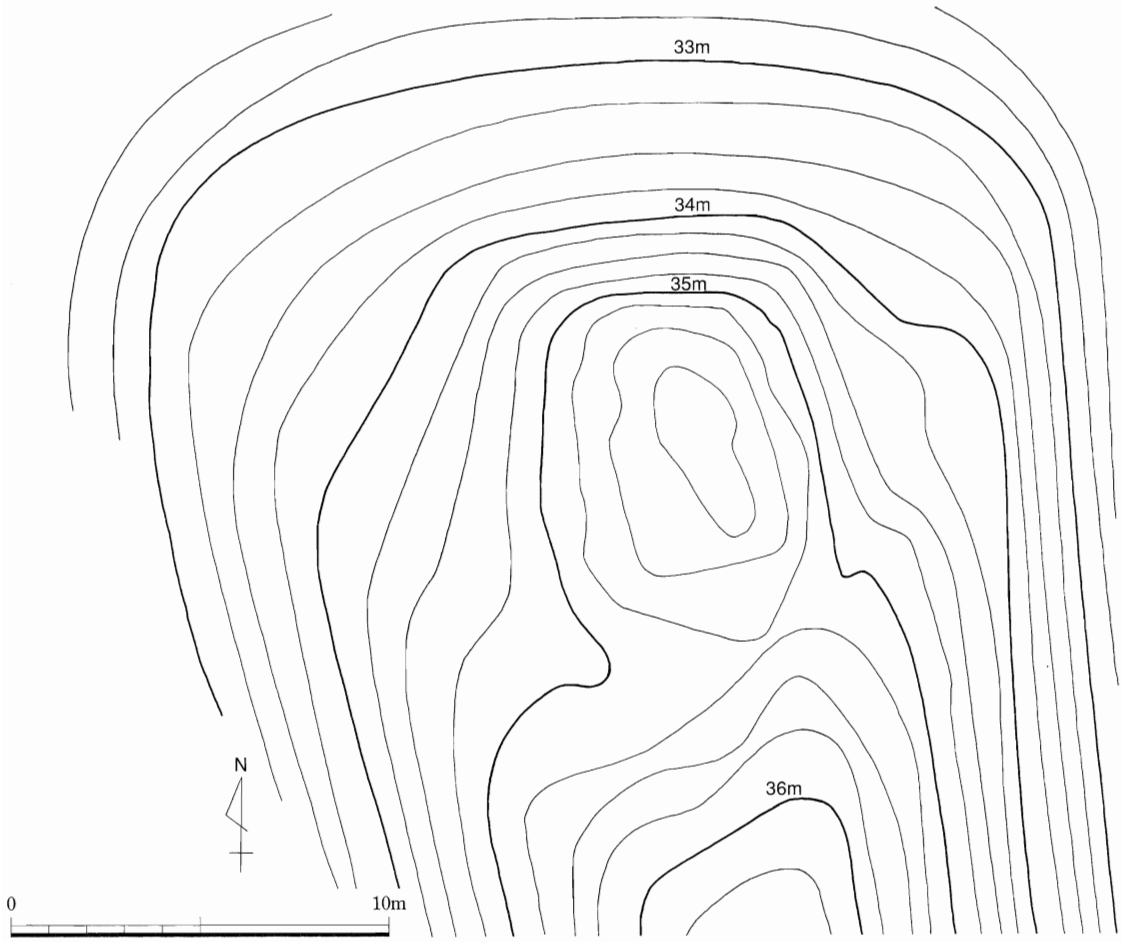
この工程は、コの字形溝の内側に盛土して墳丘基盤を造成するものである。盛土は、まず谷側の墳裾線上に土を高さ0.5ｍ盛り、コの字形の溝と連結させて墳丘基盤の範囲を確定している。この盛土は旧表土の上にブロック状に盛っており、その内側に黄褐色系の土を山側端の1.8ｍ内側から谷側に向かって敷いている。その後、黄褐色系の土と黒色系の土を相互に谷側を厚く、山側を薄く盛って表面が水平になるよう盛土作業を行っている。この作業でも谷側の端部には、ブロック状の土止めを施している。この端部の盛土は、土嚢袋に土を詰めたものを並べた可能性があり、墳丘の流失を防ぐためのものと考えられる。この工程での盛土は、谷側で0.65ｍ、山側で0.2ｍあまりにおよび、上面の平坦面は6.7ｍ×5.5ｍあまりである。

第３工程

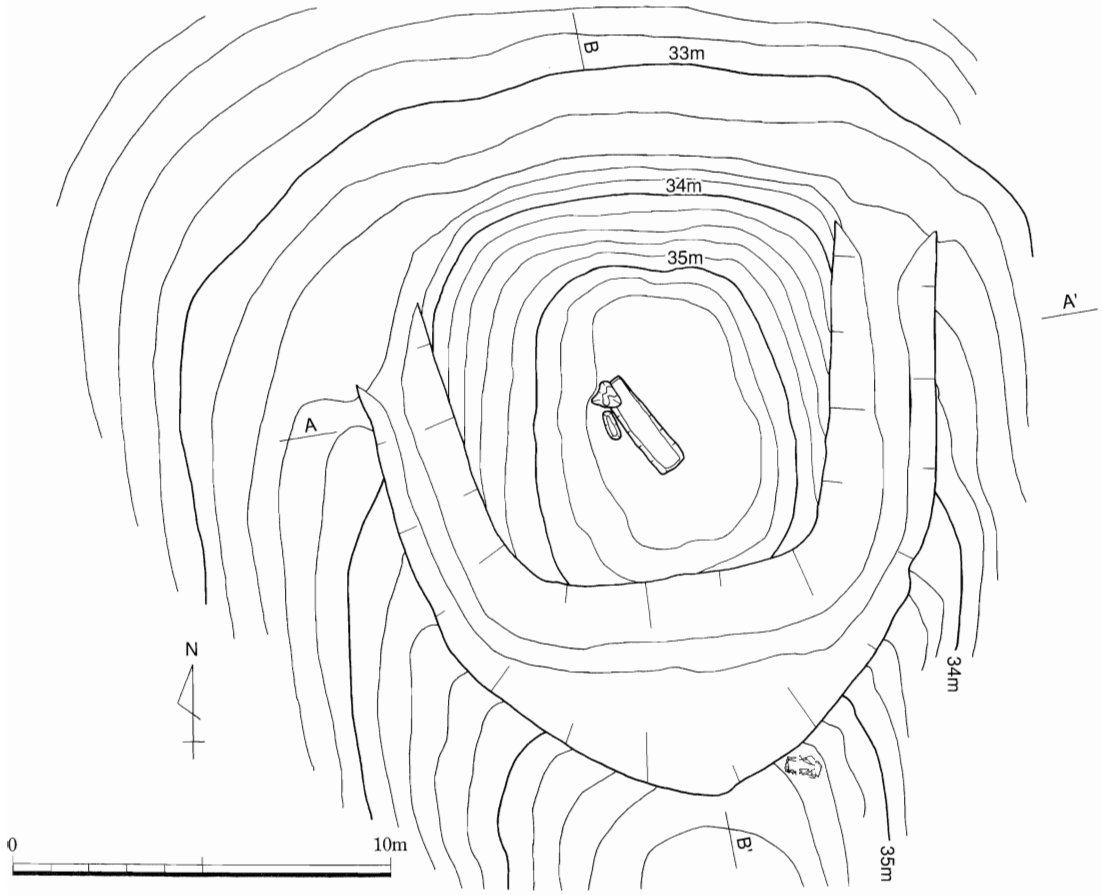
墳丘基盤の上に盛土して墳丘の形を整える作業である。盛土は第２工程のものと比べ一層あたりの厚みが厚く、全体の厚みは0.5ｍあまりで、下に淡灰褐色土を谷側から主体部の北端あたりまで敷き、その上に暗黄橙色土、黄橙色土を盛っている。

第４工程

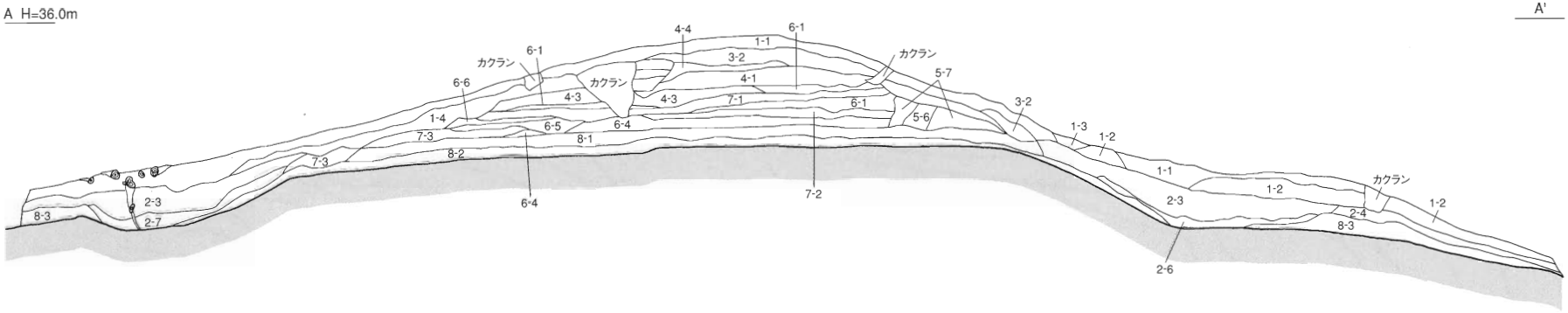
墳丘全体に盛土を施し、墳頂部に埋葬施設を築造して遺体を納め埋める作業である。この段階の

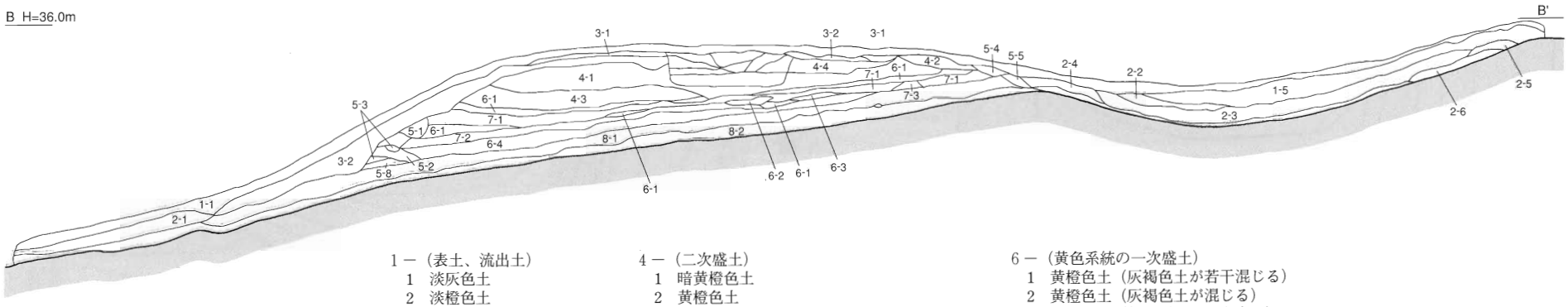


第７図　南外２号墳調査前墳丘測量図



第８図　南外２号墳調査後墳丘測量図





1－（表土、流出土）
1 淡灰色土
2 淡橙色土
3 淡灰黄褐色土
4 暗灰黄褐色土（流出土）
5 淡橙色土（流出土）

2－（溝埋土）
1 灰黄褐色土
2 暗茶褐色土
3 黒褐色土
4 淡灰橙色土
5 淡灰茶褐色土
6 淡灰黄褐色土
7 暗橙褐色土

3－（三次盛土）
1 暗茶褐色土
2 茶褐色土

4－（二次盛土）
1 暗黄橙色土
2 黄橙色土
3 淡灰黄褐色土
4 明茶褐色土

5－（ブロック状盛土）
1 明茶褐色土
2 灰茶褐色土
3 暗黄褐色土
4 灰黄褐色土
5 灰茶褐色土
6 黄褐色土（黒褐色土が若干混じる）
7 黄茶褐色土（黄褐色土が若干混じる）
8 灰茶褐色土（黄色土ブロックを若干含む）
9 明茶褐色土(灰褐色土が若干混じる)

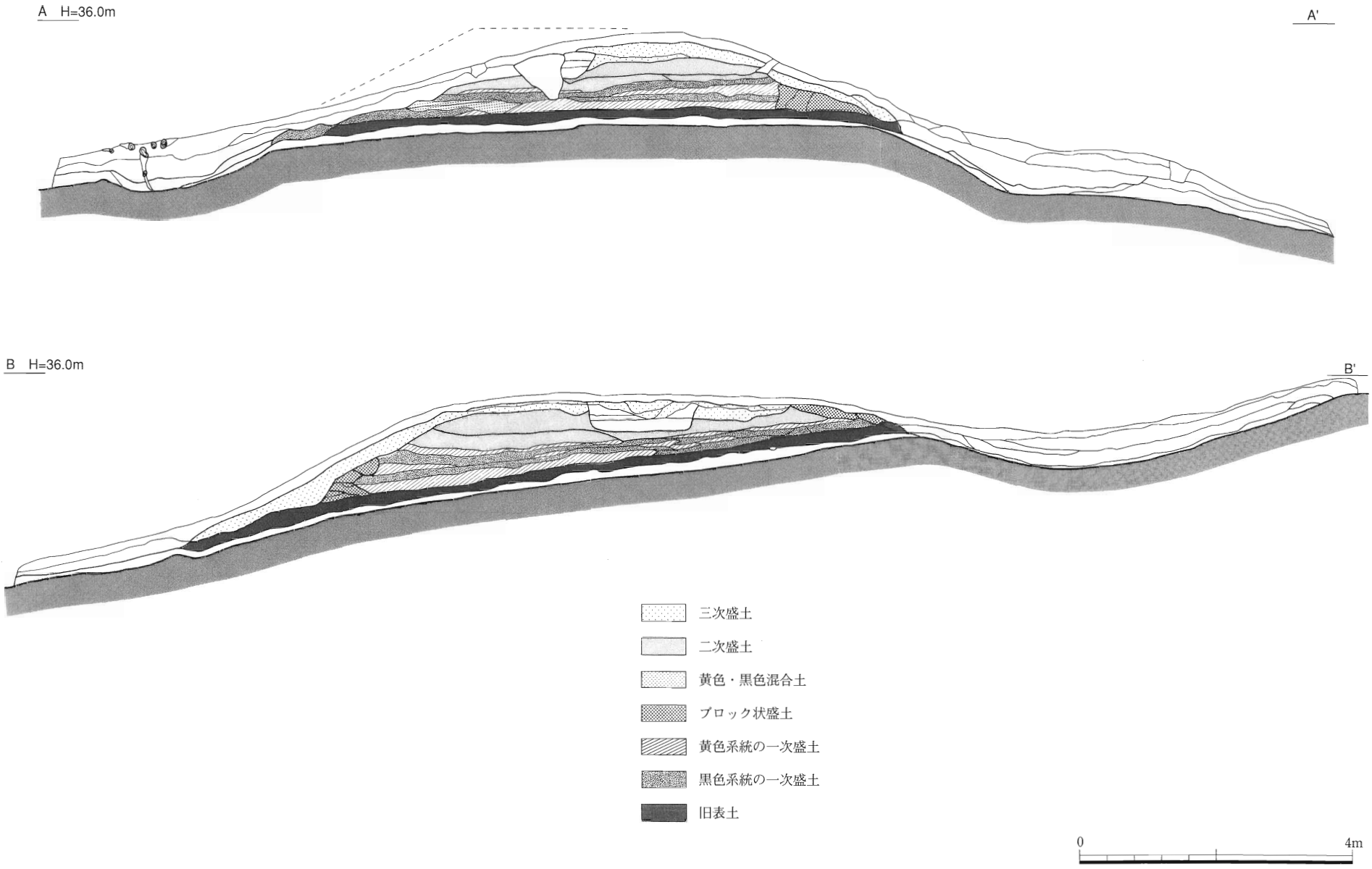
6－（黄色系統の一次盛土）
1 黄橙色土（灰褐色土が若干混じる）
2 黄橙色土（灰褐色土が混じる）
3 黄橙色土（粘土ブロックを含む）
4 黄橙色土（黒色土ブロックを含む）
5 灰黄橙色土
6 灰黄褐色土

7－（黒色系統の一次盛土）
1 灰黄褐色土（橙色土ブロックを含む）
2 暗灰黄褐色土（橙色土ブロックを含む）
3 灰褐色土

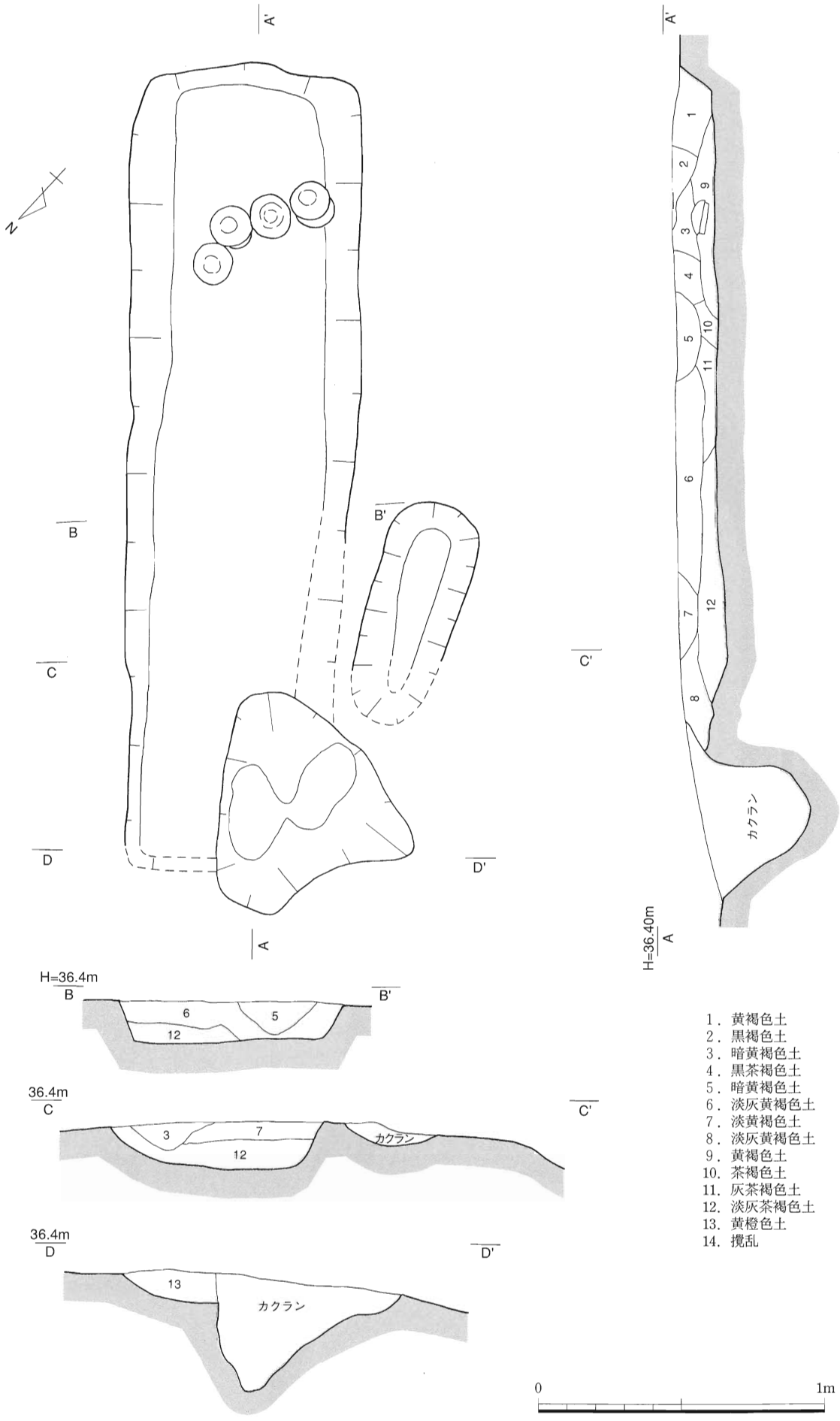
8－（旧表土、地山）
1 黒褐色土
2 淡明黄褐色土
3 明黄橙色土

0 4m

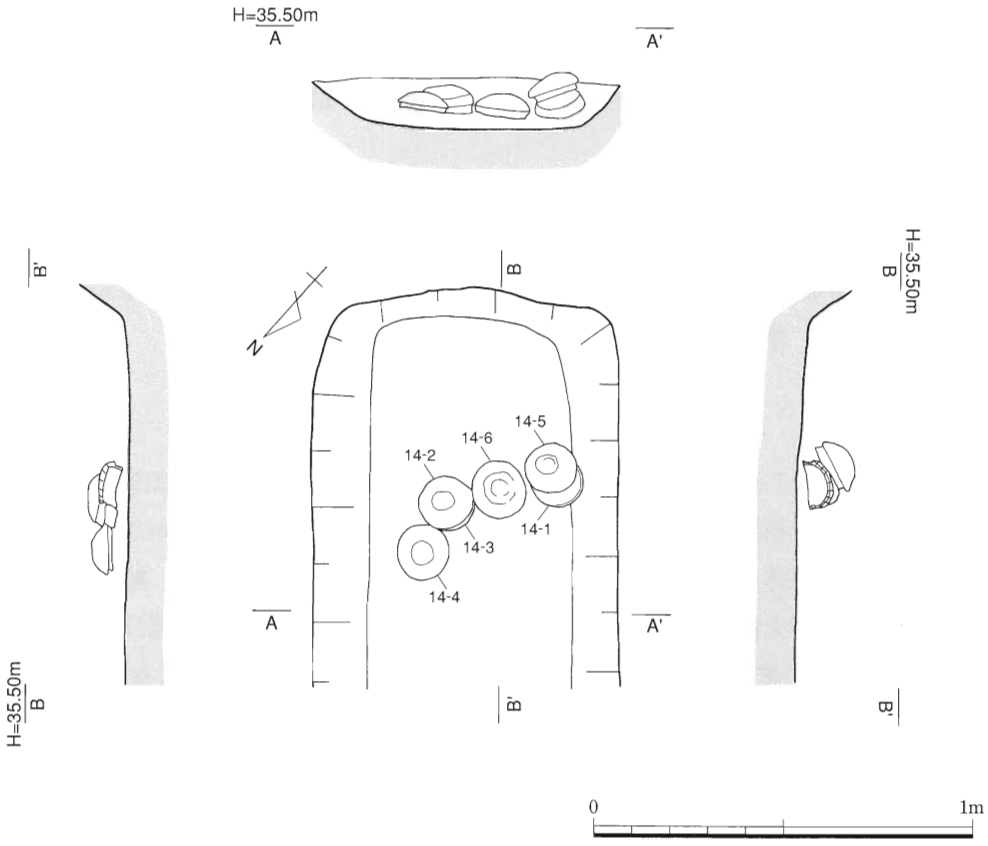
第９図　南外２号墳墳丘土層図



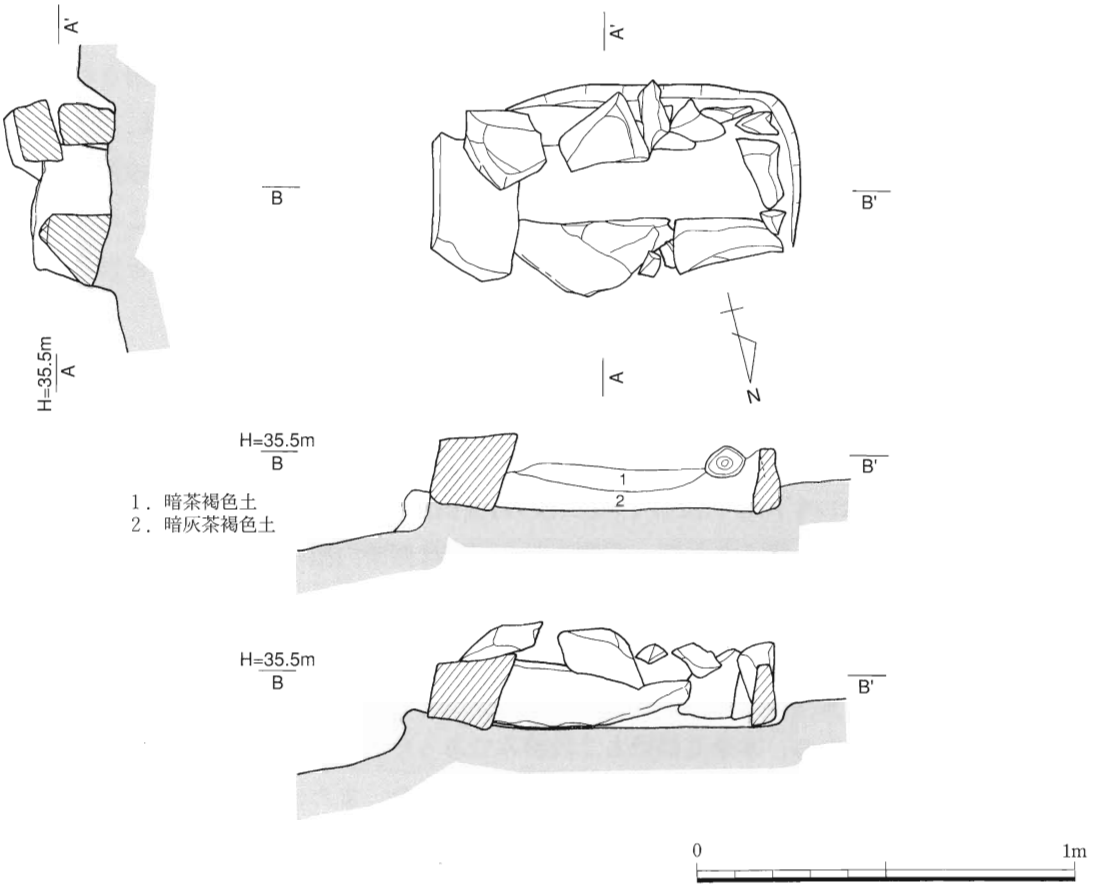
第10図　南外２号墳墳丘構造概念図



第11図　南外２号墳主体部実測図



第12図　南外２号墳須恵器出土状況図



第13図　箱式石棺実測図

盛土は谷側の下方約2.0ｍのところまで盛土がほどこされ、墳丘の全体を完成している。そして、上面から深さ約0.5ｍ、長さ2.7ｍの細長い土壙を掘って、遺体を埋葬し、土壙を埋めてこの工程が終了している。

第５工程

この工程は、遺体を埋葬した後、上方に化粧土の盛土を施して古墳築造が完成するものである。盛土はほとんどが流失していたが、第３工程までの墳丘斜面の角度からみて１ｍあまりの盛土があったものと推測され、墳丘上面の平坦面は一辺2.5ｍあまりと考えられる。

２．主体部

埋葬施設は長さ2.7ｍ、幅0.75ｍ～0.82ｍの細長い土壙で、墳頂部のほぼ中央部に設けられており、主軸は墳丘の北西隅と南東隅の対角線上にある。墳頂部には調査前から土師器の細片が散乱していたことから、主体部の上に土器を供献するやや古いタイプの古墳で、幅の広い土壙を想定していた。そのため、表土掘削時に検出した幅の狭い黒色の落ち込みを棺が陥没した痕跡であると判断し、全体的に掘りすぎとなってしまった。土壙の深さは0.15ｍあまりとなったが、残っていた墳丘土層から本来は0.5ｍあまりの深さを持つものであることが分かった。頭位方向は土壙の幅から南東側になるものと考えられる。南東端から0.4ｍあまり中央によった頭部付近には須恵器の蓋坏が６個「へ」の字形に並んで置かれていた。南西側から１番目と３番目の土器は２個体が重った状態で出土し、２番目、４番目は１個体であった。それらは、蓋坏が本来使用する形態でないことや、列状に並んでいること、それに土壙中央の土器が両脇の土器と比べやや低くなっている状況からこれらの土器は死体の枕として使用された可能性が高いものと考えられる。

土壙の北西側は後世の撹乱を受けていたため、北西隅と西側側壁を確認することができなかった。墳丘表面で宋銭及び寛永通宝が出土していることから中近世に祭祀の場として利用されたものと考えられ、その関係で撹乱を受けたものと推測される。土壙内に詰まっていた土は、床面から0.1ｍあまりのところに水平な面が存在し、その上は棺が腐食し土が内側に流れ込んだ痕跡が残っていた。また、出土した須恵器は水平な土層の中から上方に突き出た状態で出土した。このことから床面に枕となる須恵器を設置した後、床面に土を敷いて整地し、遺体を安置したものと思われる。

３．箱式石棺

この石棺は、南外２号墳南西側の周溝外側に築かれた長さ0.9ｍ、幅0.5ｍの小規模な箱式石棺である。大きな木の根を取り除いた時に見つけたもので、蓋と思われる石は、南外２号墳の周溝内に落ちていた。小口はいずれも１枚石で、東側の石は西側石と比べやや大きく長さ0.4ｍあまりを計ることから頭位は東側と考えられる。東側小口の南側は側壁内側にあるのに対し、北側は側壁の外側にはみ出ている。また、西側小口は両側壁に挟まれた形になっている。側壁は北側が１段、南側は２段積みになっている。南側壁の２段目の石は１段目の石よりやや小さめなものを用いており、南側壁から東小口にまたがって石が積まれているものもある。南側壁と北側壁の上面のレベルにかなりの差があることから、本来北側壁も２段積みであったものと考えられる。石棺内からはなにも検出できず、暗茶褐色土・暗灰茶褐色の土が詰まっていた。また、石棺を造るための土坑は、南側の山手から西側小口に向かってわずかに痕跡が残っていた。

4．出土遺物

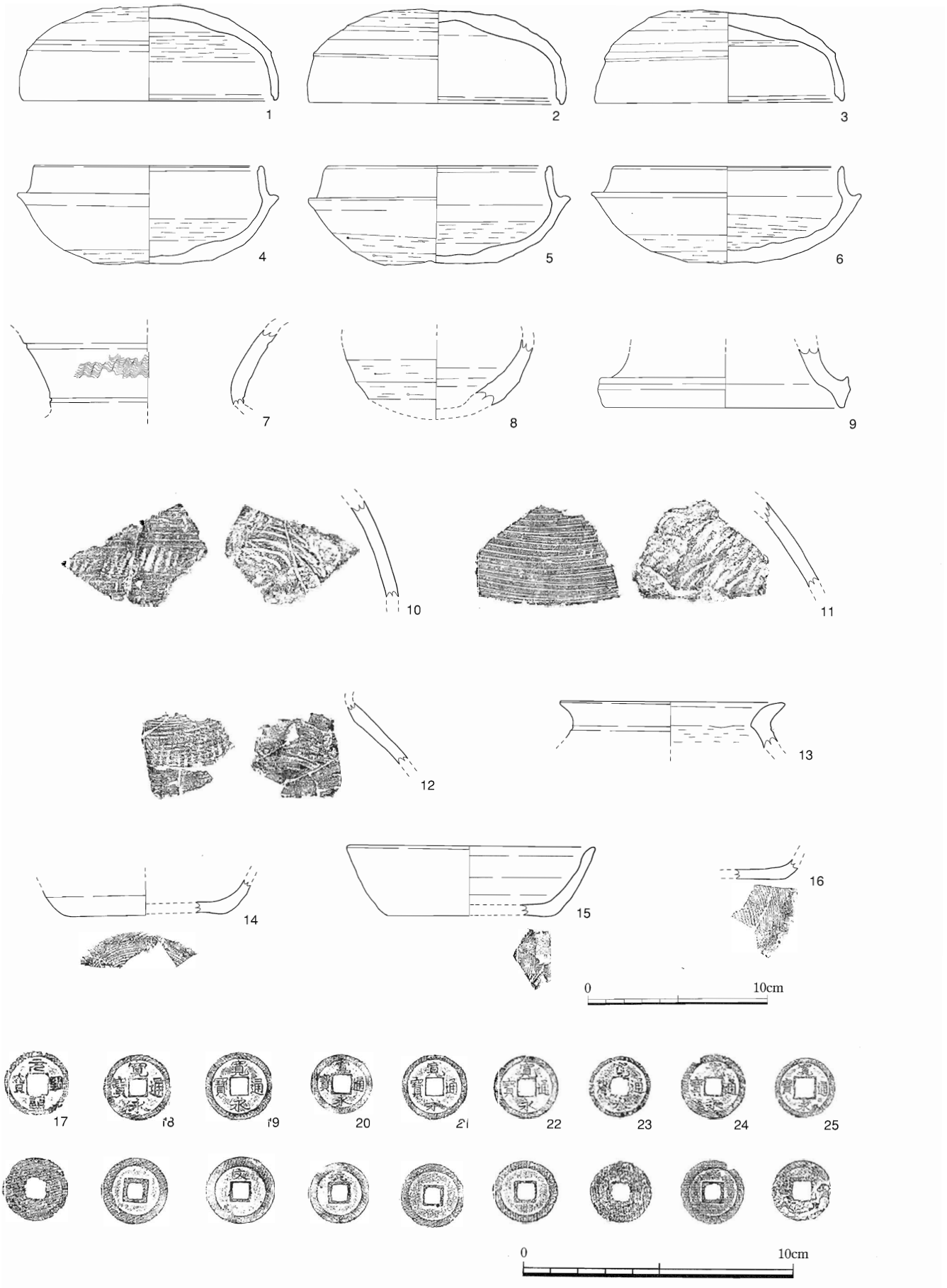
今回の南外２号墳の調査では主体部の土壙内から須恵器の蓋坏６点が出土した他、墳丘表土や周溝内から須恵器の高坏片、甕片、壺、甕片、坏片、土師器片、宋銭、寛永通宝等が見つかった。土壙内出土の蓋坏は北から南西にかけて「へ」の字形に身（第14図４）蓋・蓋（第14図２・３）身（第14図６）身蓋（第14図５・１）の順に並んで置かれていた。これらは死体の枕として使用されおり、焼成や色調、口径等から見て明確なセット関係をつかむことができなかったので図化したものは任意に並べたものである。

蓋坏は、１～３が蓋、４～６が身である。１は口径14.0cm、器高5.4cmを計り、天井部と体部の境に段を持つ。天井から体部にかけては丸みを持って口縁部にいたっている。口縁部は沈線状の段を持ち､口縁端部は丸い。天井部には回転のケズリが施されている。天井部内側には幅約1.6cmのやや荒い横ナデの調整がある。色調は淡灰色及び白っぽい灰色で、焼成は十分である。２は口径14.0cm、器高5.4cmを計る。器形及び調整は１とほぼ同じであるが､全体的に器壁が厚く､天井部内側には幅2.5cm、長さ7.0cmの縦方向の荒いナデが施されている。また、天井外側にはヘラ状工具で描いた直線的な沈線がある。焼成はやや軟質な仕上がりである。３は口径14.0cm、器高5.２cmあまりで、器形及び調整は１・２と同じである。天井部内側には１と同じ荒い横ナデが施されていが、幅は0.4cmで狭い。また、天井部の器壁は他の蓋と比べやや厚く、外面には黒色がかった自然釉が付着している。

４は口径12.7cm、器高5.4cmを計る身で、立ち上がりはやや内傾し、1.6cmあまりの高さを持つ。口縁端部内側には沈線状の段を有し、端部は丸い。受け部は沈線状の凹みがあり、外側に0.5cm突き出ている。底部には右回転の回転ケズリが施され、器壁は底部中央付近が0.4cmと薄い。内面底部付近には幅1.2cmあまりの荒い横ナデが施されている。色調は外面が茶灰色､内面が淡い白灰色で、焼成は良好。５は口径12.3cm、器高5.5cmを計る。器形及び調整は３と同じで、内面底部付近には荒い横ナデが施されている。焼成は良好、色調は灰褐色及び淡い灰色を呈する。６も器形及び調整は３・４とほぼ同じであるが、口縁端部内側の沈線に力強さを感じないもので、内面の荒いナデは中心から上方向に渦巻き状に施している。口径12.3cm、器高5.5cmを計り、色調は白灰色で、焼成はやや軟質である。１～６はいずれも内側に特殊な荒いナデが施されていることから、同一の窯で焼かれた可能性が高い。

７は須恵器壺の頸部から口縁部にかけての破片で、頸の基部から外側にやや外反して上がっている。上下に２本の沈線が廻り、その間にクシによる波状文を施している。頸部の径は推定10.7cmあまりで、色調は内外面とも薄緑灰色を呈し、焼成はやや軟質である。胎土は良好。８は甕の底部片で､外面には回転ケズリが施され､器壁はやや厚い。色調は内外面とも淡い灰色、焼成は十分、胎土に若干の砂を含む。９は低脚付高坏の脚部片で、推定底径13.4cmあまりである。脚端部は「く」の字形にやや屈曲して底部にいたっている。焼成はやや軟質で、白茶灰色を呈する。10～12は壺と思われる肩部から胴部にかけての破片で、いずれも焼きが甘く、外面にはカキ目を施している。13は「く」の字形に屈折した頸部から口縁部にかけての土師器片で、内面下方にケズリがある。

14～25は古墳とは直接関係のない後世の遺物である。14～16は奈良・平安時代の糸切り底を持つ坏片で、17～25は銅銭である。17は模鋳銭の元豊通宝と思われ、18～25は寛永通宝。18は古いタイプのもので他は新寛永と言われているものである。19・20の裏面には文、元の字がある。



第14図　南外２号墳出土遺物実測図

第３節　勝負遺跡の調査

勝負遺跡の調査では住居跡５棟、段状遺構11基、溝跡７基、土抗６基等の遺構を検出したが、以下、遺構別に記述する。

１．住居跡

今回の調査で検出した住居跡は、縄文時代１棟、弥生時代３棟、古墳時代１棟の計４棟である。縄文・弥生時代の住居は、尾根から若干下がった斜面に築かれているのに対し、古墳時代の住居跡は谷部に存在していた。また、弥生時代の住居跡は30ｍ～40ｍ離れて営まれていた。

ＳＩ０１（第15・16図）

縄文時代の竪穴住居跡で緩斜面に築かれていた。ここは堤を造る際に出てきた土を盛った下部から検出したもので、尾根から若干東側に下がった緩やかな斜面に当たり、前方の谷を下って行くと縄文時代後期～晩期にかけての石台遺跡にたどり着く。竪穴は3.62ｍ×2.6ｍ以上の方形を呈しているが、現状では「コ」の字形となっている。また、両側壁はほぼ平行しているのに対し、奥壁は若干円弧状に張り出している。掘削の深さは奥壁で0.45ｍあまりとしっかり掘り込んでおり、前方に行くに従って側壁の高さが低くなっている。この住居跡は緩斜面に造られていることから、本来、「コ」の字形に竪穴を掘り、下方斜面に盛り土して床面を形成したものと考えられる。

床面には大小さまざまなピットが存在していたが、注目されるのは壁際に沿って掘られた小ピット群と主柱それに中央に築かれていた炉跡である。壁際の小ピット群は径15㎝～20㎝、深さ３㎝前後で、奥壁及び西側の側壁に15㎝～35㎝間隔に不揃いで存在していた。これらは壁の柱と考えられるものである。主柱になると思われる柱穴は９本あまり存在していたが、棟持柱を含めた６本柱になるものと推測される。柱穴は径25㎝～40㎝、深さ35㎝～55㎝を計る。炉跡は60㎝×80㎝の不正形を呈した深さ25㎝あまりを計る掘込炉である。この炉は坑を掘った後に、明灰黄褐色砂質土を20㎝あまり埋め、その上に赤橙色粘砂土を敷き、その周辺を灰褐色の粘質土で固めて造っている。赤橙色粘砂土の上面は凸凹しており、中央は橙色を呈し、周りが赤く変色していた。

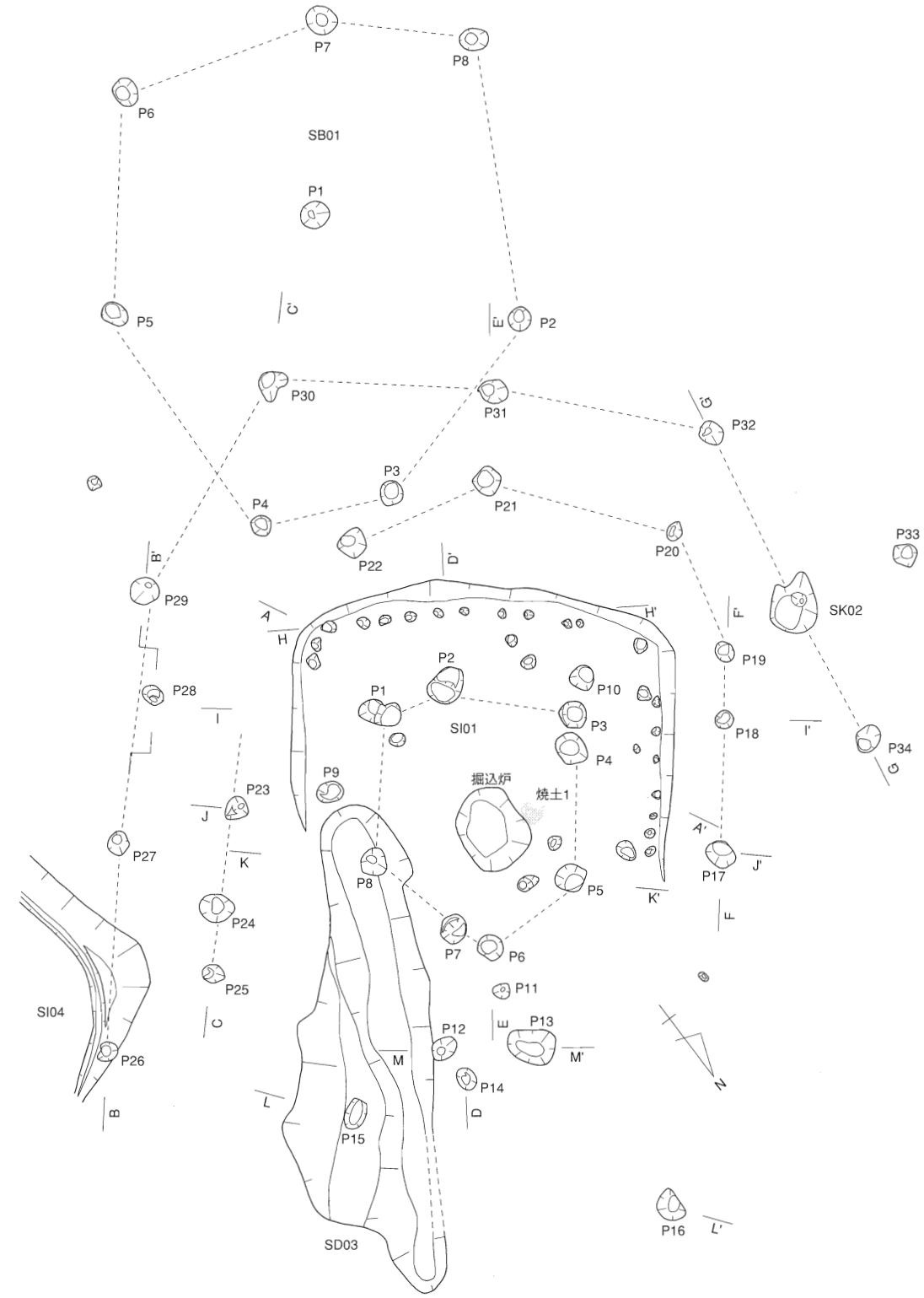
堀方の外側1.3ｍ～1.8ｍのところには、堀方を取り囲むように柱列が廻っていた。これは柵列になるものと思われ、その内側にも間隔がばらばらであるが同様な柱列が存在していた。これらの柱穴の径は8㎝～15㎝である。なお、住居跡西隅から西側１ｍと８ｍのところには石器や縄文土器が出土した土坑が存在している。

ＳＢ０１（第22図）

ＳＩ０１の南側の尾根上から７角形につながる柱列を検出した。形状はやや縦長で、規模は3.6m×4.6ｍあまりである。柱間は1.2ｍ～2.5ｍを計り、柱穴は径0.2ｍ～0.3ｍである。掘り方はないが縄文時代の住居跡になるものと思われるが、この遺構に関わる遺物は検出できなかった。

出土遺物

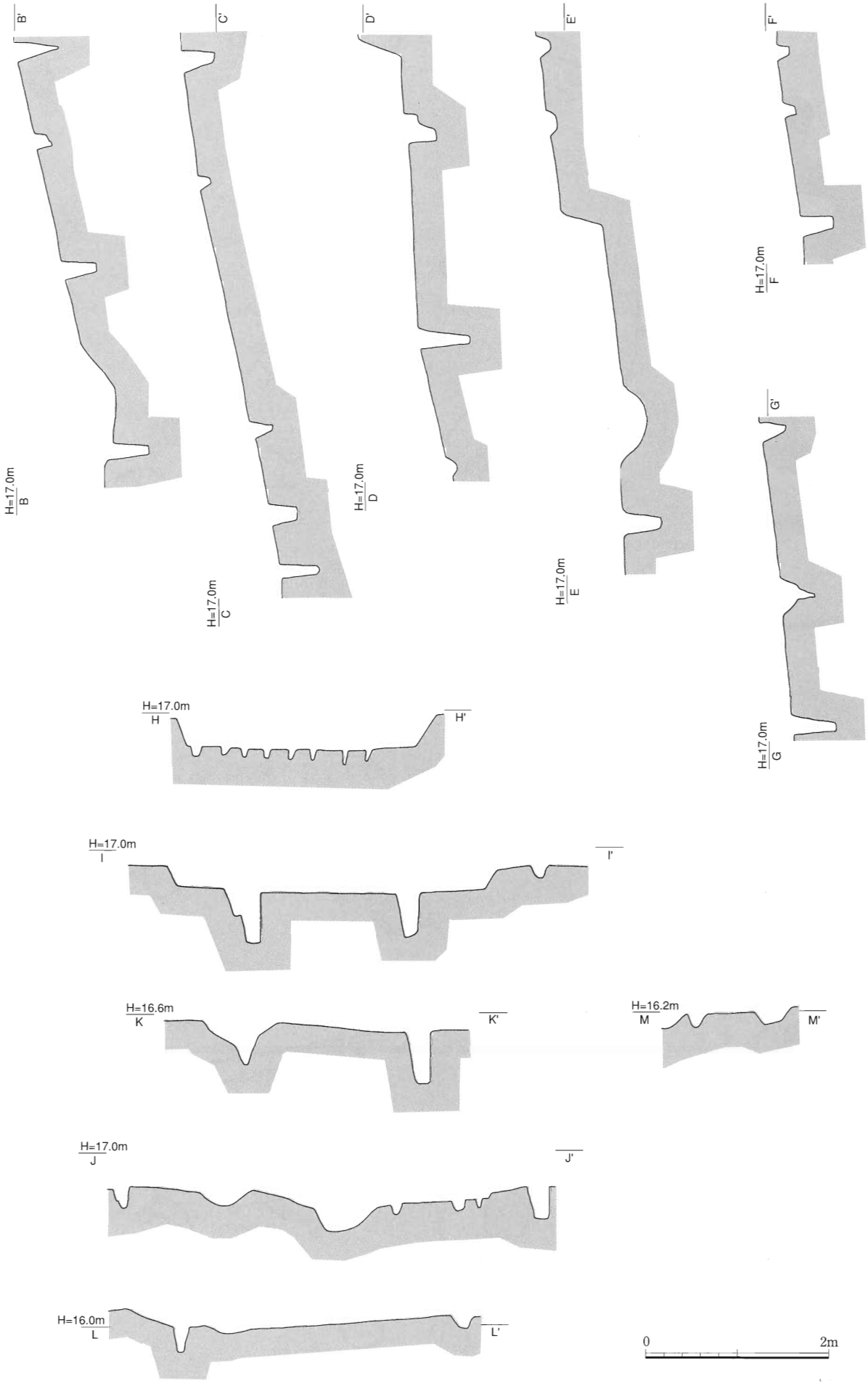
この住居跡からは縄文土器の他、石鏃、スクレーパー、楔形石器、石錘、石錐、打製石斧、磨製石斧、磨石等の石器、及び黒曜石の薄片が多量に出土した。第17～20図は土器片と石器片及び石材片の出土状況を示したもので、土器と黒曜石片は炉跡付近で多く見つかっている。礫石器は南西部に集中しており、遺物は床面から上方40㎝の間に存在していた。住居内の土層第図（15図）を見てみると尾根側から灰黄褐色土、暗灰赤褐色土（炭化物を多く含む）、暗灰黄褐色土、灰褐色土が人工



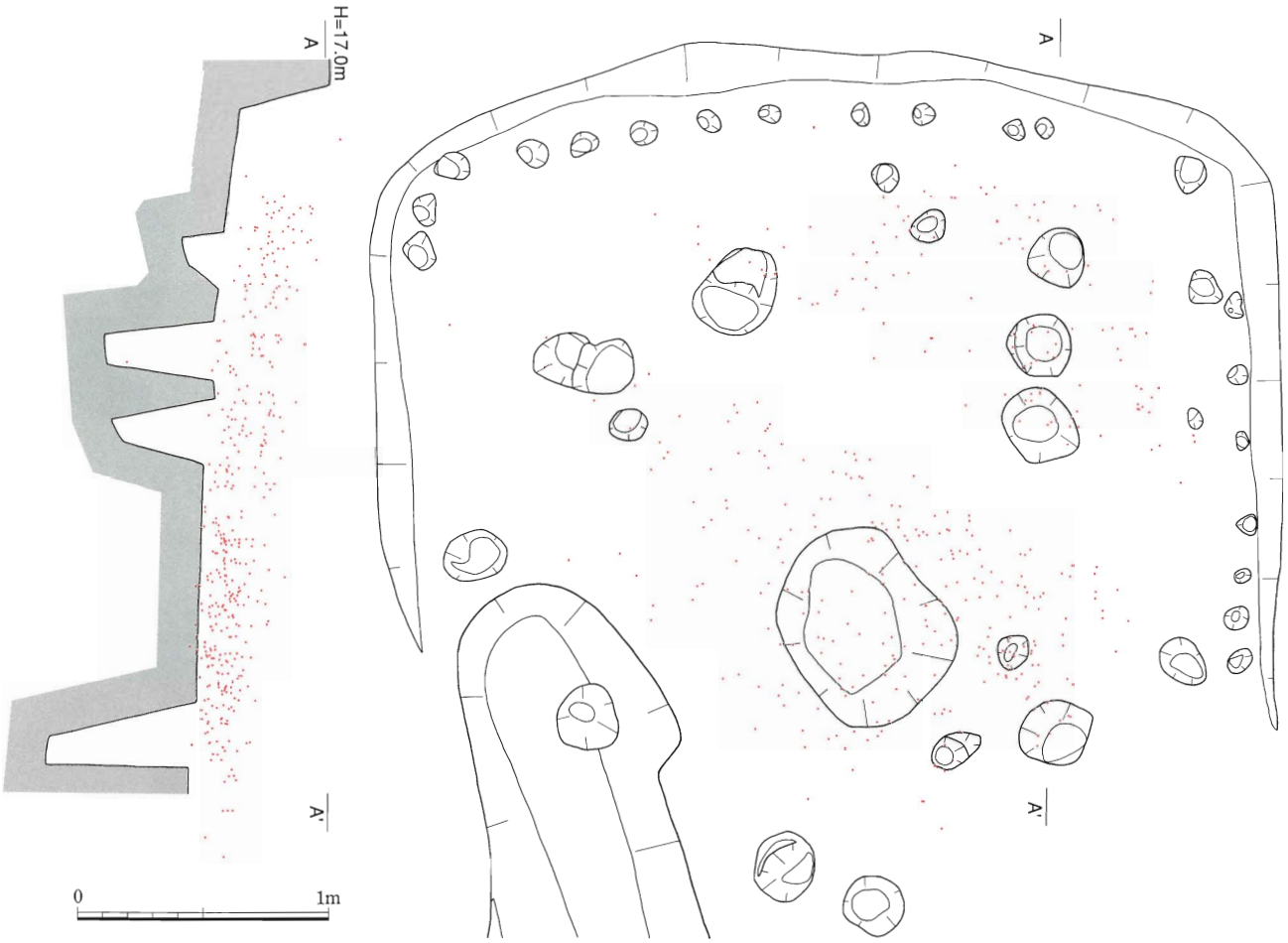
1．灰茶褐色土
2．淡灰茶褐色土
3．茶褐色土
4．暗茶褐色土
5．暗灰赤褐色土（炭化物を多く含む）
6．暗灰黄褐色土（炭化物を多く含む）
7．灰褐色土
8．暗黄橙色土(地山ブロックを含む)
9．灰黄褐色土
10．暗灰茶褐色土

0　2m

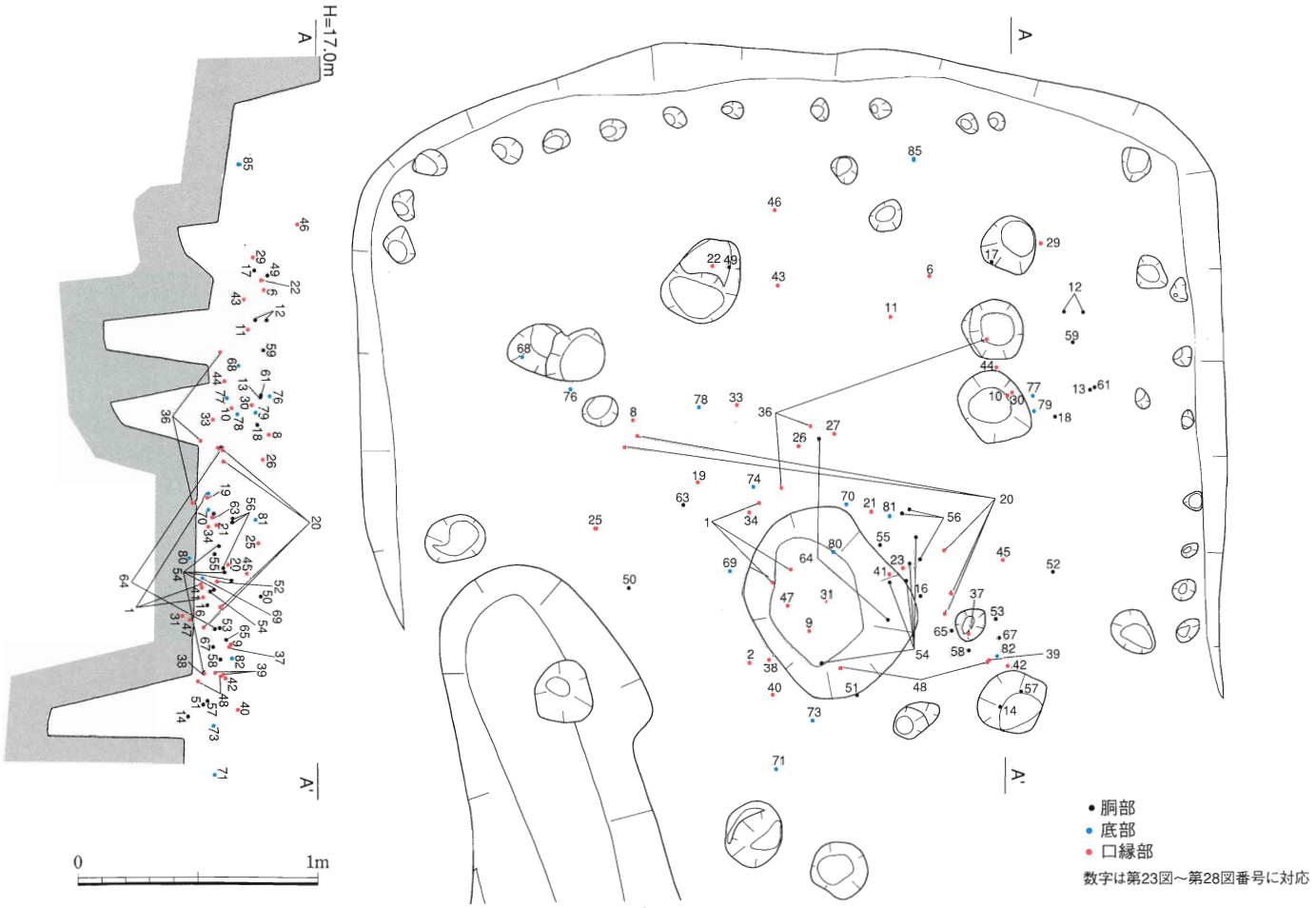
第15図　勝負遺跡ＳＩ０１実測図



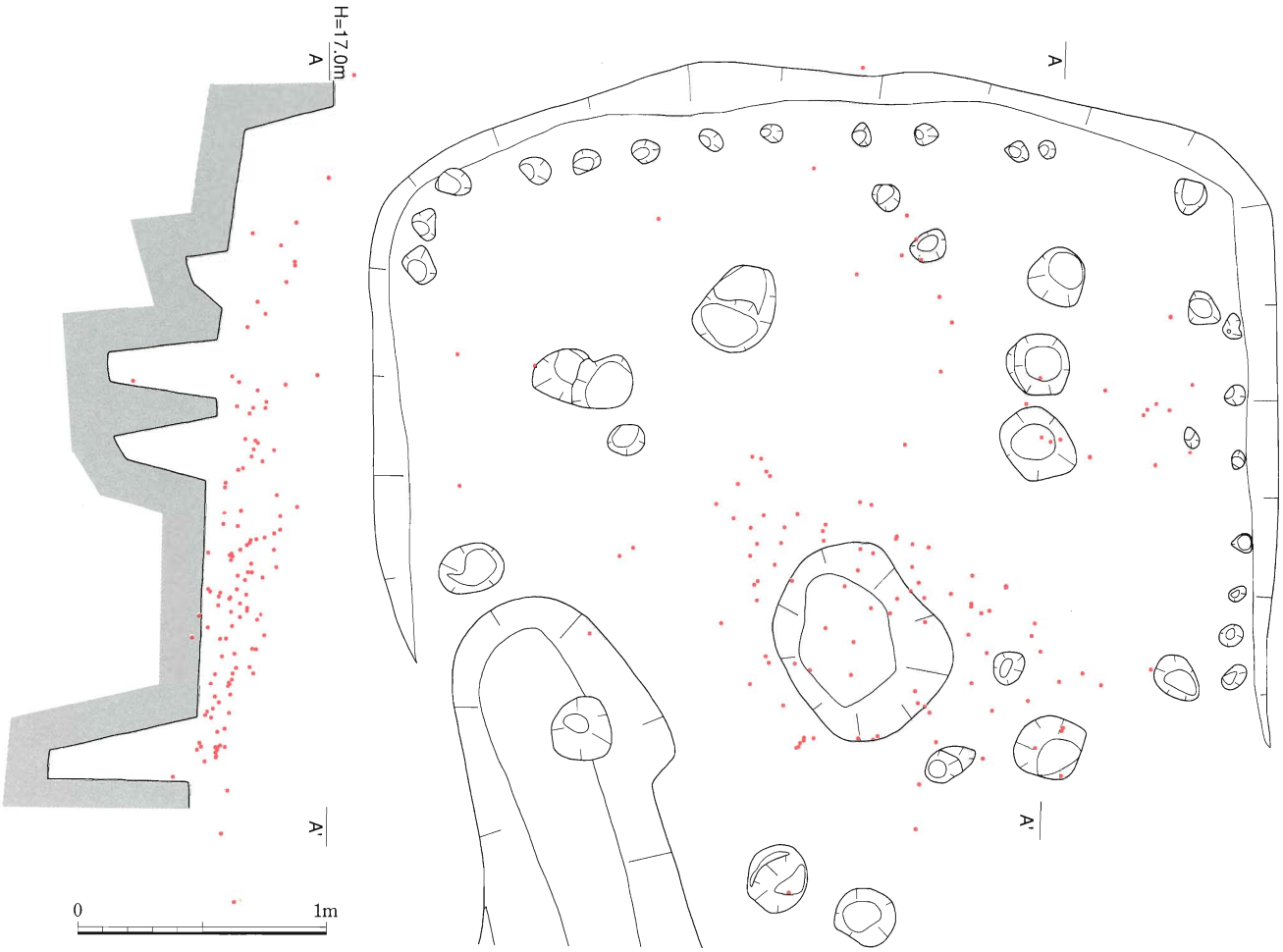
第16図　勝負遺跡ＳＩ０１断面図



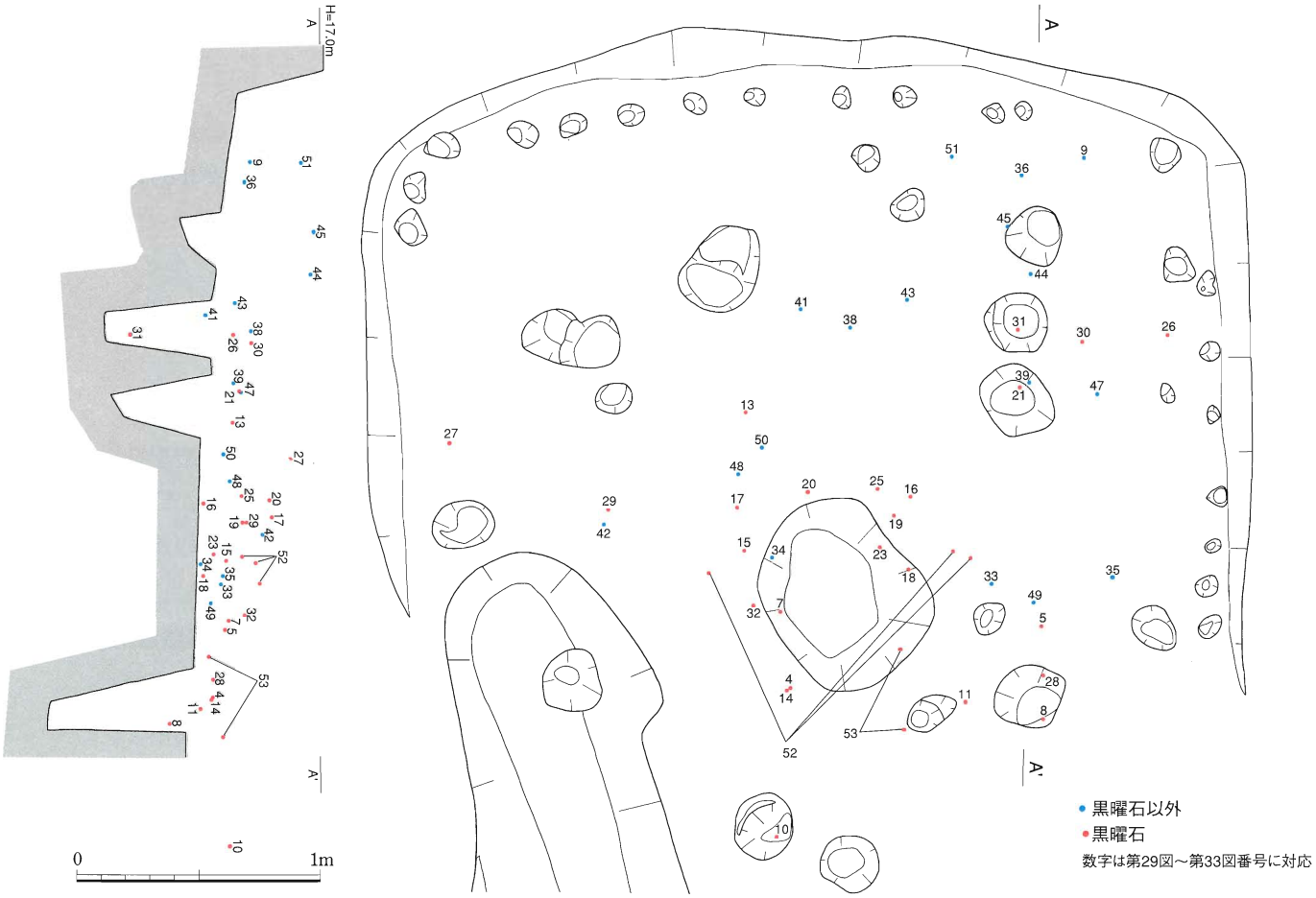
第17図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器分布図



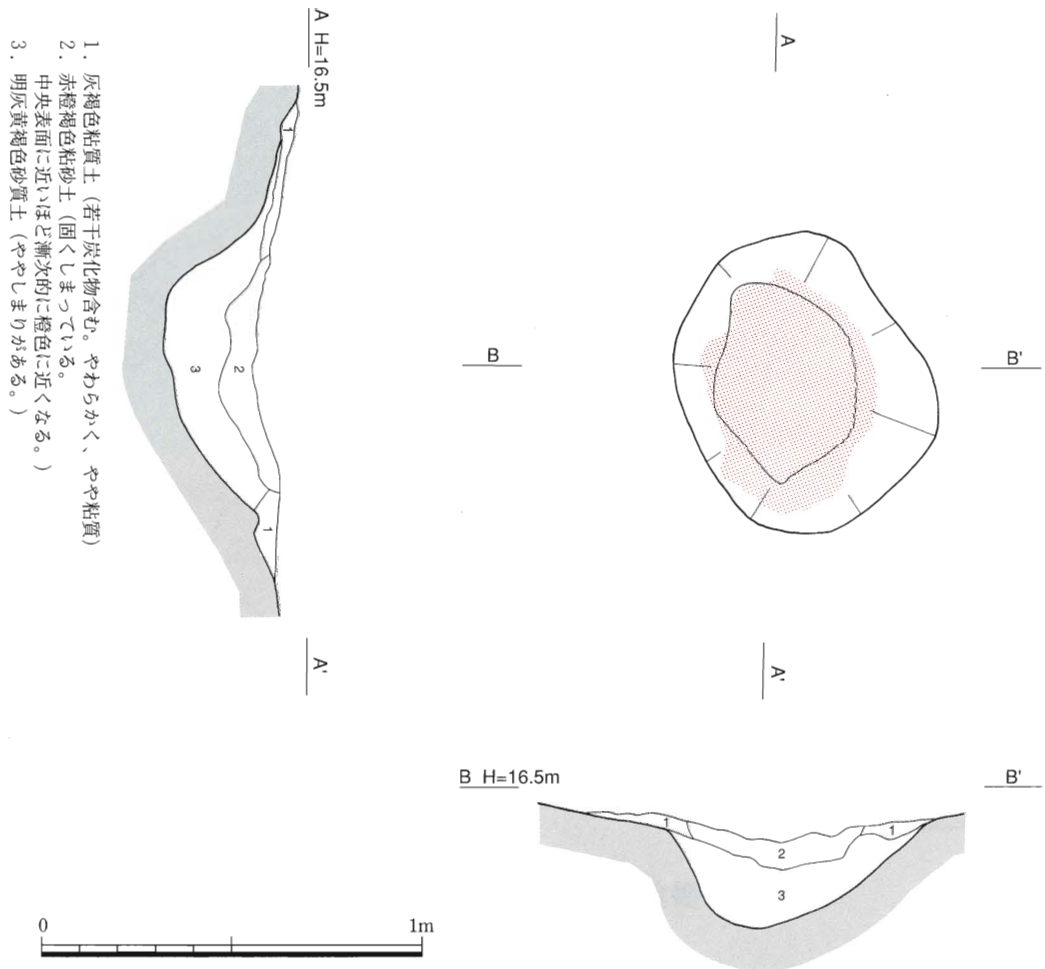
第18図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器接合関係分布図



第19図　勝負遺跡ＳＩ０１出土黒曜石分布図



第20図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器分布図



第21図　勝負遺跡ＳＩ０１中央ピット実測図

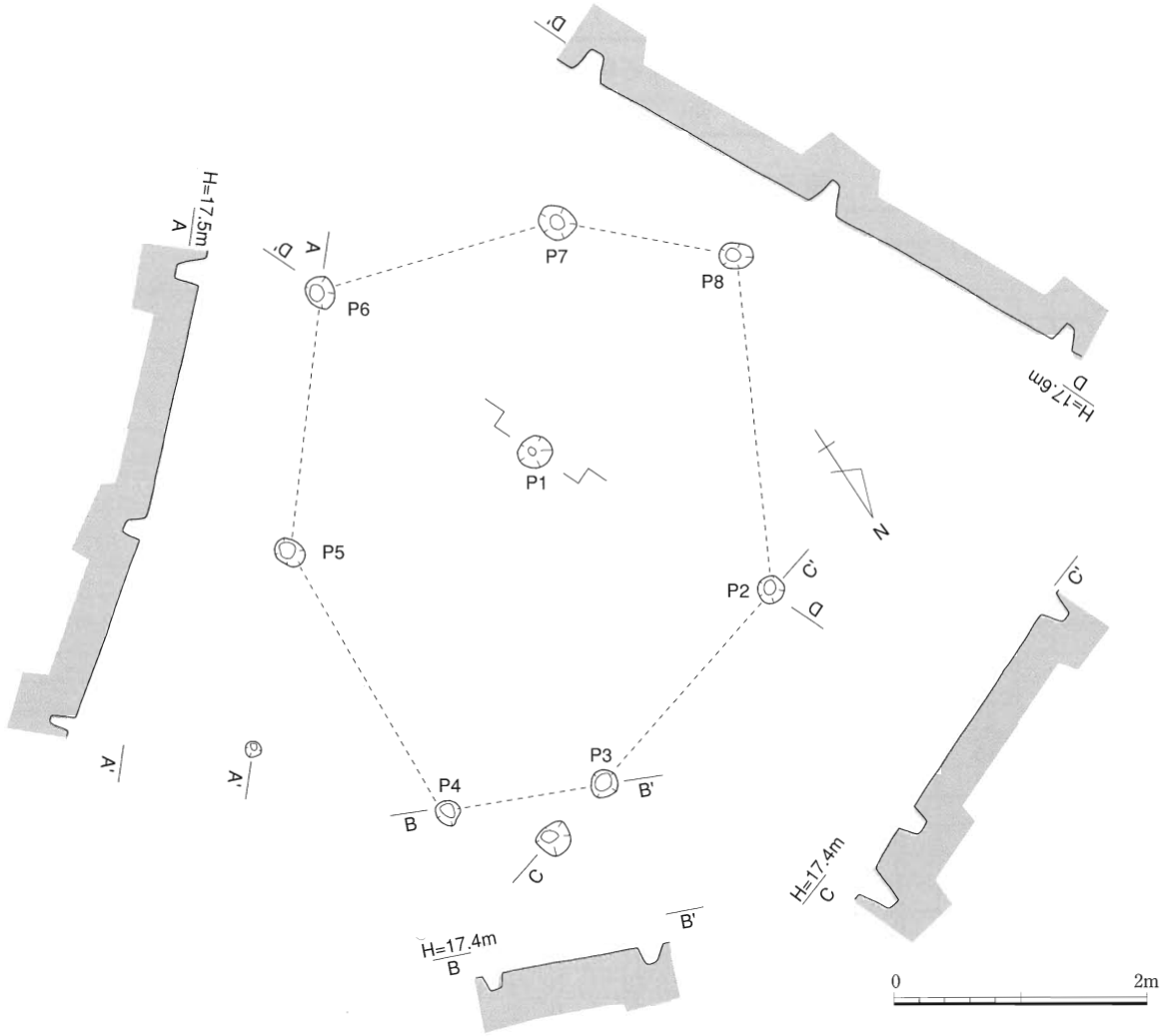
的に埋められており、土と一緒に遺物も住居跡内に廃棄したものと考えられる。これらの遺物は同時期の一括資料として重要なものである。また、炉周辺部の土壌を洗浄した結果、ドングリの表皮と思われる自然遺物が数点見つかった。

縄文土器（第23図～28図）

縄文土器には有文のものと無文のものがあり、後者は精製土器と粗製土器とに分けられる。以下文様の有無や器形により分類して報告する。

「有文土器」（１～18）

有文土器は刻目文や縄文を施したもので、１～４は縁帯文土器である。１は、口縁部がやや外反し、胴部が膨れた「Ｓ」字形を呈する深鉢。推定口径は34.0㎝、胴部最大径37㎝あまりで、口縁部は肥厚した突起を持つ縁帯文土器である。突起部には３本の並行する垂下沈線があり、その沈線間に３つの円形刺突文がある。突起部以外の口縁部は外側を肥厚させ、口唇部に沈線を廻らし、その上から刻目文を施している。口縁部以外には文様はなく、粗製な仕上がりとなっている。器壁は0.8㎝前後で、胎土には砂を多く含み、暗茶褐色を呈している。２は口縁部突起部分の破片で、肥厚した口縁部に２本の垂下沈線とその両側の口唇部に沈線を廻らしたものである。色調は灰茶褐色で、砂を多く含み、焼成は十分。３も口縁部突起部分の破片。突起中央部に巻き貝の刺突文があり、その左右に４本の垂下沈線を描き、沈線の下には横方向の沈線が廻る。この沈線内には小さな円形刺突文があり、その他の部分には細いＲＬの縄文がある。色調は茶褐色で、焼成は十分。４は肥厚し



第22図　勝負遺跡ＳＢ０１実測図

第４表　SI01土器数量表

有文口縁部	無文口縁部	有文土器 (口縁部含む)	精製無文土器 (口縁部含む)	底　　部	小　　片
10	39	18	33	29	762

第５表　ＳＩ０１出土石器数量表

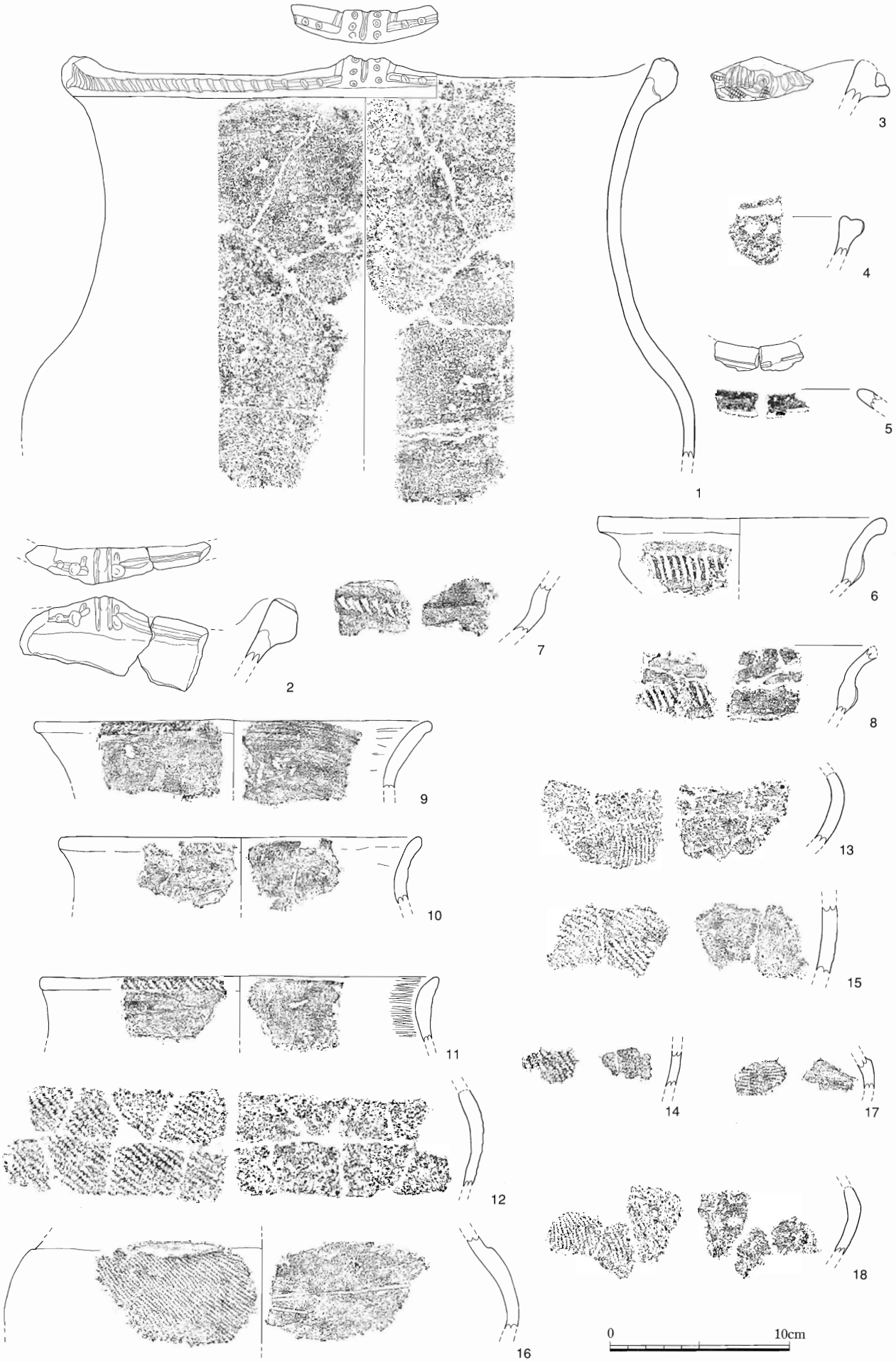
石鏃	石錐	石匙	楔形石器	二次加工剥片	剥片	石核	打製石斧	磨製石斧	磨石敲石類	石皿台石	石錘
5	2	2	13	6	201	4	3	2	3	2	3

第６表　ＳＩ０１ピット・土坑計測表

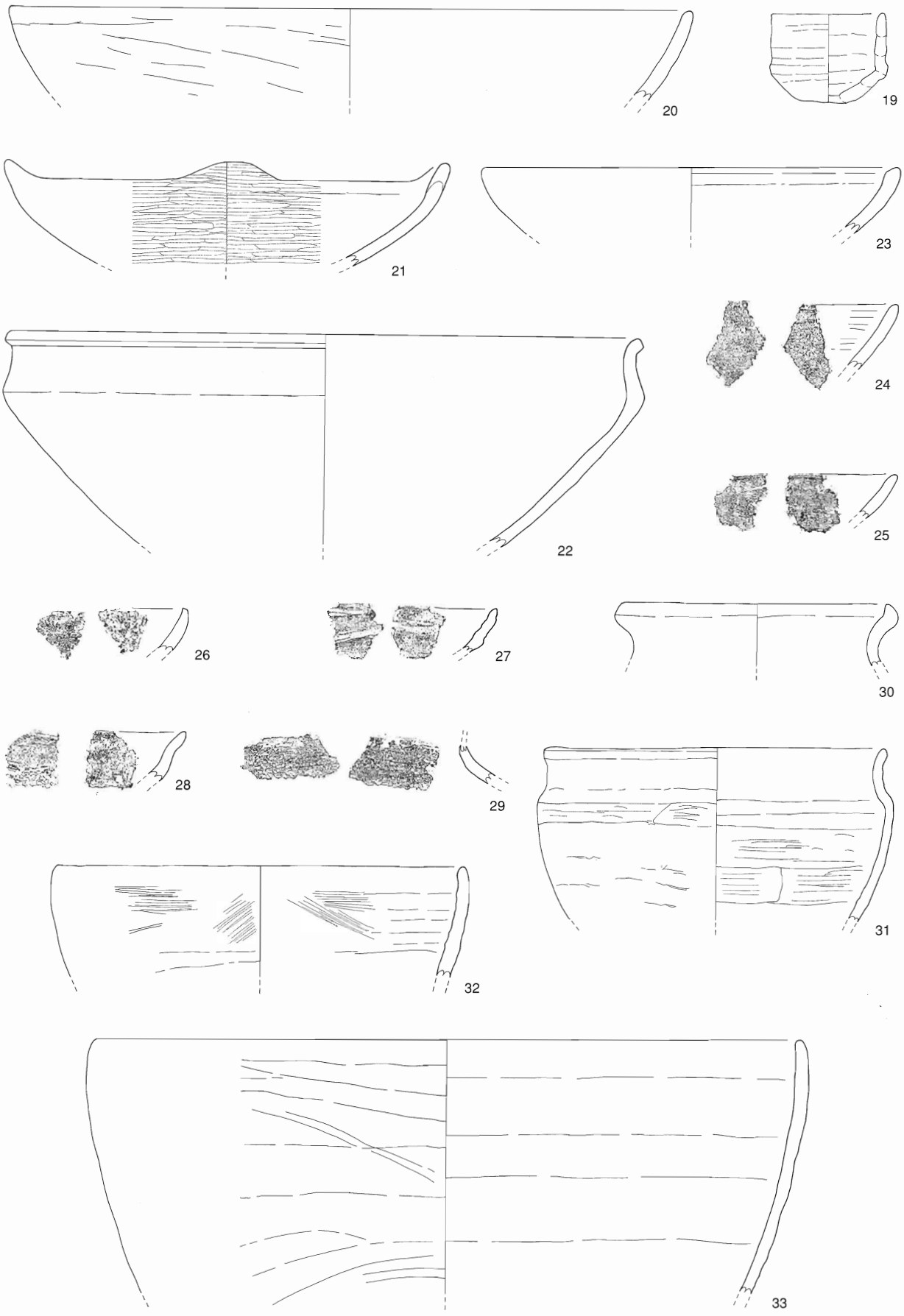
ピット名	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
焼土面1	0.20	0.20	－	16.63	－	埋土中で検出。
掘込炉	0.79	0.70	0.28	16.41	16.13	
P1	0.4 (0.23)	0.22	0.57	16.55	15.98	二段堀。( )は下段の長径。 上段から石皿破片出土。
P2	0.48	0.3	0.33	16.54	16.21	二段堀
P3	0.26	0.25	0.49	16.53	16.04	2/3の深さから石皿破片出土。 底面より石核(27図-31)出土。
P4	0.32	0.29	0.35	16.49	16.14	
P5	0.31	0.26	0.48	16.3	15.82	
P6	0.24	0.24	0.41	16.38	15.97	
P7	0.26	0.24	0.23	16.41	16.18	
P8	0.26	0.24	0.61	16.43	15.82	ＳＤ03内で検出。
P9	0.25	0.18	0.14	16.54	16.4	
P10	0.23	0.22	0.08	16.53	16.45	
P11	0.16	0.15	0.21	16.31	16.1	
P12	0.27	0.19	0.08	16.2	16.12	
P13	0.43	0.34	0.12	16.22	16.1	
P14	0.22	0.18	0.08	16.09	16.01	
P15	0.28	0.2	0.25	16	15.75	
P16	0.29	0.21	0.12	16.08	15.96	
P17	0.3	0.23	0.35	16.63	16.28	
P18	0.18	0.17	0.14	16.81	16.67	
P19	0.2	0.19	0.15	16.89	16.74	
P20	0.18	0.13	0.11	17.03	16.92	
P21	0.27	0.25	0.14	17.2	17.06	
P22	0.28	0.27	0.3	17.15	16.85	
P23	0.24	0.21	0.24	16.63	16.39	
P24	0.36	0.26	0.3	16.44	16.14	
P25	0.24	0.18	0.44	16.32	15.88	根撹乱が入る。
P26	0.19	0.15	0.42	15.97	15.55	ＳＩ04の壁に位置する。
P27	0.22	0.2	0.37	16.48	16.11	
P28	0.23	0.18	0.18	16.77	16.59	
P29	0.29	0.27	0.42	16.98	16.56	根撹乱が入る。
P30	0.26	0.21	0.35	17.36	17.01	
P31	0.27	0.23	0.15	17.3	17.15	
P32	0.24	0.21	0.29	17.11	16.82	
P33	0.23	0.21	0.23	16.95	16.72	
P34	0.27	0.22	0.47	16.74	16.27	

第７表　ＳＢ０１ピット計測表

ピット名	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
P1	0.27	0.26	0.24	17.53	17.29	
P2	0.22	0.22	0.18	17.36	17.18	
P3	0.23	0.21	0.15	17.18	17.03	
P4	0.2	0.2	0.14	17.2	17.06	
P5	0.27	0.2	0.19	17.59	17.4	
P6	0.27	0.22	0.22	17.73	17.51	
P7	0.3	0.26				
P8	0.27	0.21				



第23図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図１



第24図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図２

た口縁部上面に沈線がめぐり、外端に巻き貝の刺突文が施されているもので、外面赤橙色、内面黄褐色を呈する。調整は風化のため不明。砂を含み、焼成は普通。５は内傾する口縁端部片で、外面には0.7㎝の間隔をおいて左右に沈線が施されている。外面茶褐色、内面暗黄褐色をなし、ミガキ調整である。砂を多く含み、焼成は良好。

６～８は屈折部に刻目文を持つ浅鉢である。６は推定口径16㎝。頸部から口縁にかけては外側に大きく外反して口縁端部に至っている。口縁端部の外側はやや丸みを持って立ち上がり、上端部は丸い。頸部から胴部にかけては「く」の字形に屈曲している。この部分に刻目文が施されている。この文様は左上がりのやや太めの斜線である。色調は茶褐色で、焼成はやや軟質である。７は浅鉢の屈曲部の破片である。色調は茶褐色で、胎土に多くの砂を含み、焼成は十分。屈曲部にはくさび形をした斜線状の刻目文が施されている。８は屈曲部の破片で、屈折部から上方は外反して口縁部にいたっている。屈折部に刻目文が廻り、色調は茶褐色で、胎土には多くの砂を含む。

９～11は口縁部に縄文を施したもので、９は推定口径22㎝の深鉢。口縁端部は短く外反し、この部分にＬＲの縄文が存在する。調整は外面が横ナデ、内面は先の平らなヘラ状の工具を使った丁寧な横ナデが施されている。10は外側に外反した推定口径20㎝の深鉢である。やや内傾した口縁端部外側にＲＬの縄文がある。色調は暗茶褐で、焼成は十分。器面調整は９と同じ。11は外側が若干外反し、内側はやや湾曲している口縁部片。内面はミガキ、外面もミガキ風の横ナデで、浅鉢になるものと思われる。口縁端部は上部がやや内傾した平坦面があり、外面はやや外傾し、やや太めのＲＬ縄文が施されている。

12～18は胴部にＲＬの縄文を施したものである。12～15がやや太めの縄文で、16～18がやや細めのものである。12・13は大きく内湾した胴部片で、12は左あがり、13はやや縦方向に縄文が施されている。14・15は左上りの斜めに縄文が施しており、胎土に砂を多く含み、内面がナデ調整されている。16～18の細めの縄文を持つものは、一つの土器で縄文の角度が異なっているものや、やや傾きの少ないものがある。16は頸部から胴部にかけての破片で、その境には段を持ち、縄文は段から下方に存在する。上方はミガキが施されている。

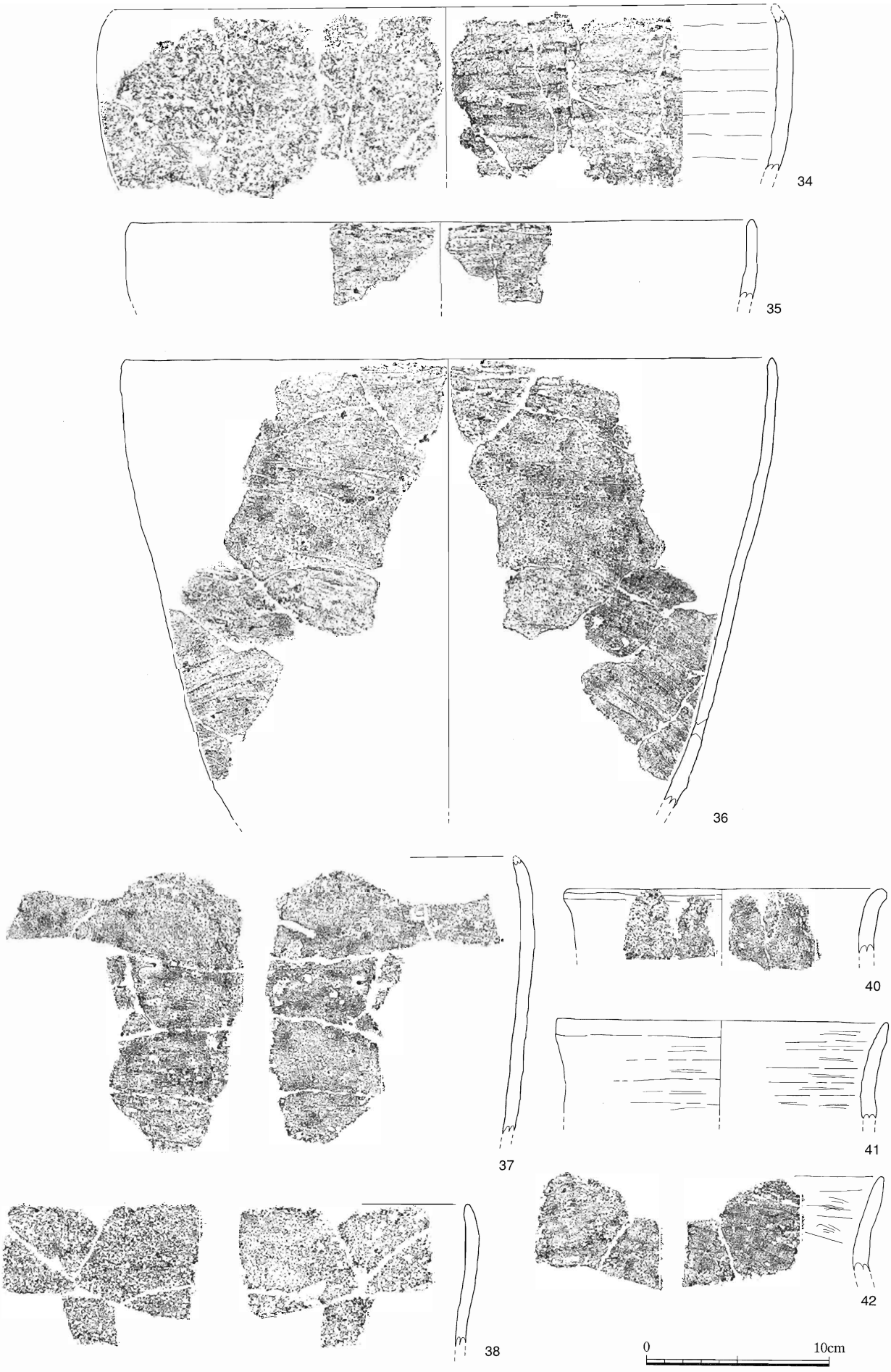
無文土器（第24図～27図）

鉢（19）

19の小形の鉢は、口縁6.1㎝、器高4.6㎝を計る。底部から外側に開きながら1.5㎝あまり上がり、そこからほぼ垂直に上に延び口縁部にいたっているものである。底部は径2.0㎝あまりでほぼ平ら。屈曲部直上はやや凹んでおり、器面は凸凹している。粘土紐の痕跡がよく残っており、輪積みによって作られたものと思われる。調整はナデで、茶褐色を呈する。大粒の砂を含み、焼成は普通。

浅鉢（20～29）

20～28は浅鉢である。20は推定口径36.5㎝を計るやや大形の浅鉢で、上方に向かって開く。内外面ともミガキ調整で、茶褐色を呈する。胎土には砂を多く含み、焼成は十分。21は推定口径23.5㎝あまりの浅鉢で、内外面には丁寧なミガキが施されている。器形は胴部から口縁部に向かってやや内湾しており底部を欠く。口縁端部は丸く、円弧状の突起が見られる。外面は黄褐色、内面は灰褐色を呈し、胎土は砂を含み、焼成は十分。22は「く」の字形に屈折している浅鉢で、推定口径33.2㎝あまりの大形品。屈折部から内側に外反ぎみに上がり、外側に短く外傾して口縁部にいたっている。口縁端部は内傾している面を持つ。器面調整はミガキで、砂を多く含む。焼成は充分。色調は茶褐色である。23は、推定口径19.0㎝の浅鉢口縁部付近の破片。やや厚手のつくりで、口縁部内側



第25図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図３

を肥厚させ、端部はやや尖りぎみである。内外面ともミガキ調整で、淡茶褐色を呈する。胎土は砂を含み、焼成は十分である。24～26は口縁部付近の小破片である。24・25は口縁端部が丸く、器面調整はミガキである。26は細くて平らな口縁端部で、調整は丁寧な横ナデである。

27は口縁端部の下方と屈曲部に沈線が廻る浅鉢で、口縁端部はやや尖り気味。色調は茶褐色、焼成は十分で、砂を多く含む。器面にはミガキ調整がある。28は軽い「S」の字形をした浅鉢。焼成はやや軟質で、調整は横ナデである。口縁端部は丸く、茶褐色を呈する。29は浅鉢頸部片で内外面ともミガキが施されている。淡茶褐色を呈し、砂を含み、焼成は良好。

壺型土器（30）

頸部から口縁部にかけて大きく外反しているもので、推定口径14.0㎝。口縁端部は内径して、尖り気味となっている。外面は赤褐色、内面は灰褐色をなし、焼成はやや軟質である。

深鉢口縁部付近の破片（第24図31～33　第25図34～42　第26図43～48）

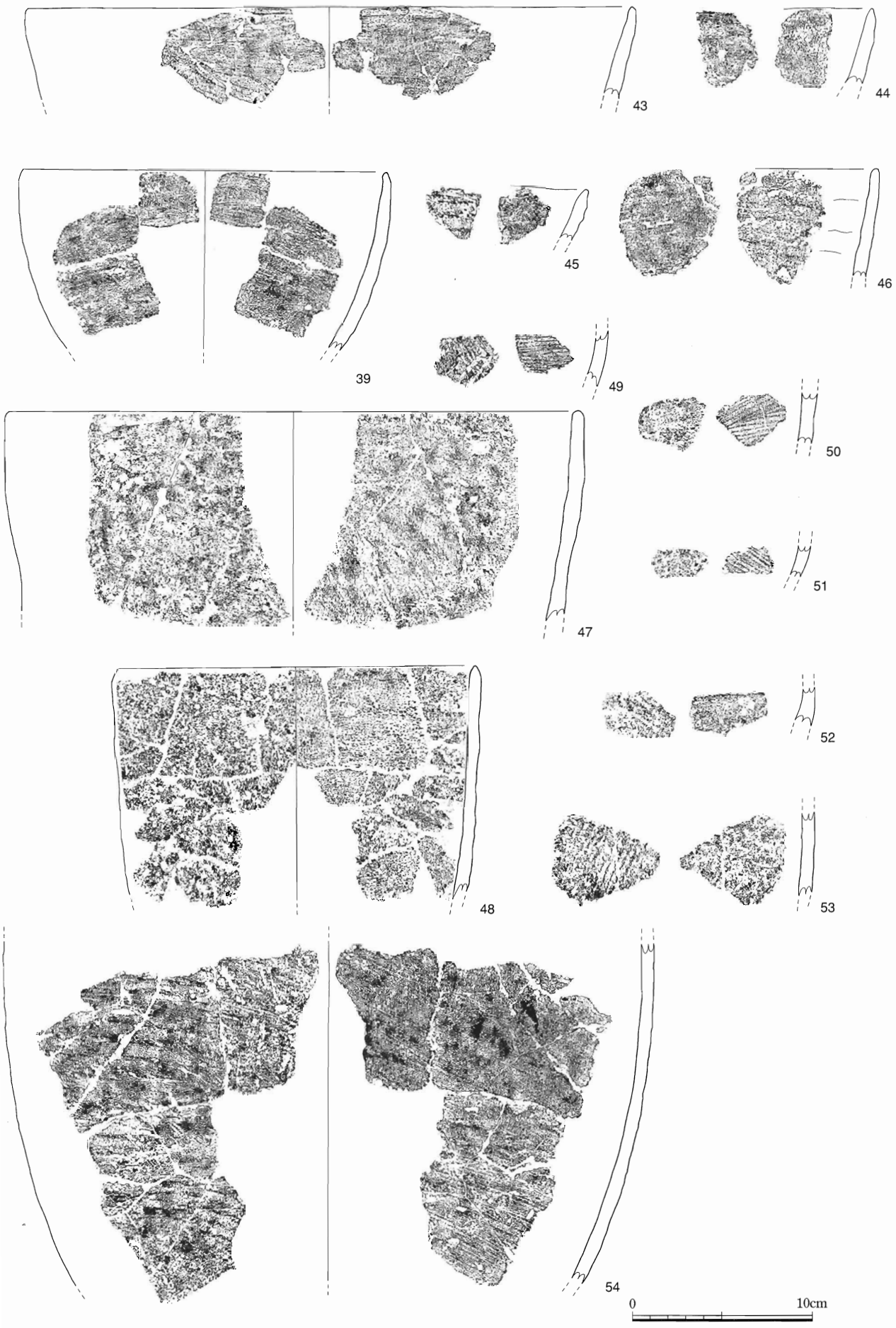
31～48は深鉢口縁部付近の破片である。それらは、軽い「S」字形をていしているもの（31）、やや内湾しているもの（32～39）、やや外反しているもの（40～42）、直立ないしやや外傾しているもの（43～48）に分けられる。また、器面調整で、巻貝状のものによるナデで、断面がやや凹んでいるものを（丸ナデ）、板状のものでナデて断面が平なものを（平ナデ）と呼ぶ。

31は口縁部が外反し、緩やかな肩を持つもので、推定口径18.0㎝である。口縁端部は上面と外側面に平坦面を持つ。内面には幅２㎝前後の平ナデがあり、外面は丸ナデ調整。色調は淡黄褐色、暗茶褐色、白褐色で、焼成は十分である。32は推定口径22㎝で、色調は外面暗茶褐色、内面淡暗茶褐色を呈する。胎土は砂を多く含み、焼成は普通である。調整は内外面とも丸ナデで、器面は凸凹している。33は推定口径38㎝あまりで、口縁端部は丸い。外面には一部に煤が付着しており、調整は幅広い丸ナデが施されている。器面は凸凹しており、茶褐色を呈する。内面は普通の横ナデ調整があり、胎土は砂を多く含み、焼成は十分である。

34は口縁端部を欠くが36㎝あまりの口径になるものと思われる。外面は風化しており調整は不明。内面は幅１㎝前後の丸ナデが施されている。胎土は砂を多く含み、焼成はやや軟質である。35は口縁端部がやや尖りぎみで、外面は凸凹し、丸ナデ調整が施されている。推定口径34.0㎝、内面は細かい横ナデ調整痕が残る。黒灰色を呈し、胎土に砂を含み、焼成は普通である。

36は推定口径34.9㎝のやや薄手の深鉢で、口縁部上面は山形に尖る。口縁部端部から12㎝あまり下がったところが外反しており、上方がやや内湾ぎみ、下方外傾している。下方には外内面から穿った円形の孔がある。器面の調整は平ナデで、外面は凸凹している。砂を多く含み、外面茶褐色、内面黒褐色を呈し、焼成は良好。37は口縁部先端を欠くが、上方はやや内湾している。外面は丸ナデの痕跡がわずかに残り、器面は割と綺麗な仕上がりとなっている。内面は平ナデで、茶褐色を呈し、砂を多く含む。38は口縁部先端が山形に尖っているもので、調整はナデ、外面黄茶褐色、内面黄褐色を呈する。砂を含み、焼成は普通。39は推定口径20.0㎝あまりのもので、口縁部は内傾して先端にいたっている。上端は狭い平らな面をもつ。体部は内湾気味で外面淡褐色、内面淡茶褐色をなし、細かい砂を含む。調整は横ナデで、焼成は十分である。

40は推定口径17㎝、若干外反したやや厚手の口縁部片。口縁端部は内傾した面を持つ。器面はやや風化しているが、横ナデの調整があるものと思われる。淡黄褐色で、大粒の砂を含む。焼成は普通。41はやや外反した口縁部片。推定口径18㎝あまりで、内外面とも丸ナデ調整が施されている。茶褐色を呈し、器面は凸凹している。焼成は十分で、胎土は砂を多く含む。42は軽い「く」の字形



第26図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図４

に屈折しているもので、口縁端部は尖りぎみである。内外面には平ナデ調整があり、外面は凸凹している。茶褐色を呈し、砂を含む。

43は推定口径33cmの深鉢。口縁部の下方はやや外傾しているが、屈折して端部にいたっている。焼成は十分で、平ナデ調整が行なれている。口縁部の先端は尖っており、外面は「く」の字形に屈折している。色調は外面明茶褐色、内面淡暗茶褐色である。44は暗茶褐色を呈した口縁部付近が外傾するもので、端部は尖りぎみである。大粒の砂をふくみ、横ナデの調整が内外面に施してある。外面は凸凹している。45は口縁部付近が外傾しているもので、端部はやや尖り気味である。外面は先のやや丸いヘラ状のもので横ナデを行っているため、器面が凸凹している。内面は普通の横ナデである。茶褐色を呈し、大粒の砂を含む。46は若干外傾しているもので、口縁端部は丸い。調整は先の平らな板状のもので横ナデを行っている。内面は強く押してナデを施しているため器面が凸凹している。黒灰色、淡茶褐色で、砂を多く含む。

47は口縁部がほぼ直立しているもので、推定口径31.3cmあまりである。器面は風化を受けているが、外面は斜め左上がり方向の平ナデと煤の付着が見られる。砂を多く含み、焼成はやや軟質である。48も口縁部がほぼ直立しているもので、推定口径19.7cm。外面赤褐色、内面黄褐色・黒色を呈し、調整はナデ、砂を多く含む。外面の一部に煤付着。焼成は普通である。

深鉢胴部片（49～64）

これらの破片は49～53が二枚貝の貝殻条痕を持つもの、外面に丸ナデがあるもの（54～60）

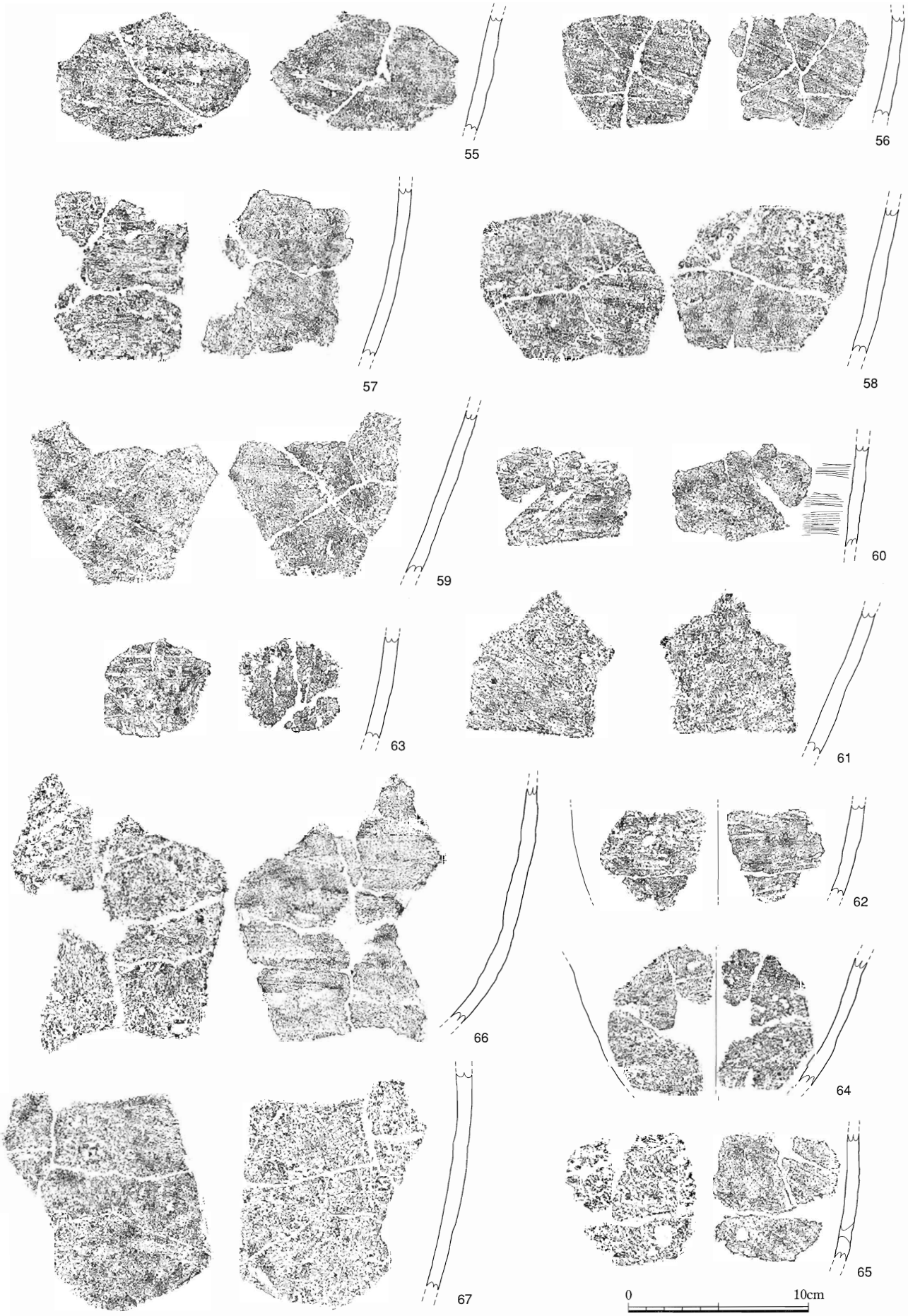
平ナデがあるもの（61～64）に分けられる。ＳＩ０１から出土した縄文土器の中で貝殻条痕を持つもの極めて少なく図化した５点がすべてである。49～51が内面、52･53が外面に施されている。条痕の幅は0.2cmから0.3cmで、外面にあるものは残りが悪い。反対側の面の調整は横ナデや平ナデである。胎土は砂を多く含み、焼成は十分なものが多い。

54～60は丸ナデの調整が見られるもので、器面が凸凹しているものが多い。54～56は外面が丸ナデ、内面が平ナデ調整である。外面はナデによって器面が凸凹している。丸ナデは幅が１cm前後で広く、内面は平ナデの細かい線がある。焼成は良好で、砂を多く含む。57～60は平ナデを行った後、一部に丸ナデを施した外面を持つ。

61～64は平ナデの外面をもつものである。63の内面はミガキ風の丁寧な調整が施してあり、64はナデ調整である。61・62は内外面ともに平ナデがある。65・66は外面が風化のため明確でないが、内面は平ナデで、65には径1.0cmあまりの丸い穴が穿孔されている。67は比較的大きな胴部片であるが、全体的に風化を受けており、調整は不明である。

底部片（第28図）

68～75は上げ底ぎみのもので、68～71・75が深鉢、72～74が浅鉢の底部になるものと思われる。68～71は底端部の上方が若干外反しており、70は外面体部に横ナデ、底部内外面の端に円形のナデがある。71は内面に70と同様なナデが内面にあり、73は内外面にミガキが施され、底部にはヘラ先でナデを施した痕跡が残っている。74は底の中央部を欠くが、上げ底になるものである。体部下方から底部と接する付近にかけて指圧痕が廻っている。内部はミガキで、砂を含む。75も底部中央部を欠くが、底部から外側に開いて上方に伸びているもので、内面下方には横ナデが施されている。77～81は平底で、81が浅鉢、その他は深鉢の底部になるものと思われる。82は平底であるが中央部がやや隆起している。85は丸底、83・84は不明なものである。



第27図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図５

石器（第29図～33図）

ＳＩ０１から出土した石器には狩猟に使った石鏃、漁猟の石錘、開墾や農耕用の打製石斧、磨製石斧、料理用具の石皿、磨石、その他生活用具の石錐、抉り入り石器、楔形石器等があり、生活に必要な石器が揃っていた。剥片石器は、ほとんどが黒曜石で、総重量419.1ｇ、総個体数233点を数える。その内、成品・未成品は22点、使用痕・加工痕の有る剥片６点、石核４点、剥片201点である。剥片の占める割合が多いことから、この場で石器を加工している可能性が高い。以下石器の概要を述べる。

石鏃（１～５）

石鏃及びその未成品と思われるものが、５点出土している。それらは無茎石鏃で、安山岩製の２を除き黒曜石製である。１は両脚部を欠いているが、残存長さ1.4cm、残存幅1.0cmを計るやや小形なもので、先端は尖っている。えぐりは円弧状で、両側縁には押圧剥離の調整が見られる。２は脚部の片方を欠くが、長さ1.6cm、幅1.4cm、厚さ0.25cmを計るやや幅広なものである。脚部の先端は丸く、えぐりは円弧状で、0.4cmあまりの深さを持つ。縁には調整の剥離痕があるが、面は未加工である。３は長さ2.0cm、幅1.4cm、を計るややいびつな形を呈し、先端は欠けている。全面に調整の加工が施し、深さ0.1cmの小さな円弧状のえぐりを持つ。４は石鏃基部にあたる剥片と思われるもので、幅1.8cmあまりを計る平基の無茎石鏃。丁寧な加工が有り、厚みは0.3cm。５は上方部を欠いているが、両側縁には加工痕があり、石鏃の未成品と思われる。

石錐（６・７）

黒曜石製のものが２点出土している。６は長さ2.5cm、幅0.9cm、厚さ0.6cmを計る。横断面は方形を呈し、先端がＶ字形に尖っており、この付近にのみ加工痕が施されている。７は長さ3.4cm、幅1.2cmあまりで、柳葉状の形をしている。横断面は６と同様方形を呈しており、下方の側縁は一方が内湾、他方が外湾して先端部にいたっている。先端は欠けてやや丸みを持っている。

抉り入り石器（８）

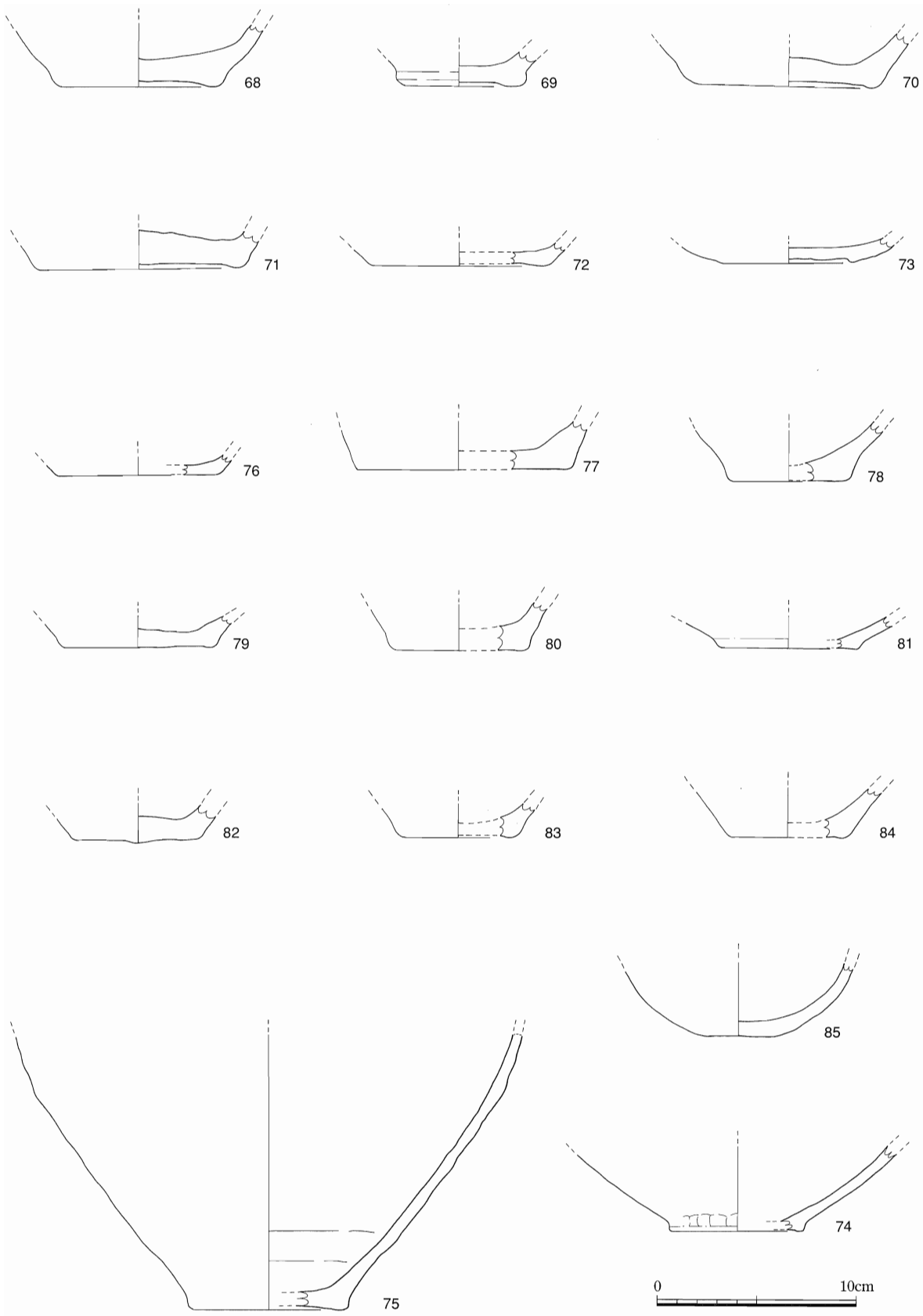
８は、やや歪な平行四辺形を呈したもので、両側に抉りがあり、下方の縁に刃部を持つ。加工は刃部、抉り部の他、上方縁の片面に見られる。面は自然面と縦剥した面があり、刃部には使用痕が残っている。大きさは5.7cm×3.8cmで、黒曜石製である。被熱のためか一部白く変色しているところがある。使用痕のある刃部の形態等からこの石器は収穫具になるものと思われる。

石匙（９）

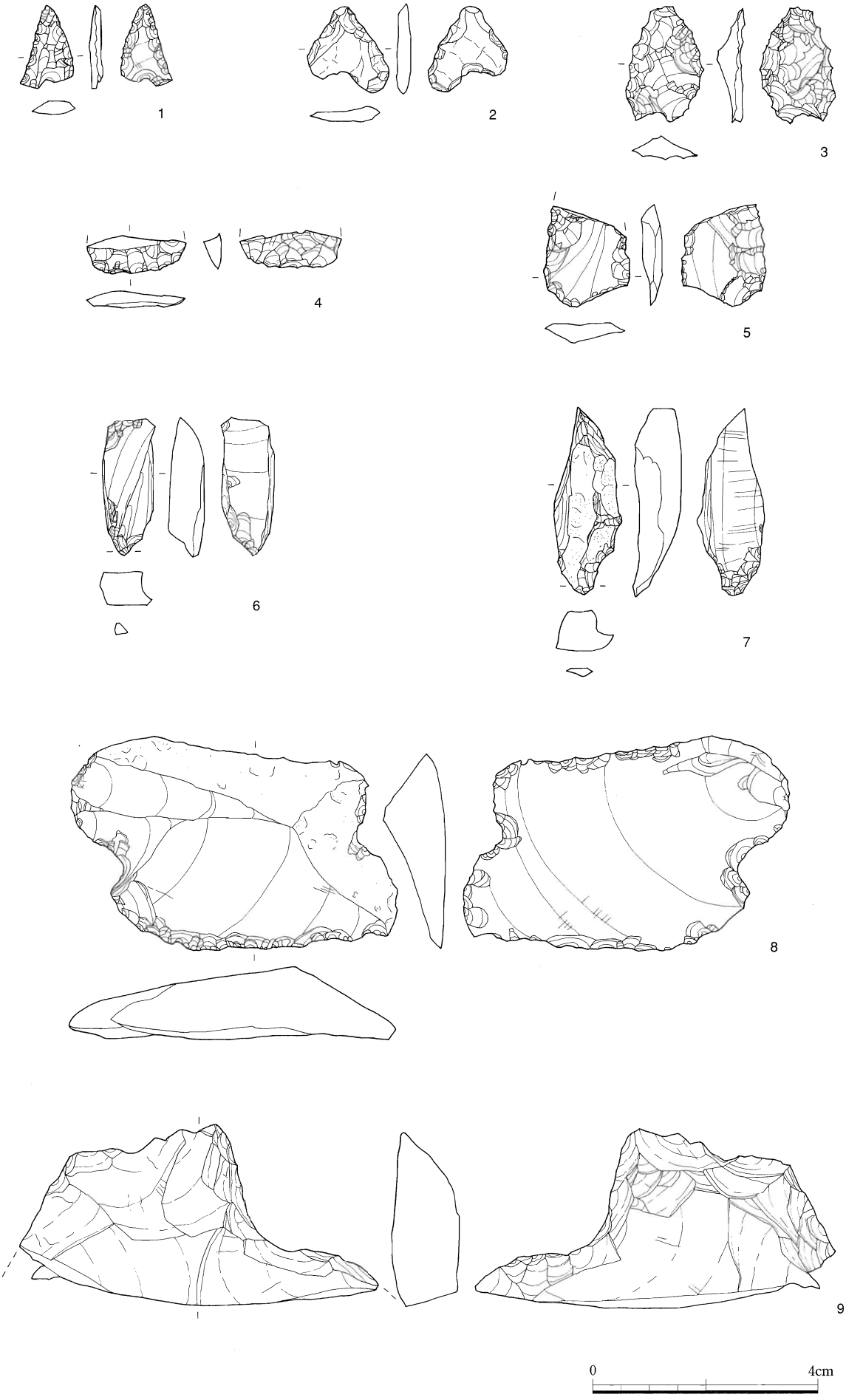
９は刃部を欠いているが、つまみの片縁に加工痕が施されているもので、横匙と思われる剥片である。残存している横幅は6.5cm、厚さ1.2cmを計る。安山岩製で、つまみの片方に加工痕がないことから未成品になる可能性がある。

楔形石器（10～22）

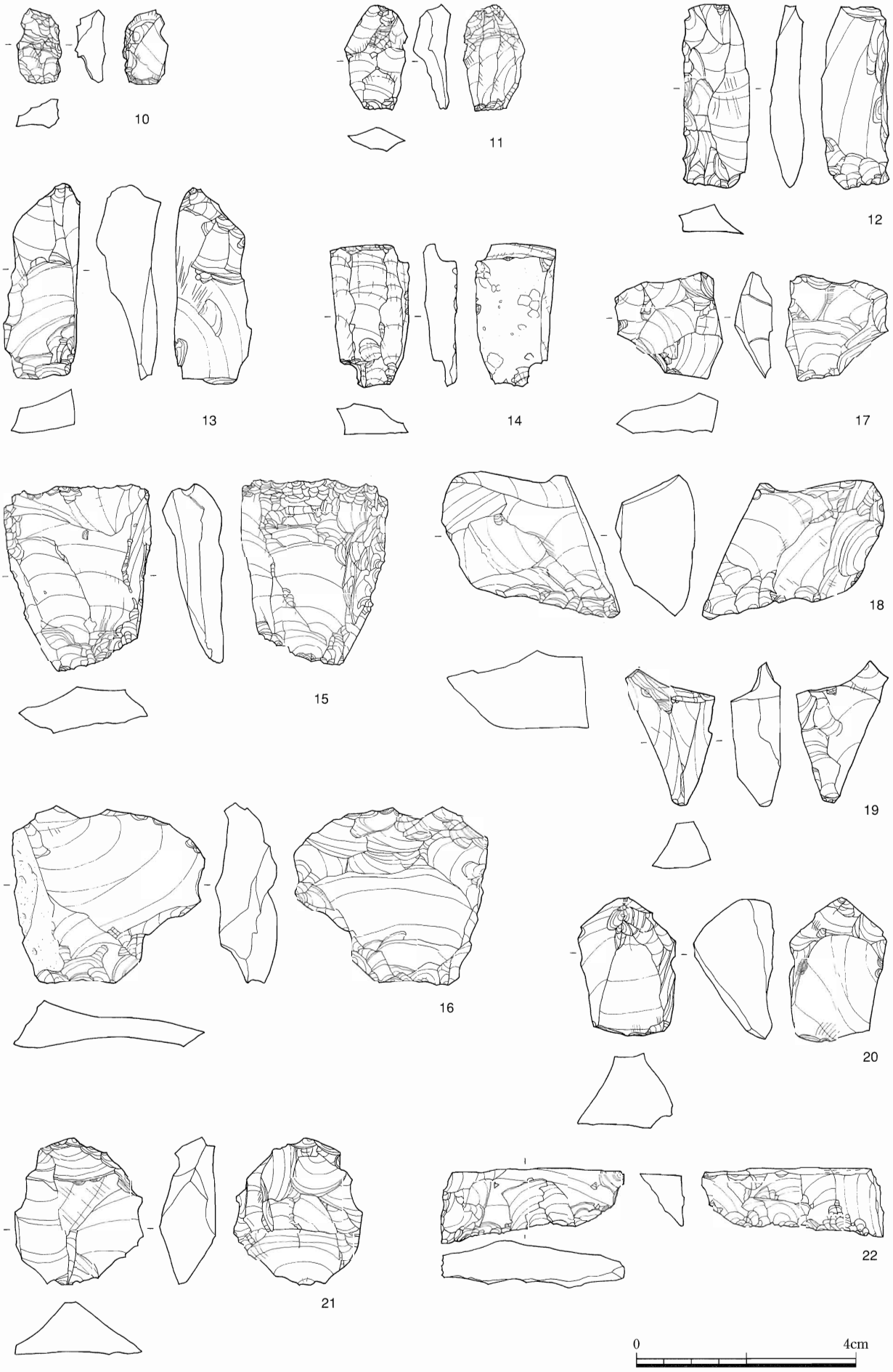
楔形石器には、柱状(10～14)台形・平行四辺形（15～18）三角形（19）５角形（20）円形（21）と様々な形態のものがあり、石材はいずれも黒曜石である。10は長さ1.35cm、幅0.8cm、厚さ0.5cmを計るやや歪な長方形を呈した小形品である。断面は上方が厚く、下端は尖り、つぶれが見られる。上部には不規則な剥離面がある。11は長さ1.9cm、幅1.1cmあまり。上部は丸く、下端は平らで尖る。下端には不規則な剥離が見られ、上端にはつぶれがある。12は長方形を呈したもので、下部はＶ字形に尖る。長さ3.3cm、幅1.2cmを計る。側縁の一方はやや内湾し、下端には不規則な剥離と、若干のつぶれがある。13は長さ3.6cm、幅1.4cmあまりで、下端は平らで尖っているが、上部は切っ先の



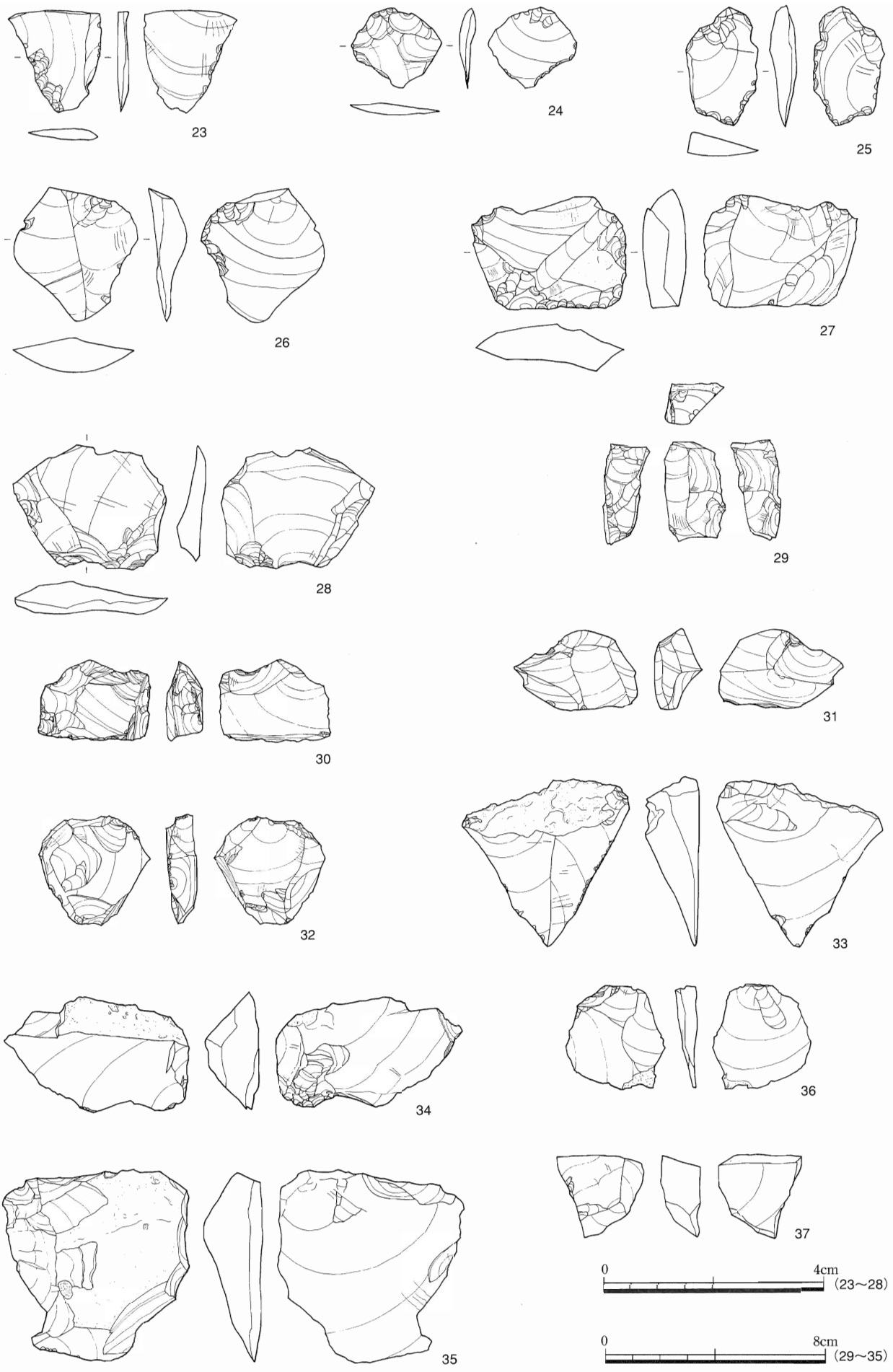
第28図　勝負遺跡ＳＩ０１出土土器実測図６



第29図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図１



第30図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図２



第31図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図３

形態を呈し、1.1㎝あまりの厚さを持つ。下端の一部につぶれがある。14は長方形と言うより羽子板状の形をしており、長さ2.6㎝、幅1.4㎝を計る。下端部は0.2㎝あまりの厚さを持ち、不規則な剥離面がある。

15は長さ3.3㎝、幅2.6㎝あまりのもので、上部が厚く下方に行くに従って細くなり、先端は尖っている。上部につぶれ、下端に不規則な剥離が見られる。16は上部が円弧状、下端が平らな台形状を呈している。長さ3.3㎝、幅3.4㎝、厚さ1.1㎝を計る。17は16と同じ形態であるが、やや小形で、長さ1.9㎝、幅1.9㎝、厚さ0.7㎝あまりである。上下端はいずれも尖っており、つぶれがある。18は形状が平行四辺形で、厚さ1.4㎝あまりを計るものである。下端にはつぶれが見られ、V字形に尖っている。長さ2.6㎝、幅3.2㎝あまりである。

19は長さ2.6㎝、幅1.6㎝、厚さ0.9㎝あまりの逆三角形を呈したものである。下端は厚さ0.2㎝の平らな面を持ち、つぶれがある。20は五角形状で上部が三角に尖り、下端は平らである。断面は一方がほぼ垂直に下がり、片方は「く」の字形に屈曲して下端にいたって尖っている。長さ2.5㎝、幅1.8㎝、厚さ1.5㎝である。21は円形状のもので、上下端につぶれが見られる。長さ2.7㎝、幅2.2㎝、厚さ1.0㎝である。下端は「V」字形に尖る。22は幅広のもので、幅3.3㎝、長さ1.4㎝を計る。下端につぶれが見られる。

使用痕のある剥片（23～27）

23は逆三角形を呈した剥片で、側縁の一部に使用痕が見られる。長さ1.9㎝、幅1.7㎝を計る。24は四角形をした剥片。大きさは1.2㎝×1.4㎝。一辺に使用痕がある。25は長さ2.2㎝、幅1.3㎝の細長い六角形を呈した剥片で、一辺に使用痕がある。26は一辺2.0㎝を計る四角形の剥片で、二辺に使用痕がある。27は26と同様、二辺に使用痕がある2.8㎝×2.0㎝の剥片で、石核を転用したものである。これら使用痕のある剥片はいずれも黒曜石で、スクレーパー的な用途をなしていたものと思われる。

加工痕跡のある剥片（28）

28は両側が逆「ハ」の字形に上方に向かって開き、上端は円弧状で、下端は平坦なものである。長さ2.3㎝、幅2.8㎝、厚み0.6㎝を計る。下端に加工痕見られ、他は剥離痕がある。石材は黒曜石である。

石核（29～32）

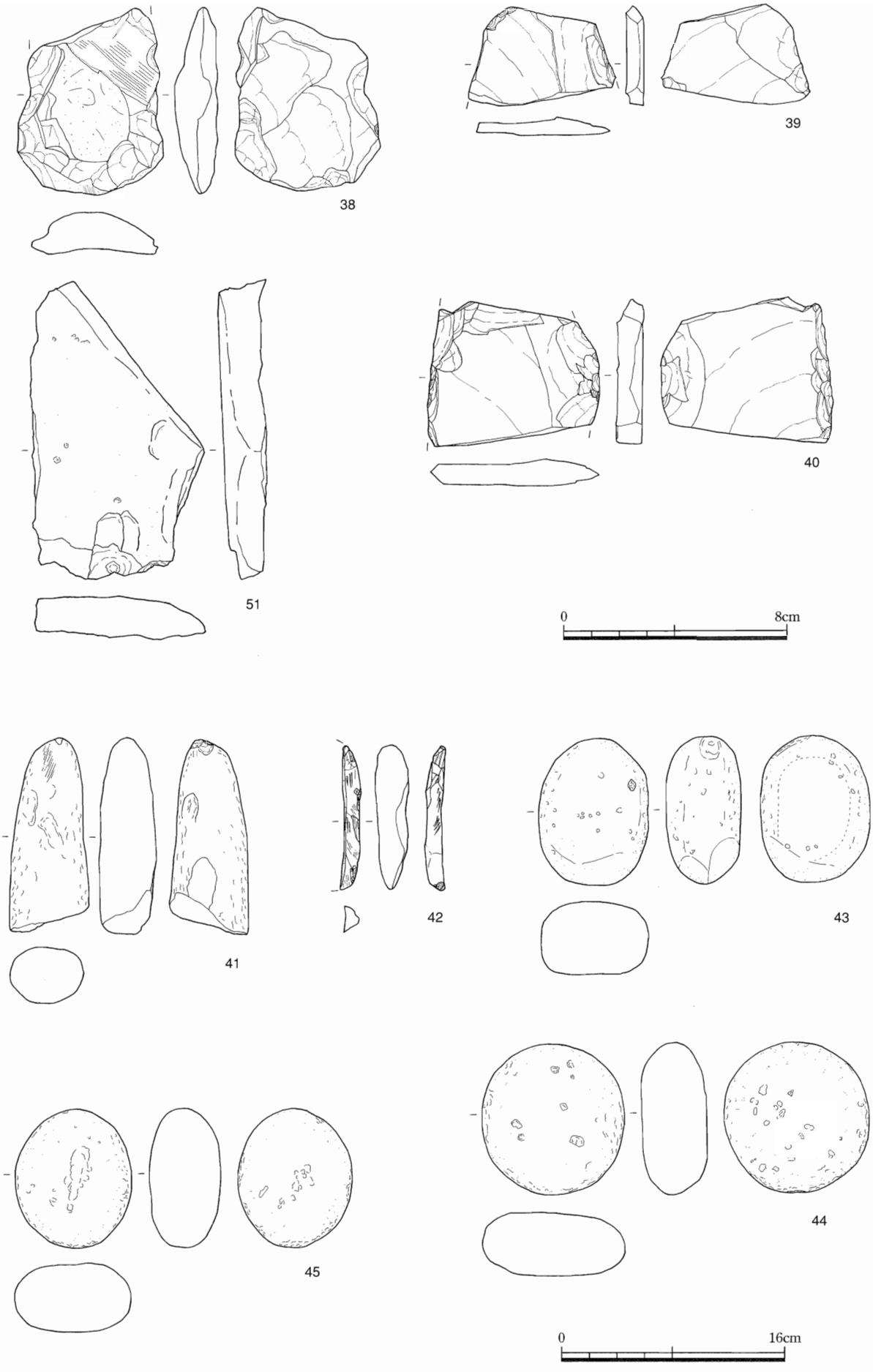
29～32は黒曜石の石核である。29は長さ3.6㎝、幅2.0㎝で、上方に打点があり、一部に自然面がある。形状は長方形である。30は上方からの剥離が多く、長さ3.0㎝、幅4.0㎝で、五角形を呈する。31・32は不正な四角形で、31は多方向から横長剥片を取っており、長さ2.9㎝、幅4.5㎝を計る。32は上方に打点があるもので、長さ3.9㎝、幅4.0㎝である。

玉髄の剥片（33～37）

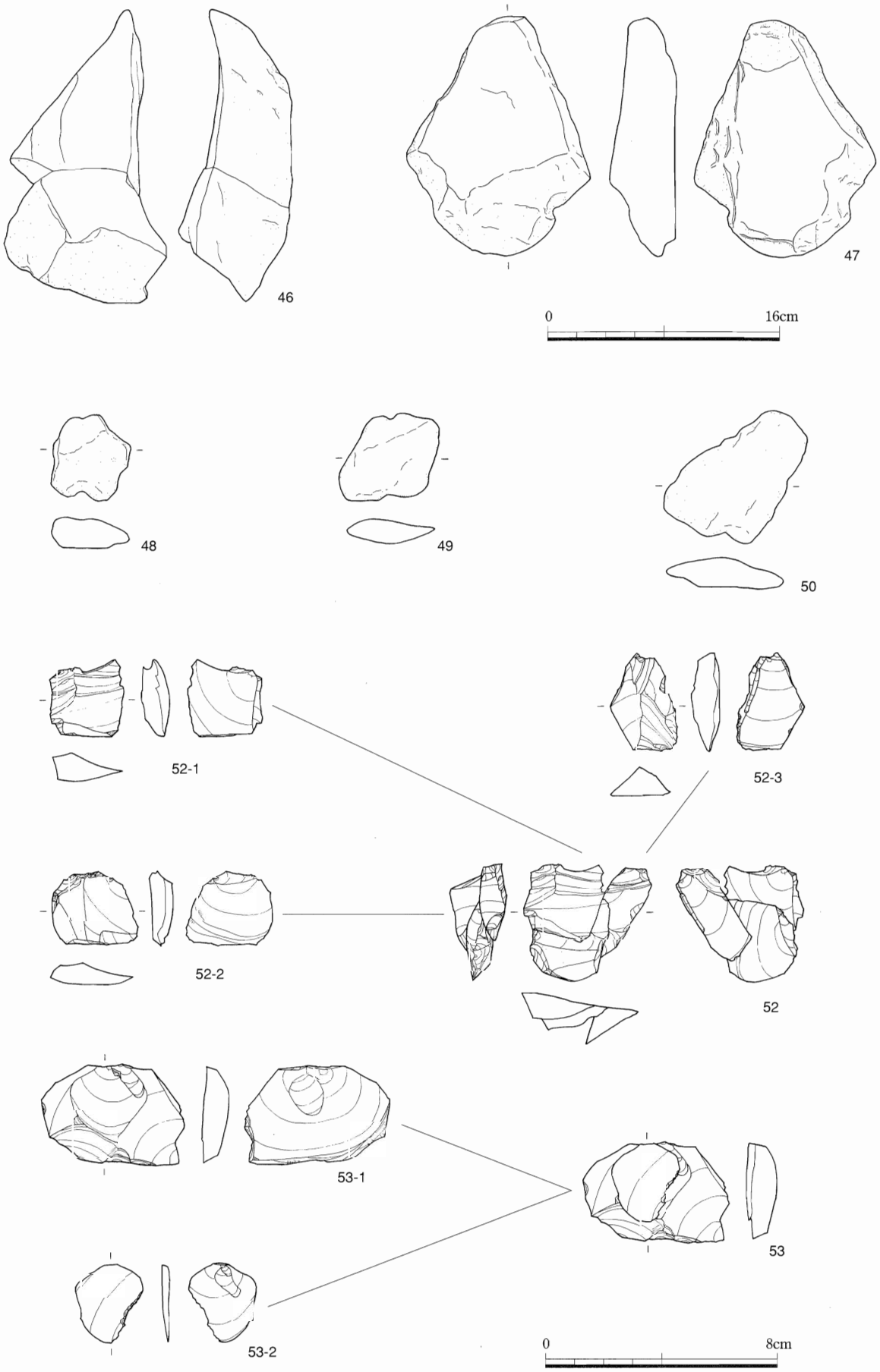
33～37は玉髄の剥片である。33は逆三角形を呈し、一方の側縁に使用痕によって出来たと思われる微細な剥離面がある。34～37は不整形なもので、34～36は下端が鋭く尖っており、自然面を持っている剥片もある。

打製石斧（38～40）

38～40はいわゆる扁平打製石斧と呼ばれているもので、38は上部を欠くが、残存長6.6㎝、幅5.2㎝の安山岩質。刃は円刃で摩耗しており、一部に擦痕がある。両側面は外湾しているので撥形になる可能性がある。縦断面は一方がほぼ垂直に下がっているのに対し、片方は「く」の字形に屈曲し



第32図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図４



第33図　勝負遺跡ＳＩ０１出土石器実測図５

て刃部にいたっている。刃部は「V」字形を呈しているが、端部は摩滅のため丸くなっている。横断面は上下面とも湾曲しており、側面には加工痕跡が見られる。39・40は流紋岩の打製石斧片で、同一個体の可能性がある。39は基部の破片と思われ、厚みは40と比べやや薄く0.6cmあまりである。側面は「ハ」の字形になっており、下方に向かって幅広くなっている。40は39より幅が広く、厚みも厚い。刃部に近い破片と思われ、側面には調整痕がある。

磨製石斧（41・42）

41は残存長14.2cm、幅5.7cm、厚さ4.2cmを計る磨製石斧であるが、刃部を欠く。基部は丸く、横断面は長円形で、石質は塩基性片岩である。側面には敲打痕がある。42は磨製石斧の側面部と思われるもので、長さ10.4cmである。基部からの打撃で割れたものと思われ、下方の先端には刃部と思われる調整が施されている。石材は流紋岩に近いものである。

磨石（43～45）

43～45は安山岩の磨石。43は長さ10.6cm×7.8cmを計る長円形を呈し、厚みは5.3cmである。横断面はやや歪な長円形で、下面は平ら、その他は丸い。下端は両側面から磨った痕跡がよく残っている。上面の一部に敲打痕がある。44は10.3cm×10.9cmの円形に近い形をしたもので、厚みは4.6cmである。縁部に磨った痕跡が残っている。45は10.1cm×8.3cmの長円形を呈し、厚みは4.8cmである。全体的に磨った痕跡が残っており、主面の中央部には叩いた時についた痕跡がある。

石皿（46・47）

46・47は流紋岩系の柔らかい石材を使った石皿である。46は2つのピットから出土したものが接合できたもので、使用した面は弧状に凹んでおり、一部に煤が付着している。47は主面の両面に使用痕があるものである。

黒曜石の剥片接合資料（52・53）

52・53はそれぞれ黒曜石の剥片資料である。52は3点の剥片が接合し、いずれも長さ3cm前後、厚さ1cm前後のものである。①は長さ2.7cm、幅2.6cm、厚さ1.0cmで背面に自然面を残し、腹面はポジティブな主要剥離面を残す。②は長さ2.5cm、幅3.0cm、厚さ0.8cmで①と同じく自然面を残す。③は長さ3.4cm、幅2.3cm、厚さ1.0cmで断面三角形の縦長剥片である。剥離の順番はまず①を左上から剥離した後、打面を変えて左側縁から②を剥離し、その後、右上から③の剥片を取っており、剥離のたびに打面を回転させている。53は長さ3.5cm、幅5.0cm、厚さ1.1cmの横長剥片から厚さ0.25cmの剥片を取っている。①は長さ3.5cm、幅5.0cm、厚さ0.9cmで腹面にポジティブな主要剥離面を残し、②は長さ2.8cm、幅2.4cm、厚さ0.25cmで右側縁に微細な剥離痕が見られる。

その他（48～52）

48～50は柔らかい石に小さなえぐりを持ち、石錘になる可能性がある。形が不正形で、えぐりもしっかりしていない。重さは48が5.6g、49が7.7g、50が18.0gである。51は扁平打製石器の石材と考えられるもので、厚さ1.6cmの板状を呈する。石質は流紋岩と安山岩の中間に当たるものである。

ＳＩ０２・ＳＤ０１（第34図）

勝負遺跡の東端の緩斜面に築かれた弥生時代後期の竪穴住居跡で、1992年に松江道路に伴う発掘調査で検出されたＳＩ１４と同一のものである。今回の調査では住居跡の南西部を発掘し、全体が明らかになった。前回の調査では、火の使用に関係する施設である溝を伴う中央ピットや径50㎝～60㎝、深さ68㎝～84㎝の主柱３本が見つかっている。その他、壁沿いに幅４～８㎝、深さ５～10㎝の周溝、焼土、赤色顔料等が検出され、４本柱の隅丸方形の住居跡と考えられていた。今回の調査では、この住居跡南側の壁及び周溝を確認し、5.4ｍ×4.5ｍ以上の規模であることが判明した。主柱４本の最後の１本（ピット２）はやや外側にずれた位置から見つかった。この主柱は径30㎝、深さ40㎝あまりで、東側及び北側の主柱との間隔は2.8ｍ前後である。その他、25㎝～30㎝、深さ25㎝～30㎝の柱穴と思われるのもが２基見つかるとともに、中央ピットから西側に伸びている溝も確認した。また、中央ピット南側の床面から円形状の焼土２カ所を検出し、床面の西側端は後世の段状遺構（ＫＤ10）によって切り取られていた。埋土は暗黄茶褐色土で周溝が埋った後、淡黄茶褐色土が床面全体を覆っていた。

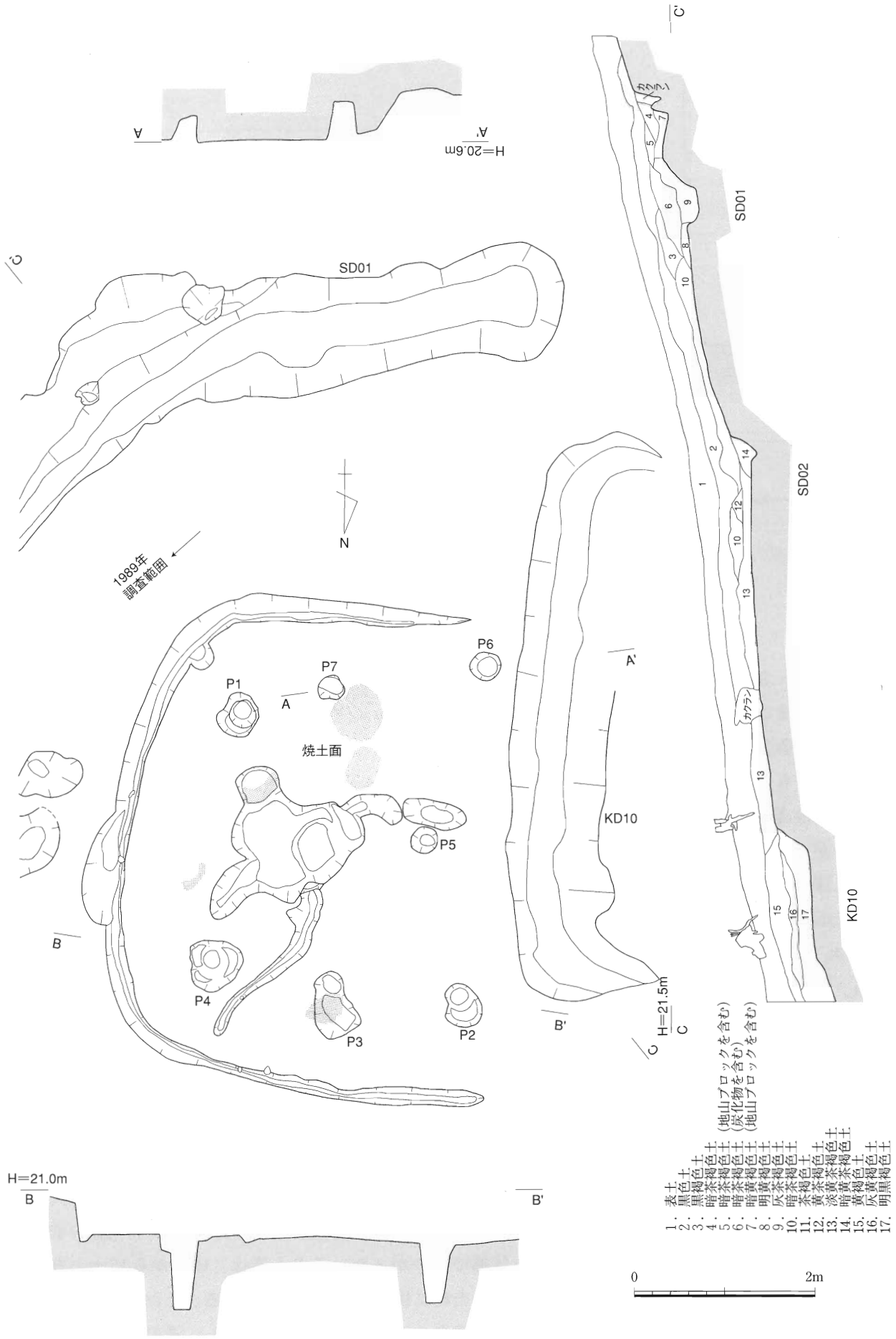
住居跡の外側２ｍあまりのところには、幅1.0ｍ～1.3ｍ、深さ0.2ｍの円弧状の溝が存在していた。この溝は、住居跡より高い斜面に掘られており、先端は住居跡南壁がなくなるあたりで止まっていた。排水等の目的で造られたものと思われ、灰茶褐色土が埋まっていた。

出土遺物（第35図）

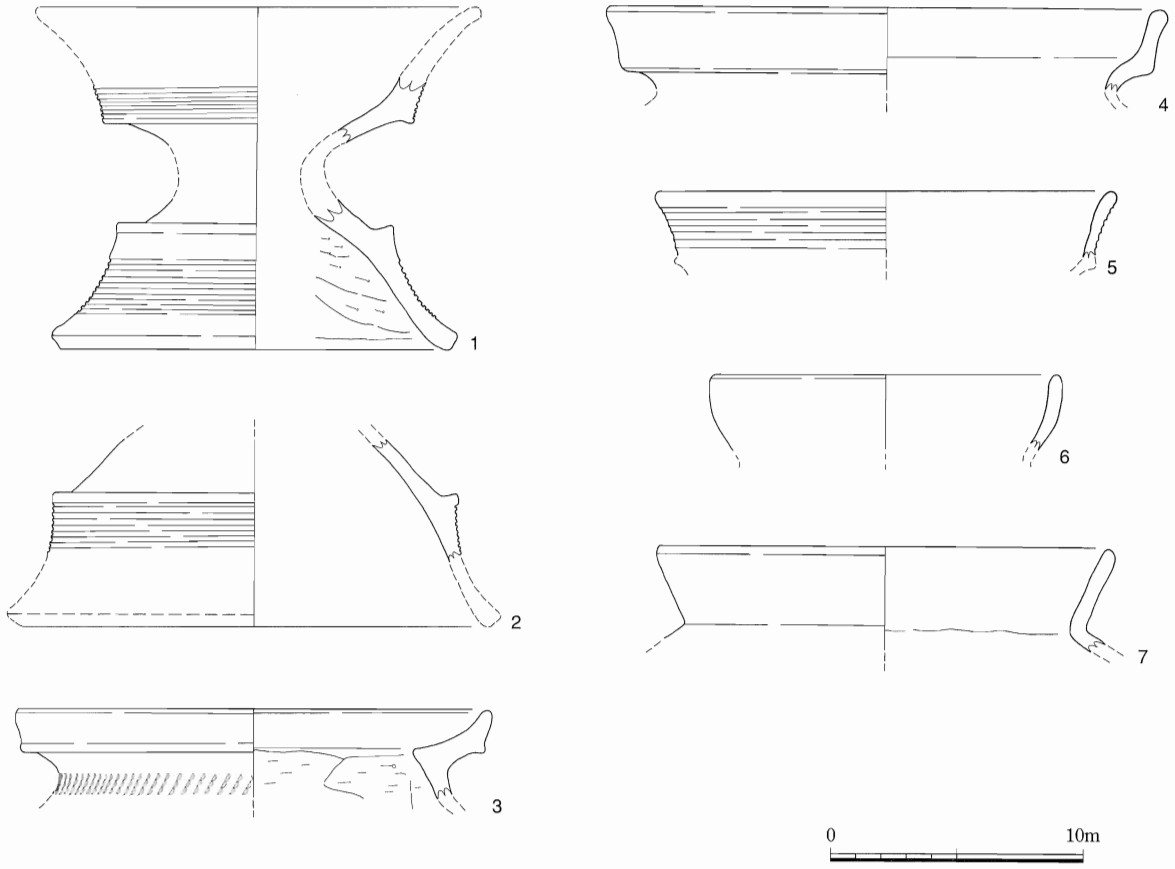
ＳＩ０２から出土した遺物はいずれも土器片で１～５が弥生後期・６、７は古墳時代中期のものである。1・2は鼓形器台の破片で、１は口径11.5㎝、高さ13.6㎝、底径15.3㎝あまりのものである。受け部下端から筒部にかけての破片と脚部片で、受け部と脚部の外面には擬凹線文が廻る。脚端部は外傾し、若干の窪みが見られる。脚部内面には左上がりのヘラケズリが施され、受け部内側は横ナデ調整がある。脚上端から筒部にかけては大きく湾曲している。淡黄褐色を呈し、胎土は小粒の砂を含み、焼成は充分である。２は筒部から脚部にかけての破片。色調は淡黄褐色で、砂を多く含む。脚部外面には擬凹線文が廻り、内面は風化のため調整は不明である。

３～５は甕口縁部片である。３は口径18.8㎝前後で、頸部から肩部にかけての外面にクシ状工具による刺突文が廻る。口縁部は外反する頸部から1.6㎝あまり外傾して立ち上がり端部にいたる。端部は丸く、器壁は厚い。内面は内湾気味に下がり、鋭角に屈曲して肩部にいたっている。上方は横ナデ、下方は横方向のヘラケズリが施されている。外面の一部に煤が付着しており、外面が黄褐色、内面が淡灰褐色を呈する。胎土は小粒の砂を含み、焼成は充分である。４はやや外反して立ち上る口縁部を持つもので、口径は21.8㎝前後である。口縁部の幅は2.5㎝を計り、端部は丸い。外面の一部に煤が付着しており、胎土は大粒の砂を含む。焼成は充分で、淡茶褐色、黄褐色、茶灰色を呈する。５は口縁部上方部の破片で、推定口径18.0㎝。上端から0.6㎝下がったところから凹線文が施されている。器壁は上方に行くにしたがって厚くなり、端部は丸い。内面は横ナデ調整。色調は外面黄褐色で、胎土は砂を多く含む。焼成は普通である。

６・７は土師器甕口縁部片で、まぎれ込みの遺物と思われるものである。６は内湾している口縁部片で、外面はナデ、内面は横ナデ調整。胎土は細かい砂を含む。推定口径15.6㎝。７は頸部から「く」の字形に外傾しているもので、推定口径17.8㎝。内面は風化を受け、外面は横ナデ調整。胎土は良好で、焼成は普通。外面は黒色、内面は黄褐色を呈す。



第34図　勝負遺跡ＳＩ０２・ＳＤ０１実測図



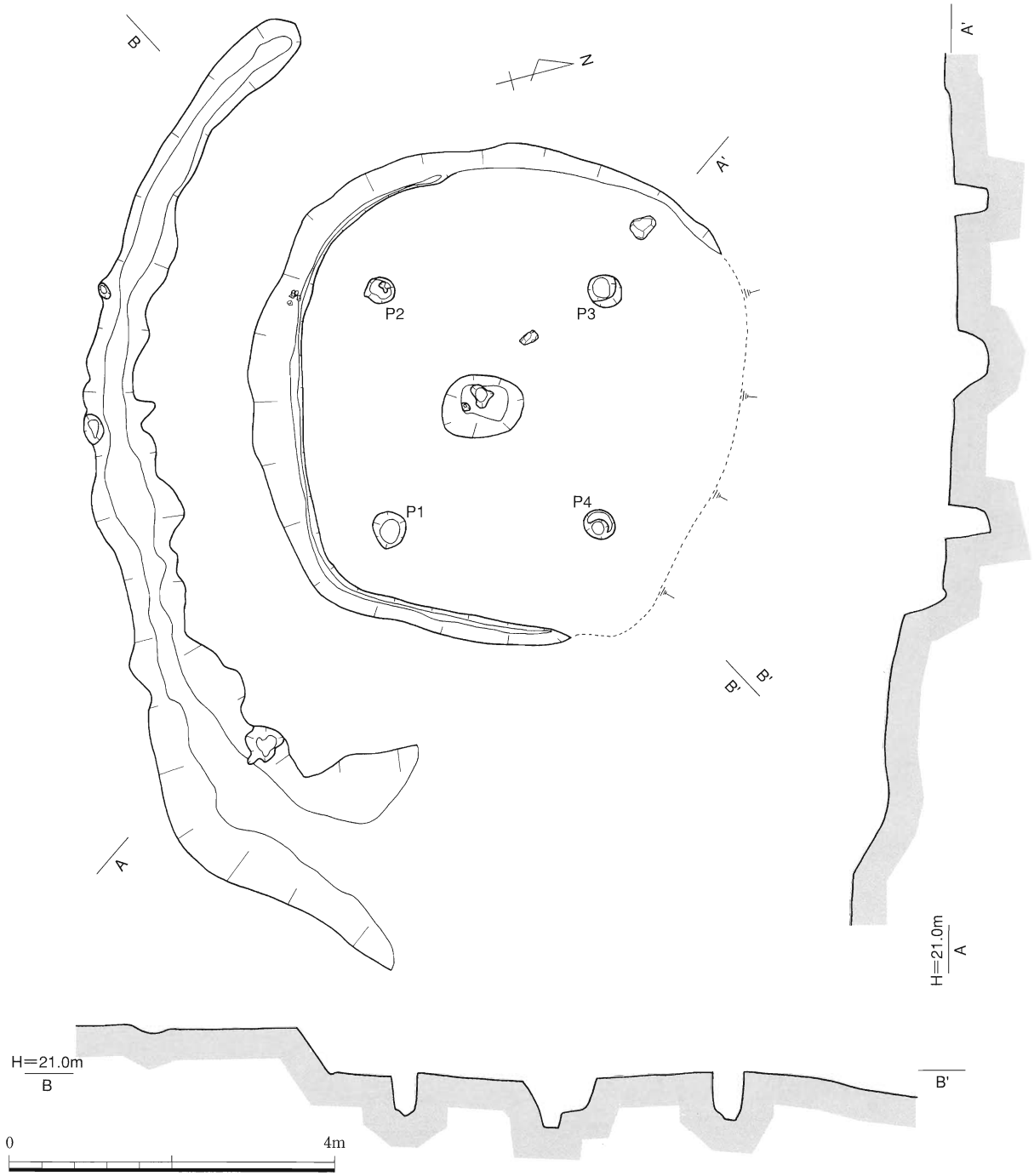
第35図　勝負遺跡ＳＩ０２・ＳＤ０１出土遺物実測図

ＳＩ０３・ＳＤ０２（第36図～39図）

ＳＩ０３は、南外２号墳から北西に伸びている尾根から東側にすこし下がった緩斜面に築かれた溝を伴う弥生時代後期の竪穴住居跡である。ここの標高は22ｍ～23ｍあまりで、谷を挟んだ同レベルにＳＩ０２が存在している。この住居跡は6.1ｍ×6.0ｍ以上の規模を持つもので、竪穴の壁は、北側の標高の低い部分を除いて３方向が残っていた。壁は東側から南側にかけては隅丸で直線的であるが、南から西にかけては円弧状を呈し、やや歪な形態となっている。深さは尾根に近い南壁が最も深く、0.52ｍあまりを計る。

床面には４本の主柱と中央部ピットが存在していた。柱穴は径40㎝前後で、20㎝～30㎝の深さを持つ。埋まっていた土層から、柱は径20㎝前後で、まわりに土を詰めて柱を固定していることが分った。柱間の距離は東西方向が3.0ｍ、南北間が2.6ｍ～2.8ｍである。中央ピットは1.0ｍ×0.8ｍの楕円形を呈し、深さは0.6ｍである。このピットは２段掘りになっており、深さ0.4ｍあまりところから径0.2ｍの小さな柱状のピットが0.2ｍあまり掘られている。底には炭化物を多く含む灰褐色土があり、その上に「U」の字状に灰黄褐色土、明灰黄褐色土が堆積していた。また、このピットの上方部には第40図の３及び５の土器が埋まっていた。３の甕片は下方から胴部片、上方から口縁部片が出土した。

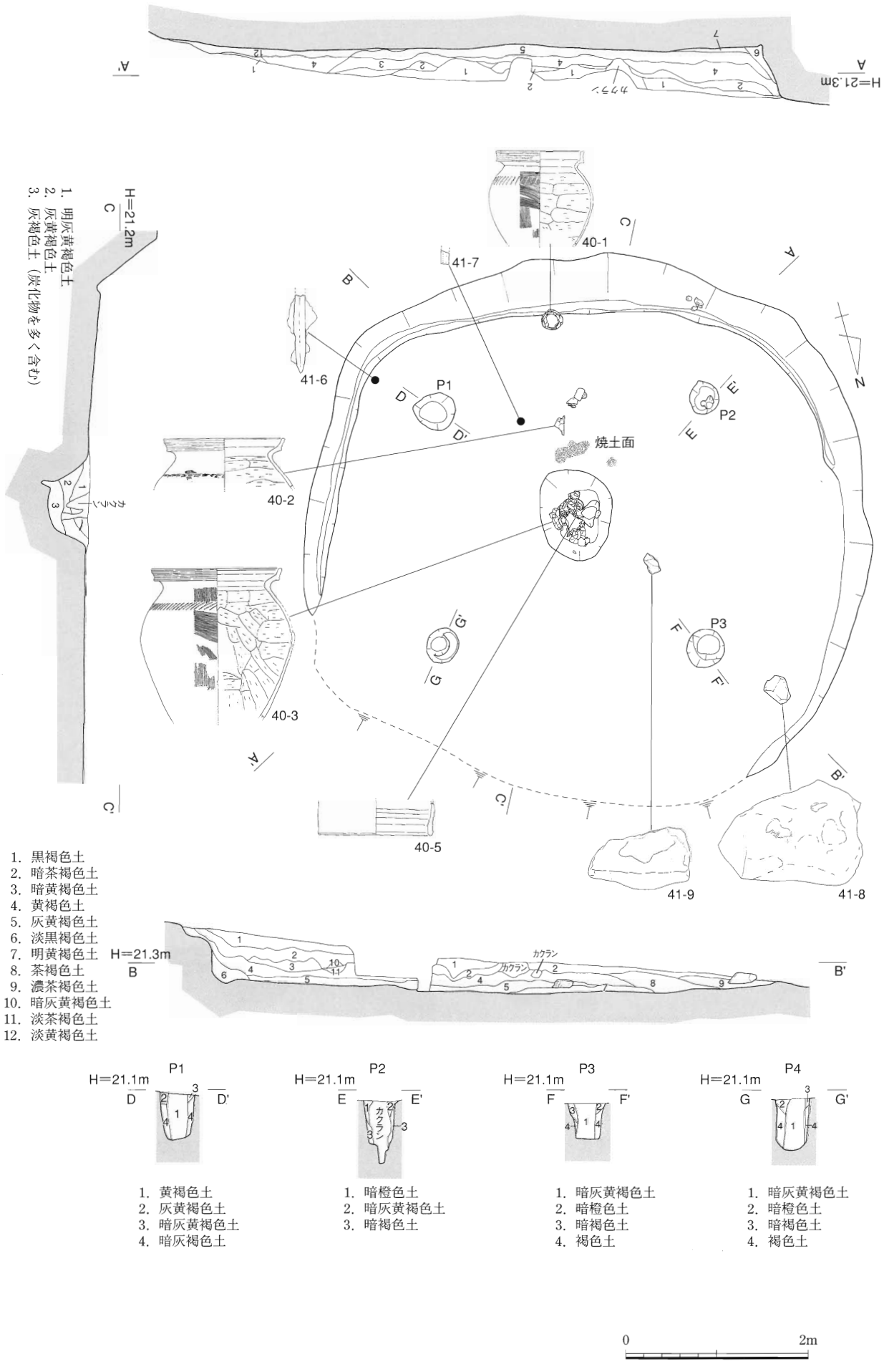
このピットと隣接した南西側から２ヶ所の焼土が見つかり、床面の北西側から20㎝～30㎝大の石２個が存在していた。一つの石には煤が付着し、他の石は火を受けていた。さらに、南側の壁の近くには第40図の１の甕が垂直に立った状態で見つかった。この土器は、床面から15㎝上方に立っていたもので、人為的にこの住居跡を埋めた時に供えたものと考えられる。それは、住居跡に堆積していた土層からも伺われる。壁際は淡黄褐色や淡黒褐色が斜めに堆積し、その上から明黄褐



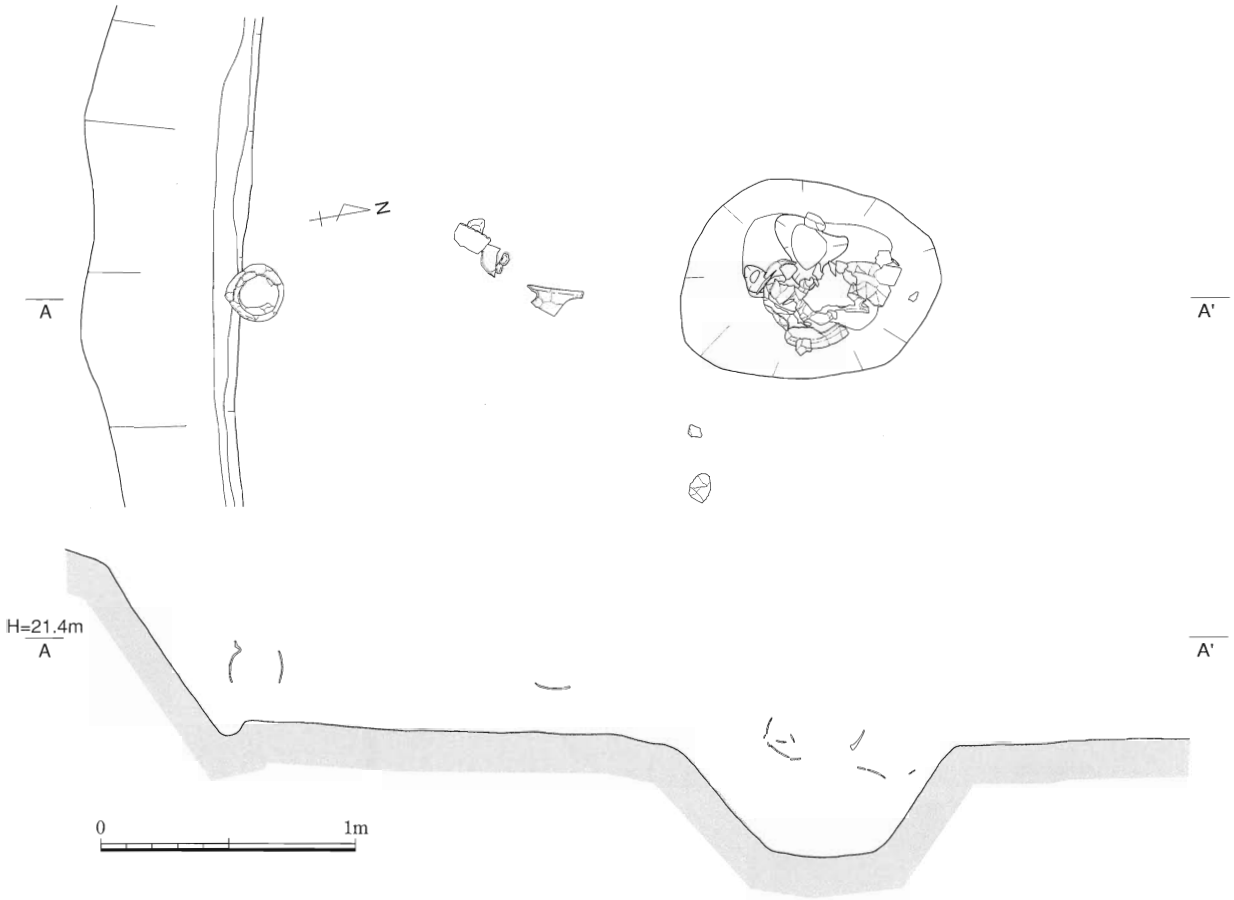
第36図　勝負遺跡ＳＩ０３・ＳＤ０２実測図

色土、灰黄褐色土が床面全体を覆い、帯状に黄褐色土、暗黄褐色土、暗茶褐色土が上方に堆積していた。この堆積状況は自然に埋まったと言うより人為的に埋めた可能性が高いと思われる。その他、南東側の壁の近くから鉄製品、中央部からガラス製管玉をそれぞれ検出した。

竪穴住居跡外側の西側から東側にかけて、円弧状の溝が存在していた。この溝は壁際から1.4ｍ～1.5ｍ外側に掘られているもので、溝上端の幅は東側が狭く0.6ｍであるのに対し、西側は2.6ｍあまりと広い。溝底の幅は15㎝～80㎝で、ばらつきが見られる。深さは12㎝～20㎝である。この溝は住居跡より標高の高い斜面に掘られていることから住居に雨水等の水が入らないよう排水を目的に造られたものと思われる。



第37図　勝負遺跡ＳＩ０３遺物出土状況図・土層図



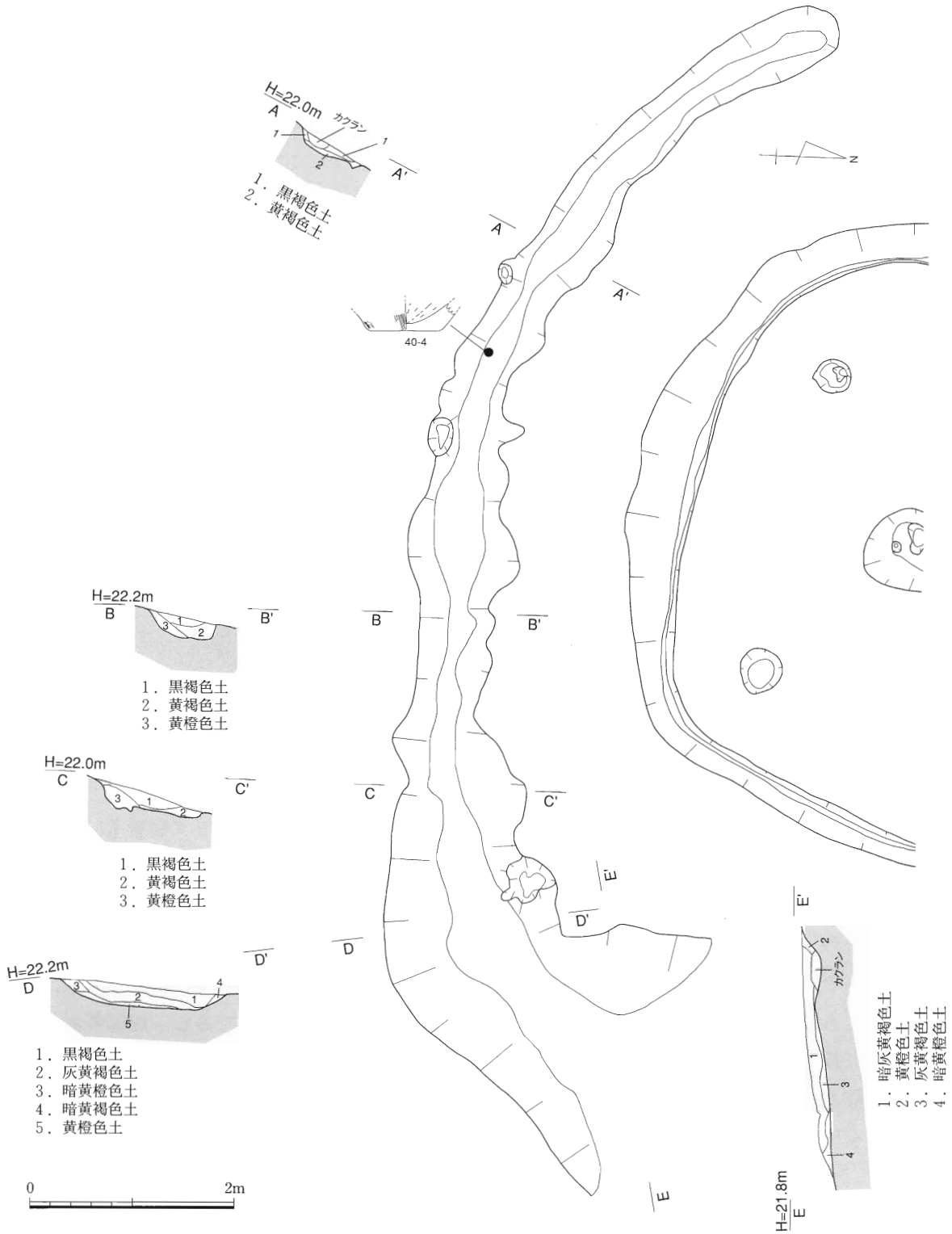
第38図　勝負遺跡ＳＩ０３土器出土状況図

出土遺物（第40図・第41図）

ＳＩ０３から出土した遺物には弥生時代後期の甕、甑の他、錐状鉄器、ガラス製管玉、台石等がある。１は住居跡の壁際から垂直に立った状態で検出した甕である。底部を欠いているが、口径19.2㎝、残存高20.7㎝、胴部最大径22.9㎝、頸部径16.0㎝を計る。口縁部はやや外反して、ほぼ垂直に立ち上り、その幅は2.5㎝あまりで、３本から４本の沈線が廻る。下端は丸く、口唇部はやや内傾し平らである。肩部から頸部にかけては大きく外反し、胴部最大径は口縁部上端から11.5㎝下がったところになる。器壁は口縁部が0.7㎝あまり、胴部が0.5㎝～0.3㎝である。肩部外面には右上がりで、長さ2.0㎝、幅0.3㎝前後のクシによる刺突文が廻る。調整はハケ目で、肩部から胴部にかけては横方向、胴部下方は縦方向である。内面には右回りで横方向のヘラケズリが施されている。淡茶褐色を呈し、胎土は細かい砂を多く含む。焼成は充分で、外面全体にわたって煤が付着している。

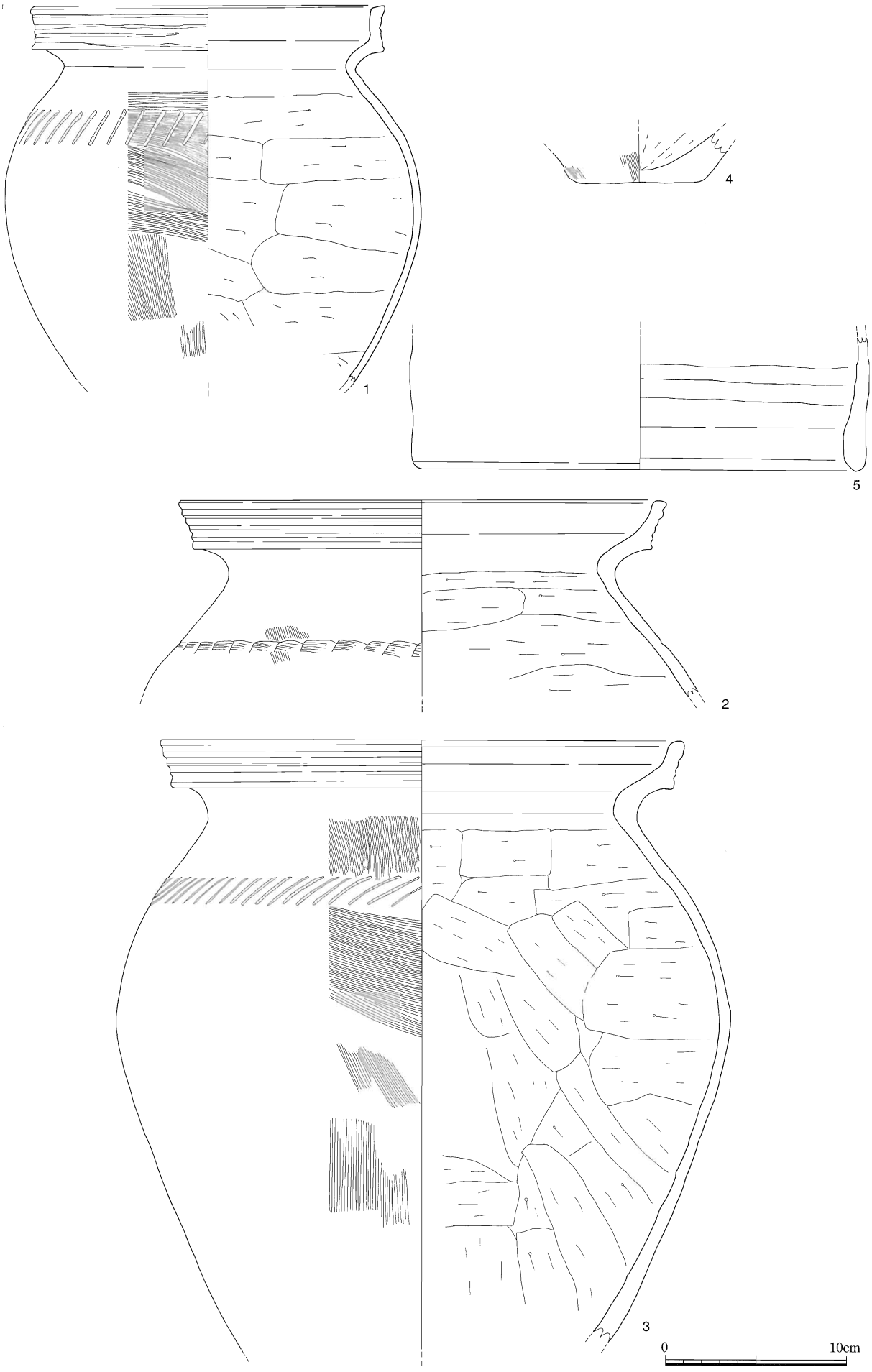
２は中央ピットの南側40㎝から検出した甕の破片である。床面を覆っていた埋土中に存在していた肩部から口縁部にかけての破片。口縁部はやや外側に傾き、５本の凹線文が廻る。推定口径26.5㎝で、端部はやや内傾した平らな面を持つ。頸部は大きく外反し、肩部はなで肩で、胴部の最大径は下方に下がるものと思われる。肩部にはクシによる連続刺突文が右回転方向に施されている。外面の調整はハケ目の後ナデを行っており、内面は左回転方向のヘラケズリである。口縁部から頸部については横ナデ調整である。外面は黄褐色、内面は茶灰色・黒灰色を呈し、胎土は小粒の砂を多く含む。

３は中央ピットから検出した甕である。ピットの上方から口縁部、下方から胴部片が出土してい



第39図　勝負遺跡ＳＤ０２実測図

ることから２と同様、底部を欠く甕をピット内に立てた状態に置いていたものと考えられる。口径28.5㎝、残存高33.0㎝、胴部最大径33.8㎝を計るやや大形の甕である。口縁部はやや外傾し、４本の凹線文が廻る。上端部は丸く、口縁部の幅は2.6㎝、厚みは0.8㎝あまりである。頸部は大きく外反しており、肩部に向かっては緩やかに下がっている。口縁部上端から15.4㎝下がったところが最大径になる。そこから下方は卵形に緩やかな湾曲を描いて底部にいたっている。器壁は最も薄いところで0.5㎝を計り、下方にいくにしたがって厚みを増している。肩部には長さ3.0㎝、幅0.1



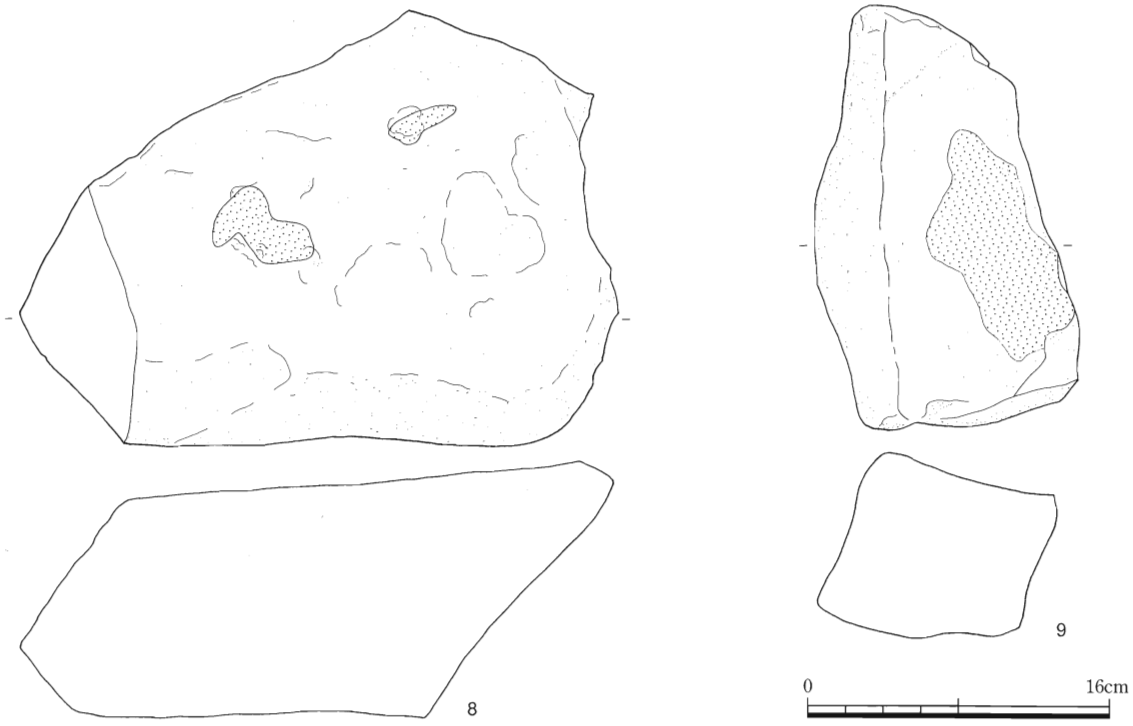
第40図　勝負遺跡ＳＩ０３・ＳＤ０２出土遺物実測図

cmで、右上がりのクシ状工具による刺突文が廻る。外面にはハケ目調整が施されているが、その方向は上部から縦方向、左上がり、縦方向である。頸部から胴部にかけての内面にはヘラケズリがある。胴部最大径より上方は左回転で横に削られ、下方は底部方向から上方に向かって削り上げている。頸部から口縁部にかけては横ナデ調整である。胎土に砂を多く含み、焼成は充分。

4はＳＤ０２の溝底から検出した弥生土器の底部片である。底径6.6cmあまりで、中央部はやや薄く、0.6cmあまりの厚さを持つが、端部は1.7cmと厚くなっている。底面はナデ、胴部下端はハケ目を施した後、ナデ調整を行っている。内面は底から上方向にケズリがある。茶褐色を呈し、胎土は大粒の砂を含む。焼成は充分である。

5は中央ピットから出土した甑形土器の底部片と思われる。底径25.0cmで、ほぼ垂直に立ち上がっている。端部は丸くて厚く、上方に行くにしたがって薄くなっている。内面はヘラ先状のもので横ナデを施している。外面は風化のため調整は不明。外面は淡褐色、内面は黄褐色を呈する。胎土は細かい砂を含み、焼成はやや不足している。

6は床面の南東隅から検出された錐状の鉄製品である。一部を欠いているが残存長4.0cm、幅0.5cmを計る。断面は方形を呈し、先端は鋭く尖っている。7は中央ピットの南東0.6mのところから出土したガラス製の管玉である。一部を欠いているが残存長0.8cm、径0.5cm、孔径0.2cmである。鮮やかな緑色を呈している。8は床面の北西隅に据えられていた31.5cm×22.7cm、厚さ12.0cm前後の台石である。上下面は平らで、上面には二ヶ所、被熱によって赤く変色したところがある。9は中央ピットの北西0.6ｍから検出した台石と思われるものである。大きさは22.5cm×13.0cm、厚さ9.0cmの石塊で、横断面は菱形を呈している。上面には12.2cm×5.8cmにわたって煤が付着しており、生活用具として使用されたものと思われる。



第41図　勝負遺跡ＳＩ０３出土遺物実測図

ＳＩ０４（第42図・43図）

ＳＩ０４は勝負遺跡西側に伸びている尾根の北側斜面に築かれた弥生時代後期の竪穴住居跡である。この住居跡の北西側２ｍあまりのところには縄文後期の住居跡であるＳＩ０１が存在し、東側の谷部には古墳時代中期のＳＩ０４が築かれている。また、この住居跡の東側半分は奈良時代の段状遺構（ＫＤ８・９）によって切り取られていた。現存していた竪穴は山手側の壁と両側の半分の壁で、隅丸方形を呈している。規模は4.4ｍ×2.4ｍ以上で、深さは山手側の壁で0.6ｍあまりを計る。壁際に沿って掘られている壁帯溝は西から北側に曲がっているコーナー付近で確認した。幅10㎝、深さ３㎝前後のものである。

主柱は４本（ピット１～４）で、床面が破壊されていた西側の柱痕は後世の段上遺構の中に２本（ピット３・４）残っていた。柱間隔は東西方向3.0ｍ～3.2ｍ、南北方向2.2ｍで、東西方向が若干長くなっている。柱穴は径30㎝～50㎝で、深さは床面の残っているところが80㎝あまりと深く、斜面下側のものは20㎝あまりで僅かに残っていた。ピット１・２の土層図から柱は22㎝前後のものであったと思われる。

床面からは焼けた建築材とまとまった土器片を検出した。建築材は棟材が南北方向に2.1ｍにわたって存在していた。その北端から0.2ｍ南によったところに梁材と思われるものを、棟材の下から検出した。この梁材は棟材とほぼ直角方向に0.9ｍあまり残っていた。さらに棟材北端から1.2ｍ南によった付近の西側には長さ0.5ｍ、幅0.3ｍにわたって炭化した建築材が棟材とほぼ垂直に存在していた。この建築材も棟材との角度から梁材と考えられる。棟材は幅15㎝、梁材は幅10㎝あまりで、この住居が焼失したとき、南側にやや傾いて棟材や梁材が倒れたものと推測される。

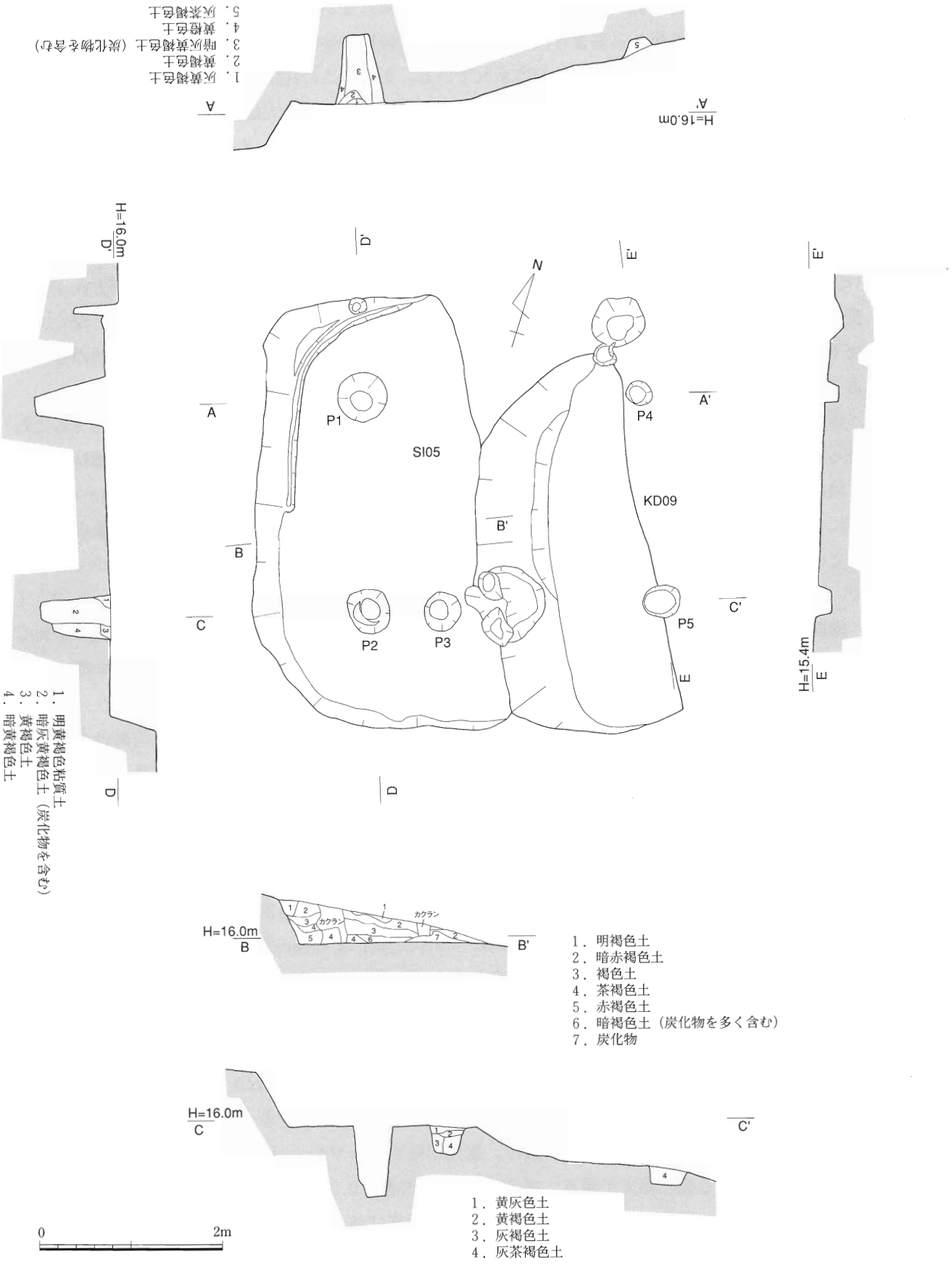
床面から検出した土器は南側の壁近くにまとまって存在していた。そのうちの一点は底部を欠く甕を逆さにした状態で置いていた。ＳＩ０３では住居跡を放棄した後に甕を立てた状態で置いていたが、これらは住居を放棄した後、何らかの祭祀を行ったことを示すものと思われる。

住居跡に堆積していた土層を見てみると、床面直上は壁に近い所から赤褐色土、茶褐色土、暗褐色土（炭化物を含む）が順番に堆積しており、その上に茶褐色土、褐色土、暗赤褐色土が帯状に斜めに存在していた。

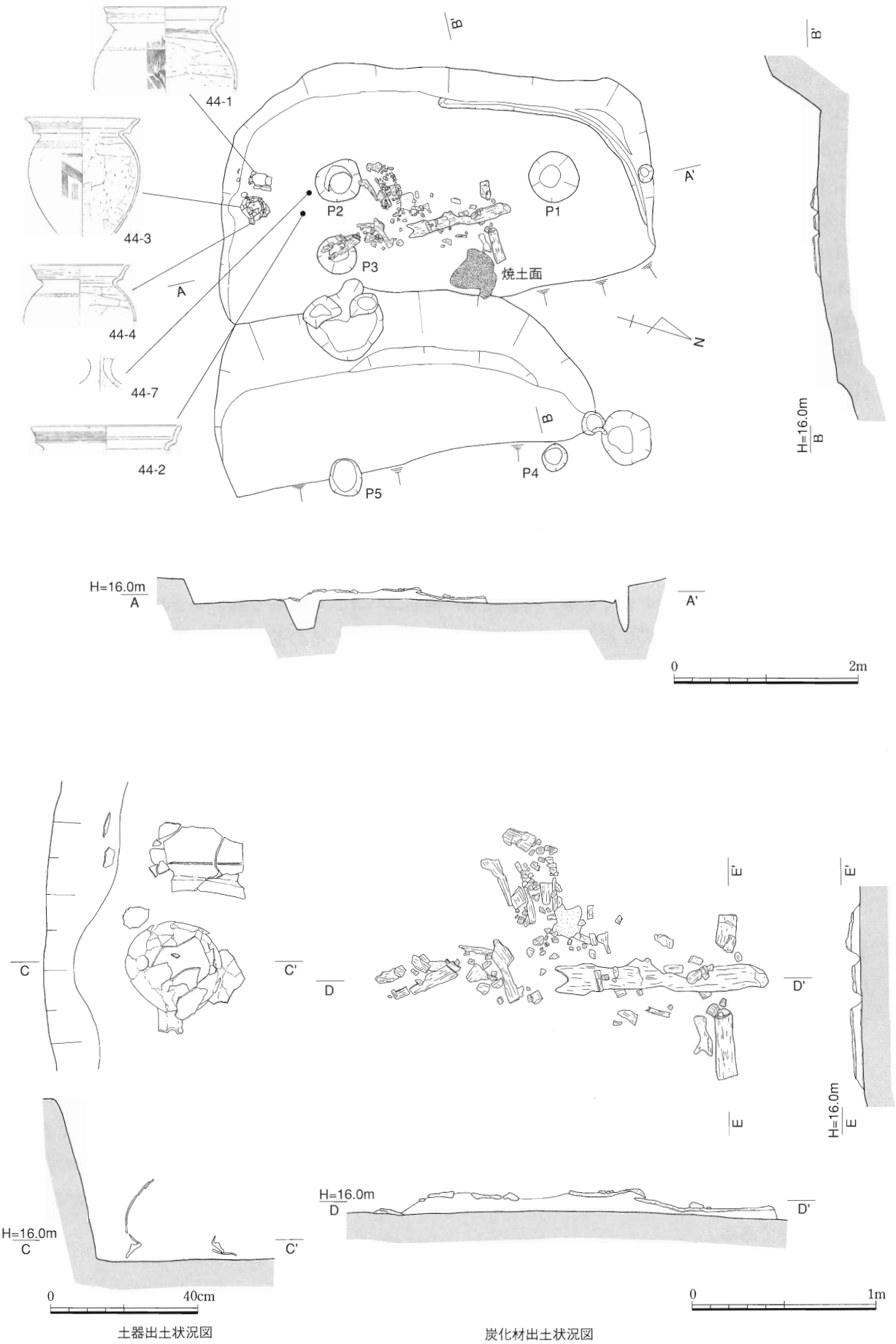
出土遺物（第44図）

床面から甕６点、高坏１点が出土したが、それらのほとんどが南壁付近で検出したものである。１は口縁部から胴部にかけての破片。推定口径26.0㎝、胴部最大径31.0㎝を計る。口縁部は高さ3.4㎝あまりで、やや外反している。９本歯のクシ状工具による擬凹線文が廻る。上下の端部は丸い。頸部は1.6㎝あまり外傾し、肩部はあまり張らずに胴部にいたっている。肩部には２条の波状文が存在する。頸部から胴部にかけては縦方向や左上がりのやや細いハケ目がある。内面は左回転のヘラケズリが施され、頸内面の屈曲部にはハケ目が残る。屈曲部より上面の内外面は横ナデ調整である。口縁部から頸部にかけての厚みは0.9㎝～1.0㎝で、胴部下方は0.4㎝あまりである。外面は黒色、灰褐色、黄褐色を呈し、内面は淡茶褐色である。胎土は砂を多く含み、焼成は充分である。

２は頸部から口縁部にかけての甕の破片。推定口径32㎝のやや大形品で、口縁部には11本あまりのクシ状工具による擬凹線文が廻る。高さは3.5㎝、外側に0.9㎝外反し、口唇部は丸くて太い。下端は「く」の字形に屈曲して頸部にいたっている。頸部は外面が直線的に伸びているのに対し、内面はやや内湾したカーブを持つ。器面調整は横ナデである。外面茶褐色、内面黄褐色を呈し、胎土には砂を多く含む。焼成はやや軟質である。



第42図　勝負遺跡ＳＩ０４実測図



土器出土状況図　　炭化材出土状況図

第43図　勝負遺跡ＳＩ０４炭化材及び土器出土状況図

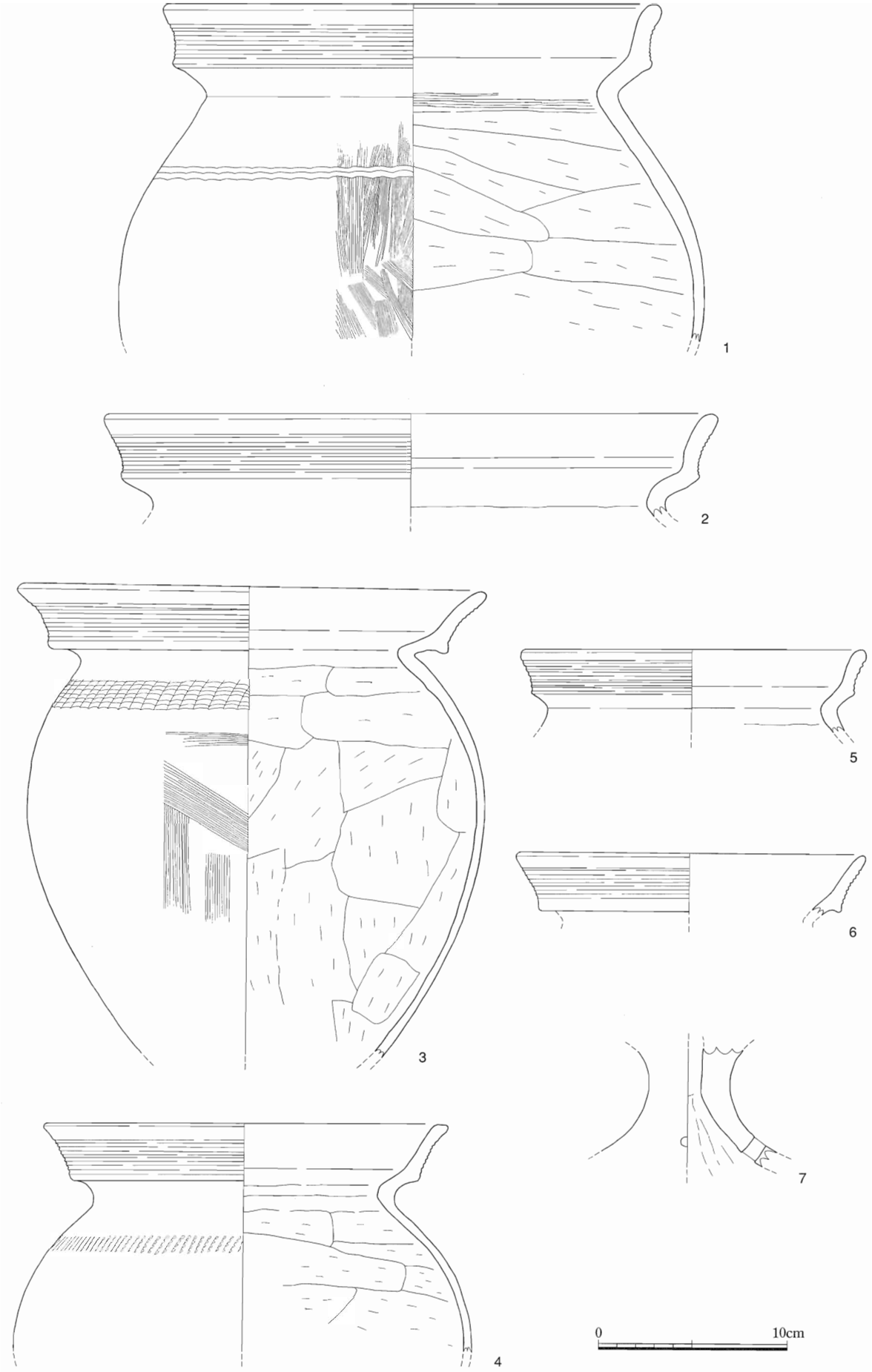
3は伏せた状態で検出された甕である。胴下部および底部を欠くが、その他はほぼ完形である。口径と胴部最大径がほぼ同じで、口縁部が開き、肩・胴部の張りが少ないものである。口縁部は外側に2.0cmあまり外傾し、9本のクシ状工具による擬凹線文が廻る。口唇部は丸く、下端は0.5cmあまり下方に下がっており、先端は丸い。頸部は鋭角に屈曲し、高さも低い。頸の屈曲部から肩・胴部にかけては内湾気味に下がり、口縁上端から11.0cmあまり下がったところが胴部最大径となる。そこから卵形に下がって底部にいたっている。推定の器高は29cmあまりである。肩部には7本歯のクシ状工具によって横方向に押引いた文様が廻る。頸部以下の外面調整はハケ目→ナデで、ハケ目は文様から下方に横方向、左上がり、縦方向に施している。文様から上方は横ナデの調整である。内面は頸の屈曲部から下にヘラケズリがある。ケズリは上方から右回りの横方向、右上がり、上方に施している。屈曲部から上方は横ナデ調整である。器壁は口縁部が最も厚く0.8cmあまりで、最も薄いのは胴部下方で0.3cmである。外面の口縁部及び胴部の一部には煤が付着している。色調は外面黄褐色・淡褐色・黒色、内面淡褐色である。胎土は砂を多く含み、焼成は普通である。

4は3の甕の下に敷かれていた胴部から口縁部にかけての甕片で、3の土器を安定するために破片を咬ませたものと思われる。推定口径は21.0cm、胴部最大径24.0cmあまり。口縁部は1.5cm外側に開き、口唇部は平らで、下端は丸く、高さは3.0cmあまりである。9本のクシ状工具による擬凹線文が廻る。頸部は半円状に湾曲し、肩部の張りは少ない。厚みは口縁部が0.7cm、胴部が0.4cmである。肩部には長さ1.0cmのクシ状工具による刺突文が右上がりに施されている。外面の調整は文様より上が横ナデ、下がナデである。頸屈曲部の内面はヘラ状の工具で横ナデされており、その下方は右回転方向のヘラケズリがある。色調は口縁部が黄褐色、その他は淡茶褐色、内面は淡茶褐色である。胎土には砂を多く含み、焼成は普通である。

5は推定口径18.0cmあまりのやや小形の甕片である。口縁部には6本のクシ状工具による擬凹線文が廻る。立ち上がりは2.5cmあまりで、0.5cm外側に傾いている。口唇部は太くて丸く、下端は「く」の字形に屈曲して頸部にいたる。頸部は0.8cmあまり湾曲して外に開く。器面調整はほとんどが横ナデであるが、内面頸部下方はヘラケズリである。厚みは0.6cm～0.9cmで、最も厚いところは頸の屈曲部である。外面の一部に煤が付着しており、茶褐色、黒色を呈する。内面は淡茶褐色である。胎土には砂を多く含み、焼成は普通。

6はやや外側に口縁部が開くタイプの甕の破片。推定口径18.0cmあまりで、9本のクシ状工具による擬凹線文が廻る。1.2cm外側に傾いており、立ち上がりの高さは3.0cmあまりである。口唇部は丸いがやや尖りぎみである。下端は約0.2cm下方に下がっており、先端は丸い。器面調整は横ナデである。赤褐色を呈し、胎土には砂を多く含む。焼成は普通。

7は高坏脚部の破片である。脚基部付近から脚下方部にかけての破片で、大きく湾曲して端部にいたっているものである。全体的に厚作りになっており、器壁は上方で1.7cm、下方で1.0cmを計る。内面の上方はほぼ垂直に下がり、「く」の字形に屈折して端部に向かっている。屈折部から下方にはしぼり痕が見られる。脚部には径0.8cmあまりの丸い穴が外側から穿孔されている。外面の器面調整は縦方向のナデである。内外とも黄褐色を呈し、胎土は甕と異なり砂の量がやや少なめである。焼成は充分である。



第44図　勝負遺跡ＳＩ０４出土遺物実測図

ＳＩ０５（第45図・46図）

第４調査区の谷部に存在していた古墳時代中期の竪穴住居跡である。数回建て替えを行っているが、最終段階の規模は壁帯溝で5.0ｍ×5.1ｍを計り、ほぼ正方形を呈している。壁は南及び西側が残っていた。その高さは0.6ｍあまりで、壁に沿って幅15㎝前後の溝が廻っている。溝の内側は20㎝あまりのテラス状の平坦部があり、その内側に壁帯溝が存在していた。この溝は当初の建物に伴うものと考えられる。建て替えを行う時点で外側に20㎝あまり拡張した際、当初の床面より約15㎝高く掘り込み旧床面に淡暗茶褐色土や淡黄褐色土を敷いて新しい床を完成させている。

床面から多数のピットを検出した。主柱は４本で、柱間隔は東西方向2.4ｍ～2.5ｍ、南北方向2.1ｍを計る。柱穴は径25㎝～30㎝で、深さは30㎝～40㎝である。４本の主柱以外には主柱となりうる柱穴を検出することができなかったことから建て替えを行った時点では、主柱の位置変更はなかったものと思われる。

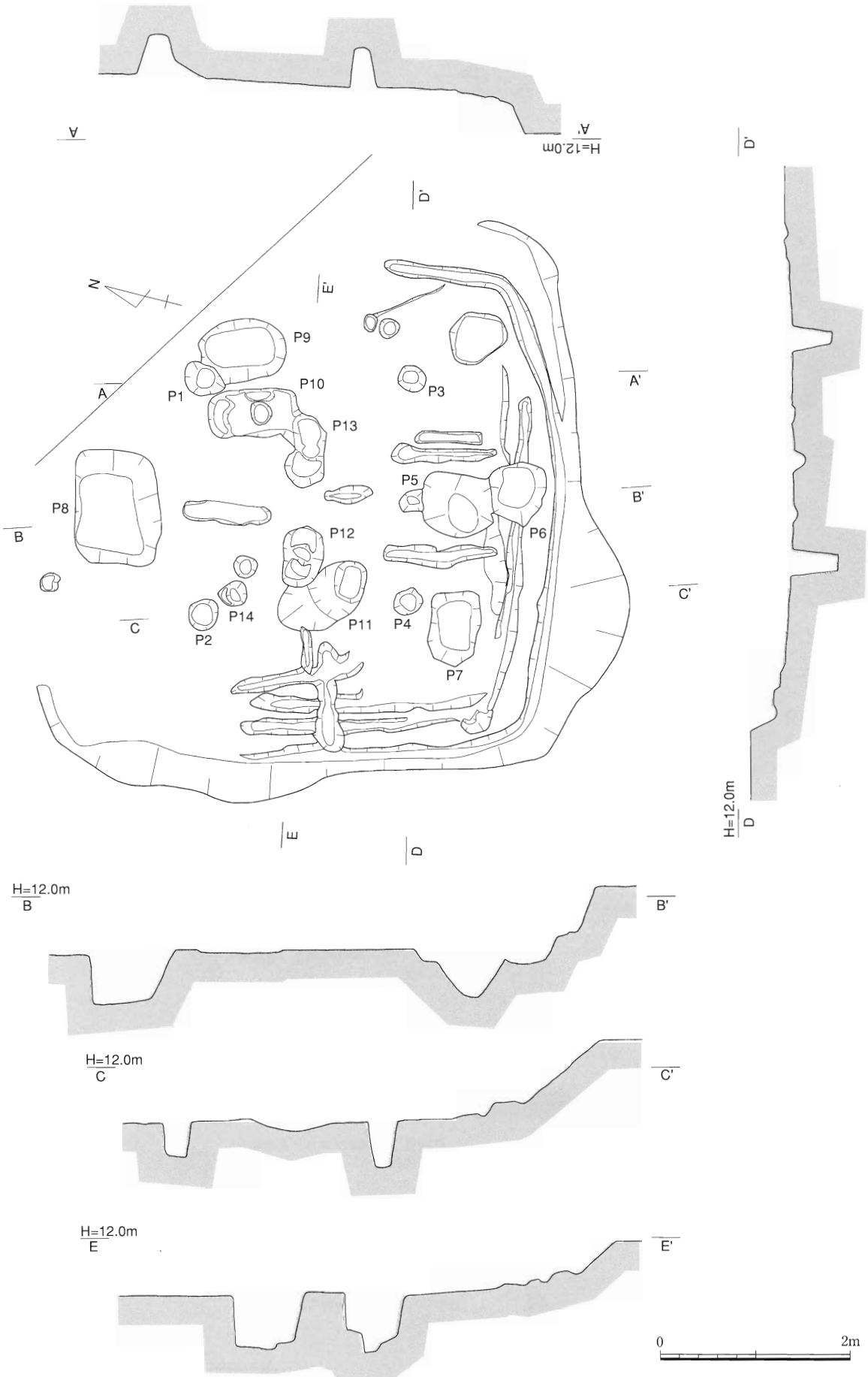
その他のピットとしては長さ0.8ｍ～1.2ｍあまりの比較的大きな長方形を呈したものを８基あまり検出した。これらは壁の方向と並行しているものが多い。南壁の近くにあるピット５は平行した２本の溝の間に存在していた。この溝は壁帯溝と直角に長さ1.1ｍ前後、幅0.1ｍ～0.2ｍで、約0.9ｍの間隔で平行に掘られたものである。ピットは66㎝×72㎝のやや不整な長方形を呈し、深さは40㎝あまりである。底は40㎝×30㎝の平らな面を持ち、炭化物が混ざった暗茶褐色土が体積していた。この遺構は、炉的な性格を持っているものと思われる。ピット６はピット５や壁帯溝を切って掘られていることから建て替え時の建物に伴うものと考えられる。

ピット７、８、11～13の主軸は南北方向、ピット９、10は東西方向で、企画的に掘られている。ピット９、10は炭化物を多量に含む暗茶褐色土が詰まり、ピット11～13はやや小形で不整形である。これらのピットの前後関係や性格については明らかにすることができなかった。また、建て替え時の床面と思われるレベルから焼土が３ヶ所見つかった。これらの焼土はピット８の上面や床面のほぼ中央部から検出したもので、中央のものは40㎝の円形を呈している。

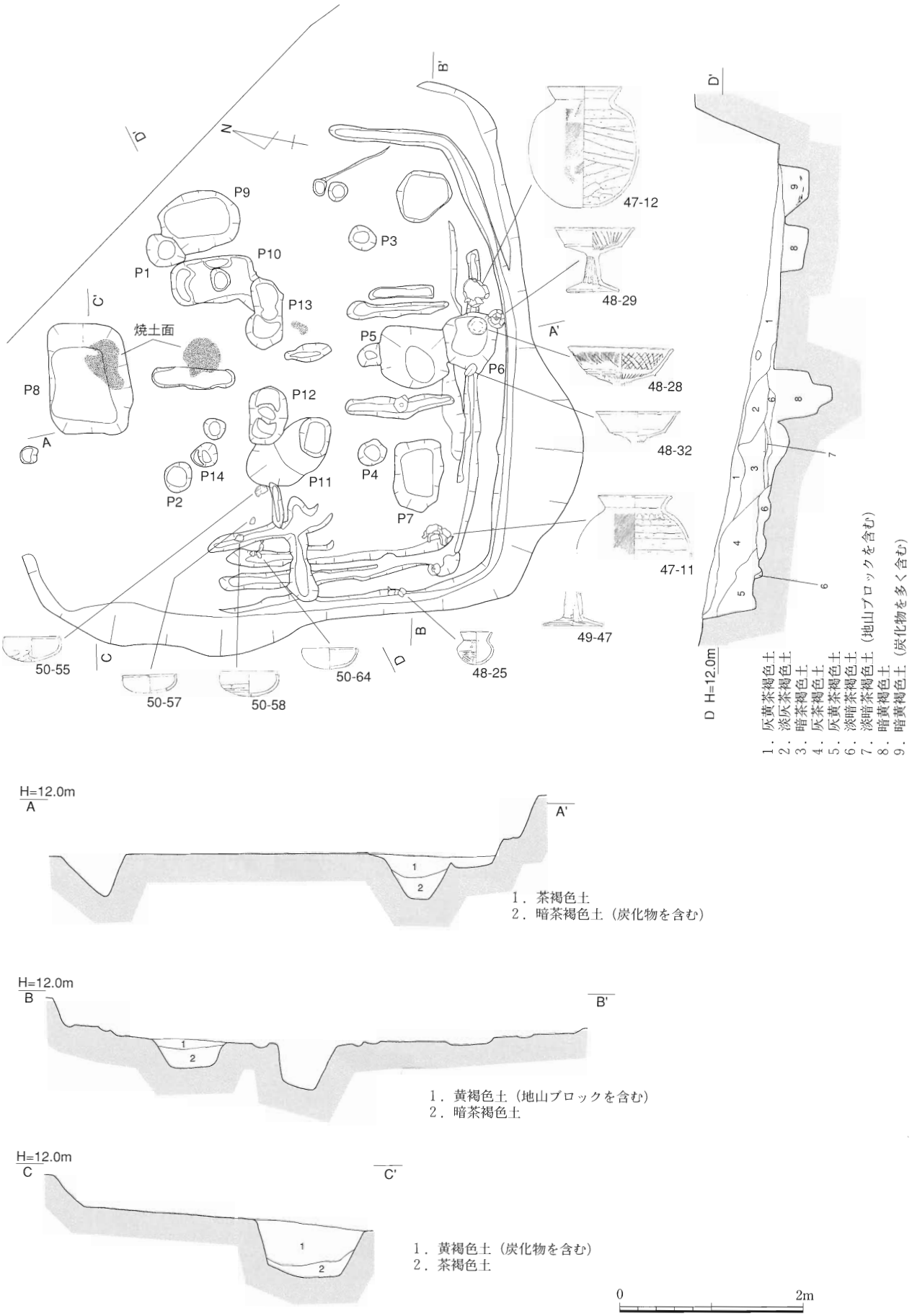
出土遺物（第47図～第51図）

ＳＩ０５から出土した遺物には古墳時代中期の土師器、初期須恵器、縄文土器、縄文時代の石器等がある。１～10はピット及び床面直上から検出したものである。１・２は床面北側に存在している長方形の比較的大きなピット８から見つかった土師器の甕及び高坏片である。１は推定口径18.2㎝、胴部最大径23.1㎝あまりの甕片である。口縁部は逆「ハ」の字形に開いているが、頸部から内湾気味に上がり若干外反して端部にいたっている。口唇部は内傾した平らな面を持つ。頸部から胴部にかけてはあまり張り出さずに下がっており、胴部最大径は下方にある。外面にはやや幅の広いハケ目があり、内面にはヘラケズリが施されている。また、頸部内側には指圧痕が残っている。外面は黄褐色、内面は黄褐色・灰褐色を呈し、胎土は細かい砂を含むも良好で、焼成は充分である。２は高杯の杯部片である。脚基部から緩やかに外側に開き、大きく屈折して上方にいたっているもので、器面調整は横ナデ、ナデである。外面褐色・暗茶褐色、内面黄褐色を呈し、胎土は小さな砂を含む。焼成は充分である。

３・４は床面東側にあるピット９から出土した土師器で、３は胴部推定最大径17.9㎝あまりの甕片である。全体的に風化しており器面調整は不明である。厚みは0.4㎝あまり、色調は白褐色で、胎土は細かい砂を含むも良好である。焼成はやや軟質。４は小形丸底壺。推定口径7.9㎝、頸部径6.0㎝、胴部最大径7.5㎝を計る。口縁部は外傾して開いており、端部は丸いがやや尖りぎみであ



第45図　勝負遺跡ＳＩ０５実測図



第46図　勝負遺跡ＳＩ０５遺物出土状況図

る。胴部は大きく内湾し、円形に近い。外面はハケ目の後、横ナデを施しており、内面は横方向のヘラケズリがある。器壁は頸部が最も厚く0.6cmあまり、口縁端部に向かって薄くなる。頸部の下方は段があり、この部分が0.4cmあまりで、胴部は0.5cmの厚みを持ち下方に向かって薄くなる。

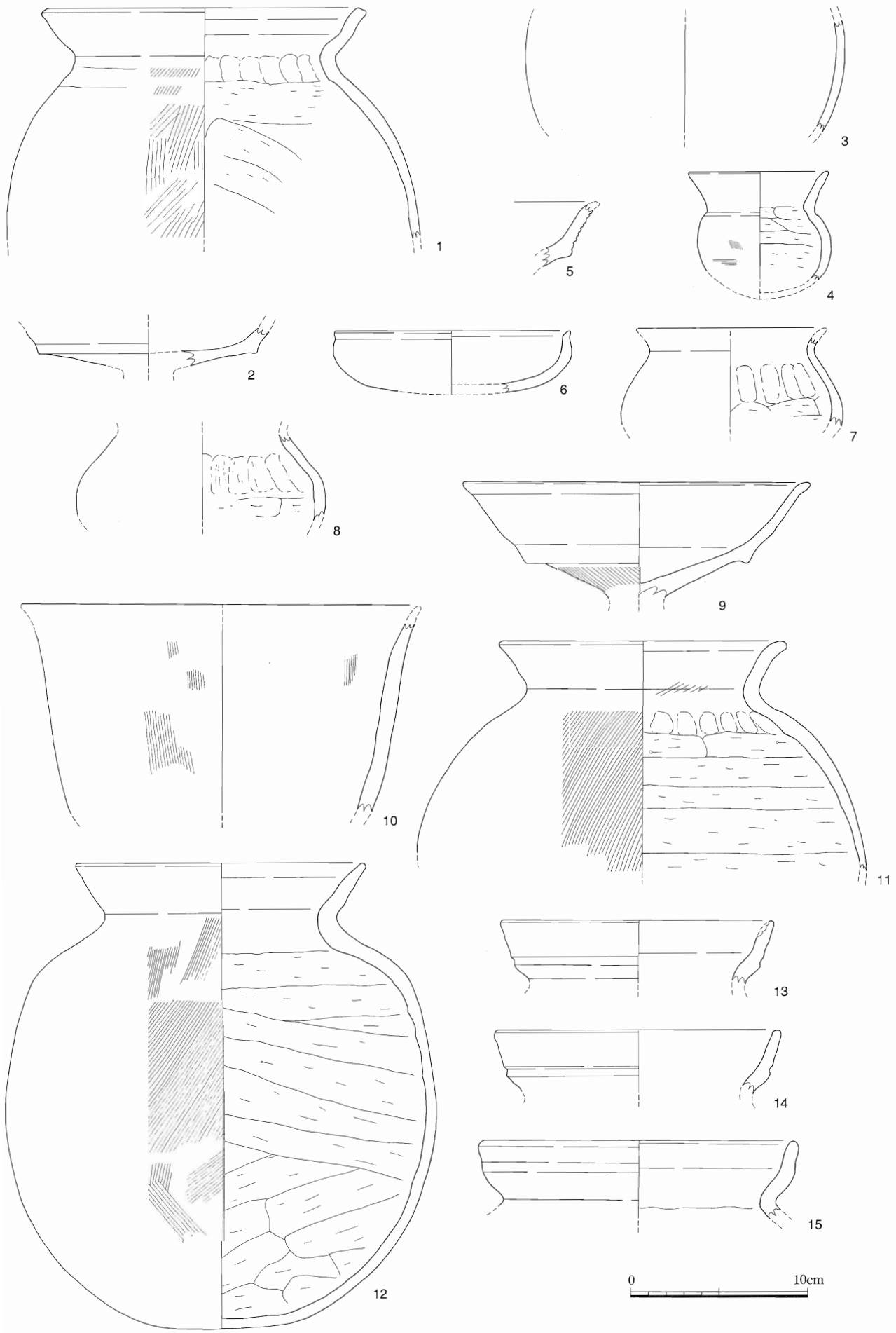
5は床面南側の炉状のピット5から出土した弥生後期の擬凹線文を持つ甕口縁部片である。口縁部はやや外反して開いており、外面は淡黄褐色・薄紫色、内面は淡茶褐色を呈する。胎土は良好で、焼成はやや軟質である。6は柱穴状のピット14から見つかった土師器の坏である。推定口径13.0cm、器高3.6cmを計る。口縁部は短く外反して端部にいたっており、先端はやや尖っている。体部は底部から内湾ぎみに緩く上がり、上方で大きく内湾して口縁部にいたる。全体的に風化しているため調整は不明。色調は赤褐色で、胎土は良好、焼成は普通である。

7～10は床面から検出した土師器。7は丹塗りの小形の甕片である。口縁部上方と胴部下部を欠く。頸部は内湾しており、胴部最大径は下方にある。肩部内面には指圧痕があり、その下にはヘラによって面取りしたようなケズリが存在する。外面は横ナデ調整で、丹が塗ってある。色調は外面赤褐色、内面黄褐色で、胎土は良好、焼成は充分である。8は肩部から胴部にかけての土師器壺片。肩部から「ハ」の字形に下がり胴部最大径にいたる。推定の胴部最大径は13.9cmあまりである。肩部内面には指圧痕があり、その下は右回転のヘラケズリがある。外面には一部に煤が付着しており、丹と思われるものもある。横ナデ調整で、胎土は小粒の砂を含む。9は屈曲している高坏の坏部片。推定口径19.4cm、口縁部は外側に大きく開いて端部にいたっている。端部は短く外反し先端は丸い。内面及び外面上方にはミガキがかかっており、坏底部の外面には荒いハケ目がある。脚基部の径は3.0cm前後でやや細い。外面は赤褐色、内面淡褐色を呈し、胎土には砂を若干含む。焼成は普通。10は推定口径22.0cmあまりの甑の破片。やや外傾した体部を持つ。底部及び口縁部を欠く。全体的に風化しているが、内外面の一部に縦方向の荒いハケ目がある。色調は外面赤褐色、黄褐色、内面赤褐色である。胎土には大粒の砂を含み、焼成はやや軟質である。

11～27はＳＩ０５の埋土中から出土した土師器の壺甕である。11は口径16.0cm、胴部最大径25.0cmを計る甕である。口縁部は1.6cmあまり外反し、端部は丸い。頸部から胴部にかけては外側に大きく内湾して張り出している。外面の肩部以下には右上がりのやや荒いハケ目があり、内面には右回転のヘラケズリがある。ヘラケズリの上方には指圧痕が残る。頸部から口縁部にかけては横ナデ調整であるが、頸部内側の一部に右上がりの荒いハケ目が残る。器壁の厚みは頸部で0.9cm、胴部下方で0.4cmである。胎土には多くの砂を含み、外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。焼成はやや軟質。

12は口径16.0cm、頸径12.8cm、胴部最大径24.0cm、器高26.3cmを計る甕である。口縁部は逆「ハ」の字形に開き、胴部はずんぐりした円形状を呈している。頸部から口縁部先端までは序々に厚みが薄くなり、端部は細くて丸い。頸部以下の外面には右上がりの荒いハケ目が全面に存在しているが、胴部下方の一部には、右上がりのハケ目の上に左上がりのハケ目が施されている。内面はヘラケズリがある。肩部が横方向、胴部中央部付近までが左上がり、胴部下方が右上がりに削られている。頸部より上方は横ナデ調整である。底部は丸底で、厚みは0.6cmである。器壁の最も厚いところは頸部で1.2cmあまりを計る。外面の一部には煤が付着している。色調は外面黄褐色・赤褐色・黒色、内面淡黄褐色である。胎土は若干の砂を含むも良好。焼成は充分である。

13～15は土師器の甕口縁部片である。13は推定口径15.2cmで、外側に若干開く口縁部を持つ。口縁部の下端には幅0.5cmあまりの凹線が一本廻る。外面の一部に煤付着。調整は横ナデである。色調



第47図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図１

は外面茶褐色・暗茶褐色、内面茶褐色・淡褐色である。胎土は若干の砂を含むも良好で、焼成は充分である。14も13と同様口縁部下端に幅広の凹線が廻るものである。推定口径16.0cmで、口縁部はやや外傾し、端部丸い。調整は横ナデで、外面茶褐色、内面茶褐色・淡褐色を呈する。胎土は良好、焼成は普通。15は頸部から口縁部かけて内湾ぎみに上がり短く外反して端部にいたる口縁部片である。端部は丸く、器壁は0.9cmあまりでやや厚手。調整は横ナデで、頸部内面にはヘラケズリがある。内外とも白褐色を呈し、胎土には細かい砂を含む。焼成はやや軟質な仕上がりである。

16は推定口径16.2cmの胴部から口縁部にかけての破片。口縁部は外側に2.5cmあまり外傾しており、その高さは3.0cmである。口唇部は内傾した平坦面を持つ。頸部から口縁部にかけては「く」の字形に開き、頸部から胴部にかけては外側に大きく張り出す。頸部内側には指圧痕があり、その下には右回転のヘラケズリがある。外面には右上がりの荒いハケ目調整がある。胎土は良好で、外面赤褐色、内面赤褐色・黄褐色を呈する。焼成は充分である。

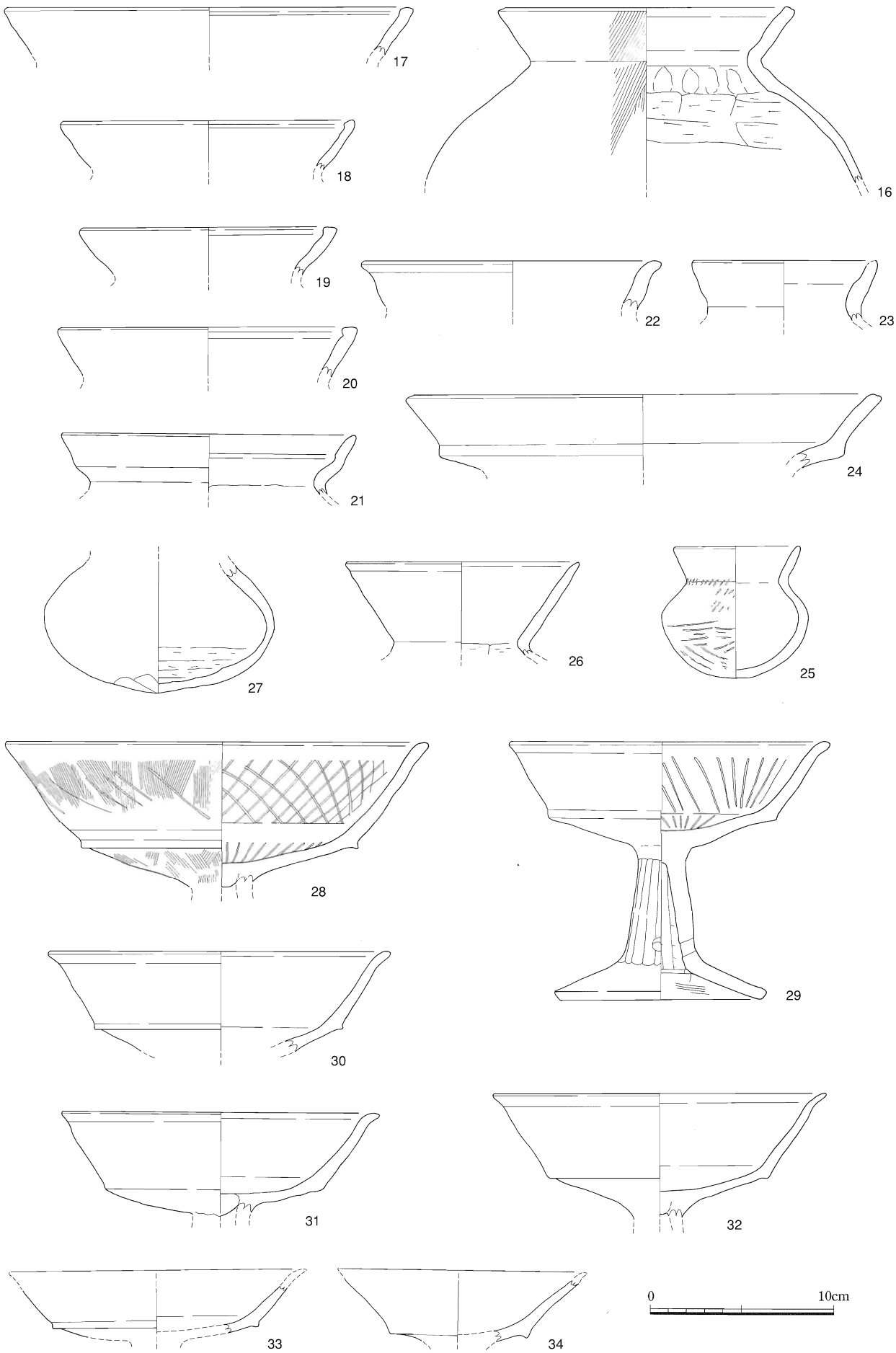
17～20は口縁端部内側がやや突起している土師器の甕口縁部片である。17は推定口径22.0cmを計るやや大型のものである。口縁部は外傾して開いているが下方を欠く。厚みは0.5cmあまりで、上端部はやや丸みを持つ。器面調整は横ナデで、外面黒色・黄灰褐色、内面淡茶褐色を呈する。焼成は充分。胎土には小粒の砂を多く含む。18は口縁部の先端がやや尖り、その内側に外傾した平面を持つもので、推定口径16.0cmあまり。口縁端部平面の内側は短く内湾して下方に下がる。焼成は普通で、胎土は良好。外面茶褐色、内面黄褐色である。19は推定口径14.0cm。口縁部は内湾ぎみに上がり端部にいたっている。端部は平らで、内側端から短く内湾して下がる。全体的に風化しており調整は不明。内外とも白褐色を呈し、胎土には砂を多く含む。焼き上がりはやや軟質である。

20は外傾した口縁部を持ち、端部は平らで、やや厚手である。色調は外面淡茶褐色、内面黄褐色を呈する。胎土は良好、焼成は充分である。

21～23はやや外傾している土師器の甕口縁部片である。21は頸部から内湾ぎみに上がり、若干外反して口縁端部にいたっているもので、先端はやや尖っている。口縁部内側は中ほどのところで、段を有している。推定口径16.0cmあまり、外面黄褐色、内面緑褐色・黄褐色を呈する。胎土には砂を多く含み、焼き上がりはやや軟質である。22は推定口径10.0cmあまりの小形品である。口縁部は0.8cm外側に傾いており、内外面とも白褐色である。内面は風化のため調整は不明であるが、外面は横ナデである。器壁の厚みは0.9cmあまりでやや厚手、胎土には砂を多く含む。焼き上がりはやや軟質である。23はやや厚手のもので、口縁端部短く外反し、先端は尖り気味。外面の一部に煤が付着しており、調整は横ナデで、焼成は充分である。胎土には砂を多く含み、外面黒色・淡茶褐色、内面黄褐色である。

24はやや大形の甕口縁部片で、推定口径25.9cmである。口縁部は外側に大きく外反し、端部は浅い窪みのある内傾した面を持つ。頸部から口縁部にかけては「く」の字に屈曲している。淡黄褐色（外面）黒褐色（内面）を呈し、胎土には砂を多く含む。焼き上がりはやや軟質である。調整は風化のため外面は不明、内面は横ナデである。

25～27は土師器の壺である。25は口径6.8cm、器高7.2cm、胴部最大径7.9cm、頸径5.5cmを計る小形丸底壺である。胴部最大径は頸部から2cmあまり下がったところにあり、口縁端部から0.5cm外側にある。口縁部は外側に0.6cmあまり傾き、端部は尖りぎみである。器壁はほぼ均一な厚みを持っており、0.5cm前後。外面は暗灰色・茶褐色で、荒いハケ目の後ナデ調整を行っている。内面は横ナデ・ナデ調整、暗灰色・茶褐色を呈する。胎土には細かい砂を含み、焼き上がりは良好である。



第48図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図２

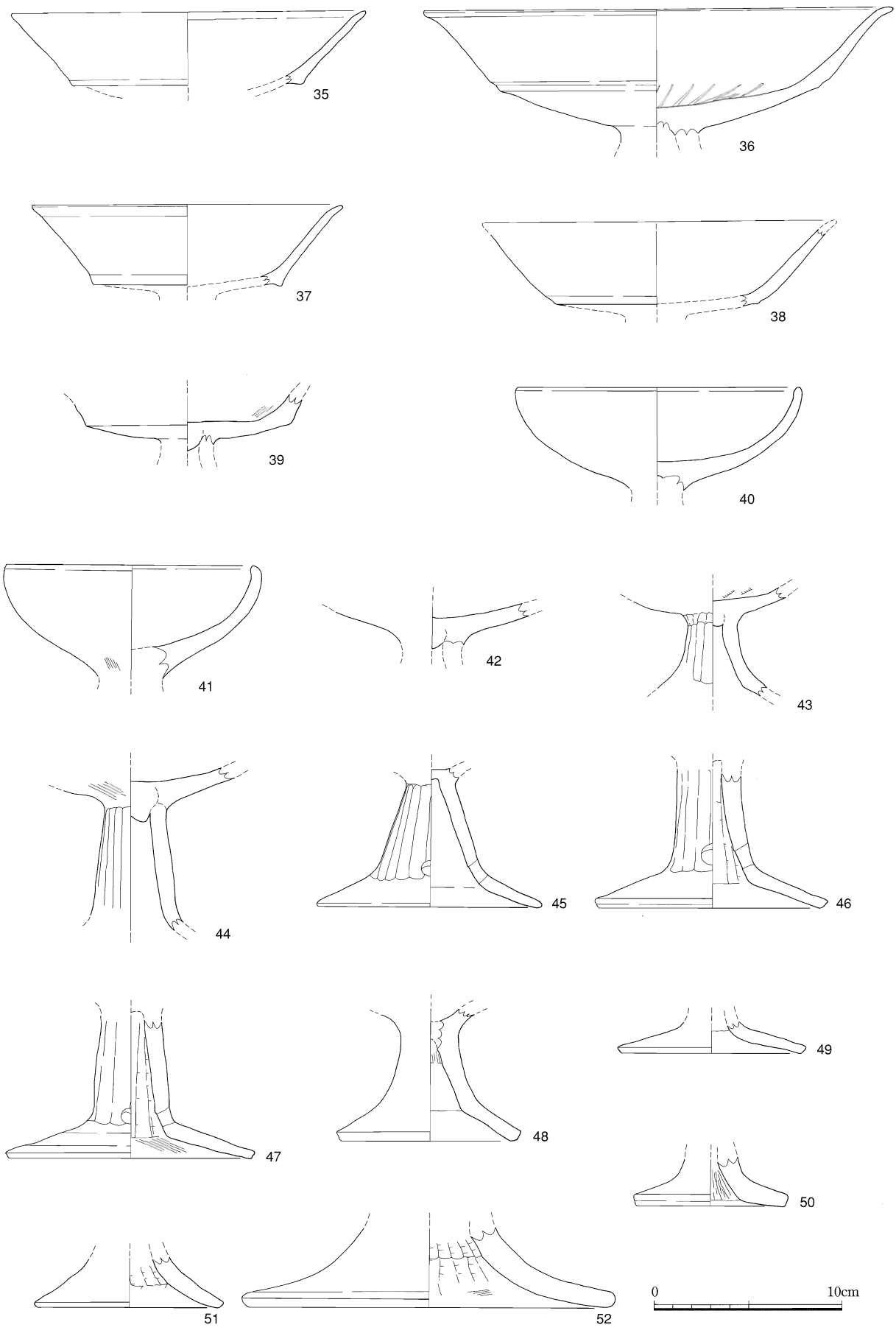
26は直口壺の口縁部片である。口縁部はラッパ状に大きく開いており、推定口径12.6㎝、高さ4.5㎝あまりである。端部は若干外反し、先端は尖っている。外面の一部に煤が付着しており、器面調整は横ナデである。頸部は径7.3㎝で、内側にはケズリが施されている。色調は外面淡褐色・黄褐色、内面黄褐色、砂を多く含んでおり、焼き上がりは普通である。27は壺の肩部から底部にかけての破片。底部は丸底であるが若干尖っている。胴部は玉葱状に張り出しており、大きく屈折している部分から下方の内面にはヘラケズリ、上方に横ナデがある。外面は風化を受けているため上方は不明であるが、底部はヘラによる面取りが行われている。内外とも黄褐色を呈し、胎土は良好、焼成は普通である。

28～52は土師器高坏片である。28～39は坏部に段を持つタイプのもので、28は坏部の破片。段には断面三角の突起が廻る。口縁部は外側に大きく開き、その高さは5.8㎝あまりである。端部はやや外反し、先端は丸い。脚基部の内側には粘土を詰めており、内外面には暗文が描かれている。内面は屈折部から上方が格子状、下方は坏底の中心に向かって直線的な暗文があり、外面はハケ目調整の上から左上がりの直線的な暗文が描かれている。内面の器面調整はミガキである。口径23.0㎝、色調は外面茶灰色・黄褐色・淡褐色、内面黄褐色・淡褐色である。胎土には砂を多く含み焼き上がりは良好。

29は器高14.2㎝、口径17.3㎝、底径10.4㎝、脚基部径2.71㎝を計る高坏。坏の屈折部は「く」の字形に曲がっており、坏底部は外反ぎみに1.5㎝あまり上がり屈折部にいたっている。口縁部は外側に2.9㎝傾いて開き、端部の手前で短く外反して口唇部にいたる。先端は尖りぎみ、器面調整は横ナデで、内面には2段に渡って直線的な暗文がある。上段は左上がり、下段は坏底部中心に向かって描かれている。脚筒部は基部からやや開きぎみに下がり、大きく「く」の字形に屈折して脚端部にいたっている。屈折部の上方には0.7㎝の円形の透かしが穿たれている。筒部外面には縦方向のミガキがあり、脚下方にはナデが施されている。筒部内面にはヘラ状の工具で面取りを行っている。脚下方の内側には一部にハケ目が残っている。色調は内外面とも淡褐色・淡茶褐色で、胎土は良好、焼成も充分である。

30は推定口径18.6㎝の坏部の破片。屈折部は断面三角の突帯が廻る。口縁部は外傾し、短く外反して端部にいたる。先端は、やや尖っている。器面調整は横ナデで、外面淡褐色、内面茶褐色・黄褐色を呈する。小粒の砂を含み、焼成は充分である。31も坏部片で推定口径12.3㎝である。屈折部は丸く曲がっており、やや退化している。口縁部は高さ4.2㎝、外側に3.0㎝傾く。端部は短く外反して口唇部にいたる。先端はやや尖りぎみ、器壁は屈折部が最も厚く0.9㎝を計り、坏底部の中央部が最も薄く0.4㎝である。脚基部内面には丸い粘土を詰めており、器面調整は風化のため不明である。外面赤褐色・黄褐色、内面黄褐色を呈する。大粒の砂を含み、焼き上がりは、やや軟質である。

32はやや薄手の坏部片で、推定口径18.2㎝。脚基部から口縁端部までの高さは、6.5㎝あまりでやや高い。屈折部は断面三角に飛び出ているが先端はやや丸い。口縁部の形態は31と同様であるが、杯底部は若干上方に上がって屈折部にいたっている。全体的に風化を受けており調整は不明で、内外とも赤褐色を呈し、胎土は良好、焼き上がりはやや軟質である。33は坏屈折の破片で、断面三角の突帯が廻っているものである。器面調整は外面横ナデで、内面は風化のため不明。赤褐色（外面）黄褐色（内面）を呈し、小粒の砂を含む。焼き上がりは普通である。34は坏部の破片で、口縁端部及び坏底部の大半を欠く、やや小形のものである。屈折部は断面三角の突帯が廻り、外面淡茶褐色、



第49図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図３

内面淡褐色で、胎土は良好。焼成は普通。

35は坏の屈折部から口縁部にかけての破片で、推定口径19.0cmである。屈折部は「く」の字形に飛び出ているが、先端はやや丸い。口縁部は外側に3.2cmあまり傾き、高さは3.9cmを計る。端部付近で若干外反し口唇部にいたっている。先端はやや尖り気味。内外面共に淡褐色を呈し、小粒の砂を多く含む。焼成はやや軟質である。36は推定口径25.0cm、脚基部径4.2cmを計るやや大形のものである。屈折部は0.6cmあまりの浅い凹線が廻る。口縁部は外傾して上がり、短く外反して端部にいたっている。先端は細くて尖っている。坏底部は脚接合部が最も厚く、屈折部に向かって薄くなっている。屈折部内面には底の中心にむかって直線的な暗文が多数描かれている。色調は外面赤褐色、内面黒灰色・黄褐色・淡褐色を呈する。全体的に風化を受けているがミガキを施しているものと思われる。胎土には砂を含み、焼成はやや軟質である。

37は坏の屈折部から口縁部にかけての破片。屈折部は断面三角の突帯が廻る。推定口径16.5cmで、口縁部は外側に開き、端部付近で若干外反し口唇部にいたる。高さは4.3cmあまりでやや薄手の作りである。淡褐色を呈し、小粒の砂を含む。焼き上がりは普通である。38も坏の屈折部から口縁部にかけての破片であるが、口縁端部を欠く。屈折部は0.6cmあまりの浅い凹線が廻り、外側に大きく開いた口縁部を持つ。赤褐色を呈し、胎土は良好、焼成は普通である。39は脚基部から屈折部にかけての破片。屈折部は「く」の字に大きく屈曲し、端部は丸い。脚基底部内面には丸い粘土を詰めており、器面調整は風化を受けているため不明であるが、内面の一部にハケ目が残る。外面淡褐色、内面黄褐色で、小粒の砂を含む。焼成は普通である。

40・41は坏部が内湾して端部にいたっているもので、40は推定口径15.2cm、脚基部からの高さ5.5cmを計る。脚基部は1.4cmあまりの厚さを持っているが、上方に行くにしたがって薄くなり、端部は0.4cmである。先端部は丸く、端部内側は若干膨らんでいる。赤褐色を呈し、胎土は良好で、器面調整は風化のため不明。焼成は普通である。41は40と比べやや小形のもので、推定口径13.2cm、脚基部からの高さ6.0cmを計る。端部は短く内湾しており、先端は尖りぎみ。内面の上方は横ナデ、下方はミガキ風の調整が施されている。外面はミガキ風で、脚基部の一部にハケ目が残る。外面淡褐色・黄褐色、内面淡褐色・黄褐色・茶褐色を呈す。胎土は良好、焼成は充分である。

42は脚基部から坏底部にかけての破片で、脚基底部内面には丸い粘土を詰めている。色調は淡茶褐色（外面）淡褐色（内面）、胎土には砂を含み、焼成は普通である。43は坏底部から脚部にかけての破片で、脚基部の径2.6cmを計る。脚基底部内面には丸い粘土を詰めており、脚筒部は外側に開きながら下がっている。坏内面にはナデ調整を行った後、ハケ目に用いる工具で、押しあてた痕跡がある。外面は上方がナデ調整で、脚部はヘラ状の工具で、縦方向にナデを施している。脚部下方内面には「く」の字に屈折して端部に向かっている。内外面とも淡赤褐色・黄褐色で、小粒の砂を含む。焼成は普通である。44も坏底部から脚部にかけての破片。脚基部の径3.3cmを計り、脚基底部内面には丸い粘土を詰めている。脚筒部は外側にあまり開かず下がっており、外面には縦方向のミガキがかかっている。坏底部外側には一部ハケ目が残る。淡褐色を呈し、細かい砂を含み、焼き上がりはやや軟質である。

45～48は脚上方から底部にかけての破片である。45は脚部の高さ6.6cm、脚基部径2.6cm、底径12.0cmを計るものである。脚部は基部から「ハ」の字形に下がり、底部から2.0cmあまり上方のところで大きく「く」の字形に屈折して端部にいたっている。屈折部のやや上のところに径1.0cmの円形の透かしが穿たれている。屈折部は器壁がやや厚く、先端に向かって薄くなっている。端部は

細くて丸い。基部から屈折部にかけての外面には縦方向のミガキが施され、脚下方及び内面は風化のため調整は不明。淡褐色をなし、胎土は良好、焼き上がりはやや軟質である。

46は脚基部を欠くもので、脚上部はほぼ垂直に下って屈折部にいたっている。屈折部上方に径1.1cmの円形の透かしが3方にある。脚上方は器壁が厚く、屈折部に向かって薄くなっている。屈折部でいったん厚くなり、やや湾曲して端部にいたる。端部は外傾し、平らな面を持つ。脚上方の外面には縦方向のミガキが施され、内面はヘラ状工具で横ナデを行っている。外面淡褐色・黄褐色、内面淡褐色で、小粒の砂を含む。焼き上がりはやや軟質である。47は46とほぼ同じ形態を呈しているが、脚上部の中央が、やや膨れているものである。底径13.3cmを計り、屈折部上方の3方に径0.8cmの円形透かしがある。脚端部は外傾し、沈線状の窪みがある。屈折部の下方内面には荒いハケ目が残り、外面はミガキ風の調整がある。他の部分の器面調整は46と同じ。内外とも淡褐色・灰褐色で、小粒の砂を多く含む。焼成は充分である。

48は底径11.2cmで、屈折部の上に円形の透かしを持つ。屈折部から端部に向かっては大きく「ハ」の字形に開き、先端尖り、外傾した面と接する。器壁は屈折部が最も厚く、先端に向かって薄くなる。淡赤褐色をなし、胎土は良好、焼成はやや不足である。

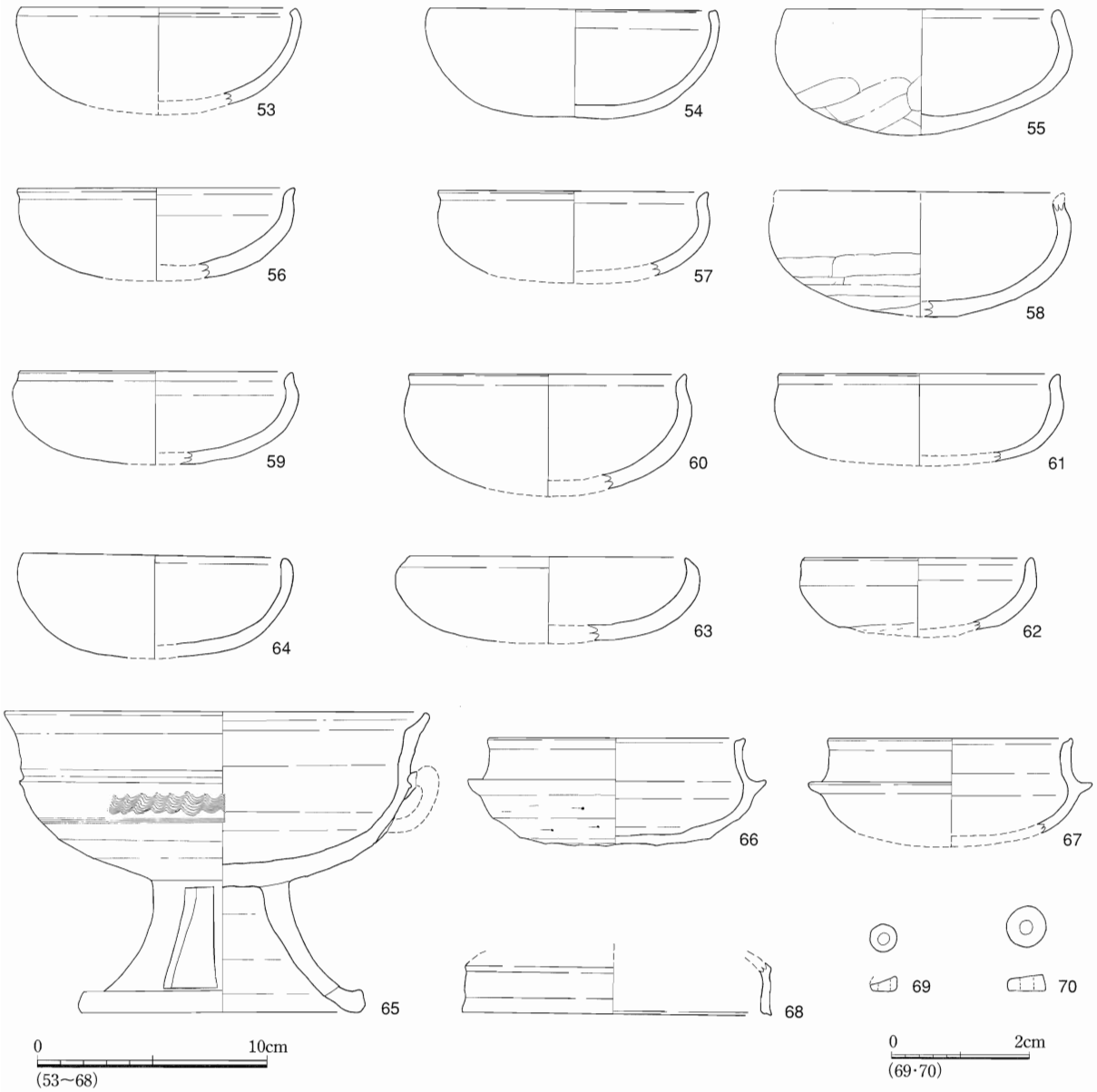
49～52は脚下部から底部にかけての破片。49は底部から屈曲部までの高さが低いもので、外面は湾曲ぎみ、内面は屈折部からやや膨れた後やや凹んで端部にいたっている。端部は外傾した平らな面を持つ。淡褐色・黄褐色を呈し、小さな砂を含む。焼き上がりは普通である。50は器壁の厚いもので、屈折部で1.2cmを計り、やや外傾した端部の平面は0.7cmの幅を持つ。底径7.8cmとやや小形で、屈折部より上の内面には絞り痕がある。外面は風化のため調整は不明。外面淡褐色、内面淡褐色・灰褐色を呈し、胎土は良好、焼き上がりはやや軟質である。

51は底径9.5cmを計るやや小形品。内面には明瞭な屈曲部を持たないもので、ヘラ状工具による横ナデの調整が上方に施されている。先端に向かって器壁は薄くなり、端部は外傾した面がある。外面はナデ調整で、赤褐色を呈し、胎土は良好、焼成は普通である。52は底径19.0cmを計る大型の高坏で、「ハ」の字形に大きく開いている。端部は丸く、内面上方はヘラ状工具による横ナデ、下方は横ナデで一部にハケ目が残る。外面はナデ調整である。内外とも赤褐色・褐色で、砂を多く含む。焼成は充分である。

53～62は土師器坏の破片で、口唇部にやや平坦な面を持つもの（53～54）体部上方で大きく内湾して端部にいたっているもの（55）口縁端部が短く外反し先端が尖りぎみなもの（56～62）口縁端部が内湾して先端が尖りぎみなもの（63）口縁端部が短く内湾して先端が丸いもの（64）に分けられる。

53は推定口径12.0cmで、口縁端部はやや外傾した面を持ち、その面の下端から短く外反して下方にいたっている。調整は風化のため不明。体部は全体的に内湾しており、茶褐色を呈する。胎土は良好、焼きはやや軟質である。54は口径12.5cm、器高4.7cmを計り、口縁端部は平坦である。内面底部にはナデが施しているが、その他は風化のため不明。器壁は底部で0.6cm、口縁端部で0.4cmの厚みを持つ。内外面とも淡褐色を呈し、胎土は良好。焼成はやや軟質。

55はやや尖った底部から3.3cmあまり上方で大きく内側に傾き端部にいたっているものである。先端は尖っており、内側に丸みを持った口唇部を持つ。体部下方外面にはヘラ状のものでミガキ風にナデを施した痕跡がある。上方は横ナデ、内面は上方横ナデ、下方ナデである。口径11.7cm、器高5.5cmを計る。外面灰褐色・黄褐色、内面淡褐色を呈する。胎土は良好、焼成は充分である。



第50図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図４

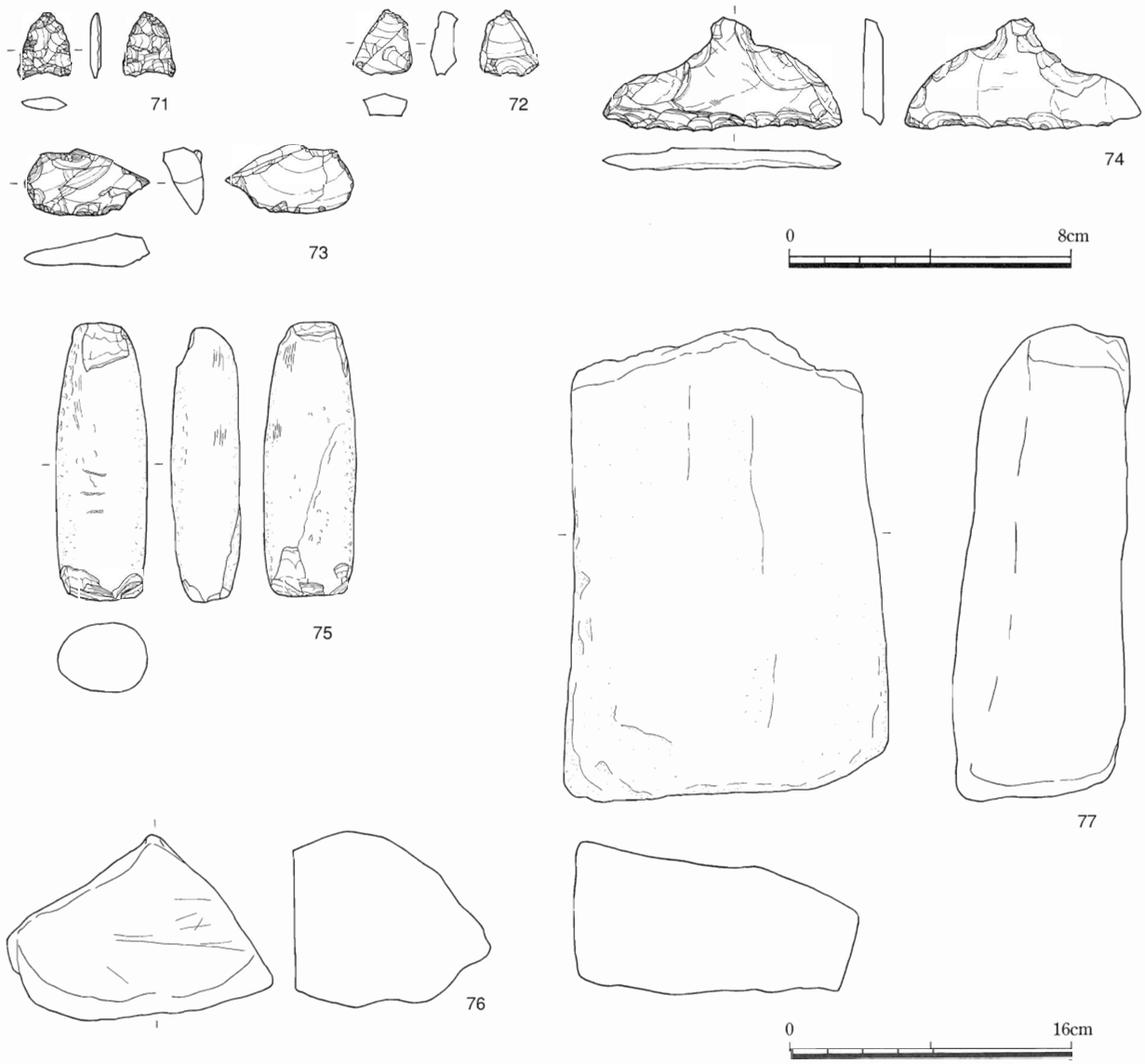
56は器高4.0㎝、口径12.0㎝を計る。底部から内湾して上がり、短く外反して端部にいたる。端部は尖っており、内側に丸みを持った口唇部がある。底部から上方に行くにしたがって器壁は薄くなる。外面赤褐色・黄褐色、内面赤褐色を呈し、胎土は良好、焼成は普通である。57は56とほぼ同じ形態で、口径11.7㎝を計る。胎土は良好、焼き上がりはやや軟質である。58はやや尖りぎみの底部をもち、体部上方で大きく内湾して端部にいたっているものである。端部を欠くが、外反して、先が尖るものと思われる。体部下半には、ヘラ状の工具によるミガキ風の横ナデがあり、上方は横ナデである。内面はナデ及び横ナデの調整である。内外とも赤褐色で、胎土は良好、焼成は普

通である。

59は推定口径12.9cm、器高4.2cmを計るもので、形態は57とほぼ同じ。全体的に風化を受けており、調整は不明。内外とも赤褐色を呈し、胎土は良好、焼き上がりはやや不足である。60は59とほぼ同じ形態を呈しているが、器高がやや高く5.4cmあまりを計る。推定口径12.0cmで、胎土は良好、焼成はやや軟質である。61も60と同じ形態である。しかし器高は4.0cmでやや低い。また、器壁は体部の屈折付近が厚くその上下は薄い。内面は横ナデが施され、外面は風化のため不明である。外面赤褐色、内面赤褐色・黄褐色で、胎土は良好。焼き上がりはやや不足である。

62は体部上方が、やや内傾して口縁端部いたっているもので、推定口径9.8cm、器高3.6cmを計る小形品である。口縁部の先端は尖り、その内側に外傾する面を持つ。体部下方は器壁がやや薄くなっており、その外面にはヘラによる面取りが施されている。色調は黄褐色（外面）、淡褐色（内面）で、胎土は良好、焼成は普通である。

63は口縁端部が内傾し、先端が尖っているもので、屈折部から先端にかけての断面は三角形を呈



第51図　勝負遺跡ＳＩ０５出土遺物実測図５

している。器壁の厚みは0.8㎝あまりを計り、他の坏と比べやや厚手の作りとなっている。器面調整は風化を受けているが横ナデ、ナデと思われる。色調は内外面とも赤褐色・黄褐色で、胎土は良好、焼成は普通である。推定口径12.0㎝、器高3.8㎝である。

64は推定口径11.5㎝、器高4.5㎝あまりである。口縁端部は若干内湾して先端にいたっており、先端は丸い。器壁は底部及び口縁端部がやや厚く、体部上方が最も薄くなっている。
内面上方は横ナデが施されているが、その他は風化のため器面調整は不明である。内外面とも赤褐色を呈し、胎土は良好、焼き上がりは普通である。

65～68は須恵器片である。65は住居跡の上層から破片が分散した状態で見つかった高坏である。口径18.3㎝、器高13.0㎝、底径12.0㎝、脚基部径5.9㎝、脚部の高さ5.5㎝を計るやや大形品。坏部は7.5㎝高さを持ち、脚基部から内湾ぎみに上がり、口縁部から３㎝あまり下がったところから１㎝あまり外反して端部にいたっている。変換点に幅0.6㎝あまりの沈線が１本廻り、その下方には８本歯の櫛による丁寧な波状文が描かれている。沈線から波状文の下方にかけて耳がつけられていた痕跡が残っている。器壁は底部が最も厚く、上方に行くにしたがって薄くなり、沈線のあたりで再び厚くなって、口縁端部から0.7㎝あまり下がったところから外傾して薄くなって先端にいたる。先端は丸い。器面調整は内面が上から回転ナデ、ナデ、外面は沈線の上方が回転ナデ、波状文の下方がカキ目、一回転のヘラケズリ、回転ナデである。脚部は基部から内湾ぎみに開いて端部にいたっている。端部はやや内傾し上下は丸い。基部から端部にかけて長台形の透かしが４方に開けられている。色調は外面白灰色・淡灰色、内面淡青灰色、白灰色で、胎土には大粒の砂を含む。焼成はやや軟質である。

66・67は蓋坏の身である。66は口径12.0㎝、器高4.7㎝を計り、立ち上がりはやや外反ぎみで、2.0㎝の高さを持つ。先端は尖り、その内側にやや凹んだ外傾する面を有する。受け部の先端は尖り気味で、体部の大半には左方向の渦巻き状のヘラケズリが施されている。体部上方から立ち上がりの外面は回転ナデ、内面も回転ナデである。淡灰色を呈し、胎土は良好、焼成は充分である。

67は底部を欠くもので、口径11.5㎝計る。立ち上がりは2.0㎝の高さを持ち、やや外反している。端部には段があり、器壁の厚みは均一である。受け部は水平に0.5㎝あまり伸び、端部は尖る。外面淡青灰色・緑灰色、内面面淡青灰色で、胎土は良好、焼成は充分である。68は蓋坏の蓋口縁部片である。端部はやや凹んだ内傾する面を持ち、天井部との堺には段を有する。淡青白灰色を呈し、胎土には大粒の砂を含む。焼成は充分である、

69・70は滑石製と思われる臼玉で、69は一部欠損しているが径４㎜、残存長２㎜、孔径２㎜を計る。70は69よりやや大きく、径5.5㎜、長2.5㎜、孔径２㎜で、いずれも緑灰色を呈する。

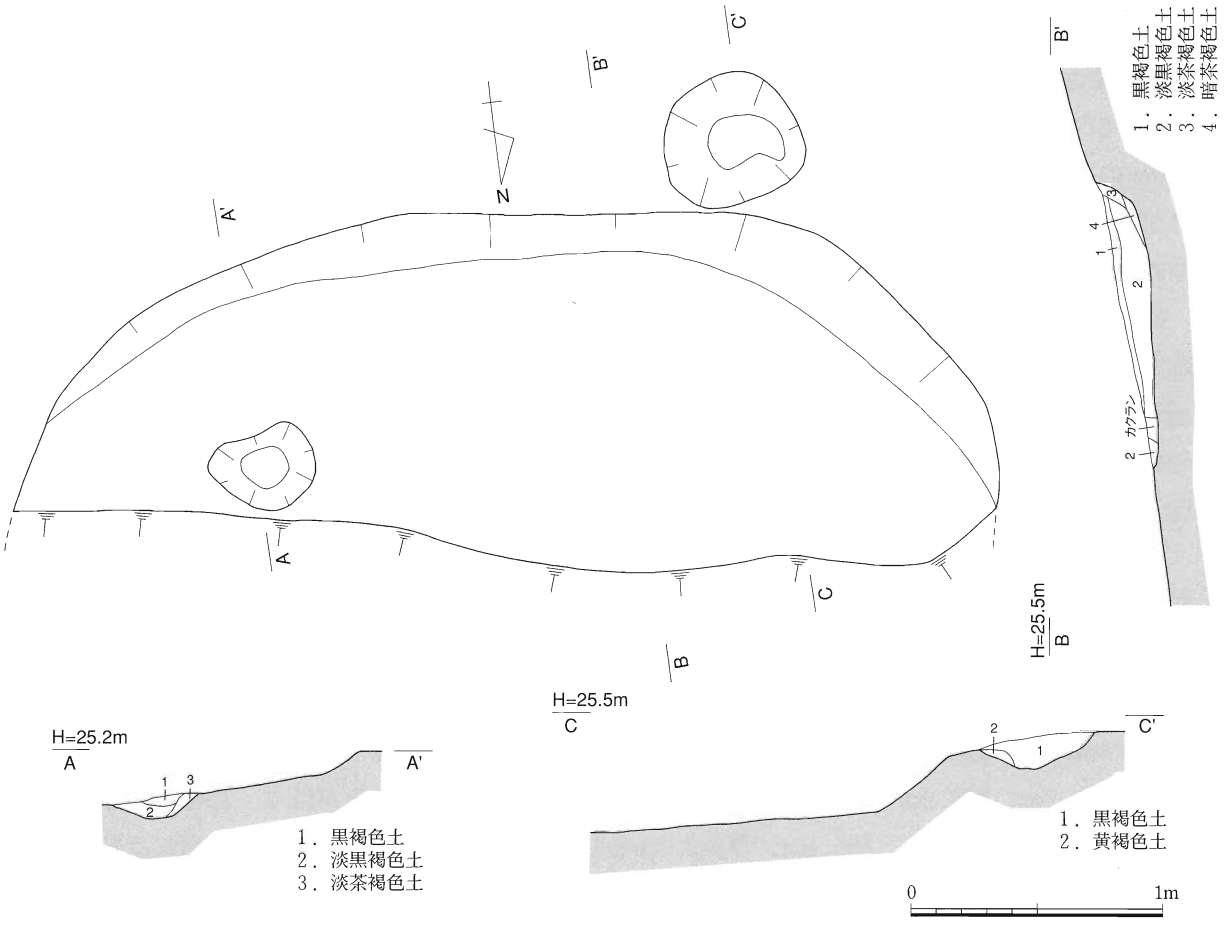
71は黒曜石製の石鏃で、長さ1.8㎝、幅1.5㎝の無茎鏃である。基部のくびれは浅く湾曲し、側面上方で屈折して先端いたる。72、73は楔形石器である。72は黒曜石製で、不整な台形を呈し、大きさは1.8㎝×1.7㎝を計る。73は瑪瑙製で、3.5㎝×1.2㎝あまりである。74は安山岩製の石匙で、刃部の長さ6.7㎝、幅3.2㎝を計る。上部中央には幅1.0㎝あまりのつまみが付く。75は刃部を欠く磨製石斧で、残存長15.6㎝、幅5.1㎝、厚み3.9㎝を計る。断面は長い円形を呈し、器面には敲打痕が残っている。76は一面だけ使用している砥石で、刃物痕が残っている。15㎝×10㎝の大きさ。77は台石と思われるもので、26㎝×18㎝、厚さ8.7㎝のものである。

２．段状遺構

段状遺構は弥生時代～奈良平安時代にかけてのものが10基あまり検出したが、弥生時代のものは尾根付近から見つかり、古墳時代中期は谷部、奈良平安時代は丘陵斜面に存在していた。

ＫＤ０１（第52図）

ＫＤ０１は南外２号墳から北東側に伸びている尾根から少し下がった緩やかな斜面に存在しているもので、標高は25ｍあまりである。尾根側を円弧状に掘り込んでおり、その長さ3.9ｍ、幅1.3ｍを計る。この遺構は下方が崩れた竪穴住居跡になる可能性があるが、柱穴を検出することができなかった。壁の深さは中央部で20㎝あまりあるが、両サイドの端に行くにしたがって浅くなり、端では床面と接する。床面東側から43㎝×30㎝の不整形な深さ20㎝あまりのピットが１基見つかった。また、壁の外側から径55㎝の不整円形をした深さ約10㎝のピットが掘られていた。埋土は壁際の淡茶褐色土・暗茶褐色土が初め埋まり、その後に淡黒褐色土・黒褐色土が床面を覆っていた。この淡黒褐色土・黒褐色土からは弥生土器の甕胴部の破片と思われるものが数点検出したが、図化できるものはなかった。



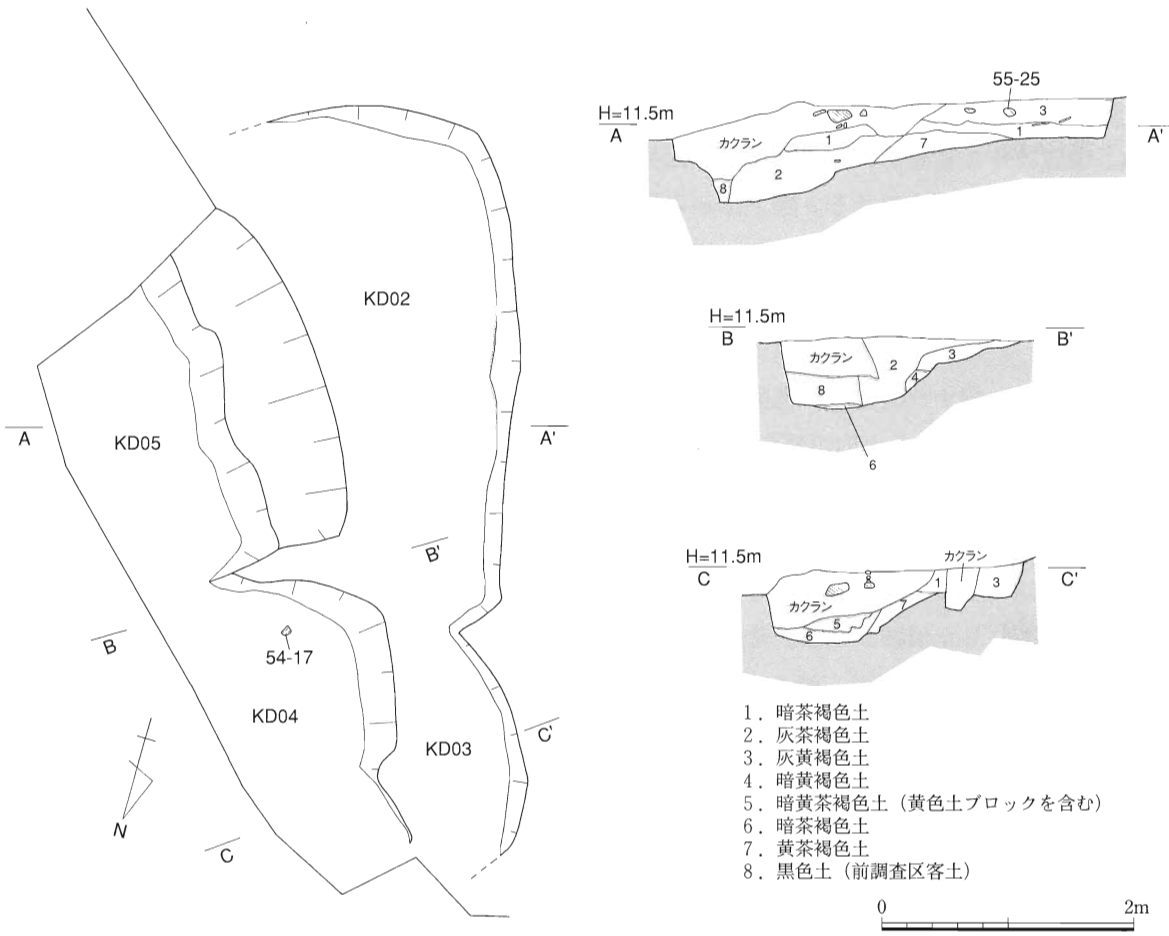
第52図　勝負遺跡ＫＤ０１実測図

ＫＤ０２～０５（第53図）

ＫＤ０２～０５は谷部の下方で検出した段状の遺構である。切り合い関係や土層からＫＤ０２・ＫＤ０３→ＫＤ０４→ＫＤ０５の順で築かれたものと思われる。上方にあるＫＤ０２は「コ」の字形に掘削して段を造っているもので、その長さは4.2ｍである。奥壁の高さは0.4ｍを計り、両脇は短く、先端は床面と接する。床面は最も広いところで1.8ｍの幅があるが、斜面には黄茶褐色土を敷き、床を拡張している。ピット等の遺構は見つからなかった。ＫＤ０３はＫＤ０２の北側に接しているもので、その前後関係を解明することはできなかった。残存する壁は円弧状に残っている。長さは1.8m、幅0.8ｍ、奥壁の深さ0.3ｍを計る。ＫＤ０４はＫＤ０３の前方に存在しているもので、ＫＤ０３の整地層と思われる黄褐色土をカットして造っている。現存している壁は「L」字で、鉄斧が出土した。この遺構は松江道路に係わる以前の調査で検出されたＳＩ18と同一の遺構になる可能性が高い。ＫＤ０５はＫＤ０２の下方にある遺構で、ＫＤ０２の上に堆積していた土層を斜めにカットして造っていることから新しいものと思われる。この遺構は松江道路に係わる以前の調査で見つかっている溜め池の水路につながるものと考えられる。

出土遺物（第54図・55図）

出土遺物には弥生土器、土師器、須恵器、鉄斧、石器がある。1～14はＫＤ０２から出土した土器片で、１は口縁部に擬凹線文を持つ弥生後期の甕片である。推定口径16.0cm、口縁部の高さ2.4cmあまりを計る。やや外傾し、上下の端部は丸い。調整は風化を受けて不明なところが多いが、頸部外面は横ナデである。茶褐色を呈し、砂を多く含む。焼き上がりはやや軟質。



第53図　勝負遺跡ＫＤ０２～ＫＤ０５実測図

2～4は土師器の甕である。2は推定口径14.0cmのやや小形の口縁部片。口縁の基部は「く」の字形に屈折しており、0.5cm外傾して端部にいたる。端部は水平であるが、中央がやや凹んでいる。内面は上端から2.0cmあまり下がったところで内湾する。調整は横ナデ、外面淡褐色、内面黄褐色を呈する。小粒の砂を多く含み、焼成は普通。3は推定口径14.5cmの口縁部片。短い頸部から外側に大きく開くもので、先端は細くて丸い。調整は内面が風化のため不明、外面は横ナデである。砂を若干含み、茶褐色（外面）黄褐色（内面）を呈する。焼成は普通。4は口縁部が内湾している甕で、推定口径16.0cm。口縁端部は太くて丸い。頸部付近の内面は「く」の字形に大きく屈折している。調整は横ナデ、色調は外面淡茶褐色、内面白茶色である。胎土は良好、焼成は普通。

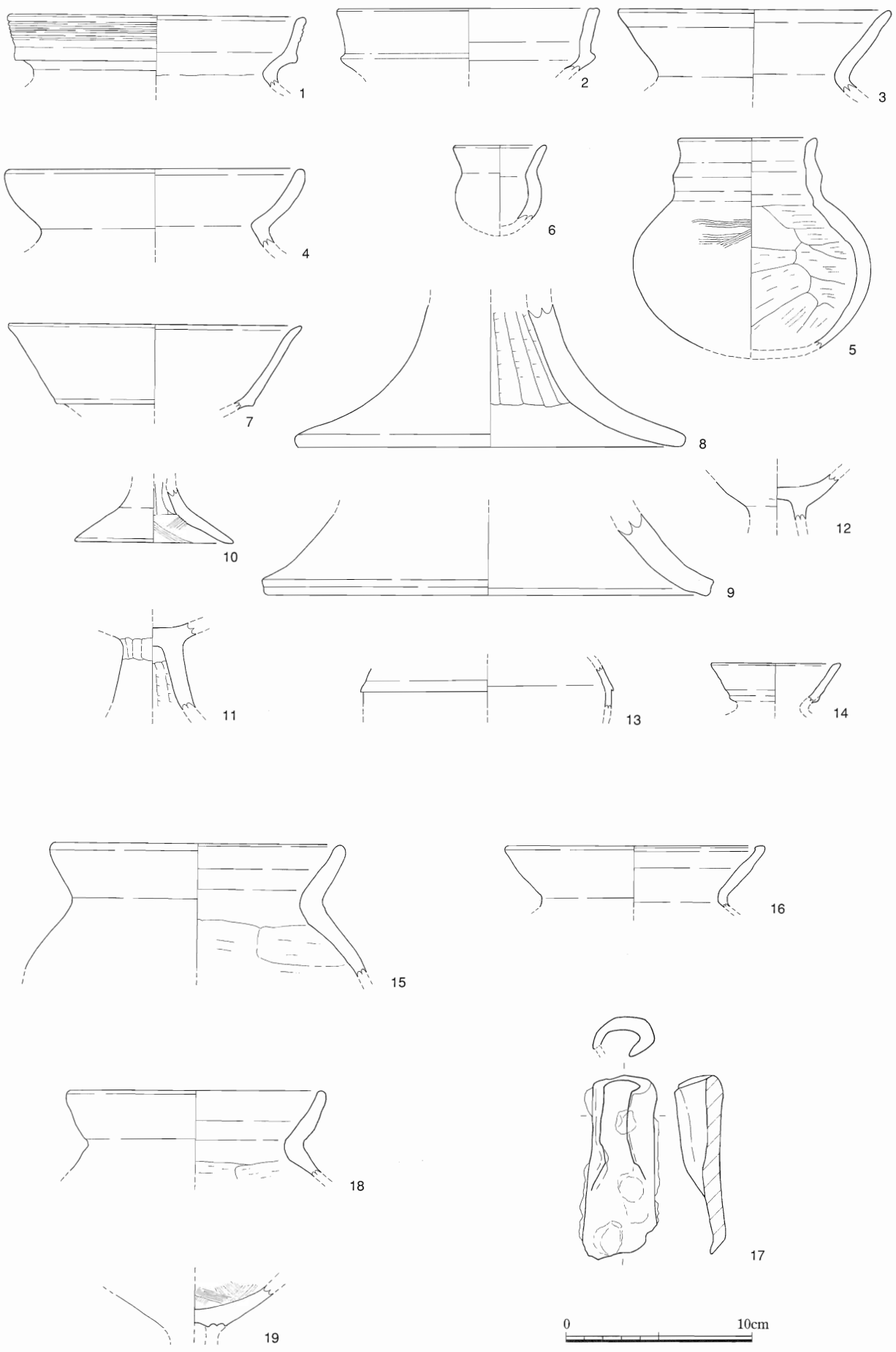
5は口径7.4cm、器高12.0cm、胴部最大径12.7cmを計る土師器の壺である。頸部の上端から内側に外反して端部にいたっている異形の口縁部を持つ。先端は尖っており、その内側に外反する面がある。口縁部の器壁は凸凹し、頸部で薄くなり、肩部が最も厚い。それから胴部下方に向かっては序々に薄くなる。胴部は円形で、ナデが施されているが、一部にハケ目が残る。頸部から上方は横ナデがある。内面の調整は頸部より上方が横ナデ、下方がヘラケズリ。ヘラケズリは上方が横方向、下方が右上がりである。砂を多く含み、外面黒灰色・黄褐色、内面黒灰色を呈する。焼き上がりは充分である。

6は口径5.0cmあまりの土師器小形丸底壺である。胴部最大径は4.5cmで口縁端部の内側にある。口縁部は1.5cmあまりの高さを持ち、やや外傾している。端部は細くて丸く、胴部は0.7cmの厚みがある。調整は外面が横ナデ、ナデ、内面は風化のため下方が不明、上方が横ナデである。色調は黄褐色（外面）灰褐色（内面）、焼成は普通。胎土は良好である。

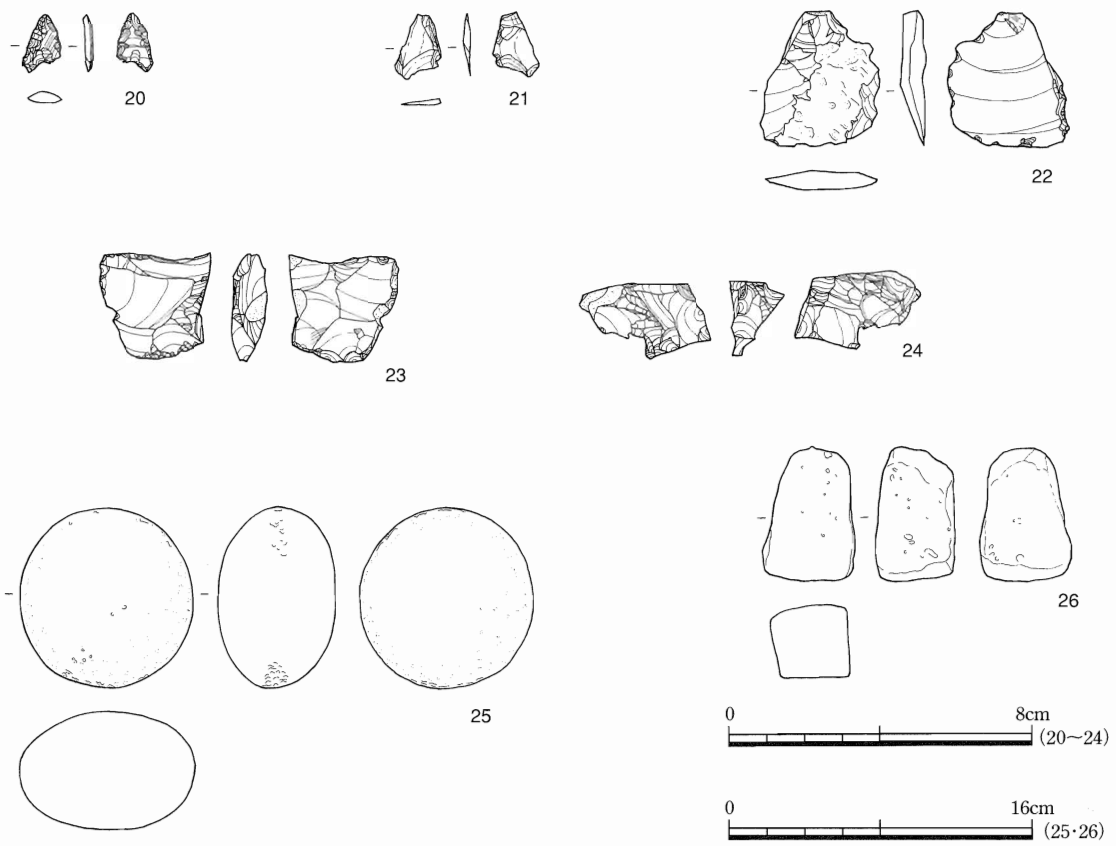
7～12は土師器の高坏で、7は坏部の破片。屈折部から外傾して逆「ハ」の字形に開くもので、若干外反して端部にいたっている。先端は尖りぎみである。器面調整は風化のため不明。砂を多く含み、焼成はやや軟質である。色調は外面黄褐色・淡褐色、内面淡褐色である。8は底径20.5cmを計る大形の高坏脚部片である。脚上部から外反ぎみに「ハ」の字形に開いて端部にいたっている。端部はやや丸みを持っており、外側に傾く。内面上方はヘラ状のもので横ナデした痕跡が残っている。下方は横ナデで、外面は風化のため調整不明。焼き上がりは普通、砂を多く含む。茶褐色（外面）赤褐色（内面）をなす。9も大形の高坏脚部片で、底径24.0cmを計る。端部はやや外傾した凹んだ面を持つ。横ナデ調整で、外面淡茶褐色、内面茶褐色を呈し、若干の砂を含む。焼成は充分。

10は底径8.5cmを計る小形の高坏脚部片。脚中央から「く」の字形に緩く屈折して端部にいたっている。端部は尖りぎみで、内面は屈折部から下方はハケ目、上方はヘラ状の工具による横ナデがある。外面はナデ調整。淡褐色（外面）淡紫色・淡褐色（内面）を呈し、胎土は良好、焼成は充分である。11は脚上部から基部にかけての破片。内面にはヘラ状の工具による横ナデ、基部外面には縦方向に面取りした痕跡が残る。その他の外面には横ナデが施され、外面淡白茶褐色、内面淡茶褐色を呈する。胎土は良好で、焼き上がりは普通である。12は脚基部径3.1cmを計る基部から坏部にかけての破片。坏は内湾ぎみに上方に上がっており、調整は風化のため不明。内面とも淡褐色で、胎土は良好、焼成はやや軟質である。

13・14は須恵器片である。13は蓋坏の蓋の口縁部上方から天井部下方にかけての破片、堺には断面三角形の細い垂れ下がった段を有する。全体的に薄手で、回転ナデの調整が施されている。色調は外面濃灰色、内面白灰色、断面茶褐色を呈する。胎土は良好で、焼成は充分。14は363趨の口縁部片と思われるものである。口径7.0cmで、頸部から1.5cmあまり外傾して端部にいたる。端部はや



第54図　勝負遺跡ＫＤ０２～ＫＤ０５出土遺物実測図１



第55図　勝負遺跡ＫＤ０２～ＫＤ０５出土遺物実測図２

や尖っており、その内側に外傾した平坦面を持つ。下方には浅い凹線が１本めぐる。調整は回転ナデで、淡青灰色を呈し、胎土は良好。焼成は充分である。

15～17はＫＤ０４から出土した遺物である。15は「く」の字形に屈折して、やや上方が開いている土師器甕の破片である。推定口径15.5㎝で、端部は太くて丸い。内面下方は横方向のヘラケズリ、上方は横ナデがある。外面の調整は肩部が風化のため不明、口縁部が横ナデである。外面淡褐色・赤褐色・黄褐色、内面淡褐色・灰褐色で、胎土は良好である。焼成は普通。16は口縁端部内側に段を持つ土師器甕の口縁部片。調整は風化のため不明。口縁部は外側に開いており、口唇部は上面に丸みを持った面を持つ。器壁は中央部が最も厚い。内外面とも淡黄褐色で、胎土は良好。焼き上がりはやや軟質である。17は袋状の鉄斧で、長さ9.5㎝、幅は基部で2.9㎝、刃部で3.9㎝を計る。袋部の一方は上方が欠けているが、横断面は丸くなるものと思われる。袋部は7.6㎝あまりの長さがある。

18・19はＫＤ０５から出土した土師器である。18は肩部から口縁にかけて「く」の字形を呈した甕で、口縁部は若干内湾気味である。端部は丸く、口縁部は内外とも横ナデ調整。内面は頸部がナデ、肩部以下がヘラケズリである。推定口径13.5㎝で、外面赤褐色・黒色・灰褐色、内面淡褐色である。胎土は良好で、焼成は普通。19は高坏の坏部下方の破片。内面にはハケ目、外面はナデがある。外面は黄褐色・赤褐色、内面黒色で、外面には赤色の顔料を塗っている。砂を多く含み、焼成は普通。

20～26はＫＤ０２から出土した石器類である。20は黒曜石製の無茎石鏃で、長さ1.5㎝、幅0.9㎝を計る小形のものである。えぐりは円弧状を呈しているが、脚の片方を欠く。先端は若干丸みを持ち、側縁は一方が直線的、片方がやや内湾気味である。身の部分に未加工のところがある。21は先端部及び脚部の片方を欠く安山岩製の石鏃。残存長1.6㎝、幅1.2㎝で、未加工のところが多い。

22は側縁に加工痕跡のある黒曜石の剥片。3.0㎝×3.6㎝を計る不整台形を呈する。片面には自然面が残り、下端は鋭く尖っている。23・24は黒曜石の石核で、23は2.9㎝×2.8㎝、厚さ0.9㎝を計る台形のもの。24は不整形な形で、3.3㎝×2.0㎝を計る。25は9.0㎝×9.5㎝の円形をした磨石と思われるものである。厚みは6.3㎝で、両面の中央部には磨り面と思われる痕跡があり、側面には敲打痕が存在している。26は7.1㎝×4.8㎝×4.2㎝の長方体を呈している砥石と思われるもので、少し被熱を受けている。

ＫＤ０６（第56図）

この段状遺構は、第４調査区の上方の谷から見つかったもので、南側及び西側の壁が残っていた。南壁は東西方向に伸び、西側の壁と鈍角に接している。前者は長さ4.4ｍ、後者は1.8ｍあまり残存する。南壁の奥が最も深く、両端に向かって序々に浅くなっており、床面には一直線に並ぶ４本の柱穴が存在していた。柱間隔は1.7ｍ～2.1ｍと均一ではなく、柱穴は径0.2ｍ～0.3ｍで、深さは0.16ｍ～0.4ｍである。また、南西側の壁付近の床面より少し上面から焼土を検出した。

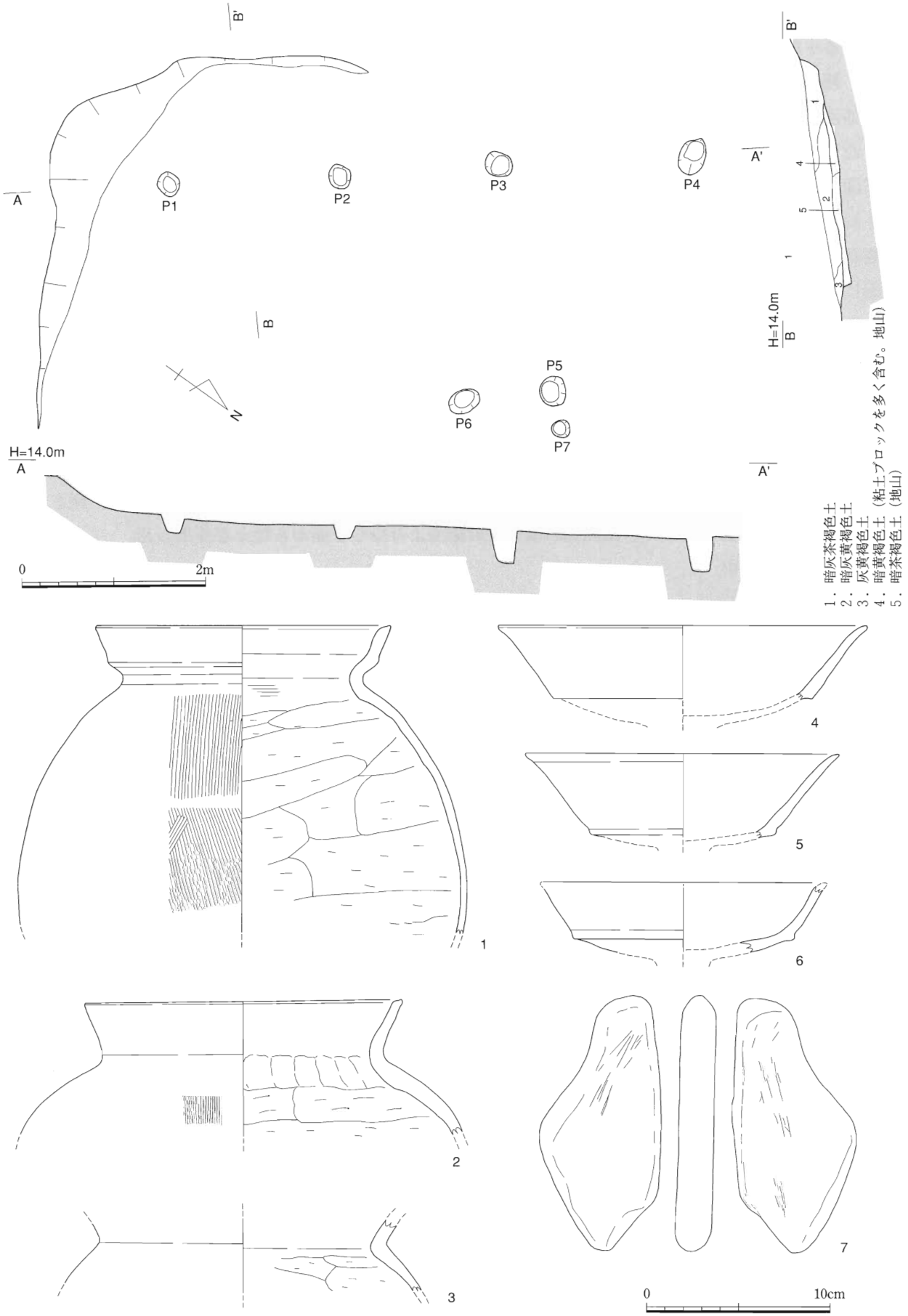
出土遺物（第56図）

ＫＤ０６から出土した遺物には、土師器の甕（１～３）高坏（４～６）砥石（７）がある。１は口径16.0㎝、胴部最大径24.4㎝、頸部径13.0㎝を計る甕片である。口縁部は頸部上端から短く外反し、外側に若干開きながら端部にいたっている。端部は尖り、内側には外傾した面を持つ。肩部はあまり張り出さず胴部にいたっており、胴部最大径は口縁端部から15㎝あまり下がったところになる。外面にはやや幅広のハケ目が縦方向に施されており、内面には横方向のヘラケズリがある。頸部から口縁部にかけての調整は横ナデであるが、内面の一部にハケ目が残る。外面の一部には煤が付着している。色調は外面暗茶褐色・淡褐色・黒色、内面黄褐色・淡茶褐色で、胎土は良好。焼成は普通。

２は推定口径17.3㎝の肩部から口縁部にかけての破片。口縁部は頸部から「く」の字形に伸びているもので、端部は尖り、内側には外傾した面を持つ。肩部は外側に張り出し、器面にはハケ目が残る。頸部内面には指圧痕があり、その下方には横方向のヘラケズリがある。口縁部には横ナデの調整が施されている。器壁は頸部下方が最も厚く、口縁部は先端に行くにしたがって薄くなっている。外面の一部には煤が付着し、大粒の砂を含む。外面淡褐色・黒色、内面淡茶褐色を呈する。焼き上がりは充分である。

３は頸部から肩部にかけての甕片。内面には横方向のヘラケズリがあり、外面は横ナデを施している。肩はやや下がりぎみで、頸部は「く」の字に屈折する。細かい砂を若干含み、外面白黄色、内面白黄色・淡褐色を呈する。焼成は普通。

４は推定口径20.0㎝の高坏口縁部片で、下方には段を有する。やや外反しており、端部は尖る。先端に行くにしたがって厚みが薄くなっており、砂を多く含む。外面には赤色顔料が塗ってある。焼成は普通で、外面黄褐色・赤褐色、内面淡褐色を呈する。５は４と同様な形態を持つ破片で、淡茶褐色（外面）、黄褐色（内面）をなす。砂を若干含み、焼き上がりはやや軟質である。推定口径17.0㎝。５は坏底部から口縁部にかけての破片で先端部を欠く。坏底部と口縁部の堺は断面三角の



第56図　勝負遺跡ＫＤ０６実測図及び出土遺物実測図

凸帯が廻る。口縁部外面は外傾し、内面は内湾ぎみである。色調は外面淡褐色・暗茶褐色、内面淡褐色である。器面調整は風化のため不明。小粒の砂を多く含み、焼成はやや不足である。６は13.8㎝×6.7㎝、厚さ1.9㎝を計る板状の不整形な砥石で、両面とも擦痕が見られる。

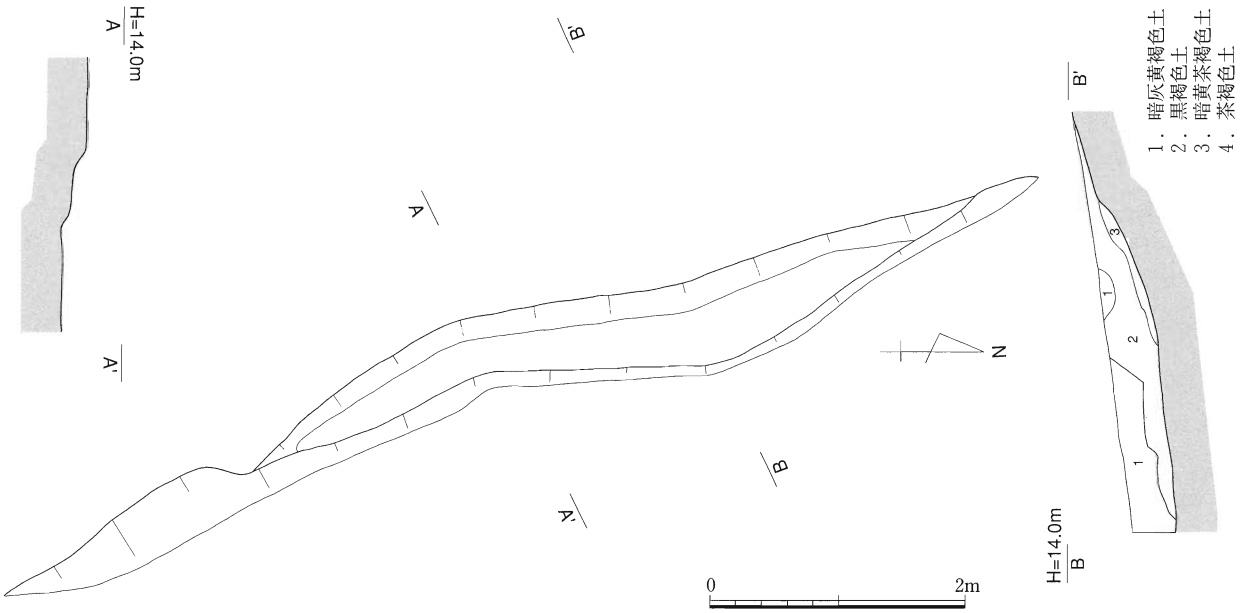
ＫＤ０７（第57図）

この段状遺構はＫＤ０６の北側に存在していたもので、斜面に堆積していた黒褐色土をカットして築いている。長さは5.1ｍあまりで、現存する平坦面の幅は0.4ｍと狭い。斜面上側の壁はジグザグしており、谷側の平坦面も上側の壁と並行してカットされている。このことから谷側の平坦面が後世に削られて狭くなったのではなく、本来からこの幅で造られたものと思われる。床面からはピット等の遺構や図化できるような遺物を検出することができなかった。この遺構の性格については不明で、時期も新しいものと考えられる。

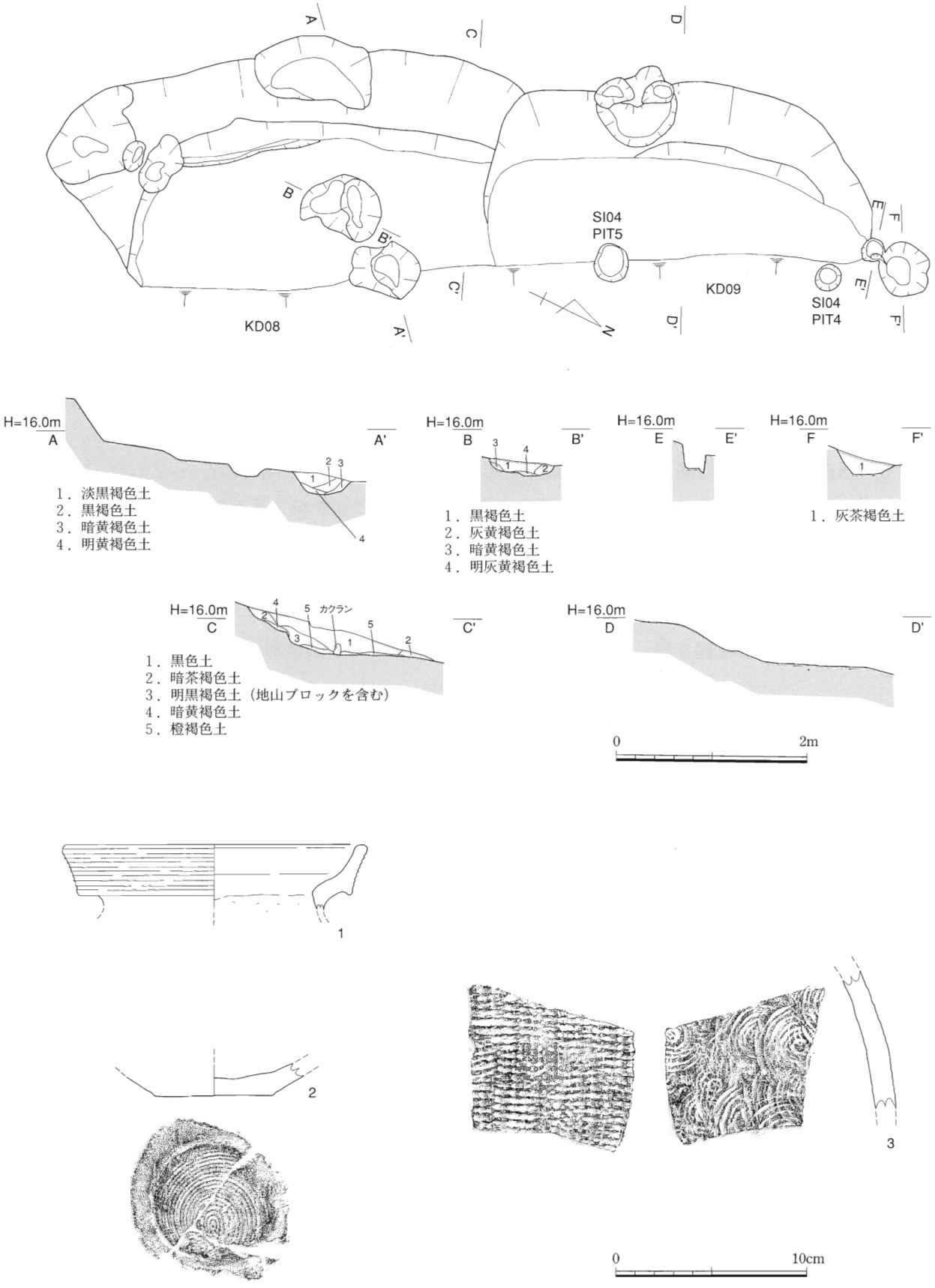
ＫＤ０８・０９（第58図）

この段状遺構は、弥生時代後期の住居跡であるＳＩ０４をカットして築いており、切り合い関係からＫＤ０８→ＫＤ０９の順で造られている。ＫＤ０８の残存規模は長さ3.6ｍ、床面の幅1.5ｍである。斜面の上方を削っているが、このカット面は上側が緩い傾斜のカットとなっており、床面近くで垂直に近い角度に削って高さ0.1ｍの壁を形成している。壁の東側には1.4ｍにわたって壁帯溝と思われる幅の狭い溝が残っており、床面からは不整形なピットが２基みつかった。ピット１は壁から0.4ｍあまり離れた所に掘られている。0.9ｍ×0.6ｍ、深さ0.15ｍあまりで、２つのピットが重なり合っている。ピット２はピット１の北側に存在している0.7ｍ×0.5ｍ、深さ0.2ｍのものである。その他、壁の西側及び南側に後世のピットが存在していた。

ＫＤ０９は０８の北側を削って造っているもので、壁は「コ」の字形に残っていた。長さ4.0ｍ、



第57図　勝負遺跡ＫＤ０７実測図



第58図　勝負遺跡ＫＤ０８・０９及び出土遺物実測図

残存している床面の幅1.1ｍを計る。両脇の壁は短く、隅は丸い。奥壁は高さ0.5ｍであるが、傾斜は比較的緩い。床面の前方にはＳＩ０４の主柱になる２つの柱穴が存在し、北端には径0.2ｍと0.5ｍの円形状のピットがある。出土遺物としてはＫＤ０８から弥生土器及び土師器、ＫＤ０９から須恵器片が見つかっている。これらの遺物から２つの段状遺構は奈良・平安時代のものと考えられる。

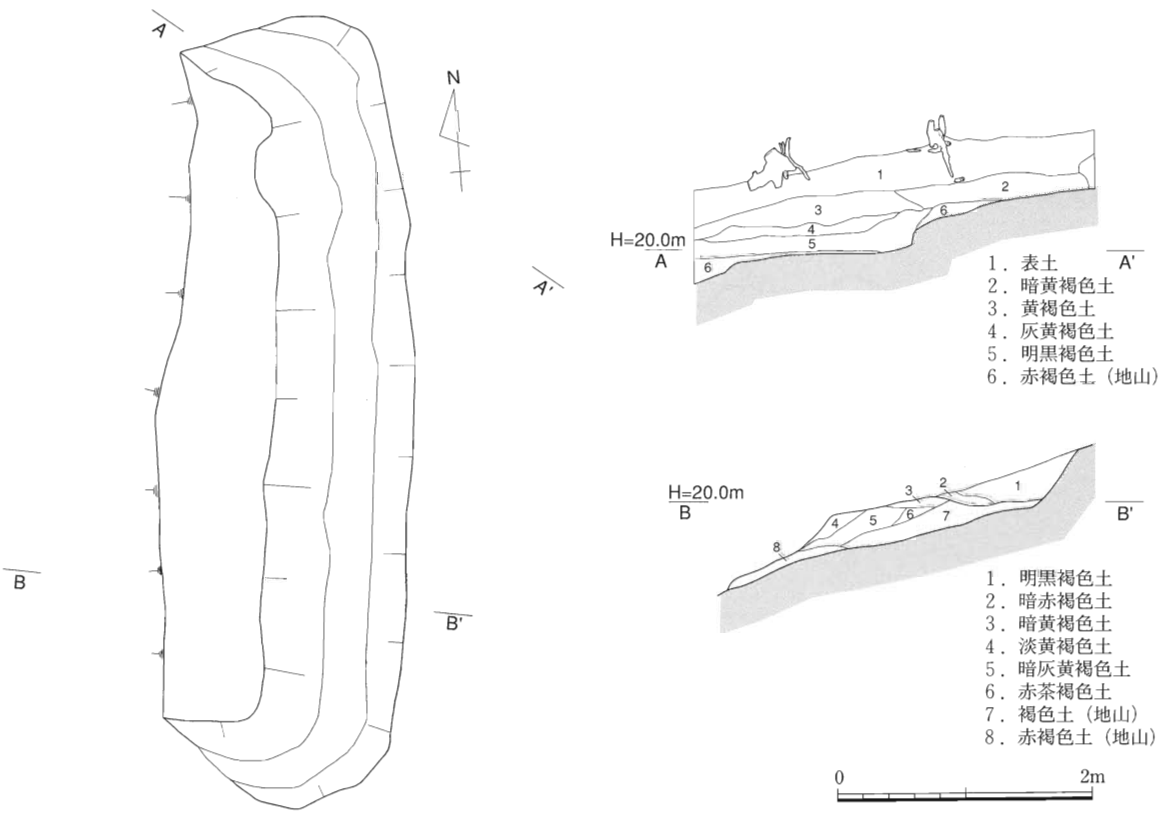
出土遺物（第58図）

ＫＤ０８からは弥生後期の甕口縁部片及び糸切り底の土師器片が出土している。１は推定口径15.5㎝で、口縁部はやや外傾し、７本の櫛状の工具による擬凹線文が廻る。口縁下端は頸部から大きく屈折し下方に突き出て断面三角状を呈する。頸部下方を欠くが、内面にはヘラケズリがある。外面茶褐色、内面黄褐色で、砂を多く含む。焼成は充分である。

２は底径6.0㎝の土師器底部片。底には回転糸切り痕がきれいに残っており、0.9㎝あまりの厚みを持つ。外側に大きく傾いて上方の体部にいたっている。内外とも赤褐色を呈し、胎土は良好。焼き上がりは普通である。３はＫＤ０９から出土した須恵器甕の胴部片で、内側にはやや荒い同心円状のタタキ、外面には格子状のタタキがある。外面灰褐色、内面淡青灰色、断面茶褐色を呈し、胎土良好。焼成は充分である。

ＫＤ１０（第59図）

この段状遺構は第３調査区のＳＩ０２の住居跡をカットして造られたもので、床面の大半が消滅し、奥壁と両脇の壁が若干残っていた。壁は「コ」の字形に残っており、隅丸である。奥壁の高さは0.4ｍあまりを計り、奥壁下端には、幅0.45ｍの浅い溝が壁に沿って掘られている。この遺構は斜面上に造られており、床面は斜面に赤茶褐色土、暗灰黄褐色土、淡黄褐色土暗黄褐色土を盛って造っており、先端は地滑り等で崩れたものと思われる。床面からは柱穴や遺物を検出することは出来なかった。



第59図　勝負遺跡ＫＤ１０実測図

３．溝状遺構

ＳＤ０１・０２は弥生住居に伴う溝であるが、ＳＤ０３～０７は単独に造られた溝状の遺構で、弥生時代と古墳時代それに時期不明のものがある。

ＳＤ０３（第60図）

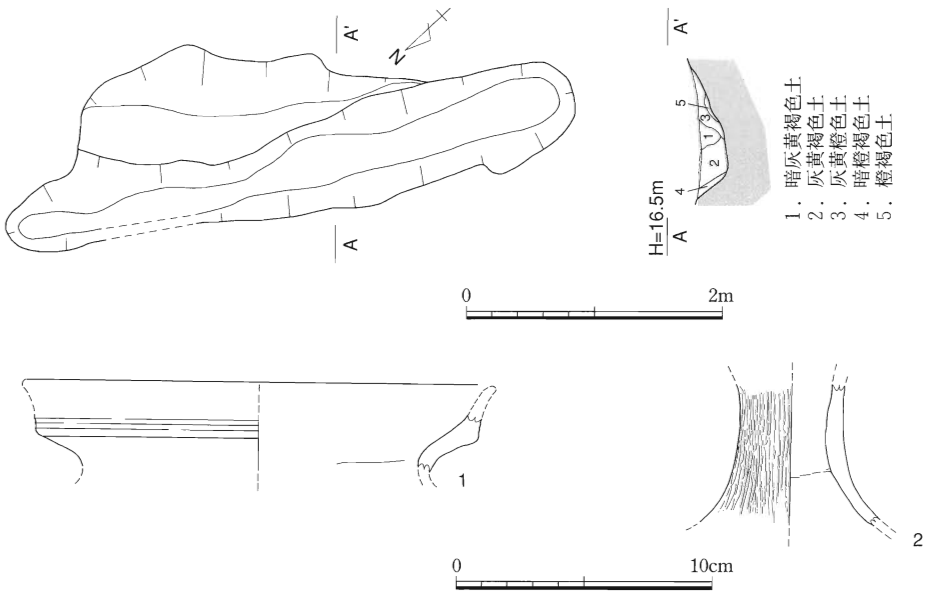
この溝は縄文時代後期の住居跡であるＳＩ０１の北側斜面に存在するものである。斜面の上から下方に向かって掘られており、その長さは4.2ｍあまりを計る。形態はほぼ直線的で、底の幅0.1ｍ～0.4ｍ、深さ0.2ｍである。南西側の上方には幅0.4ｍの平坦面がある。埋土は両脇に暗橙褐色土、灰黄橙色土がまず埋まり、その後に灰黄褐色土、暗灰黄褐色土が堆積していた。この溝は弥生住居のＳＩ０４の北西隅から1.8ｍしか離れていないことや、同時期の土器が出土していることから、この住居に伴う可能性がある。

出土遺物（第60図）

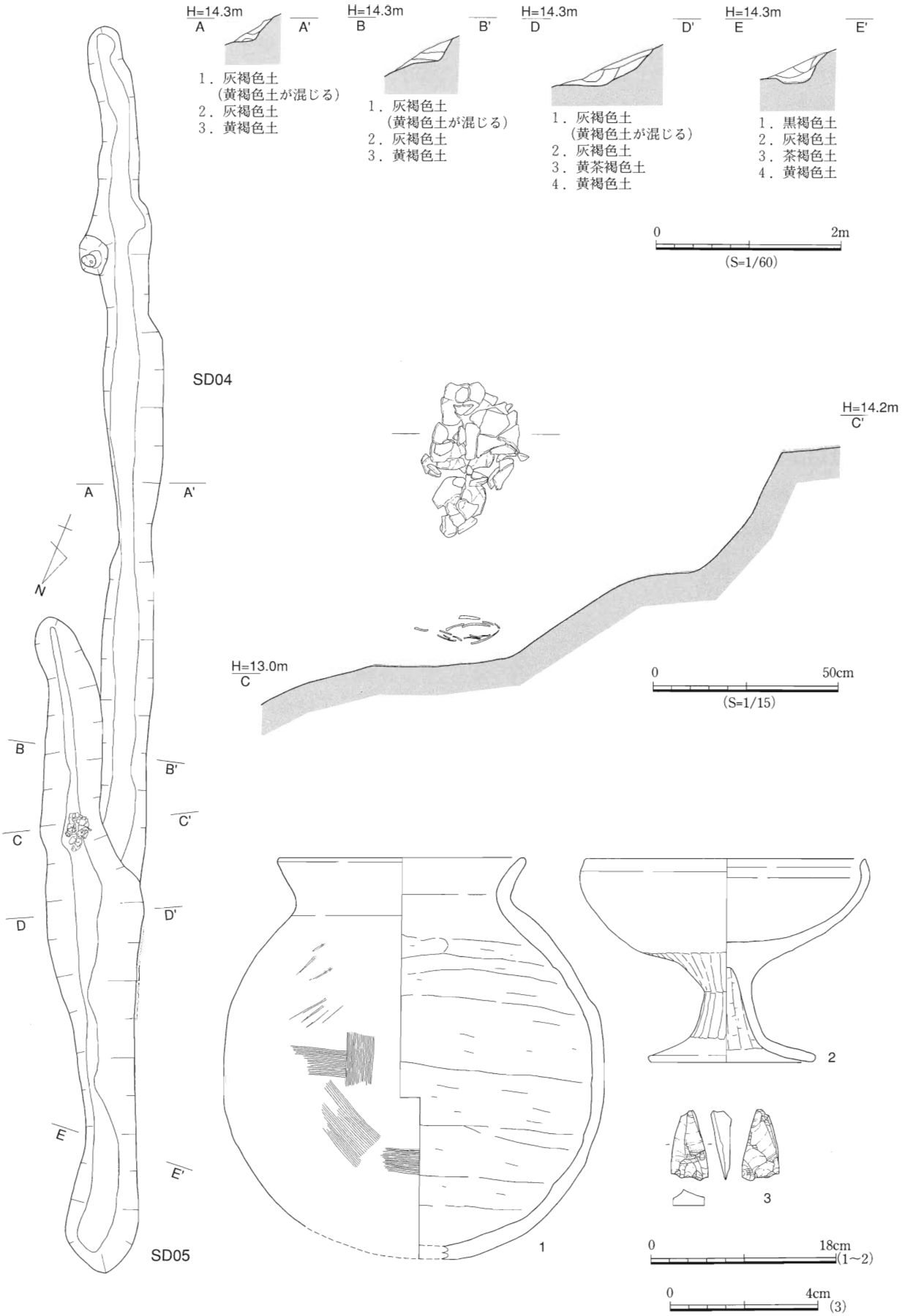
ＳＤ０３から出土した遺物には弥生時代の甕片及び高坏片である。１は頸部から口縁部下方にかけての破片。頸部は外反し「く」の字形に屈折して口縁部にいたっている。屈折部は丸く、1.0㎝あまりの厚みを持つ。口縁部の上方を欠くが、擬凹線文が廻っている。外面の一部には煤が付着しており、内面は風化を受けている。内外面ともに淡茶褐色を呈し、若干の砂を含む。焼き上がりは普通である。２は高坏脚部の破片である。上下端を欠くが、筒部の径は4.2㎝を計る。やや湾曲して下がっており、筒部の中央あたりが最も厚く0.7㎝の厚さを持つ。内面は風化しているため調整は不明であるが、外面は縦方向のミガキが施してある。外面赤褐色、内面淡茶褐色を呈し、小粒の砂を多く含む。焼成は普通。

ＳＤ０４・０５（第61図）

この溝跡は古墳時代中期のＳＩ０５の西側斜面に存在するものである。標高14.0ｍの等高ラインに沿って北西から南東の方向に伸びており、切り合い関係からＳＤ０４→０５の順で造られている。ＳＤ０４は南東に存在する溝で、長さ9.0ｍ、法面の幅0.4ｍ～0.65ｍ、底は平で、幅0.15ｍ～0.3ｍあまりを計る。北西端はＳＤ０５によって切られている。斜面上方をカットし、下方の法面は浅い。南東端から2.4ｍ北西によった溝の谷側法面には0.3ｍ×0.4ｍの不整円形のピットがある。



第60図　勝負遺跡ＳＤ０３及び出土遺物実測図



第61図　勝負遺跡ＳＤ０４・０５及び出土遺物実測図

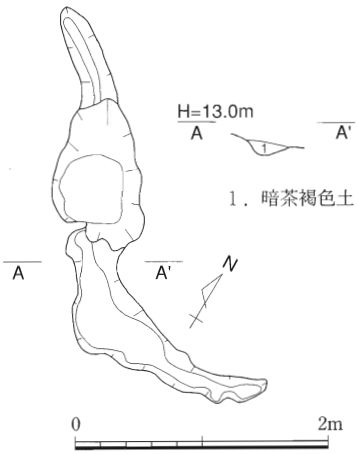
ＳＤ０５は長さ6.9ｍ、法面の幅0.6ｍ～1.0ｍで、南東端から２ｍまではＳＤ０４の下方にあるが、それより北西側はＳＤ０４を切って造られている。南東端から２ｍあたりの埋土上面から土師器の甕及び高坏がそれぞれ１点供献するような形で出土した。出土状況から高坏は伏せた状態で、甕は底部の一部を欠いたものを立てて置いたものと思われる。

出土遺物（第61図）

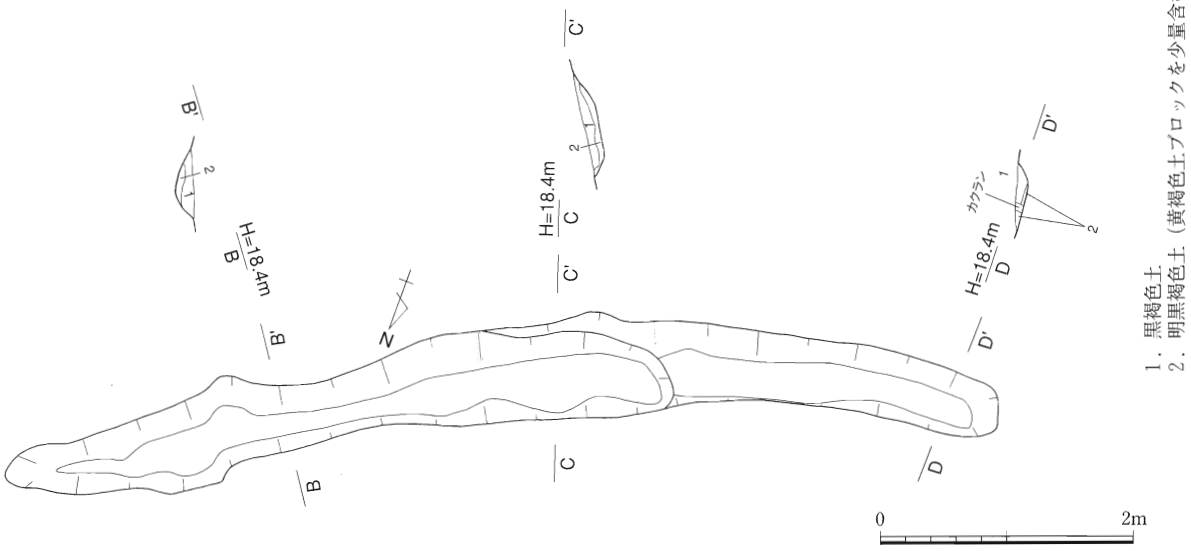
ＳＤ０４からは斜面上方からの流れ込みと思われる楔形石器１点、ＳＤ０５から土師器の甕及び高坏それぞれ１点が出土した。

１は口径13.2cm、器高21.7cm、胴部最大径21.4cmを計る土師器の甕である。口縁部は２cmあまりの高さで、外側に0.7cm傾いて端部にいたっている。端部は丸い。肩部から胴部にかけては円形状を呈しており、胴部最大径は口縁端部から17.0cm下がったところになる。底部は丸底で、外面の口縁部から胴部下方にかけての一部に煤が付着している。外面肩部には荒いハケ目、胴部には細めのハケ目がある。肩以下の内面には横方向のヘラケズリが施されている。頸部から上の内外面には横ナデがある。外面淡茶褐色、内面黄褐色で、胎土は大粒の砂を含むも良好である。焼成は充分。

２は口径14.9cm、器高11.0cm、底径9.0cmを計る土師器の高坏である。坏部は脚基底部から外反し、それから内湾ぎみに上がり、口縁端部手前で大きく内湾して先端にいたっている。先端は尖り、内側には外反する0.5cmあまりの面を持つ。脚部は底部から1.4cmあまり上ったところで大きく「く」の字形に屈折している。端部はやや外傾しているが丸い。器壁は坏底部が1.4cmあまりの厚みを持ち、上方に行くに従って細くなる。脚部は屈折部の下方がやや厚くなっている。屈折部から脚上方に向かって１段階のミガキがあり、そこから坏下方に向かって２段階目のミガキが施されてい



第62図　勝負遺跡ＳＤ０６実測図



第63図　勝負遺跡ＳＤ０７実測図

る。屈折部より下方はナデ、坏部上方は横ナデである。内面は脚屈折部上方がヘラ状工具による横ナデ、下方がナデ。坏部内面は底部がナデ、口縁部が横ナデである。内外面とも淡茶褐色を呈し、胎土及び焼成は良好である。３はＳＤ０４から見つかった楔形石器で、長さ2.0㎝、幅1.0㎝の三角形を呈した小形のものである。上下端には不整形な痕跡があり、上方の縄文住居跡付近から流れ込んだものと考えられる。

ＳＤ０６（第62図）

この溝状遺構は、第４調査区のＳＩ０６の北側から見つかったもので、「L」字形を呈している。コーナー付近が最も幅が広く60㎝あまりを計るが、両端に行くに従って細くなっている。長さは2.6ｍと1.4ｍである。長辺の溝には100㎝×70㎝の後世の土坑が存在していた。埋まっていた土は暗茶褐色土で、断面は逆台形状を呈している。遺物は検出できなかった。

ＳＤ０７（第63図）

この溝状遺構は、第３調査区の谷部から見つかったものである。谷を横切る形で溝を掘っており、その長さは7.8ｍあまりで、谷の上部にやや湾曲している。法面の幅は25㎝～80㎝を計り、底はやや丸い。西端から2.6ｍのところで、いったん底がとぎれ、それより北東側に向かって新たな底が続く。底の幅は0.15ｍ～0.3ｍである。遺物は見つけることが出来なかったので、時期・性格とも不明である。

４．土坑

今回の調査で検出した単独の土坑は縄文時代と思われるものが６基あった。その中の２基は落とし穴と考えられる大形もので、その他は径50㎝あまりのものが多い。

ＳＫ０１（第64図）

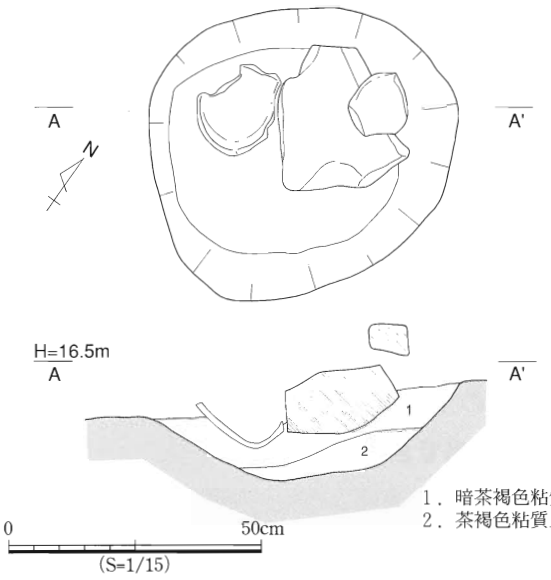
この土坑は縄文住居跡のＳＩ０１の西側尾根上から検出したものである。径60㎝の不整円形を呈し、深さは15㎝あまり、底は丸い。詰まっていた土は底から茶褐色土、暗茶褐色土があり、その上方から縄文土器の鉢、石塊が出土した。土器はほぼ完形で、土坑上面にあったものが押しつぶされたものと思われ、25㎝×28㎝あまりの大きさの石塊は、土器の横から見つかったことから土器とともに何からの意図をもって置かれたものと思われる。

出土遺物（第64図）

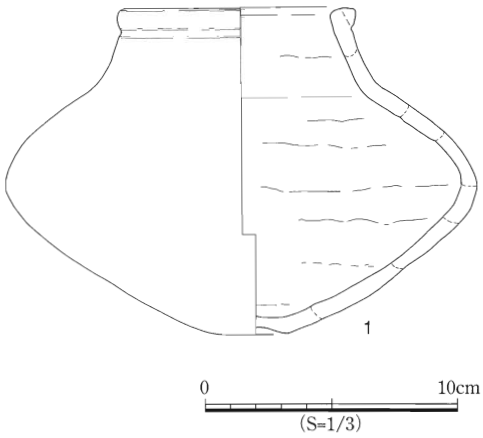
ＳＫ０１から出土した縄文時代の鉢は、口径9.3㎝、器高12.9㎝、底径2.3㎝、胴部最大径18.7㎝を計る。口縁部は頸部から内傾して３㎝あまり上がり、端部手前で外傾して先端にいたっている。端部は断面三角の凸帯を張り付けて形成したものと考えられ、凸帯の下方には沈線が１本廻る。先端はやや外傾した平面を持つ。頸部から胴部にかけては「く」の形に大きく屈折して底部にいたっている。底部は径が小さく、0.3㎝あまりの上げ底になっている。外面は風化を受けているため調整は不明。内面は輪積した粘土紐の痕跡がよく残っており、上方は横ナデ、下方がナデの調整がある。外面黄褐色・茶褐色・黒灰色、内面黄褐色を呈する。胎土は石英や長石等の砂を多く含んでおり、焼き上がりはやや軟質である。

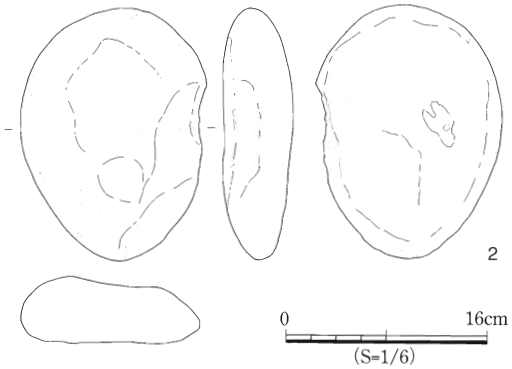
ＳＫ０２（第64図）

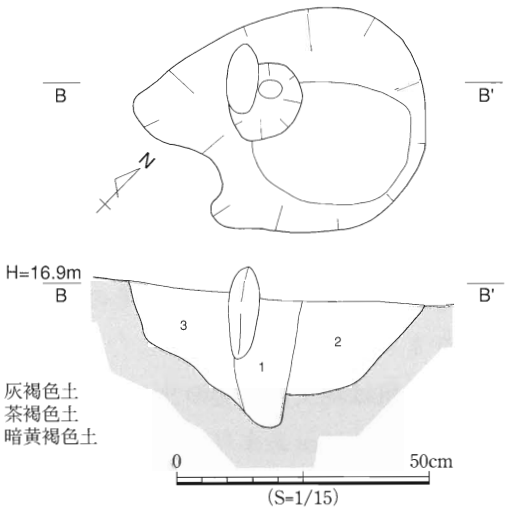
ＳＩ０１北西隅の近くから見つかった45㎝×58㎝の不整形なものである。この土坑はまず、径50㎝、深さ18㎝あまりの底の平らな抗を掘り、暗黄褐色土及び茶褐色土が埋まった後に、径15㎝、深さ29㎝の坑を掘削している。後者の坑から石皿が突き刺さったような状態で出土した。



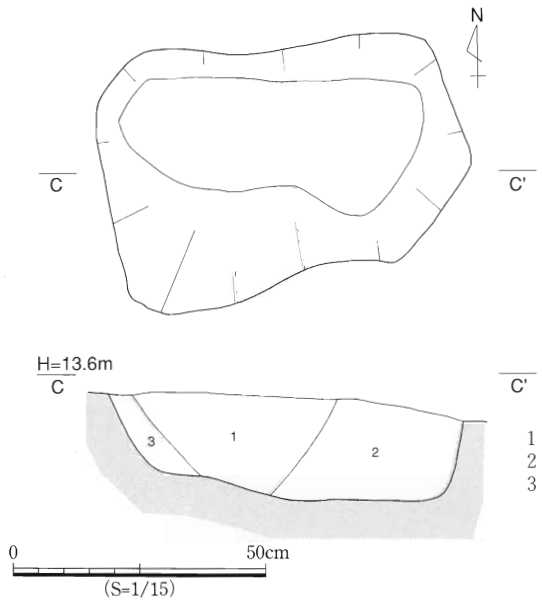
SK01

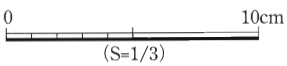






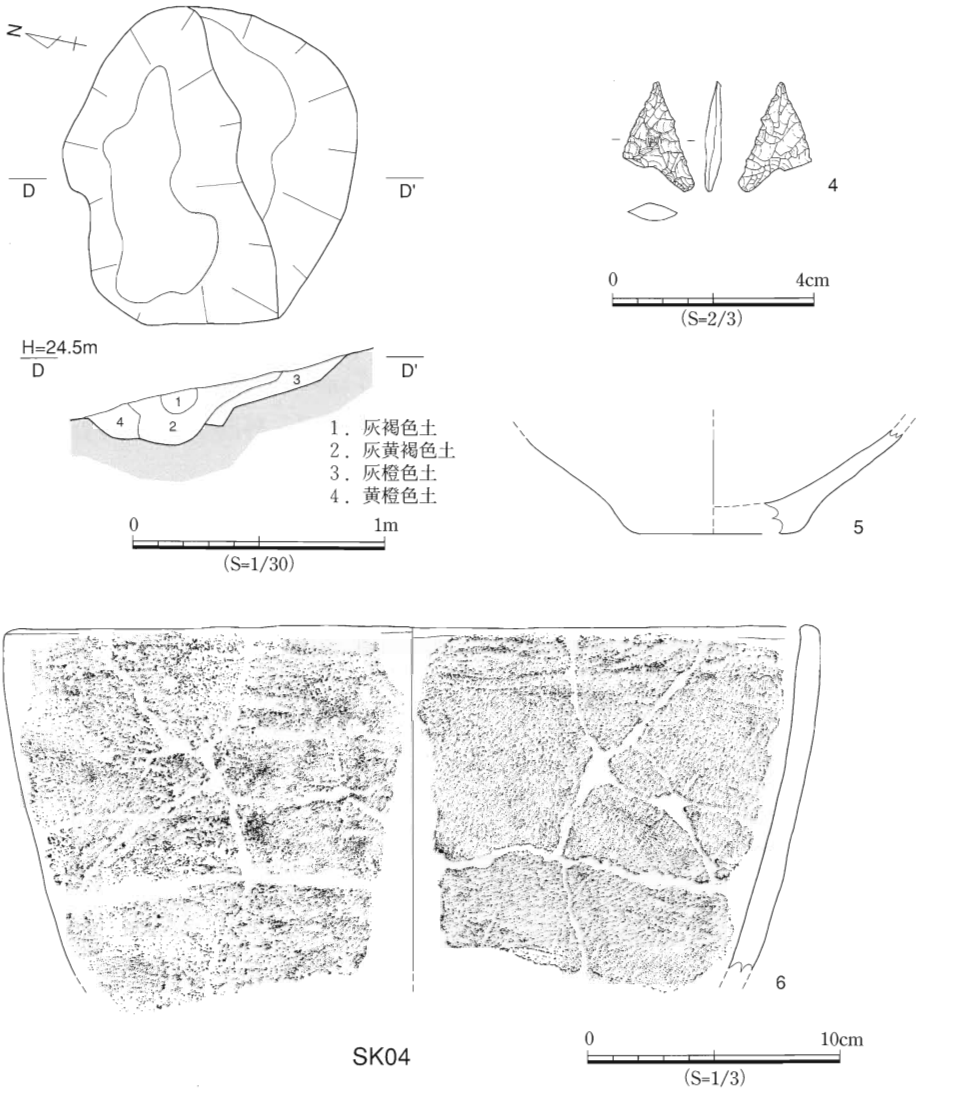
SK02





SK03

第64図　勝負遺跡ＳＫ０１～０３及び出土遺物実測図



第65図　勝負遺跡ＳＤ０４～０６及び出土遺物実測図

出土遺物（第64図）

ＳＫ０２から出土した石皿は20㎝×14㎝の長円形を呈した花崗岩製で、厚みは5.3㎝である。側縁の一部を欠いているが、上面はやや凹んでおり、擦られた痕跡が残っている。

ＳＫ０３（第64図）

この土坑は第４調査区の谷部北側から見つかったもので、52㎝×73㎝の不整形な長方形を呈している。深さは20㎝あまりで、底は平らである。坑には暗灰黄褐色、淡灰黄褐色、黒褐色土が詰まっていた。暗灰黄褐色から縄文時代の粗製土器片が１点見つかった。

出土遺物（第64図）

ＳＫ０３から出土した縄文時代の粗製土器片は６㎝×７㎝の小破片で、内面の一部に板状の工具によるナデの痕跡が残っている。大半は風化のため調整は不明。外面茶褐色、内面暗褐色を呈し、砂を多く含む。焼成はやや不足である。

ＳＫ０４（第65図）

この土坑は第１調査区の尾根上に掘られていたもので、ＳＩ０３の上方12ｍあまり位置にあたる。1.15ｍ×1.25ｍの不整円形を呈し、斜面上方に坑を掘り、それが埋まった後、下方に幅0.7ｍの縦長の坑を掘削している。上方の坑は深さ0.1ｍあまりと浅く、灰橙色土が詰まっていた。下方の坑は深さ0.2ｍあまりで、底は丸い。底から灰黄褐色土、黄橙色、灰褐色土が埋まっており、この土坑内から石鏃１点、縄文土器片２点が見つかった。

出土遺物（第65図）

１は黒曜石製の石鏃で、長さ2.2㎝、幅1.4㎝を計る無茎鏃である。脚の片方を欠くが、やや細長の二等辺三角形を呈し、えぐりは「Ｖ」字形に0.5㎝凹む。先端はするどく尖り、剥離調整は丁寧に施されている。厚みは0.3㎝あまりである。２は縄文土器の底部片で、推定底径6.0㎝。底部から外側に大きく開いて上方に上がっている。器面調整は風化のため不明。外面茶褐色、内面黒灰色で、砂を多く含む。焼き上がりはやや不足である。３は深鉢の口縁部から胴部にかけての破片。推定口径32.0㎝あまりを計る。口縁は単純口縁で、端部の内側が若干内湾して先端にいたっている。先端は「へ」の字形を呈し、器面調整は板状の工具でナデを行っている。外面茶褐色、内面黒灰色・茶褐色で、小粒の砂を多く含む。焼成は普通である。

ＳＫ０５（第65図）

この土坑は南外２号墳から15ｍあまり下がった尾根上に掘られた落とし穴と思われるものである。1.7ｍ×1.8ｍの円形を呈し、深さは1.3ｍを計る。この土坑は端から0.1ｍ～0.4ｍ内側まで緩やかな傾斜で0.1ｍあまり削り、その端から下に向かって若干の角度をつけて1.2ｍ堀下げている。底は1.0ｍ×0.5ｍの長円形を呈し、平らであるが、中央部に径0.2ｍ、深さ0.35ｍの小さな穴が穿たれている。埋まっていた土は、下から暗灰黄褐色土、灰黄褐色土、暗黄褐色土、暗橙褐色土、淡黄褐色土である。遺物は出土しなかった。

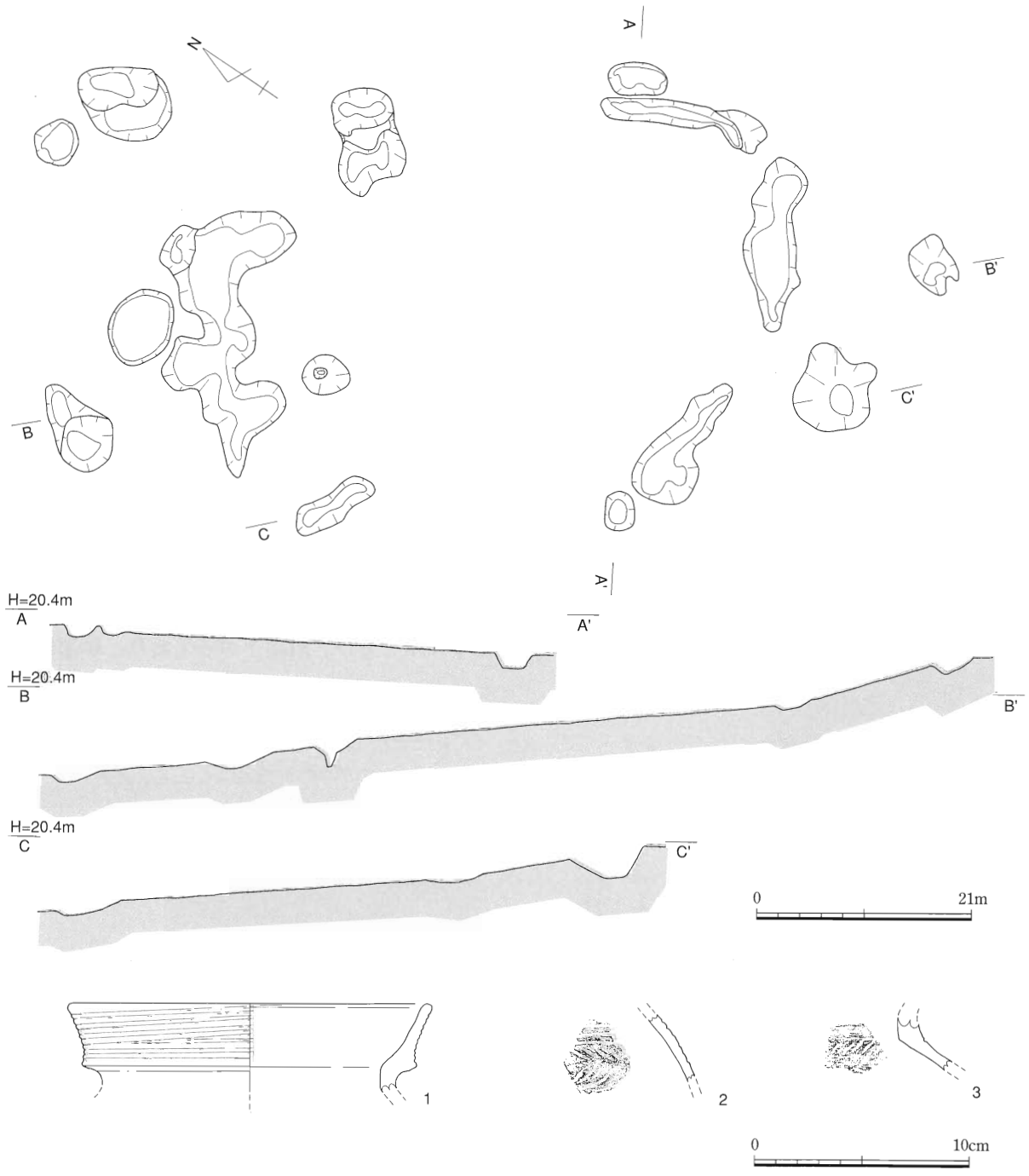
ＳＫ０６（第65図）

この土坑は南外２号墳の墳裾から３ｍあまり下がった緩やかな斜面に掘られた落とし穴である。坑の構造はＳＫ０５とほとんど同じで、1.5ｍ×1.65ｍの長円形を呈し、深さ1.6ｍを計る。底は平らで、0.8ｍ×0.6ｍの不整形な形をしている。底の中央部の小さな穴は径0.18ｍ、深さ0.5ｍである。底から灰褐色土、灰黄褐色土、黄褐色土、暗黄褐色土が詰まっていた。遺物は出土しなかった。

5．その他の遺構

土坑・ピット群（第66図）

ＳＩ０３の西側の尾根から不整形な土坑やピットが多数見つかった。その中には鍵形の溝状のものが含まれ、弥生後期の遺物が検出されていることから竪穴住居跡が存在していた可能性もある。ここから出土した土器は甕の縁部片（1）、肩部片（2）、頸部（3）である。1は推定口径16.5㎝の擬凹線文が廻るもので、口縁部はやや外反している。外面灰褐色、内面黄褐色で、大粒の砂を含む。焼成は充分。2は1と同一個体になる可能性がある肩部片で、沈線、クシによる刺突文がある。3もクシによる刺突文があるが1．2とは別個体のものである。



第66図　勝負遺跡土坑・ピット群及び出土遺物実測図

土器溜まり１（第67図・68図）

この土器溜まりは、第４調査区ＳＤ０６の北西隅から見つかったもので、図化できたのは古墳時代の土師器３点であった。１は口径14.8㎝、器高17.7㎝、胴部最大径17.8㎝を計る甕である。口縁部は「く」の字形を呈し、やや外反してやや開いている。高さは2.3㎝あまりで、端部は丸い。肩は比較的張っており、胴部最大径は口縁端部から７㎝下がったところになる。底部は丸く、器壁は底部及び頸部が厚い。頸部以下の外面はナデ調整であるが、一部にハケ目が残る。内面は上方が横方向のヘラケズリ、下方はケズリ→ハケ目→ナデの順で調整が行われている。外面黒色・淡茶褐色、内面淡茶褐色を呈し、大粒の砂を含む。焼成は普通である。

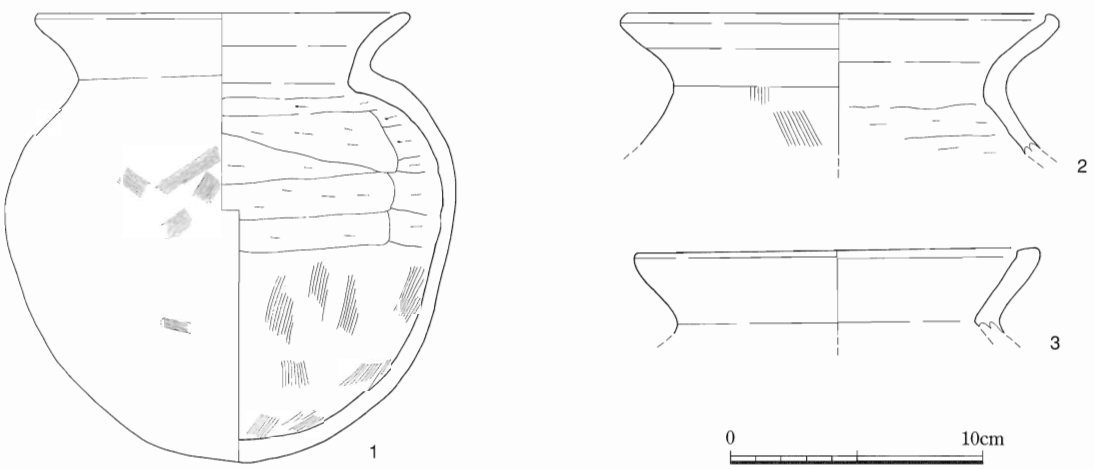
２は推定口径6.5㎝を計り、頸部から口縁部にかけて大きく外側に湾曲して端部にいたっているものである。口縁端部内側には段をもち、先端は内傾したやや丸みのある面を有する。外面の一部には煤が付着している。調整は内面ヘラケズリ、外面ハケ目→ナデである。外面黒褐色・淡褐色、内面淡褐色を呈し、胎土は良好、焼成は充分である。３はやや厚手の甕口縁部片で、推定口径16.0㎝。口縁部は外傾して上がり、上方で若干内湾する。先端は平らな面を持ち、内側には段を有する。外面の一部に煤が付着し、器面調整は横ナデである。外面茶褐色・黒色、内面茶褐色で、胎土は良好、焼成は普通である。

土器溜まり２（第68図～70図）

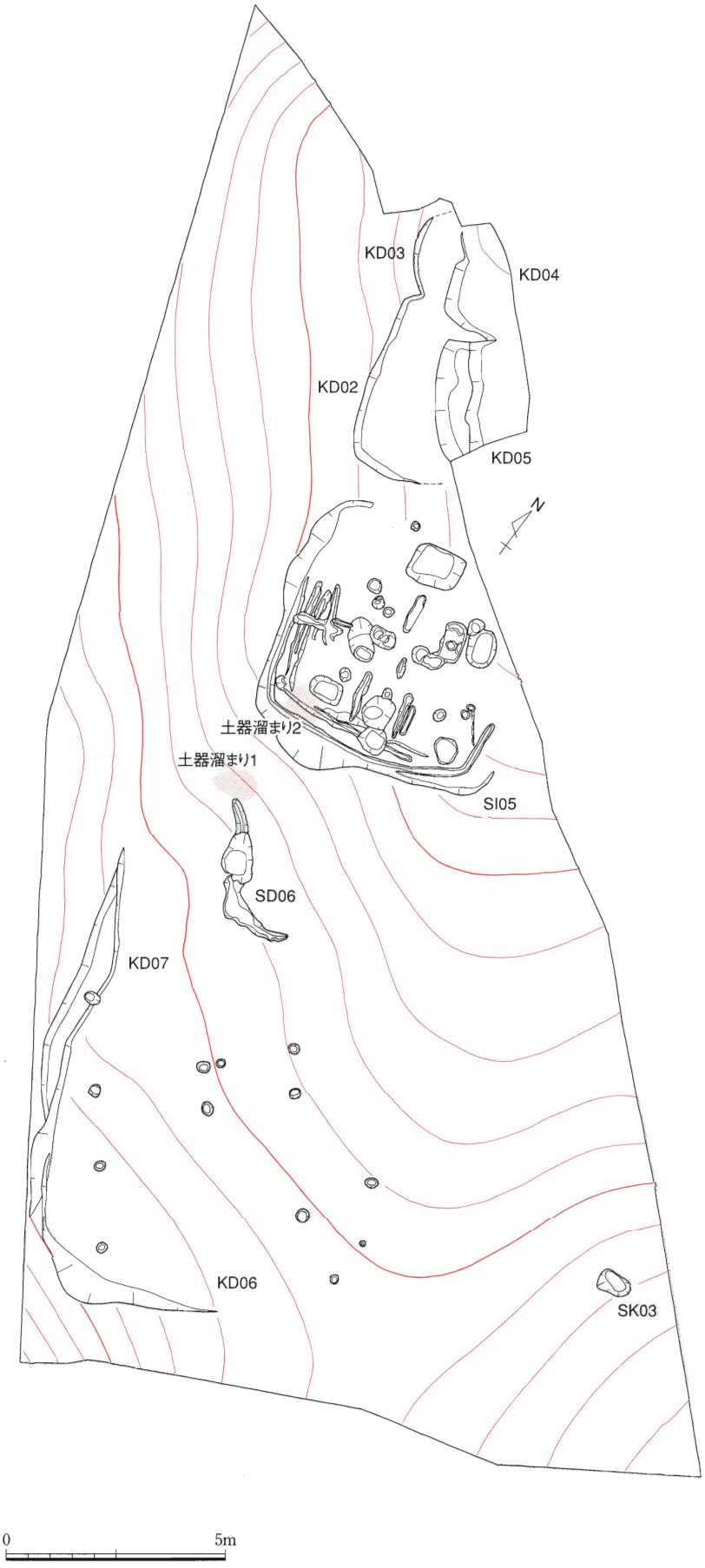
この土器溜まりは、第４調査区ＳＩ０５の南西隅上面から検出したもので、土師器の甕、高坏、砥石等が出土した。

１～９は土師器の甕である。１は口径12.5㎝、推定器高21.0㎝、胴部最大径21.4㎝、頸部径10.5㎝を計る。口縁部は外傾して上がり、上方で若干外反して端部にいたっている。端部は丸く、器壁は先端に行くにしたがって薄くなる。肩部は外側に張り出し、胴部は丸みを持っている。底部を欠くが丸底になるものと思われる。内面にはヘラケズリが施されているが、下方は縦方向、上方は横方向である。外面の一部には煤が付着し、ハケ目→ナデの調整がある。外面淡茶褐色・黒色・茶褐色、内面淡茶褐色、茶褐色で、胎土は良好、焼成は充分である。

２は縦長の胴部を持つ甕で、口径16.0㎝、胴部最大径25.5㎝、頸部径13.0㎝を計る。口縁部は若干外反しており、高さは2.7㎝あまり、先端は内傾した面をもつ。肩は下がっており、胴部最大



第67図　勝負遺跡４区土器溜まり１出土遺物実測図



第68図　勝負遺跡４区遺構全体図

径は口縁端部から14cm下がったところになる。胴部は卵形を呈し、内面には縦方向（下方）横方向（上方）のヘラケズリ、外面はハケ目の調整がある。頸部内側には指圧痕が残る。外面茶褐色・黒色・黄褐色、内面淡茶褐色で、小粒の砂を多く含む。焼成は普通。

3は甕の頸部から胴部にかけての破片で、胴部最大径24.2cmを計るやや縦長のものである。内面には横方向のヘラケズリ、外面にはハケ目→ナデが施されている。淡褐色・黒色（外面）灰褐色（内面）を呈し、胎土良好、焼成普通である。4は「く」の字形を呈している肩部から口縁部にかけての破片で、推定口径13.7cm。口縁端部は丸く、頸部以下の内面にはヘラケズリがある。外面は淡茶褐色、内面は淡褐色をなし、胎土良好、焼成普通である。

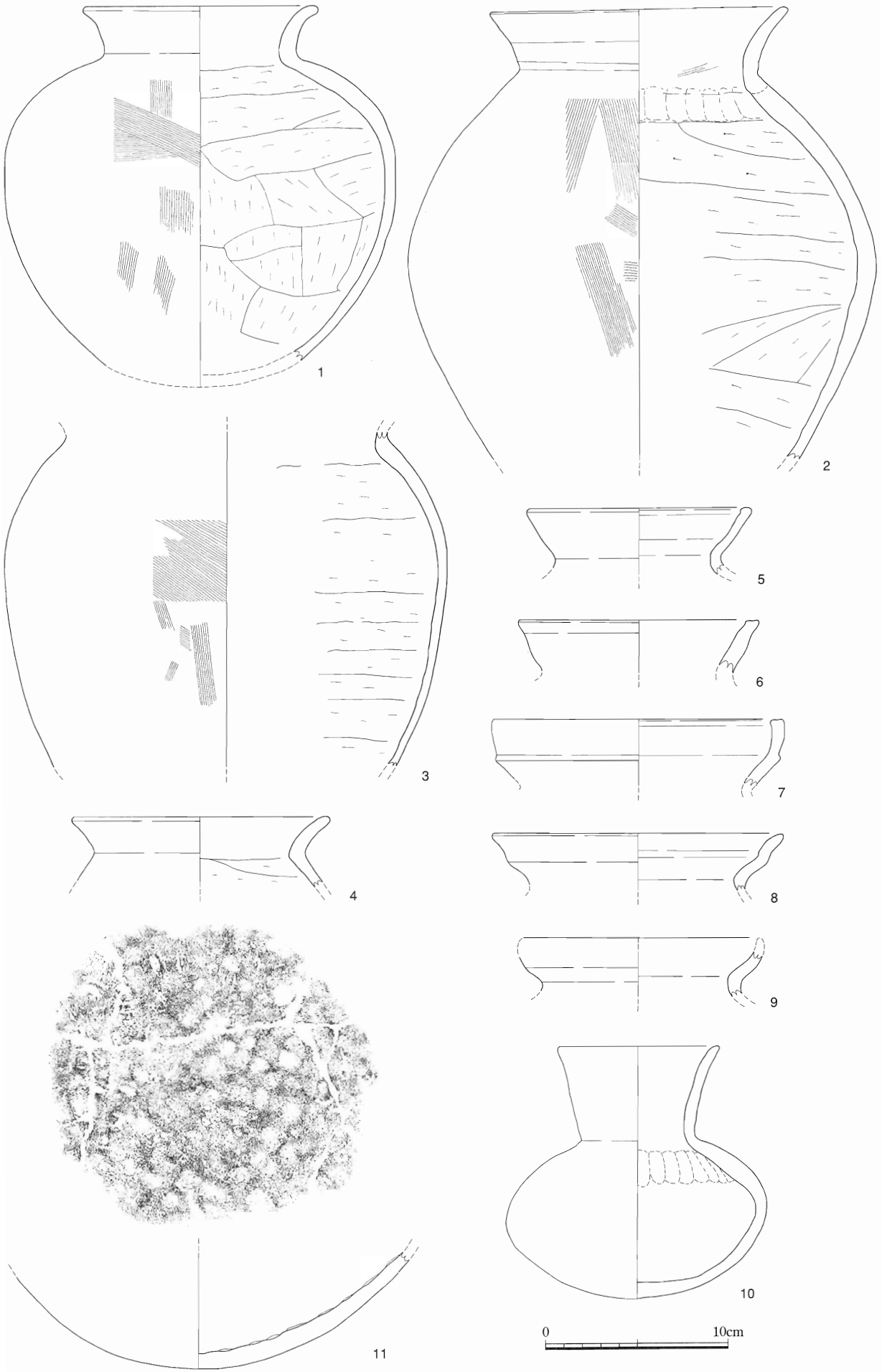
5は推定口径12.0cmを計る口縁端部内側に段を持つ甕口縁部片である。口縁部は外側に傾き、端部はやや丸みを持つ面を有する。調整は内外とも横ナデで、胎土は良好、焼成は充分である。外面赤褐色・黄褐色、内面黄褐色を呈する。6も甕口縁部片で、下方を欠く。推定口径13.0cm。外傾して開いており、端部上面はやや凹んだ0.7cmあまりの面を有し、内側は若干凹んでいる。内外面とも淡褐色を呈し、小粒の砂を含む。焼成は普通である。

7は外傾した頸部から短く内傾して口縁部にいたっている甕片である。口縁部はやや内湾気味に上がり、端部上面はやや凹んだ0.7cmあまりの面を持つ。推定口径15.8cm、外面黄褐色・赤褐色、内面黄褐色で、砂を多く含む。焼成は充分である。8は推定口径16.0cmの甕口縁部片。外側に大きく開き、軽い「S」字形を呈する複合口縁の退化したものである。先端はやや尖っており、風化を受けているため器面調整は不明。外面明茶褐色、内面黄褐色を呈し、小粒の砂を含む。焼き上がりはやや軟質である。9は口縁部上方を欠くもので、内湾した口縁部である。外面の一部に煤が付着しており、器面の調整は横ナデである。外面黄褐色・黒色、内面白褐色を呈する。胎土良好、焼成普通である。

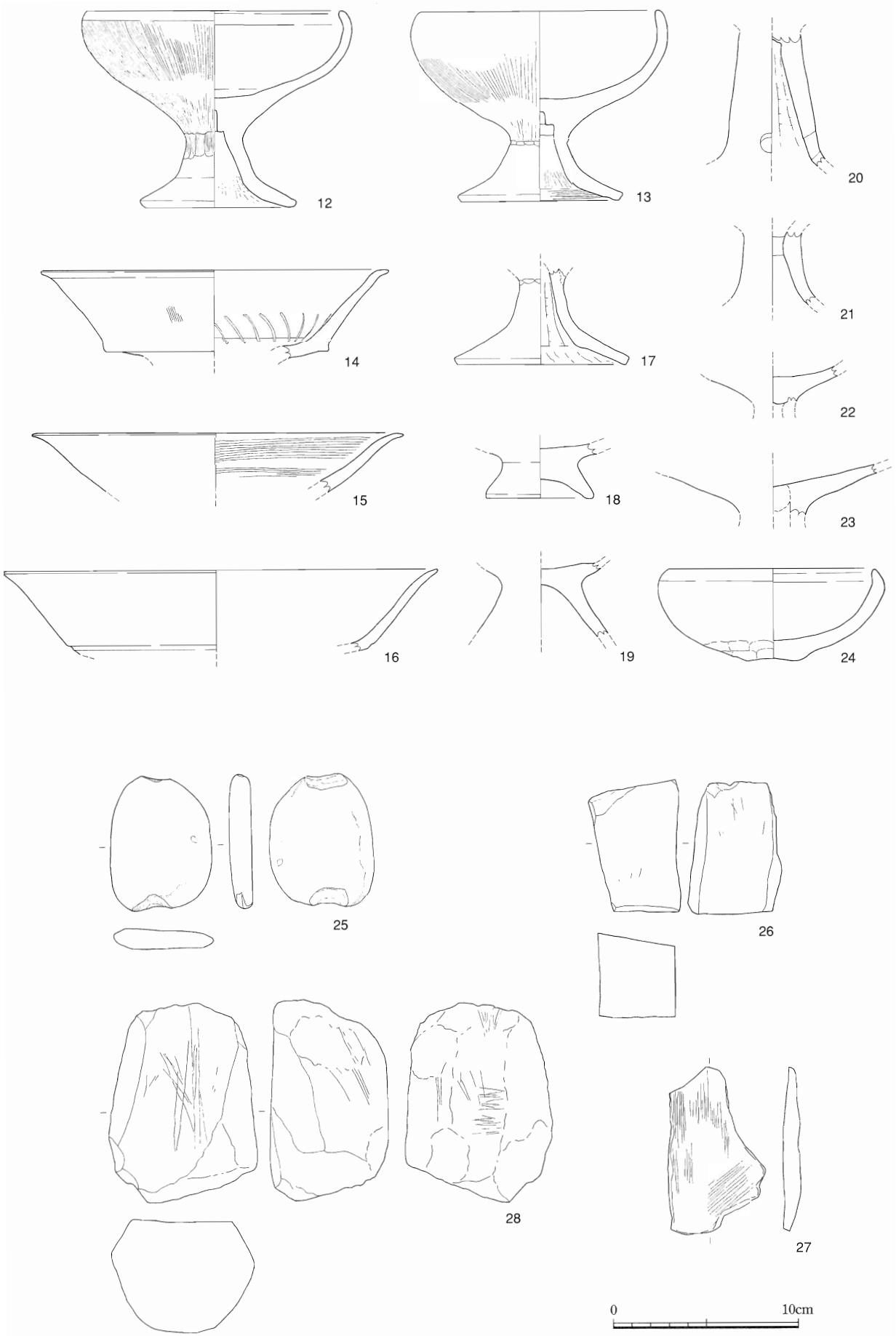
10は口径8.8cm、器高14.0cm、胴部最大径14.2cm、頸部径6.2cmを計る直口壺である。胴部は玉葱状に張り出し、底部は丸底である。口縁部は若干外傾し、その高さ5cmあまり。先端はやや尖っている。器壁は肩部と底部が厚く、肩部内面には指圧痕が残る。外面の胴屈曲部より下方はナデ、上方は横ナデがある。内面は指圧痕跡より上は横ナデ、下方は風化のため不明である。外面赤褐色、内面赤褐色・淡褐色を呈し、器面には光沢がある。胎土良好、焼成は普通である。

11は丸底の底部片で、指圧痕が内面にびっしり残っており、一部には爪痕もある。指圧痕の大きさは径0.7cm～1.0cmで、円形を呈している。大形の甕底部になるものと考えられ、型によって底部を作るときに指圧痕跡がついたものと推測される。器壁は0.9cmあまり、上方がやや薄くなる。外面に煤が付着し、胎土は砂を多く含む。淡茶褐色・黒色（外面）淡茶褐色（内面）で、焼成は充分である。

12～23は土師器の高坏である。12は口径13.5cm、器高10.6cm、底径7.8cm、脚基部径3.0cmを計る。坏部は脚基部からやや外反ぎみに2.8cmあまり上がり、そこから大きく内湾して口縁端部にいたっている。先端はやや内側に向き、尖りぎみである。脚は比較的短く、緩く「く」の字形に屈折して端部にいたる。先端はやや外傾し丸い。脚内面の上方には径0.3cm、深さ1.1cmの細い軸痕が存在する。脚基部の外面にはヘラ状工具によって縦方向に1.2cmあまり面取りした痕跡がある。その部分より上方は縦方向のやや目の粗いハケ目が施され、脚下方はナデがある。坏部内面は上方横ナデ、下方ナデ、脚部内面は上方にヘラ状工具による横ナデがあり、下方にはしぼり痕が残る。色調は内外とも赤褐色で、胎土良好、焼成充分である。



第69図　勝負遺跡４区土器溜まり２出土遺物実測図１



第70図　勝負遺跡４区土器溜まり２出土遺物実測図２

13は12と同じ形態をした高坏で、口径12.8㎝、器高10.3㎝、底径8.4㎝、脚基部径3.0㎝を計る。坏部は内湾して端部にいたっており、やや丸みを持っている。脚部は緩く外反し、端部には外傾した平らな面を持つ。脚基部にはヘラ状工具を押し当てたような痕跡が廻り、そこから上方に粗いハケ目があり、一部にナデが施されている。脚部内面上方には径0.4㎝、深さ0.7㎝の軸痕が残っている。脚上方は横ナデがあり、その下にはしぼり痕、横方向のハケ目が存在する。坏部内面はナデ、横ナデの調整で、内外とも茶褐色・淡褐色を呈し、胎土は良好、焼成は充分である。

14は坏底部から口縁部にかけての破片。口径18.7㎝で、坏底部と口縁部の堺には断面三角の凸帯状のものが廻る。口縁部は外傾して開き、端部手前で短く外反して先端にいたっている。先端は外側に尖り、上方にはやや丸みを持った面を有する。器壁は上方に行くにしたがって薄くなる。内面には「ノ」の字の暗文が廻り、外面には赤色顔料が塗ってある。調整は内外とも横ナデ、色調は外面赤褐色・淡褐色、内面淡褐色を呈する。砂を多く含み、焼成は充分である。

15は口縁部片で、推定口径20.0㎝。外側に大きく開き、先端は外側に尖っている。内面にはハケ目、外面は横ナデが施され、外面赤褐色・黒灰色、内面赤褐色を呈する。胎土良好、焼成充分である。16は推定口径23.5㎝計る大形のもので、口縁部は若干外反して開いている。先端は尖り、底部との堺には沈線が廻る。器面調整は横ナデ、外面茶灰色・茶褐色、内面赤褐色・茶褐色をなす。胎土は良好、焼成は普通である。

17は推定底径9.0㎝、脚基部径2.3㎝あまりの脚部片。脚は下方で大きく開き、端部外傾した面を持つ。基部にはヘラを押しあてたような痕跡が廻り、内面にはヘラによる横ナデ、絞り痕がある。外面にはミガキが施されている。内外とも赤褐色で、胎土良好、焼成充分である。18は高さの低い脚部片で、底径5.6㎝を計る。脚部は「ハ」の字形に開き、端部は丸い。外面淡茶褐色、内面黒灰色・淡茶褐色・黄褐色をなす。胎土良好、焼成は普通である。

19は坏底部から脚上方部の破片。脚は大きく外側に開き、器面調整は横ナデ、ナデである。基部の径4.3㎝あまりで、外面淡褐色、内面黒色・淡黄褐色を呈する。胎土良好、焼成は普通である。20は脚筒部の破片。基部の径3.4㎝で、下方には径1.0㎝の円形の透かしが３ヶ所に穿たれている。内面にはヘラによる横ナデがあり、内外面とも赤褐色・黄褐色を呈し、胎土良好、焼成はやや軟質である。21は脚部上方片で、外側にやや開きながら下がっている。調整は風化のため不明。外面淡褐色・黄褐色、内面淡褐色を呈し、若干の砂を含む。焼成は普通である。22は坏下方片で、脚上方には粘土を詰めた痕跡があり、坏は外側に開いている。調整はナデで、内外とも黄褐色、大粒の砂を含み、焼成は普通。23も坏下方片で、外側に大きく開いているものである。調整は風化のため不明。外面淡褐色、内面黄褐色で、砂を多く含む。焼成はやや軟質である。

24は口径11.1㎝、器高5.1㎝、底径2.8㎝を計る坏である。体部はやや内湾しており、端部近くで内傾して先端にいたる。先端は尖りぎみである。調整は横ナデ、ナデで、底部は上げ底である。底部付近の外面には指圧痕が残っている。内外とも赤褐色、胎土は良好、焼成はやや軟質である。

25は7.3㎝×5.5㎝、厚さ1.2㎝の長円形を呈した凝灰岩の河原石を利用した石錘で、上下端に加工痕が見られる。26～28は凝灰岩の砥石で、26は7.2㎝×5.0㎝、厚み4.5㎝の長方体、27は9.0㎝×5㎝、厚さ1.0㎝の扁平な石で、上面には無数の擦痕が見られる。28は11.0㎝×7.9㎝、厚さ6.0㎝の石で、上下面には無数の刃物痕がある。

6．包含層出土遺物

第１～３調査区出土遺物（第71図・72図）

南外２号墳から北西に伸びている尾根上にあたる第１調査区からは縄文土器、弥生土器が出土した。１は推定口径26.0cmを計る弥生時代後期の甕口縁部片。口縁部は外側に大きく傾き擬凹線文が廻り、先端は丸い。頸部は短く外反し、内面にはヘラケズリがある。その他の調整は横ナデである。外面淡褐色、内面赤褐色を呈する。砂を多く含み、焼成は充分である。２は同じく弥生時代後期の甕口縁部片。口縁部の傾きは１より少なく、擬凹線文が廻り、先端は丸い。頸部は緩く外反し、内面にはヘラケズリがある。頸部外面は横ナデ、口縁部内面は風化のため調整不明。外面淡黄茶褐色、内面淡褐色で、砂を多く含む。焼成は普通である。３は推定底径10.0cmあまりの縄文土器深鉢底部片である。上げ底で、端は丸い。内外面とも淡褐色で、砂を多く含む。焼成は普通である。

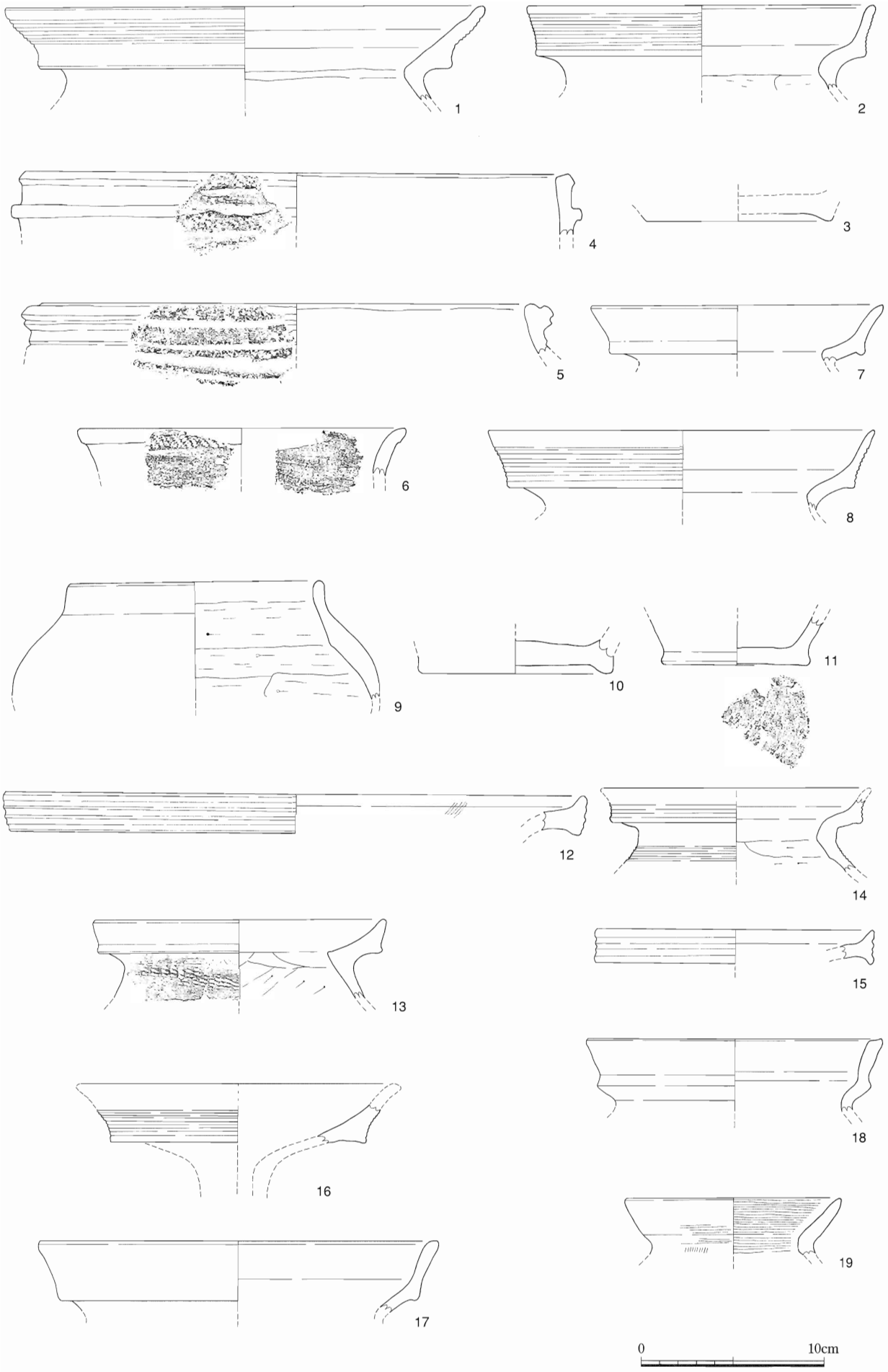
４～９は第１調査区の北西側にあたる第２調査区から出土した土器である。４～６は縄文土器の深鉢になるもので、４は推定口径29.5cmの口縁部片。やや内湾しており、端部から２cmあまり下がったところには幅0.7cm、高さ0.6cmのしっかりした凸帯が廻る。先端は２つの平坦面を持ち、外側の内傾した面及び凸帯先端の面には細い縄文が施されている。器面調整は横ナデ、ナデで、外面暗茶褐色、内面淡暗茶褐色を呈する。細かい砂を含み、焼成は普通である。５も口縁部片で、やや内傾したものである。丸い先端から1.5cmあまり下までは、断面三角状に厚くなっており、その上に幅0.8cm、高さ0.4cmの凸帯が廻る。推定口径26.5cmで、内面の調整は風化のため不明、外面は横ナデである。外面濃茶褐色、内面淡茶褐色を呈し、細かい砂を多く含む。焼成は普通である。６はやや外反している口縁部片で、推定口径17.5cmである。端部が若干厚くなっており、その部分に縄文が施されている。先端はやや尖りぎみで、内面下方にはヘラ状の工具よる横ナデがある。その他は横ナデである。内外面ともに茶褐色を呈し、細かい砂を含む。焼成は充分。

７・８は弥生時代後期の甕口縁部片である。７は推定口径16.0cmを計る無文の口縁部片。１cmあまり外側に外反しており、先端はやや尖りぎみである。外面の一部に煤が付着しているが、器面調整は風化のため不明。内外とも黄褐色を呈し、砂を多く含む。焼成は普通。８は外傾している口縁部片で、擬凹線文が廻る。推定口径21.0cm、先端は細くてやや尖っている。器面調整は風化のため不明。内外とも黄褐色で、砂を多く含む。焼成は普通である。

９は土師器の短頸壺で、推定口径13.5cmを計る。頸部から1.2cmあまり直立して上がり端部にいたっている。先端は丸く、口縁部の器壁は薄い。肩部あたりが最も厚く、その上下が薄くなっている。内面にはヘラケズリが施され、外面はナデである。外面淡茶褐色・赤茶褐色、内面黄褐色で、若干の砂を含む。焼き上がりは充分である。

10～19は第１調査区の東側の谷部にあたる第３調査区から見つかった土器である。10・11は縄文土器底部片。10は推定底径10.0cmの上げ底で、端は丸い。調整はナデ、外面黄褐色・茶褐色、内面茶褐色をなす。大粒の砂を含み、焼成は充分である。11は底径8.0cmの平底で、端はやや尖り気味、短く外反して上方にいたっている。底の内外面にはケズリ状の調整が施されている。その他は横ナデである。外面黄褐色、内面灰褐色を呈し、砂を多く含む。焼成は充分。

12～16は弥生土器壺・甕の破片である。12は推定口径31.5cmを計る大形の口縁部片。やや外傾し、４本の凹線が廻る。幅は2.2cmあまりで、上方はつまみ出して形整しているため、器壁は薄く端部は丸い。頸部にはカキ目状の横線が数条ある。調整は横ナデで、内面の一部にハケ目が残る。



第71図　勝負遺跡１区～３区包含層出土遺物実測図１

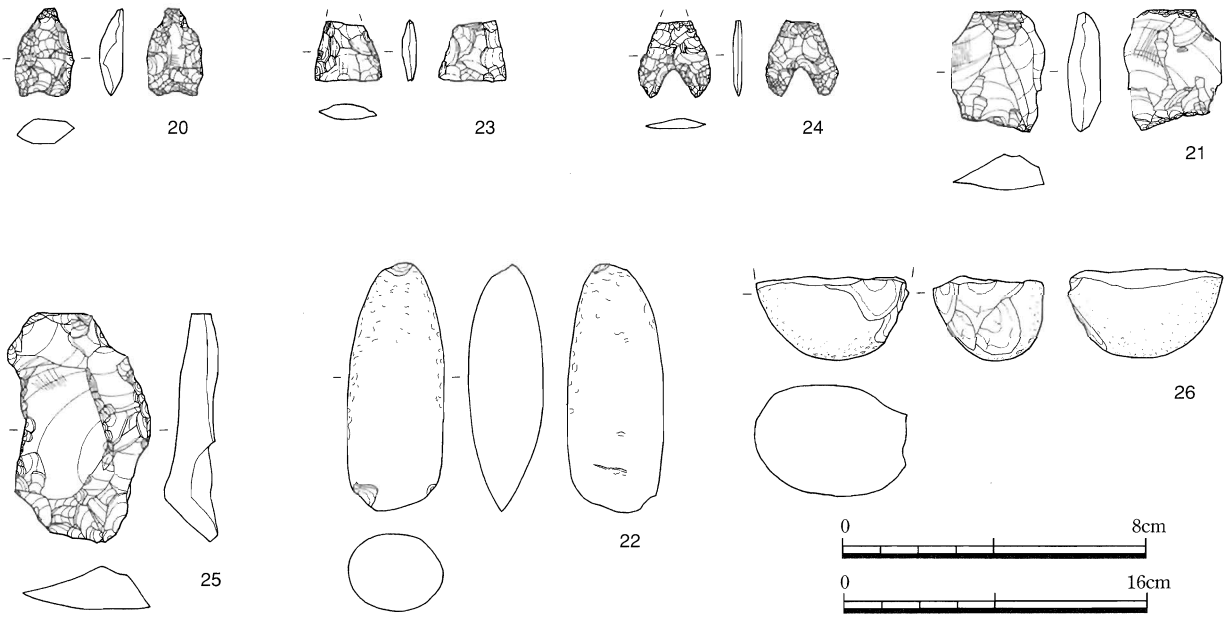
内外とも淡黄茶褐色を呈し、砂を多く含む。焼成は充分である。13はやや外傾した無文の口縁部片。内面は「く」の字形に大きくはり出し、推定口径15.5㎝、口縁部の高さ1.8㎝を計る。頸部から肩部にかけてクシによる刺突文が廻る。内面にはヘラケズリ、ナデ、外面に横ナデがある。外面の一部に煤が付着。外面淡黄褐色、内面淡茶褐色で、砂を含み、焼成は充分。

14は肩部から口縁部にかけての破片で、先端を欠く。口縁部はやや外反し、擬凹線文が廻る。頸部は「く」の字形に屈折し、肩部には擬凹線文を有する。内面にはヘラケズリ、横ナデ、外面横ナデである。色調は淡褐色、砂を多く含み、焼成は普通。15は推定口径15.0㎝を計る口縁部片。ほぼ垂直で、３本の凹線が廻る。上下をつまみ出して形成しており、先端はやや尖り気味である。調整は横ナデ、色調は淡白褐色で、砂を多く含む。焼成は充分である。16は鼓形器台の口縁部下方の破片で、擬凹線文が廻る。調整はナデ、横ナデ、色調は黄茶褐色を呈し、砂を多く含む。焼成は充分。

17～19は古墳時代の土師器片。17はやや外反する無文の口縁部片で、先端は丸く、推定口径21.5㎝である。外面の一部に煤が付着しているが、調整は不明。黄褐色を呈し、砂を多く含む。焼成は普通。18はやや退化した複合口縁で、先端はやや尖り、その内側にやや凹んだ0.7㎝あまりの面を有する。調整は横ナデ、胎土良好、焼成充分である。推定口径16.0㎝。19は「く」の字に屈曲した口縁部片。推定口径11.5㎝、先端は尖る。内面には粗いハケ目、外面ハケ目→横ナデがある。赤褐色を呈し、若干の砂を含む。焼成は普通。

20～22は第２調査区から出土した石器である。20は長さ2.3㎝、幅1.5㎝の無茎石鏃。黒曜石製で、基部には「へ」の字形のえぐりがある。21は3.2㎝×2.5㎝、厚さ0.9㎝の黒曜石製の楔形石器である。22は長さ13.0㎝、幅5.0㎝の磨製石斧で、断面は円形に近い。

23～26は第３調査区で検出した石器。23は安山岩製の石鏃で、先端を欠く、基部は平で、幅は1.8㎝である。24も先端を欠く石鏃。黒曜石製で基部のえぐりは「Ｖ」字形を呈する。幅は1.9㎝。25は側面に使用痕のある剥片で、黒曜石製、6.1㎝×3.3㎝の大きさである。26は上方を欠く磨り石と思われるものである。



第72図　勝負遺跡１区～３区包含層出土遺物実測図２

第73図　勝負遺跡４区土層図

第４調査区出土遺物（第74図～79図）

勝負遺跡北側の谷部である第４調査区からは多量の土器が出土したが、それらは黒褐色土に包含していたものが大半をしめる。その他、黒褐色土の下層である暗黄褐色土、暗茶褐色土、暗灰褐色土等からも検出された。土器としては弥生土器、古墳時代の土師器、須恵器、奈良平安時代の土師器、須恵器があり、縄文時代のものと思われる石鏃、スクレパー、石錐等の石器も見つかった。

１～３は弥生中期の土器で、１は推定口径21.5㎝の頸部から口縁部にかけての壺片である。口縁部は内傾し、２本の凹線文が廻る。上下の器壁は薄く、先端はやや尖っている。頸部には「ノ」字形の刺突を持つ張り付け凸帯を有し、肩部は外側に張りだす。調整は風化のため不明。黄褐色を呈し、胎土良好、焼成はやや軟質。２はやや外反している頸部からほぼ垂直に伸びる口縁部を持つ壺の破片。２本の沈線を描いた後、縦方向にクシ状工具による刺突文を施している。内面にはハケ目調整後、波状文を２条廻らす。外面黒灰色・淡茶褐色、内面暗茶褐色で、胎土良好、焼成充分である。３は口縁部上面にやや内傾する幅1.5㎝の面を持つ甕片で、推定口径20.5㎝、外面の端は尖っており、胴部は若干外に張りだしている。調整はナデで、淡茶褐色を呈し、胎土良好、焼成充分である。

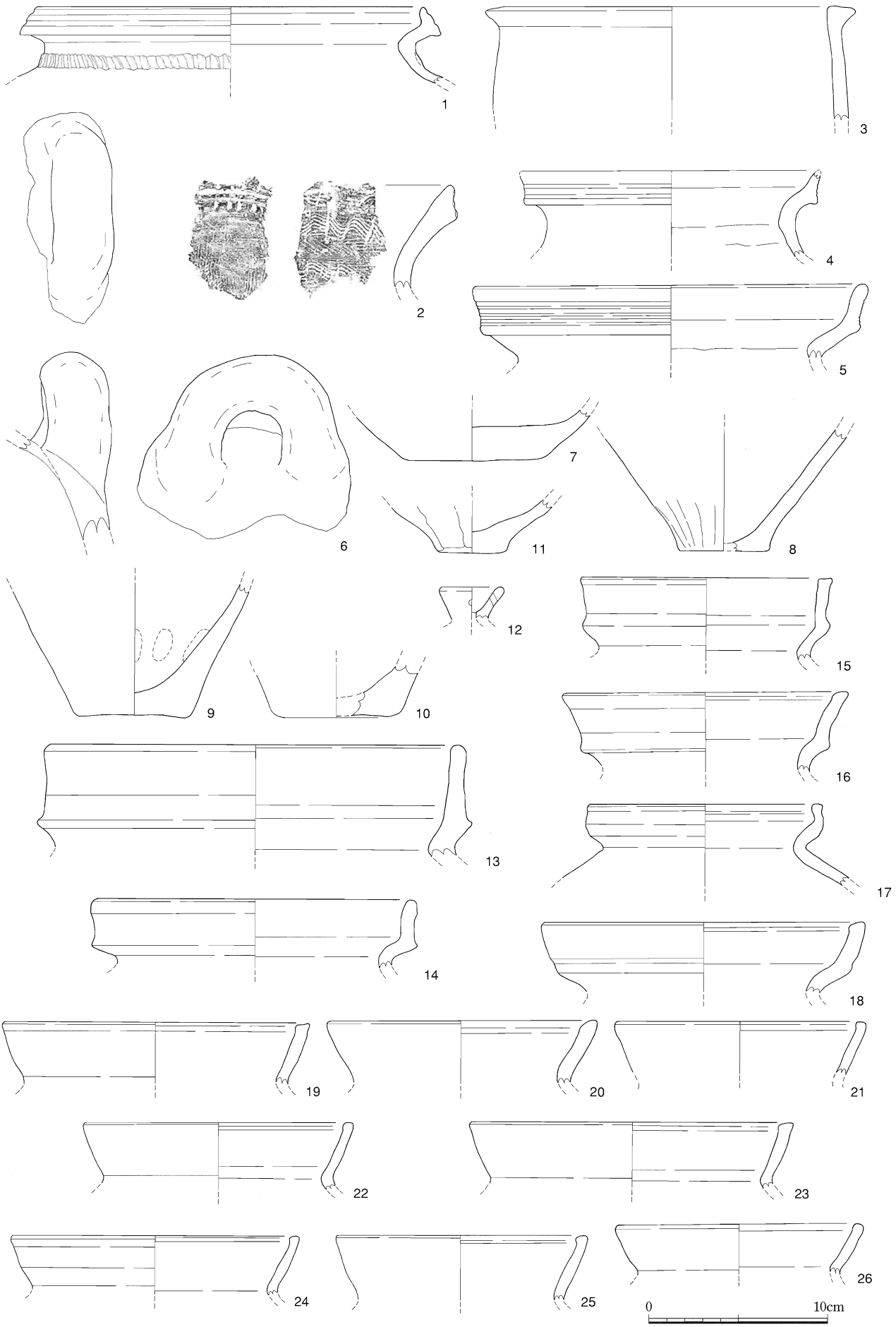
４はやや外反した口縁部に擬凹線が廻っている弥生後期の甕片で、先端を欠く。内面の下方にはケズリが見られるが、他は風化のため調整は不明。外面の一部に煤が付着し、外面黒色・淡茶褐色、内面淡茶褐色で、砂を若干含む。焼き上がりは普通である。５はやや外反した口縁部に擬凹線が廻る推定口径21.5㎝の破片。端部は丸く太い。淡赤褐色（外面）淡褐色（内面）を呈し、大粒の砂を含む。焼成は充分。６は肩部に付けられた把手で、長さ9.5㎝あまりの半円を呈した大形のものである。

７～11は弥生土器底部片である。７は底径7.0㎝、厚さ2.0㎝あまりを計る厚手のものである。端から緩やかに外反して上方に伸びているが、器壁は薄い。外面は黄褐色・灰褐色を呈し、調整は風化のため不明。内面は灰褐色で、ナデ、横ナデがある。砂を多く含み、焼成は普通である。８は推定底径5.0㎝で、逆「ハ」の字形に開いて胴部にいたっている。底部は薄く、体部は0.8㎝あまりの厚みを持つ。底部外面はナデ、体部下方は縦方向のケズリ、上方はナデがある。内面はナデ調整である。外面黄褐色・黒灰色、内面黄褐色を呈し、小粒の砂を多く含む。焼成は充分である。

９は底部端の厚み2.4㎝を計り、体部の上方に行くに従って薄くなる。内面は丸く、底部は若干上げ底ぎみである。調整はナデ、内面には指圧痕が残る。外面暗茶褐色、内面黄褐色、黒灰色を呈し、砂を多く含む。焼成は普通で底径6.0㎝を計る。10は底径6.0㎝を計るやや上げ底ぎみなもので、厚手の作り。調整はナデで、淡褐色を呈し、大粒の砂を含む。焼成は普通。11は底部から外反して大きく開くもので、底径3.5㎝を計る。体部下方はヘラ状のもので縦方向に面取りされており、その他はナデ、横ナデが施されている。底部は厚く1.2㎝あまり、体部は0.6㎝である。淡褐色・暗茶褐色（外面）暗茶褐色（内面）、胎土良好、焼成普通。

12は蓋のつまみ片で、外傾して開いている。端部は丸く、径0.3㎝の円形の孔が２ヶ所穿たれている。つまみの底も穴が開いており、ナデ、横ナデが施されている。内外面とも淡褐色・黒灰色で、胎土良好、焼成普通。

13～43は古墳時代の土師器甕の破片である。13はほぼ直立する口縁部で、推定口径22.5㎝。端部は丸く、横ナデが施されている。淡褐色・茶褐色（外面）黒灰色・淡褐色（内面）で、胎土良好、焼成は充分。14もやや外反しているがほぼ直立した口縁部片。無文で、横ナデが施され、内面とも暗茶褐色・淡茶褐色を呈する。胎土良好、焼成充分。推定口径17.5㎝。15は口縁部下端が「く」



第74図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図１

の字形に屈折し、ほぼ直立な立ち上がりを持つ口縁部片。端部上方には0.7㎝あまりの平らな面を有する。推定口径14.0㎝、横ナデ調整で、煤が付着している。内外面とも茶褐色・淡褐色を呈し、若干の砂を含む。焼成は普通である。16は口縁部がやや外反して開くもので、端部上方はやや丸みを持つ面があり、内側には浅い段を有する。器面調整は横ナデで、推定口径16.0㎝、黄褐色・黒灰色を呈する。若干の砂を含み、焼成は充分。

17は頸部から内湾して上がり短く外反して端部にいたっている口縁部片で、上方には0.5㎝あまりの平らな面を持つ。肩は大きく外に張りだし、調整は横ナデ、ナデである。黄褐色（外面）茶褐色（内面）を呈し、胎土良好、焼成充分である。推定口径13.0㎝。18は口縁部下方に浅く幅広の凹線が廻り、やや内湾した口縁部片。口唇部は外傾した面を持ち、やや厚手の作りである。黄褐色・茶褐色で、若干の砂を含む。調整は横ナデ、焼き上がりは普通である。推定口径17.0㎝。

19は推定口径17.0㎝の外傾する口縁部片。先端は尖り、内側にやや凹んだ0.7㎝あまりの面を持つ。灰褐色で、横ナデ調整、胎土良好。焼き上がりは普通である。20は外傾する口縁部片で、先端は尖り気味。推定口径15.0㎝、横ナデ調整、胎土良好である。焼成は普通で、黒灰色（外面）淡茶褐色（内面）を呈し、外面の一部に煤が付着。

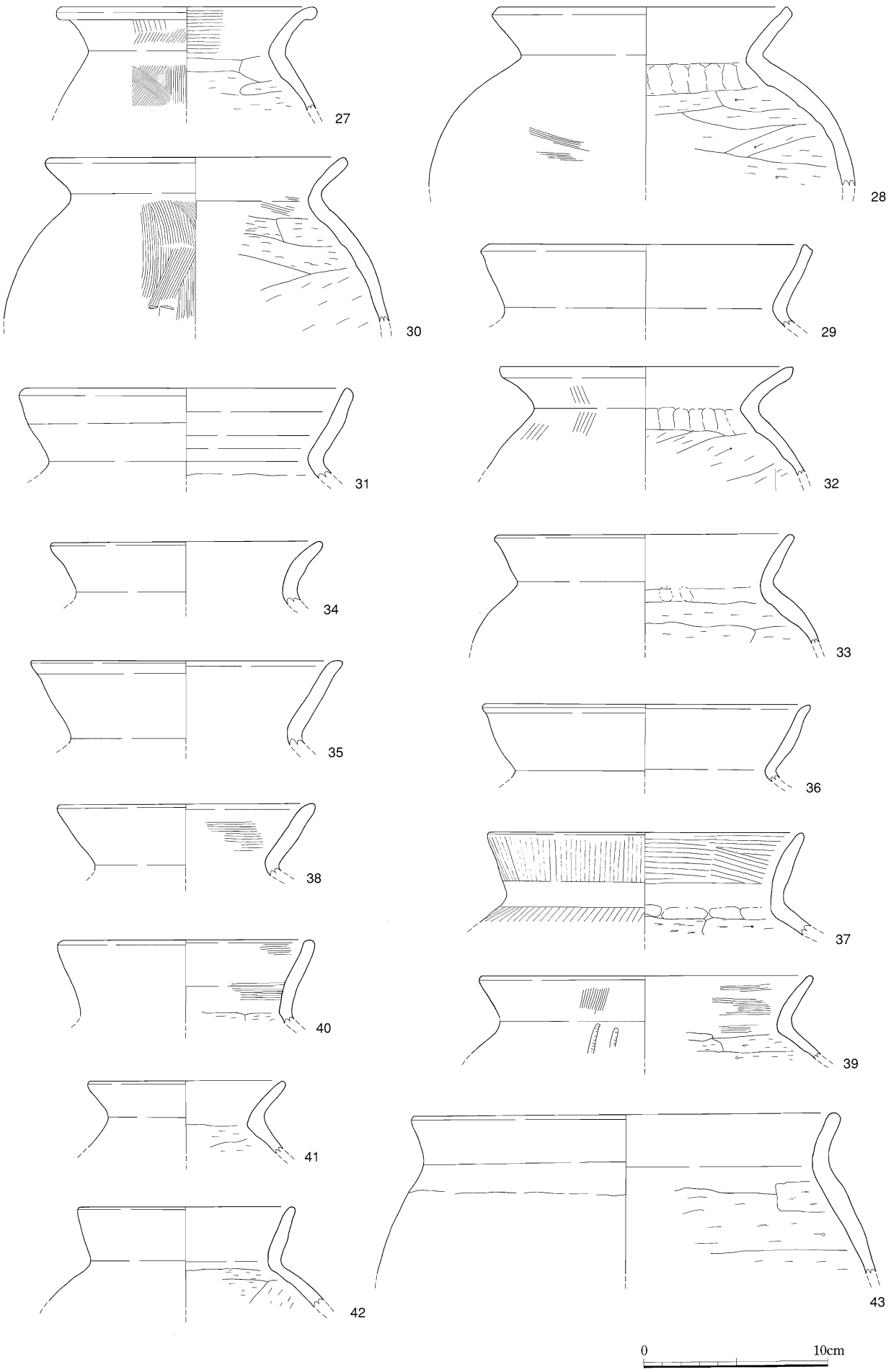
21は外傾するやや薄手の口縁部片で、端部内側に段を有し、口唇部は平らな面を持つ。横ナデ、ナデ調整、淡褐色を呈する。推定口径13.5㎝で、若干の砂を含み、焼成は普通。22は21と同じ形態を呈する口縁部片、横ナデ、ナデ調整。黒色（外面）淡灰色（内面）で、若干の砂を含む。焼成は普通である。

23は上方に向かって厚くなっている口縁部片で、外傾し端部は尖る。上面には内傾した面を持ち、その内側には段を有する。横ナデ調整で、黒灰色を呈する。胎土良好、焼成は普通である。24は21と同様な形態を持つ口縁部片で、横ナデ調整がある。赤褐色を呈し、若干の砂を含む。焼成は普通である。25も同様な形態。横ナデ調整で、外面赤褐色、内面茶褐色で、胎土良好、焼成充分である。26は口唇部がやや内傾した面を持つもので、その他の形態・調整は23と同様である。外面淡褐色、内面茶褐色である。若干の砂を含み、焼成は普通である。

27は頸部からやや外反して上がり、端部が玉縁状に厚くなっているもので、推定口径14.0㎝。肩は下方に下がっており、頸部内面にはヘラ状のもので横方向に面取りを行っており、その下はヘラケズリ、上は粗いハケ目である。外面はハケ目、横ナデで、淡灰褐色、黄褐色を呈する。内面は灰褐色で、胎土は良好、焼成は充分である。28は「く」の字形に大きく外傾し、端部は内傾した面を持つ。肩は丸く、内側にはヘラケズリがあり、上方には指圧痕が廻る。その他の調整は横ナデ、ナデで、外面の一部にハケ目が残る。茶褐色（外面）淡褐色（内面）を呈し、砂を多く含む。焼き上がりは普通である。推定口径15.5㎝。

29も内傾した口縁端部を持つ破片で、推定口径17.0㎝。横ナデ、ナデ調整、黄褐色を呈する。胎土良好、焼成はやや軟質である。30は推定口径16.0㎝の短く外側に開いている口縁部を持つもので、端部は内傾した面を有する。肩は下がり気味で、外面ハケ目、内面ヘラケズリがあり、内面の一部にハケ目が残る。外面に煤が付着しているところがあり、黄褐色を呈する。若干の砂を含み、焼成は充分である。31も外傾した口縁端部を持つ破片。淡茶褐色を呈し、胎土良好、焼成は普通である。

32は外側に大きく開いている口縁部で先端は尖りぎみである。頸部内側には指圧痕が廻り、その下にはヘラケズリがある。口縁部内面は横ナデ、外面はハケ目→横ナデである。淡茶褐色を呈し、



第75図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図２

胎土、焼成とも良好である。推定口径16.0cm。33は口縁端部が内傾した丸みを持つもので、推定口径16.0cm。口縁部は外傾し、内面はヘラケズリ、横ナデがあり、一部に指圧痕が残る。外面はナデ調整である。茶褐色を呈し、砂を多く含み、焼き上がりは普通である。34は外反している口縁部で、先端がやや尖りぎみのものである。横ナデ、ナデ調整、茶褐色を呈する。砂を多く含み、焼き上がりは充分である。推定口径14.5cm。

35は内傾する口縁部の端が若干外反して先端にいたるもので、先端はやや尖り気味である。推定口径17.0cm、横ナデ調整、外面の一部に煤付着。外面茶褐色・黒色・淡褐色、内面淡赤褐色で、砂を多く含む。焼成は普通である。36は口縁部の中央あたりが膨らみ、端部手前で外反して先端にいたっている。推定口径17.5cmで、横ナデ調整、黄茶褐色土を呈し、若干の砂を含む。焼成は普通である。

37は推定口径17.0cmで、口縁部の中央あたりがやや膨らみ、傾きが少ないものである。端部は丸く、頸部の内側はヘラ状のもので横方向に面取りをしており、その下はヘラケズリがある。頸部上面の内外面はハケ目→横ナデで、その他は粗いハケ目がある。外面茶灰色・暗茶褐色、内面茶褐色・茶灰色を呈し、焼成は充分。胎土は細かい砂を含むも良好である。

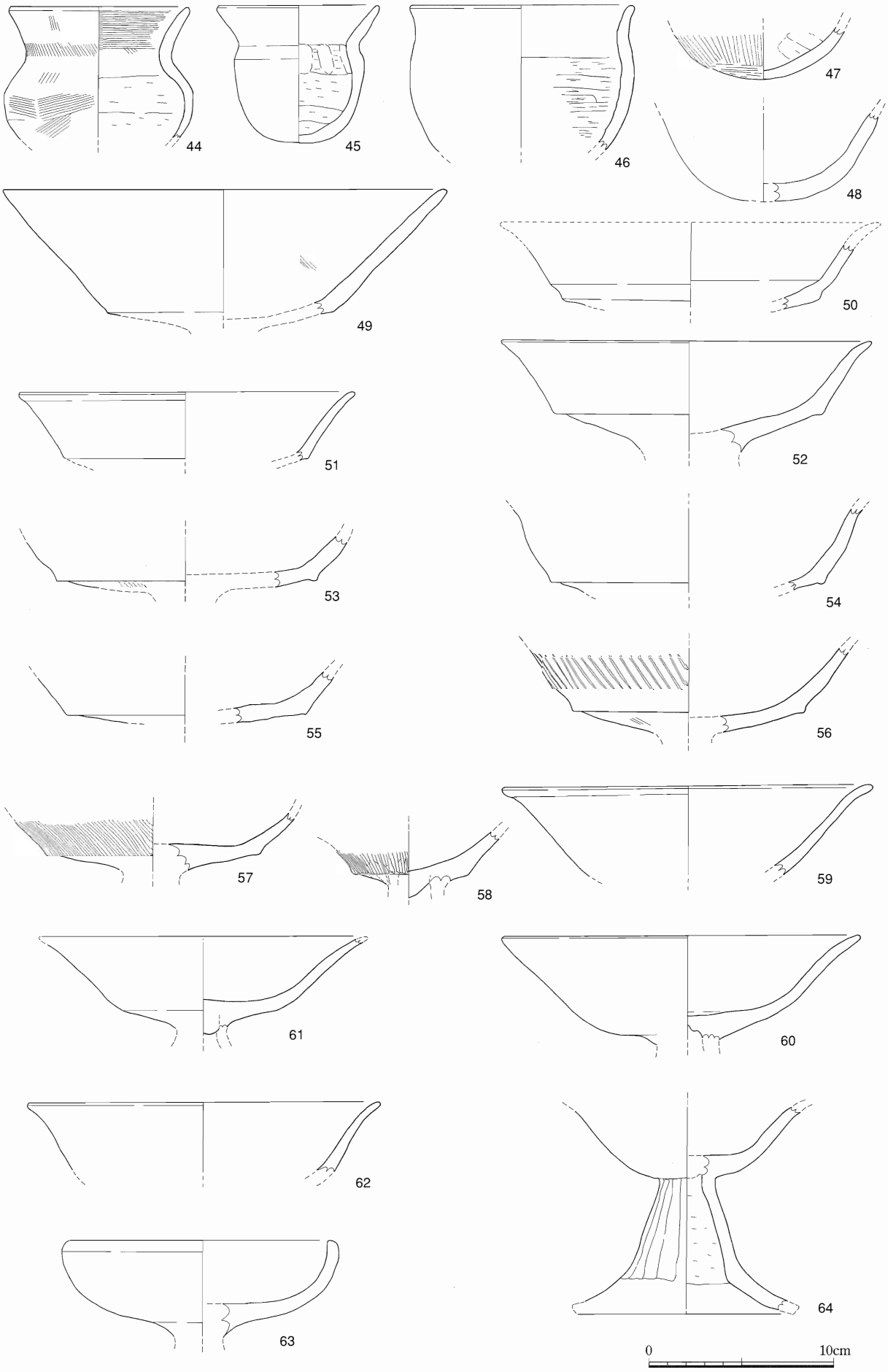
38も口縁部の中央あたりがやや膨らんでいるもので、外側に大きく開いている。外面は淡茶褐色を呈し、一部に煤が付着する。内面は黄褐色で、ハケ目→ナデがあり、やや厚手の作りである。端部は丸く、胎土良好、焼成は普通である。推定口径14.0cm。39は外傾する口縁部で、先端は細くて丸い。肩部にはクシ状のものによる刺突文が廻り、内面下方にはヘラケズリがあり、その他はハケ目→ナデである。淡黄灰色（外面）、灰褐色・淡灰色（内面）で、推定口径18.0cm。胎土良好、焼成普通である。

40はやや外反しているが傾きの少ない口縁部で、先端は丸い。調整は内面ヘラケズリ、ハケ目→横ナデ、外面横ナデである。色調は淡褐色（外面）暗茶褐色（内面）で、胎土良好、焼成普通である。推定口径13.5cm。41は短く外側に開いている口縁部で、先端は丸い。調整はヘラケズリ、横ナデで、黄褐色を呈する。若干の砂を含み、焼成は普通である。推定口径10.5cmの小形品。

42推定口径11.5cmの肩部から口縁部にかけての破片。口縁部は外傾しているが、傾きは少なく、先端は丸い。肩は丸く張りだし、内部にはヘラケズリがある。その他の調整はナデ、横ナデである。淡茶褐色を呈し、胎土、焼成は良好。43は「く」の字形に緩く外反する口縁部を持ち、頸部からあまり張りださずに下がっているものである。内面下方はヘラケズリ、その他はナデ、横ナデである。暗茶褐色・茶褐色を呈し、砂を多く含む。焼成は充分である。

44・45は土師器の小形丸底壺である。44はやや外反した口縁部に丸い胴部を持つもので、推定口径9.5cm、胴部最大径10.2cm、頸部径7.8cmを計る。口縁部内部、外面には粗いハケ目が残り、肩部以下の内面にはヘラケズリがある。黒色・黒灰色（外面）淡茶褐色（内面）を呈し、若干の砂を含む。焼成は充分である。45は胴部があまり張り出していないもので、口径8.5cm、器高7.4cm、を計る。口縁部はやや外傾して開き、先端は細くてやや尖りぎみである。胴部最大径は口縁部より内側にあり、頸部内面には指圧痕がある。その下にはヘラケズリが施され、外面茶褐色・淡褐色・暗茶褐色、内面黒灰色・淡茶褐色・淡褐色を呈する。胎土、焼成とも良好である。

46は推定口径12.0cmを計る土師器の鉢形土器片。口縁部から胴部にかけて軽い「S」字形を呈し、先端は丸い。内面はヘラケズリ・横ナデがあり、外面には・横ナデ・ナデがある。黒灰色・黄褐色（外面）淡褐色・黄褐色（内面）を呈し、胎土、焼成とも良好。



第76図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図３

47・48は土師器の丸底の底部片。47は外面にハケ目、内面にミガキ風のナデがあり、外面茶褐色、内面淡褐色を呈し、小粒の砂を含む。焼成は充分。48は内外面ともミガキがかかっており、器壁はやや厚い。赤褐色で、胎土、焼成とも良好。

49～58は土師器の高坏で、段を持つ坏部片である。49は大きく外側に開いている口縁部を持つもので、推定口径24.0cmあまりの大形品。段は鈍く、調整は横ナデである。内面の一部にハケ目が残る。赤褐色で、胎土良好、焼成普通。50は段付近の破片で、口縁部上半を欠く。段は「S」字形に屈折し、ここで器壁の厚みも変化し、口縁部が薄くなる。淡褐色で、砂を多く含み、焼成は普通である。51は推定口径18.0cmのやや薄手のもので、口縁部はやや外反し、端部は丸い。段外面は丸く、横ナデ調整が施されている。外面暗茶褐色、内面淡褐色で、胎土、焼成とも良好。

52はやや外反する口縁部で、先端は細くてやや尖っている。段は「く」の字形に屈折し、口縁基部が厚く、上方に向かって薄くなる。坏底部は上方が薄く、下方が厚くなっている。推定口径19.8cm、調整は風化のため不明。淡褐色を呈し、胎土良好、焼成普通である。53は段付近の破片で、やや厚手な作りである。段は断面三角を呈し、底部の一部にハケ目が残る。他は横ナデ調整で、淡褐色（外面）淡褐色・黄褐色（内面）をなす。若干の砂を含み、焼き上がりは普通である。

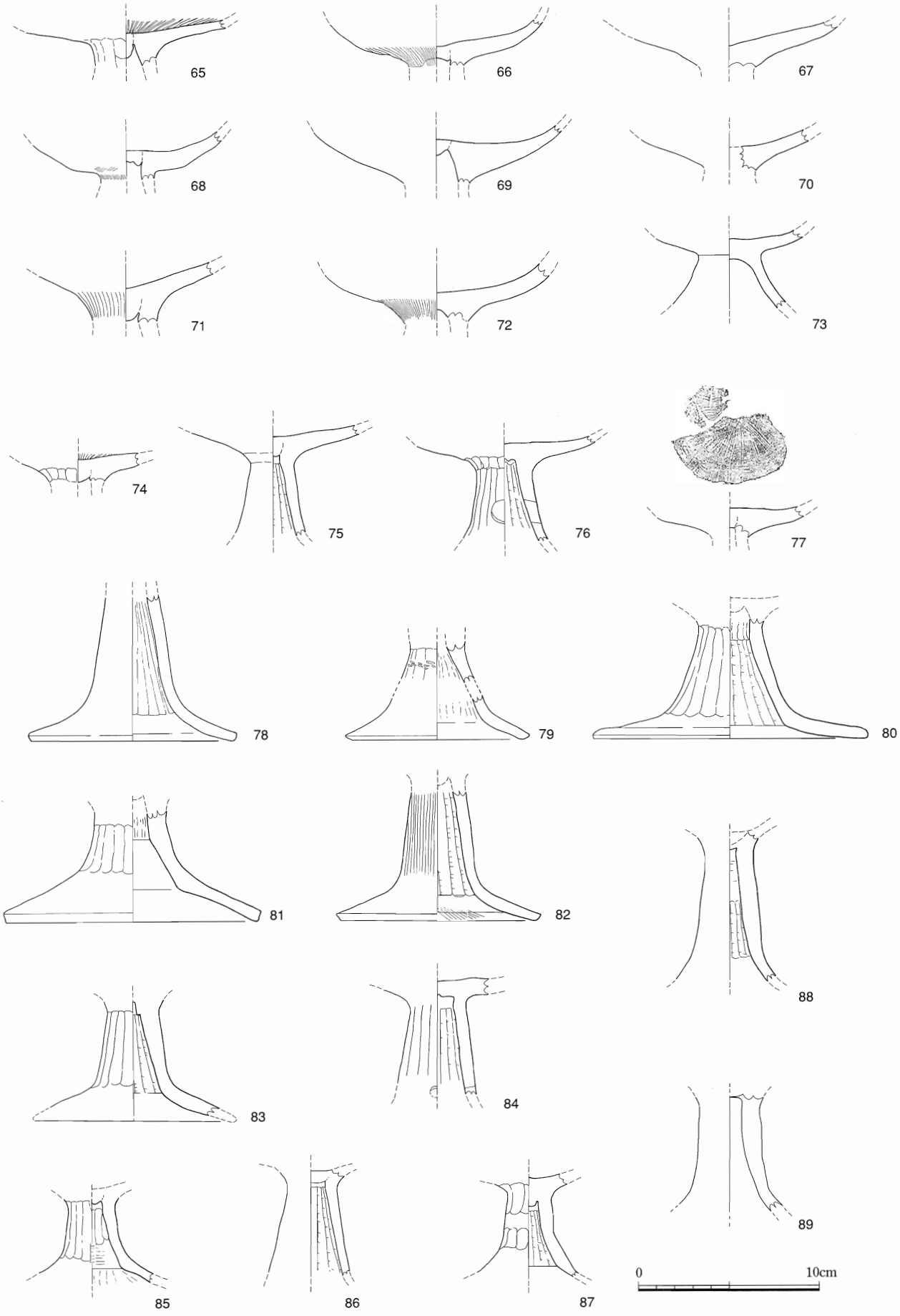
54は口縁部がやや立ち上がっているもので、段は丸く飛び出し、内外ともミガキが施されている。淡黄褐色を呈し、小粒の砂を含む。焼成は充分である。55は「く」の字形に屈折する段を持つ破片。調整は風化のため不明、淡黄褐色を呈し、焼成は普通。小粒の砂を含む。56は口縁部上方を欠く破片。段は三角状に飛び出ており、口縁部には左上がりの斜め方向に付けられた暗文が廻る。調整は横ナデ、ナデで、底部の一部にハケ目が残る。淡褐色を呈し、焼成は充分。若干の砂を含む。

57は三角状に突出した段を持ち、口縁部には粗いハケ目がある破片。口縁部はやや薄手で、底部下方は厚い。ハケ目以外の調整は風化のため不明。淡茶褐色で、胎土良好、焼き上がりはやや不足である。58は緩い「く」の字形をした段を有するもので、脚内部の奥には粘土で穴を詰めたこぶが残る。口縁部外面には縦方向のミガキが施され、底部には指圧痕がある。内面はナデ調整、若干の砂を含む。淡褐色（外面）、淡褐色・黄褐色（内面）で、焼成は充分。

59～63は土師器高坏の無段の口縁部片である。59は推定口径20.0cmで、口縁部は下方が内湾気味、上方が外反して端部にいたっている。やや薄手の作り、器面調整は横ナデ、ナデで、外面の一部にはハケ目が残る。淡茶褐色（外面）黄褐色（内面）を呈し、焼き上がりは普通。砂を多く含む。60は、脚基部から外反して上がり、いったん内湾した後、外反して端部にいたっている。先端は丸く、器面調整はナデである。淡茶褐色で、焼成は充分。若干の砂を含む。脚内部奥には軸穴がある。

61は60と同じ形態であるが、口縁部先端を欠き、やや薄手の作りである。脚内部奥には粘土で穴をふさいでおり、調整は風化のため不明。黄褐色を呈し、焼き上がりはやや不足である。大粒の砂を若干含む。62は推定口径19.0cmで、外反して端部にいたっている、やや薄手のものである。暗茶褐色（外面）淡褐色・黄褐色（内面）を呈し、焼成は充分。若干の砂を含む。63は坏部が内湾しているもので、端部は内傾した面を持つ。調整は横ナデ、ナデ、焼成は充分。胎土良好で、外面灰褐色、内面淡褐色を呈する。推定口径14.0cm。

64は坏部から脚にかけての破片。坏は無段のもので、下方が内湾、上方が外反しており、端部を欠く。脚は基部の径3.0cmを計り、一旦やや膨らんで、「く」の字形に屈折して端部にいたっている。屈折部より上方外面にはヘラによる縦方向のナデがあり、内面にはヘラによる横方向のナデが施されている。その他の調整はナデがある。茶褐色・黒灰色（外面）、茶褐色（脚内面）、淡赤褐色（坏



第77図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図４

内面）を呈し、胎土、焼成とも良好である。

65～77は土師器高坏の坏底部から脚部にかけての破片。65は脚基底部の径3.5㎝を計る破片で、坏部は外側に大きく開く。内面には中心部に向かって暗文が廻り、外面はヘラによる縦方向の面取りがある。脚内部奥は粘土で穴をふさいでおり、胎土・焼成は良好。暗茶褐色（外面）、淡褐色（内面）を呈す。66は坏部が内湾しているもので、外面下方にはハケ目が放射状にあり、その他の器面調整はナデである。外面茶褐色・赤褐色、内面黄褐色・灰褐色を呈し、焼成は充分である。砂を比較的多く含む。

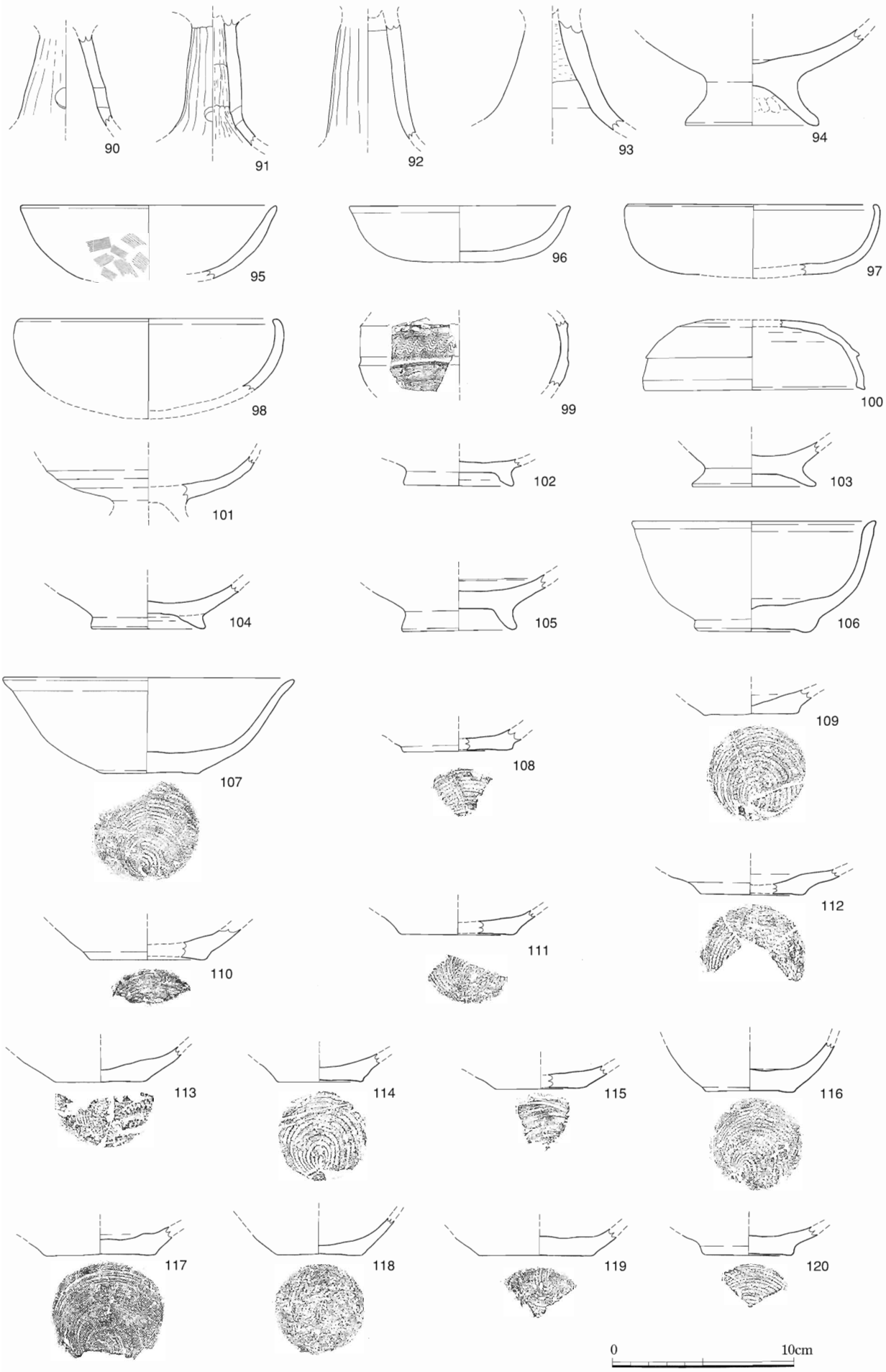
67はやや厚手の作りで、坏部は外側に開く。風化のため調整不明、焼き上がりはやや不足。砂を多く含み、淡褐色・茶褐色を呈する。68は坏部の下方に膨らみがあるもので、脚内面奥部は軸粘土で穴をふさいでいる。脚基部付近にハケ目が残り、その他はナデ調整である。胎土、焼成良好、黄褐色を呈する。69は坏部が内湾しているもので、上方に行くに従って薄くなっている。基部は厚いが、脚内面奥部は薄く、粘土で塞いでいる。横ナデ、ナデ調整で、砂を多く含む。焼成は普通、外面淡褐色・茶褐色、内面黒灰色・灰褐色・淡褐色を呈する。70は外側に開いている坏部片で、ミガキ風のナデが施されている。淡褐色・黄褐色を呈し、胎土良好、焼成は普通である。

71は脚内面奥部に粘土塊を詰めているもので、外面には粗いハケ目があり、淡褐色を呈する。焼成は普通、若干砂を含む。72は内湾している坏部片で、脚基部には粗いハケ目があり、その他の調整はナデである。赤褐色を呈し、胎土良好、焼成は普通である。73は内湾ぎみの坏部に「ハ」の字形に開く脚部を持つ破片で、外面には赤色顔料が塗ってあり、脚基部の径3.4㎝を計る。調整は脚部がナデ、坏部が風化のため不明、外面赤褐色、内面黄褐色を呈する。胎土良好、焼き上がりはやや不足である。74は脚内面奥部に粘土塊を詰めているもので、坏部内面には放射状にハケ目があり、脚基部外面にはヘラによる面取りがある。赤褐色を呈し、胎土、焼成は良好。

75は外側に開く坏部と開きの少ない脚部を持つ破片。外面及び坏部内面の調整は風化のため不明であるが、脚内面にはヘラ状工具による横ナデある。脚内面奥部には粘土塊を詰めており、外面淡黄褐色、内面黄褐色を呈する。焼き上がりはやや不足で、若干の砂を含む。76はやや内湾する坏部を呈するもので、脚内面奥部には軸穴がある。脚部はやや開いており、ヘラによる縦方向の面取りが施され、径1.0㎝の円形の透かしが３ヶ所開けられている。また、内面にはヘラによる横ナデがある。淡褐色で、胎土良好、焼成はやや軟質である。77は内湾ぎみの坏部片で、内面には放射状のハケ目がある。外面はナデ調整、外面赤褐色、内面茶褐色を呈す。胎土、焼成とも良好。

78～93は土師器高坏脚部片である。78はラッパ状に裾が開いている脚で、端部は外傾して丸い。外面はミガキがあり、内面下方は横ナデ、上方はヘラによる横ナデが施されている。底径11.4㎝で、淡黄褐色をなす。胎土良好、焼成は普通である。79は脚下方が「く」の字形に屈曲して端部にいたるもので、先端は尖り、外傾した面を持つ。外面にはヘラによる面取りがあり、ヘラ先状の刺突痕が廻っている。屈折部上方の内面には絞り痕あり、下方には横ナデが施されている。淡褐色・茶褐色をなし、胎土良好、焼成普通である。底径9.2㎝あまりを計る。

80は底径15.0㎝を計る脚裾が大きく開くものである。外面にはヘラによる縦方向の面取りがあり、裾にはミガキ風のナデが施されている。内面はヘラによる横ナデが施され、上端には絞り痕がある。淡褐色をなし、胎土、焼成とも良好。81は脚の上方で屈折して端部にいたっているもので、端部は外傾した面を有する。内面は「く」の字形に屈折しており、上方は直立する。絞り痕とナデがある。外面は面取りナデが施されている。赤褐色・黄茶褐色をなし、胎土良好、焼成普通である。



第78図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図５

82は脚上方が筒状、下方が「ハ」の字状に開いているもので、端部は外傾した面を持つ。外面には縦方向のハケ目、ナデがあり、内面にはヘラによる横ナデ、ナデが施され、一部にハケ目が残る。底径10.7㎝で、茶褐色を呈し、若干の砂を含む。焼成は普通である。83も82と同じ形態を呈しているが、筒部はやや短く、裾はやや丸みを持ち、端部を欠く。外面には面取り、内側にはヘラによる横ナデがあり、脚内部上端には軸穴が残る。赤褐色を呈し、胎土良好、焼成普通。84は筒状の脚上方部片で、径0.6㎝の円形の透かしを持つ。調整は83と同じ。淡黄褐色を呈し、胎土良好、焼成やや軟質。脚内部上端には小さい軸穴がある。

85は脚内部上端に粘土塊を詰めており、裾が大きく開くものである。内面は「く」の字形に屈折し、それより上方にはヘラで横ナデや押したような痕跡が残る。下方には絞り痕がある。外面には面取りが施されており、淡茶褐色（外面）黒灰色（内面）を呈する。胎土良好、焼成普通である。

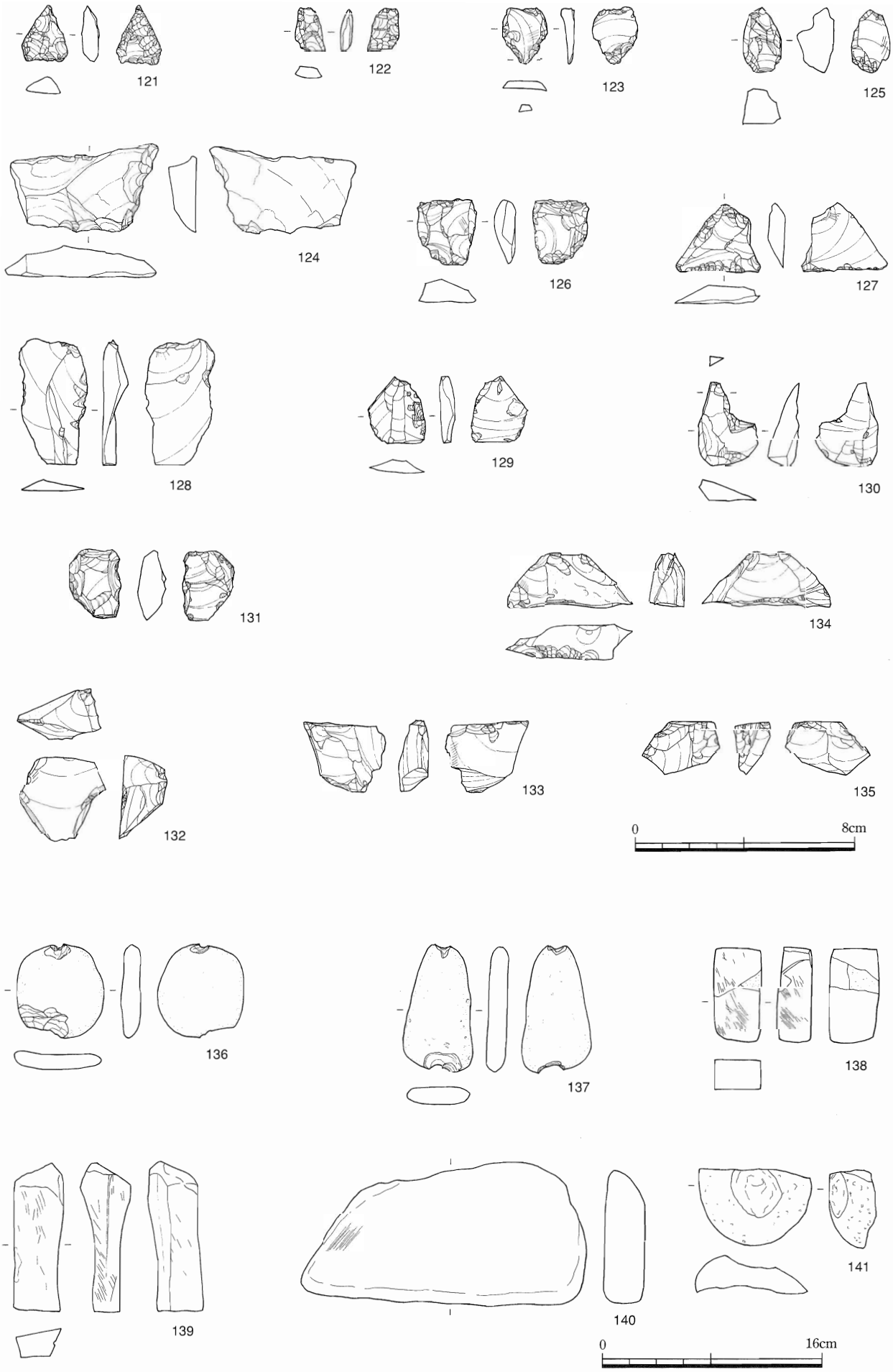
86は脚上方部片で、やや開きぎみである。脚内部上端に粘土塊を詰めており、ヘラによる横ナデがある。外面の器面調整は風化のため不明。外面淡茶褐色､内面黒灰色で、砂を多く含む。焼成は普通。87は脚上方に膨らみがあるもので、脚基部と中央部の二段にわたって面取り行われている。内面はヘラによる横ナデがあり、上端には粘土塊を詰めている。茶褐色をなし、胎土、焼成とも良好。

88は脚筒部片で、開きの少ないものである。脚内部上端から坏部内面にかけての厚みが2.8㎝あまりを計る。脚内面にはヘラによる横ナデが見られるが、その他は風化のため調整不明である。淡褐色を呈し、胎土良好、焼成やや不足である。89も開きの少ない筒状を呈した破片、内面に絞り痕が見られる他は調整不明。淡黄褐色を呈し、胎土良好、焼成充分である。

90は「ハ」の字形に開く脚上方部片で、外面には縦方向の面取り、内面は絞り痕があり、径1.2㎝の円形透かしが３ヶ所に開けられている。赤褐色を呈し、小粒の砂を含む。焼成は充分である。91は筒状の脚部片で、径0.8㎝の円形透かしが３ヶ所ある。外面には縦方向の面取り、内面は絞り痕がある。淡黄褐色で、胎土良好、焼成普通。92は91と同じ形態、調整で、茶褐色を呈し、胎土良好、焼成普通である。93は「ハ」の字形に開いた脚部片で、やや厚手の作りである。外面は茶褐色・黄褐色をなし、ナデ調整である。内面は淡褐色を呈し、ヘラによる横ナデがある。胎土良好、焼成普通。94は脚部の器高が低く、2.3㎝あまりである。底径は7.3㎝で、脚部はやや外反し、端部は三角に尖り、坏部は内湾ぎみ。脚内面には指圧痕、横ナデがあり、坏内面はナデ、外面は横ナデが施されている。大粒の砂を含み、淡黄褐色を呈する。焼成普通である。

95～98は土師器坏の破片である。95は推定口径14.0㎝あまりのもので、内湾した体部を持つ。先端は尖っており、内面は淡褐色をなし、板状のもので縦方向にナデを施している。外面は淡褐色・灰褐色を呈し、横ナデ、ハケ目がある。胎土良好、焼成普通である。96は器高3.0㎝、口径12.0㎝を計る坏で、端部手前で若干外反し、先端は尖り気味である。調整は風化のため不明、赤褐色を呈し、胎土良好、焼成やや軟質である。97は口径13.5㎝、器高4.0㎝あまりのやや薄手の作り。端部は短く内湾し、先端は丸い。調整は横ナデ、ナデで、外面茶褐色・黄褐色、外面黄褐色を呈する。胎土は良好であるが、焼成はやや不足ぎみである。98は内湾した体部を持つもので、先端は内側に屈折し、尖り気味。推定口径14.0㎝、淡茶褐色（外面）淡褐色・淡茶褐色（打ち面）をなし、胎土良好。焼き上がりは普通である。

99～101は須恵器片である。99は、甕の体部と思われるもので、上下にしっかりした沈線があり、その間に波状文が廻っている。調整は回転ナデで、外面青灰色、内面茶灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。100は蓋坏の蓋で、器高3.8㎝、口径12.0㎝を計る。天井部と口縁部の堺には断面三角状



第79図　勝負遺跡４区包含層出土遺物実測図６

の段があり、口縁部はやや内湾ぎみである。先端は尖り、内倒する面を持つ。天井部には回転ケズリが施され、その他は回転ナデの調整である。外面淡黒灰色、内面薄灰色、断面紫色を呈する。胎土、焼成とも良好である。101は高坏の坏部片で、内湾している。外面には回転ケズリ、内面には回転ナデがある。外面青灰色、内面茶灰色、断面淡紫色をなす。胎土、焼成とも良好。

102～105は「ハ」の字形の高台が付く土師器片。102は底径5.8㎝を計り、高台の先端は尖り気味で、内側に内傾する面を持つ。底部は糸切りした後にナデを施している。その他は横ナデ調整である。外面淡褐色・淡茶褐色、内面淡茶褐色を呈し、胎土良好、焼成普通である。103は高台基部から先端に向かって序々に薄くなっているもので、先端は尖る。外面は外反ぎみ、底径6.5㎝あまりを計る。調整は風化のため不明。外面黄褐色、内面淡暗茶褐色をなし、胎土良好、焼き上がりはやや不足である。

104は断面三角状の高台を持つもので、底部は糸切り後、ナデを施している。その他はナデ、横ナデである。淡茶褐色をなし、胎土焼成とも良好。底径6.0㎝。105はやや外反している高さ1.2㎝あまりの高台で、底径6.0㎝を計る。高台の基部から先端に向かって序々に薄くなり、先端は丸い。底部外面には糸切り→ナデ、体部内面は中央が回転ナデ、周辺が横ナデである。外面は横ナデが施されている。外面暗茶褐色・茶褐色、内面暗茶褐色を呈し、胎土、焼成とも良好。

106・107は土師器の碗形土器である。106は口径13.3㎝、器高6.1㎝、底径6.0㎝を計る。底端部は丸く、若干上げ底ぎみである。底部から0.7㎝上部で「く」の字形に屈折し、そこから内湾ぎみに上がり、口縁端部手前で若干外反して先端にいたっている。先端は細く尖り、内側に外反する面を持つ。底部はやや厚く1.2㎝あまりを計り、体部は0.5㎝である。調整は底部がナデ、体部内面が横ナデ・ナデで、体部外面は風化のため不明。黄褐色を呈し、大粒の砂を含み、焼成は普通。体部外面の一部に煤が付着している。

107はやや外側に開いている碗で、口径15.8㎝、器高5.1㎝、底径5.2㎝を計る。底部には糸切りがあり、体部は内湾ぎみに上がり、口縁端部手前で若干外反する。先端は丸く、底部は1.2㎝あまりの厚さを持つ。内面は横ナデ・ナデで、外面は横ナデの調整がある。淡黄褐色を呈し、焼成は普通。細かい砂を含む。

108～120は中世土師器底部片である。ほとんどが糸切りであるが、110・119は糸切り→ナデの調整がある。108は底径5.8㎝、内面には回転ナデがあり、暗茶褐色を呈する。外面は横ナデ調整で、淡褐色をなす。若干の砂を含み、焼成は普通。底部の厚みはほぼ均一で0.7㎝である。109は底部の中心が薄く、端に向かって厚くなっているもので、底径5.0㎝、内面回転ナデ、外面横ナデがある。黄褐色（外面）淡茶褐色（内面）を呈し、砂を多く含む。焼成は普通である。110は底部の大半を欠くもので、推定底径6.2㎝。体部は外側に開いており、体部下方はナデであるが、その他は風化のため調整は不明である。淡褐色（外面）黄褐色（内面）で、胎土良好、焼成はやや不足である。111は底径6.0㎝で、体部は底部と比べ極端に薄くなっている。底部の厚さ0.7㎝、体部の厚さ0.4㎝である。調整は内面がナデ、外面は風化のため不明。外面黄褐色、内面薄茶褐色で、小粒の砂を若干含む。焼成は普通。112は体部下方が外側に屈折しており、底径5.5㎝を計る。淡褐色を呈し、若干の砂を含む。焼成は普通。113は体部が逆「ハ」の字形に開くもので、底端部が最も厚く1.2㎝を計る。茶灰色（外面）淡褐色（内面）を呈し、調整は回転ナデ、胎土良好、焼成普通である。

114は若干上げ底になっており、体部は外反している。底径4.6㎝で、内面回転ナデ、外面ナデである。淡黒灰色を呈し、若干の砂を含む。焼成は充分である。115は外側にやや開いている体部

を持つものである。内面はヘラ先状のものでナデた痕跡が中心部にあり、その外側にナデ調整がある。外面は横ナデで、淡灰色を呈し、胎土、焼成とも良好。底径4.6㎝。116は体部がやや内湾し、壺か碗の底部になるものである。底部の厚さ1.2㎝、体部の厚さ0.5㎝を計る。外面茶褐色・黄褐色、内面茶褐色・淡褐色を呈し、若干の砂を含む。調整は内面回転ナデ、ナデ、外面横ナデで、焼き上がりは充分である。底径5.8㎝。

117は体部がやや開いており、底径5.7㎝。内面は回転ナデのため器面が凸凹している。外面は横ナデ調整で、茶褐色・黒灰色を呈し、内面は暗茶褐色をなす。若干の砂を含み、焼成は充分である。118はやや薄手の作りで、底径4.5㎝を計る。内面黄褐色・茶褐色で、回転ナデ、横ナデがある。外面は風化のため調整は不明、黄褐色をなす。焼成は普通で、砂を多く含む。119はやや厚手の底部片で、暗茶褐色を呈する。小粒の砂を若干含み、内面ナデ、横ナデ、外面横ナデで、焼成は普通。底径6.2㎝である。120はやや厚手のもので、体部は「く」の字形に大きく開いている。底径4.9㎝、内面回転ナデ、外面横ナデである。胎土、焼成とも良好。淡褐色（外面）茶褐色（内面）を呈する。

121～141は石器である。121は長さ2.1㎝、幅1.6㎝を計る黒曜石製の無茎石鏃で、五角形を呈し、基部は平らである。122は石鏃の未成品と思われるもので、長さ1.6㎝、幅1.1㎝を計り、黒曜石製。123は五角形を呈した黒曜石製の石錐で、先端は「V」字形に尖っている。長さ2.1㎝、幅1.6㎝。124は一部を欠くスクレーパーで、刃部及び側縁に加工痕が見られる。残存している大きさは5.4㎝×3.3㎝で、逆台形を呈する。125・126は黒曜石製の楔形石器である。125は2.4㎝×1.4㎝のやや小形品で、上下端にはつぶれが見られる。126はやや歪な五角形を呈した2.3㎝×2.1㎝、厚さ0.8㎝を計るもので、上下端にはつぶれがある。

127・128は使用痕のある石器で、127は黒曜石製の台形を呈したもので、刃部の裏面には擦痕があり、刃こぼれが見られる。大きさは3.0㎝×2.5㎝である。128は4.6㎝×2.5㎝の長方形を呈した玉随製で、側面上方に使用痕がある。129～131は加工痕がある石器。129は黒曜石製で側面に加工痕が見られる。130は上方に不規則な剥離面がある白瑪瑙製。131は勾玉の未製品になる可能性があるもので、2.6㎝×1.9㎝を計る玉随製。132～135は黒曜石の石核で、大きさは2㎝～4㎝である。形は台形、歪な五角形を呈する。

136・137は流紋岩製の扁平な河原石を用いた石錘である。136は6.8㎝×6.3㎝の長円形を呈し137は長さ9.3㎝、幅5.1㎝の細長いもので、上下に加工痕が見られる。138～140は砥石で、138・139は凝灰岩製で全面に細かな擦痕が残っており、140は安山岩系の石で、わずかに擦痕が残る。141は大半が欠損しているが中央に凹みのある凹み石で安山岩製。

第４節　総括

１．南外２号墳の調査

この古墳は、一辺12.5ｍ、高さ1.0ｍ～2.2ｍを計る小規模な方墳であるが、計画的で丁寧に造られており、古墳時代中期末の古墳を知る上に重要なものである。そこで、築造時期、埋葬施設、墳丘を築造等について検討してみたいと思う。

築造時期

この古墳の築造時期を知る手がかりになるものは、埋葬施設内から見つかった須恵器の蓋杯である。この蓋坏は、死体の枕として使用されていたもので、身３点、蓋３点の計６点が一括で出土した。蓋、身とも口縁端部に段を有し、5.2㎝～5.5㎝の器高があるなど古い要素を持っている。しかし、口径は、蓋で14.0㎝、身で12.3㎝～12.7㎝あまりを計り、やや大形化してきており、蓋は天井部と体部とが一体化しつつある。また、身の立ち上がりもやや低く内傾し、端部の段も沈線状で、やや退化傾向がみられる。このような特徴から見て、これらの土器は、定型化した古式須恵器がやや退化した段階のもので、６世紀前半代と考えられ、山本編年・大谷編年のⅡ期にあたるものと思われる。（１・２）

埋葬施設

埋葬施設は、墳丘隅の対角線上に長さ2.7ｍ、幅0.75ｍ～0.85ｍの細長い土壙が１基設けられていた。細長い土壙は、前期末に松江市奥才古墳群で箱式木棺を納めたものが出現する（3）。そして中期になると、松江市長砂古墳群のように、一つの古墳に一つの細長い土壙を伴うものが定着するようになり（4）、小規模な方墳によって構成された古墳群が盛んに造られるようになる。その中には、墳丘隅の対角線上に埋葬施設を設けるものが出てくる。そのような土壙は、５世紀中頃の長砂４号が最も古く、松江市増福寺20号、21号（5）、土井13号（6）、敷居谷５号（7）、米坂３、５、12号等（8）の６世紀中頃まで続く。また、須恵器は溝や墳裾から検出されるものが大半を占めるが、定型化以後のⅡ期になると埋葬施設の枕として用いられた蓋坏が松江市喰ヶ谷１号（9）、鍛冶谷１号（10）などで見られるようになる。このように、出雲地方の６世紀前半代には、墳丘隅の対角線上に築かれた細長い埋葬施設や須恵器転用の枕を用いたものが普遍的に見られる。

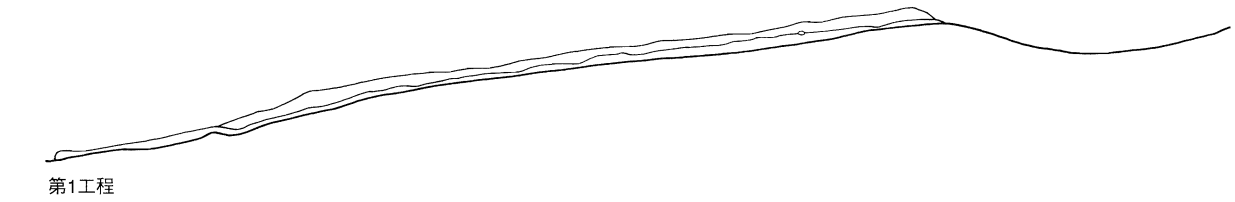
墳丘の築造方法

南外２号墳の調査では５工程によって墳丘が造られていたことが分かったので、以下工程ごとに記述し、検討を加えてみたい。

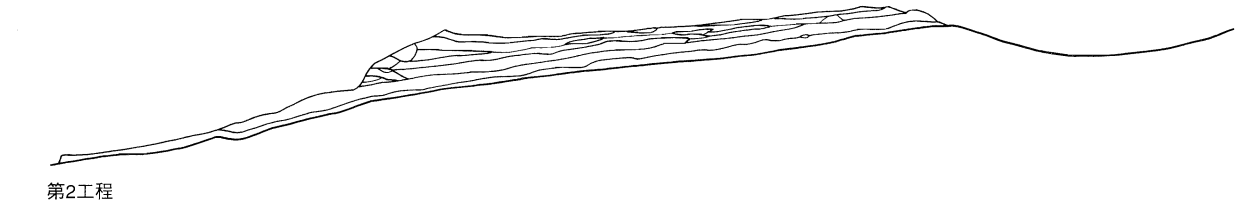
第１工程

墳丘の築造は溝を掘削することから始まる。溝はまず山手の尾根をカットし、その両端から下方に向かって前方がやや開いた「コ」の字形に掘削する。このような形態に溝を掘削しているのは、低い斜面前方に盛土が施しやすいようにし、墳丘の頂上部が方形で平らになるよう計画的に築造しているものと思われる。山手の溝は、墳丘側が直線的であるのに対し、上方は円弧状になっており、平面形は半円形を呈する。両側の溝は、2.0m～2.7mの幅を持ち、下方に行くに従って浅くなり、谷側の墳裾線付近で消滅する。また、西側の溝が消える付近はやや平坦になっており、ここが、通路の出入り口として利用された可能性がある。

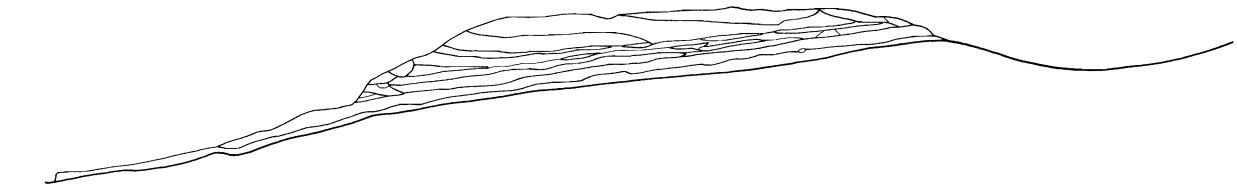
第２工程



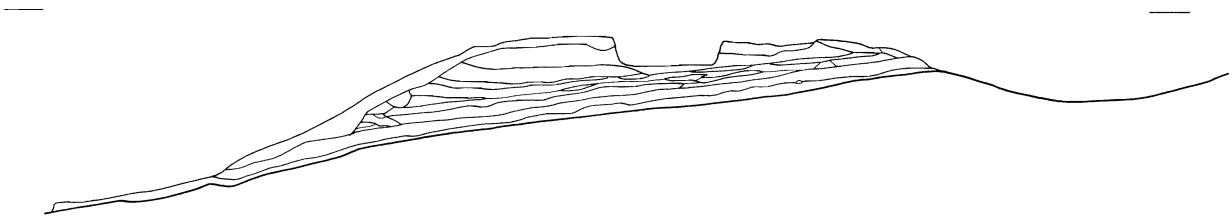
第1工程



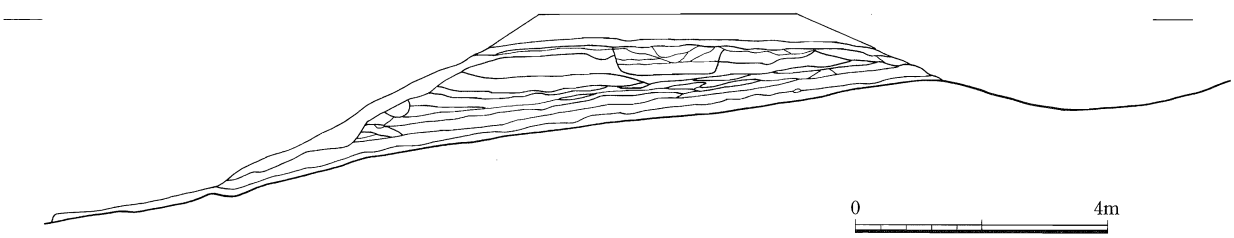
第2工程



第3工程



第4工程



第5工程

第80図　南外２号墳墳丘築造工程図

この工程は、溝の内側に盛土して墳丘基盤を造成するものである。盛土は、まず谷側の墳裾線上に土を高さ0.5m盛り、コの字形の溝と連結させて墳丘基盤の範囲を確定する。この盛土は旧表土の上にブロック状に盛っており、その内側に黄褐色系の土を山側端の1.8m内側から谷側に向かって敷いている。その後、黄褐色系の土と黒色系の土を相互に谷側を厚く山側を薄く盛って、表面が水平になるよう盛土作業を行っている。この作業でも谷側の端部には、ブロック状の土止めを施している。この端部の盛土は、土嚢袋状のものに土を詰めたものを並べた可能性があり、墳丘が流失するのを防ぐためのものと考えられる。

第3工程

この工程は、墳丘基盤の上に盛土して墳丘の形を整える作業である。盛土は第2工程のものと比べ一層あたりの厚みが0.3mにおよぶところがあり、全体の厚みは0.5m前後である。下に暗黄橙色土を谷側から主体部北端あたりまで敷き、その上に、暗黄橙色土、黄橙色土を盛っている。

第4工程

墳丘全体に盛土を施し、墳頂部に埋葬施設を築造して遺体を納める作業である。この段階の盛土は、谷側の下方約2.0mのところまで施され、墳丘全体を完成している。そして、上面から深さ約0.5m、長さ2.7mの細長い土壙を掘って、死骸を埋葬し、土壙を埋めてこの工程が終了している。

第5工程

この工程は、死骸を埋葬した後、上方に化粧土の盛土を施して古墳築造が完成するものである。

盛土の大半は流失していたが、第3工程までの墳丘斜面の角度からみて1mあまりの盛土があったものと推測され、墳丘上面の平坦面は一辺2.5m前後と考えられる。

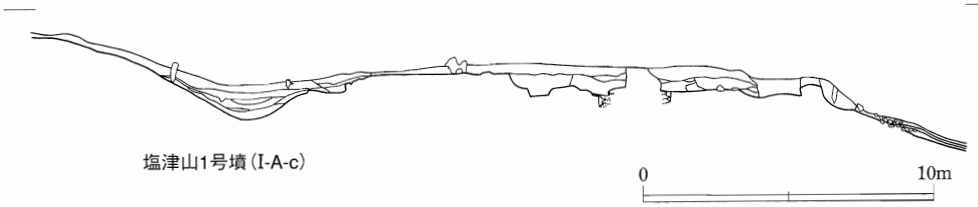
以上の工程で古墳が造られている。特に注目したいのは、墳丘の大半が盛土によって構成されており、端部にはブロック状の土留めが見られることである。墳丘の築造方法については、五反田古墳の調査報告書で池淵俊一氏が土堤状盛土について述べている他（11）、後期古墳については角田氏の論文がある（12）程度で、中期古墳については、ほとんど研究されていない。そのような状況なので、前期古墳から中期古墳にかけての墳丘の築造方法について改めて見てゆきたい。

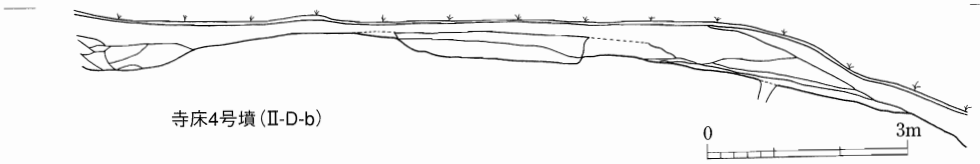
出雲地方における墳丘の築造方法について

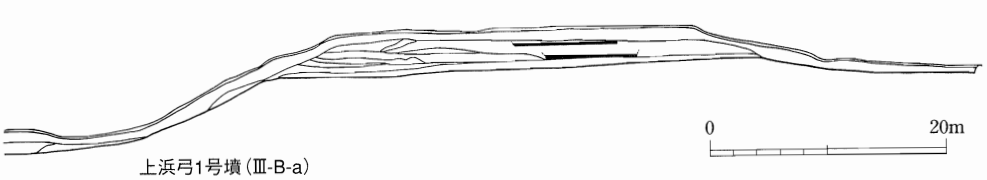
墳丘は主体部と盛土の関係から「Ⅰ」主体部が地山に掘り込んでいるもの。「Ⅱ」主体部が盛土から掘り込まれ地山まで達しているもの。「Ⅲ」主体部が盛土の中で納まるものの3つに分け、盛土方法として「A」普通の盛土、「B」水平になるよう谷部を厚く盛る方法、「C」盛り土の端をブロック状の土留めがあるもの、「D」土堤状盛土が見られるものの4つに分けた。さらに墳丘における盛土の割合について「a」50%以上、「b」33%以上、「c」33%以下に分けた。

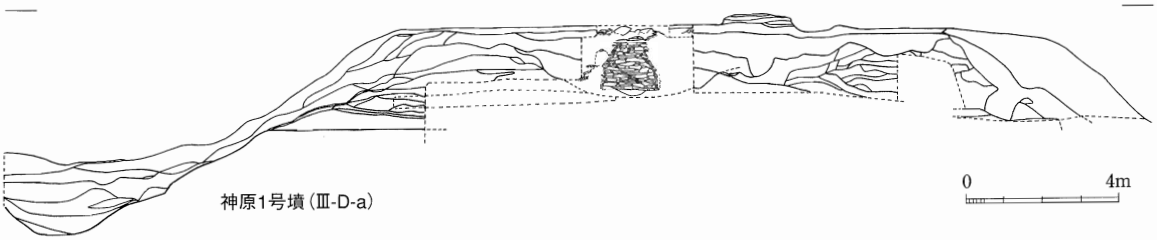
前期古墳の墳丘築造

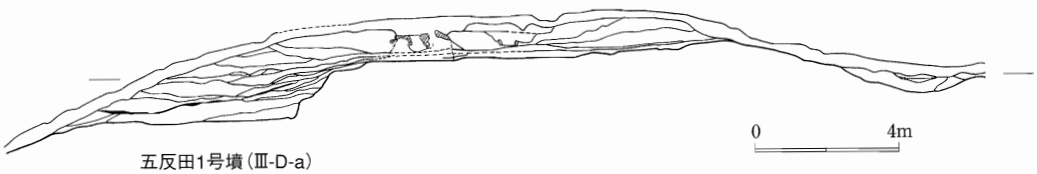
前期古墳は、地山を加工して墳丘を整え、主体部は地山に掘り込んでいるⅠ-Acが大半を占めるが、斐伊川中流域では、神原神社1号墳のように古い段階から盛土の多い古墳が存在する。この古墳は3.2mあまりの盛土があり、盛土中に主体部の竪穴式石室は築かれ、墳丘の端部に土堤状の盛土が見られるⅢ-Daタイプである（13）。また、前方後方墳の松本1号墳は、埋葬施設が盛土から掘り込まれ地山までたっしているⅡタイプで、33%以上の盛土を持っている（14）。安来市の大成古墳（15）、造山1号（16）、3号（17）などの竪穴式石室を持つ著名な前期古墳は、盛土の割合が低く、斐伊川中流域の前期古墳と様相を異にしているのは興味深い。出雲地方では、前期末に円墳が出現してくると、盛土の多い古墳が出雲全体に広がってくる。33%以上の盛土を持つ「b」タ



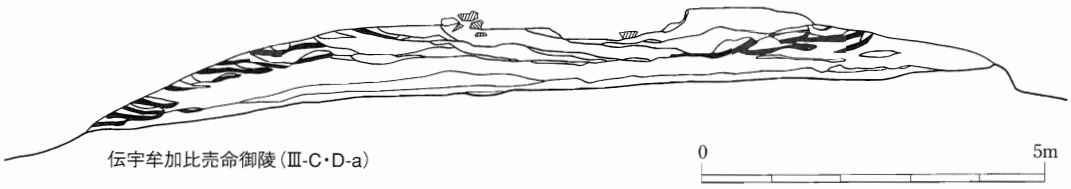


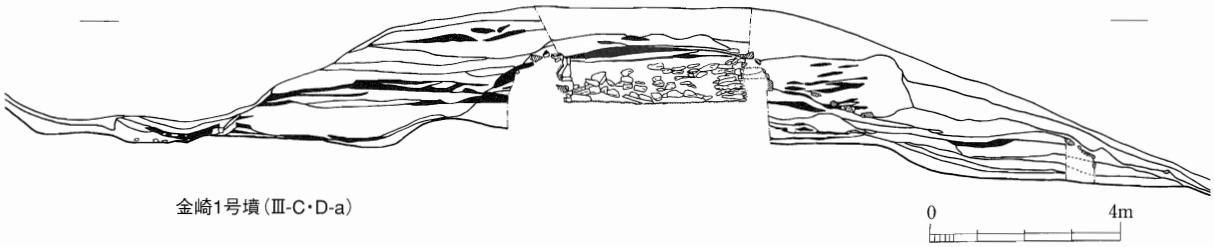


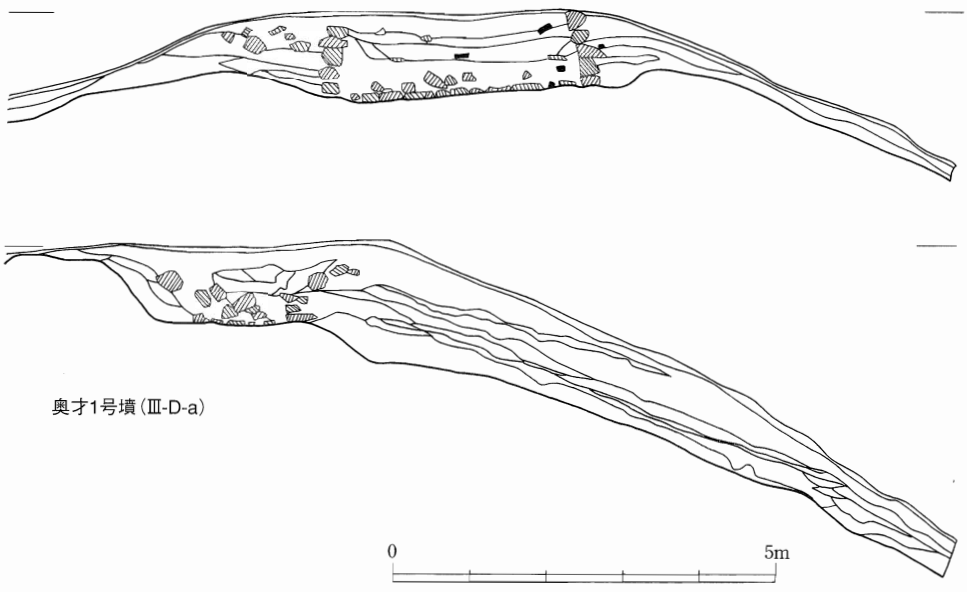




第81図　出雲地方における前期～中期古墳の墳丘築造方法 1







第82図　出雲地方における前期～中期古墳の墳丘築造方法２

第８表　出雲地方における前期～中期古墳の墳丘築造一覧表

古墳名	所在地	墳形	規模	時期	盛土方法	盛土率	主体部	備考
神原神社１号墳	雲南市	方墳	中	前期	Ⅲ－Ｄ(両方)	a	竪穴式石室	
大成古墳	安来市	〃	大	〃	Ⅱ	c	〃	
造山３号墳	〃	〃	大	〃	Ⅰ	c	〃	
松本１号墳	雲南市	前方後方墳	大	〃	Ⅱ	b	粘土槨２	
土井・砂３号墳	〃	方墳	小	〃	Ⅰ－Ａ	c	土坑１	
布志名大谷１号墳	松江市	〃	中	〃	Ⅰ－Ａ	c	土坑５	
塩津山１号墳	安来市	〃	中	〃	Ⅰ－Ａ	c	主体部５	
土井・砂１号墳	雲南市	〃	小	〃	Ⅰ－Ａ	c	〃	
釜代１号墳	松江市	〃	中	前期末	Ⅱ－Ｄ(両方)	b	粘土槨２	
小屋谷３号墳	〃	〃	小	前期	Ⅰ－Ａ	c	土坑２	
小屋谷１号墳	〃	〃	小	〃	Ⅰ－Ａ	c	土坑１	
吉佐山根１号墳	安来市	〃	小	〃	Ⅰ－Ａ	c	石棺３	
寺床１号墳	東出雲町	〃	中	〃	Ⅰ－Ａ	c	礫槨１土坑１	
五反田１号墳	安来市	円墳	中	前期末	Ⅲ－Ｄ(両方)	a	石室１その他２	
廻田１号墳	松江市	前方後円墳	大	〃	Ⅲ？	b		
上野１号墳	松江市	円墳	中	〃	Ⅲ－Ｄ(片方)	a	粘土１その他２	盛土溝で止める
斐伊中山２号墳	雲南市	長円墳	小	〃	Ⅰ－Ａ	c	土坑６	
熊谷１号墳	〃	方墳	〃	〃	Ⅰ－Ａ	c	土坑１	
〃　２号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－Ａ	c	土坑２	
大寺古墳	出雲市	前方後円墳	大	〃	Ⅲ	b	石室	
山地古墳	出雲市	不整形	小	〃	Ⅰ－Ａ	c	箱１土１礫１	
浅柄古墳	〃	不整形	〃	〃	Ⅰ－Ａ	c	粘土１礫槨１	
社日１号墳	松江市	方墳	〃	前期	Ⅰ－Ａ	c	土坑３	
奥才４号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－Ａ	c	土坑１	
〃　５号墳	〃	〃	〃	〃	〃	c	礫床１土坑１	
〃　６号墳	〃	〃	〃	〃	〃	c	土坑１	
〃　11号墳	〃	〃	〃	〃	〃	c	礫床１	
〃　12号墳	〃	〃	〃	〃	〃	c	礫床１土坑１	
〃　13号墳	〃	〃	中	〃	〃	c	礫床２箱石２	
〃　14号墳	〃	円墳	小	〃	〃	c	礫床２箱石２	
〃　17号墳	〃	〃	中	〃	〃	c	箱石２土坑２	
〃　１号墳	〃	？	小	中期末	Ⅲ－Ｄ(片方)	a	石室１	段切り２段
寺床２号墳	東出雲町	方墳	〃	〃	Ⅰ－Ａ	c？	土坑１	
〃　３号墳	〃	〃	〃	中期	〃	c？	〃	
〃　４号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－Ｄ(片方)	b	〃	
古曽志１号墳	松江市	前方後方墳	大	中期末	Ⅲ－Ｄ「くの字盛土」	b	礫槨１	
塚山古墳	〃	方墳	中	〃	Ⅲ－Ａ	b	礫床１	
土井13号墳	〃	〃	〃	中期末	Ⅱ－Ａ	b	土坑１	
増福寺20号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅲ－Ｄ(片方)	a	土坑１	
〃　21号墳	〃	〃	〃	？	Ⅲ－Ｂ	a	土坑１	
長砂１号墳	〃	〃	〃	中期末	Ⅲ－Ｄ(両方)	a	土坑１	
〃　４号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅲ－Ｄ(両方)	a	〃	
〃　５号墳	〃	円墳	〃	〃	Ⅲ－Ａ	a	〃	
〃　６号墳	〃	方墳	〃	〃	Ⅲ－Ｄ(片方)	a	〃	
〃　７号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅲ－Ｄ(中央窪み)	a	〃	
〃　８号墳	〃	円墳	〃	〃	Ⅲ－Ｄ(中央窪み)	a	〃	墳丘直下の地山段状にカット
〃　９号墳	〃	方墳	〃	〃	Ⅲ－Ｄ(両方)	a	〃	
〃　10号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅲ－Ｂ	a	〃	
〃　13号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－Ａ	a	〃	
〃　14号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅲ－Ｄ(両方)	a	〃	
廻田古墳	〃	円墳	〃	中期末	Ⅲ－Ｄ(両方)	a	未検出	
金崎１号墳	〃	前方後方墳	中	中期後半	Ⅲ－Ｃ､Ｄ(両方)	a	石室１	主体部の下方、台状に地山カット
喰ヶ谷１号墳	〃	方墳	小	中期末	Ⅰ－Ｄ(片方)	b	箱石１	
山崎古墳	〃	〃	〃	中期後半	Ⅱ－Ａ	b	土坑１	
細曽１号	〃	〃	〃	中期	Ⅰ－Ｄ(片方)	b	土坑１	
小丸山１号墳	〃	〃	〃	中・？	Ⅰ－Ｄ(両方)	b	石棺１	
〃　２号墳	〃	〃	〃	中・？	Ⅰ－Ａ	b	礫床１	
上浜弓１号墳	〃	〃	中	中期	Ⅲ－Ｂ	a	土坑１	
〃　９号墳	〃	〃	小	〃	Ⅲ－Ａ	a	土坑１	
観音寺１号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－Ａ	a	土坑１	
〃　２号古墳	〃	〃	〃	中期末	Ⅰ－Ａ	a	土坑１	
鍛冶谷１号古墳	〃	〃	〃	〃	Ⅱ－Ａ	a	土坑１	地山楕円形カット
二名留３号墳	〃	円墳	〃	中期	Ⅲ－Ｄ(両方)	a	石棺１	
岩屋５号墳	〃	方墳	〃	中期末	Ⅱ－Ａ	a	石棺３	地山窪みカット
敷居谷３号墳	〃	〃	〃	後期初頭	Ⅲ－Ａ	a	土坑１	地山窪みカット
〃　４号墳	〃	〃	〃	中期末	Ⅲ－Ａ	a	土坑１	
〃　５号墳	〃	方墳	〃	〃	Ⅲ－Ａ	a	土坑１	
〃　２号墳	〃	〃	〃	不明	Ⅲ－Ａ	a	土坑１	
奥山１号墳	〃	方墳	〃	中期後半	Ⅰ－Ａ	c？	土坑１	
〃　２号墳	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－Ａ	c？	土坑１	
〃　３号墳	〃	円墳	〃	〃	Ⅲ－Ｂ	b	土坑１	
〃　５号墳	〃	方墳	〃	〃	Ⅰ－Ａ	c？	土坑２	
米坂３号古墳	〃	方墳	〃	中期末	Ⅲ－Ａ	a	土坑１	
〃　５号古墳	〃	〃	〃	〃	Ⅲ－Ｄ(片方)	a	土坑１	

古墳名	所在地	墳形	規模	時期	盛土方法	盛土率	主体部	備考
米坂７号	松江市	方墳	小	?	Ⅲ－D(片方)	a	土坑１	
〃 12号	〃	〃	〃	中期末	Ⅲ－D(片方)	a	土坑１	
伝宇牟加比売命御陵	〃	〃	〃	〃	Ⅲ－C、D(両方)	a	石郭１	
中山２号	〃	〃	〃	〃	Ⅲ－B、C	a	土坑２	広範囲段切
論田４号	〃	円墳	〃	後期初頭	Ⅲ－C	a	土坑１	
八色谷４号	〃	方墳	〃	中期末	Ⅲ－C、D(両方)	a	土坑１	１ｍ間隔縦張石　３段階盛土
宮谷１号	安来	長円	〃	?	Ⅲ	?	土坑１	
小馬木２号	〃	円墳	〃	中期	Ⅲ－D(片方)	a	土坑１	地山整形
樋ノ木１号	松江市	方墳	〃	?	Ⅲ－D(片方)	a	土坑１	基部平に整地
大堤Ⅱ１号	〃	〃	〃	中期末	Ⅲ－A	a	土坑１	
西谷15号	出雲市	〃	〃	中期後半	Ⅲ－A	a	土坑１	
丸子山１号	奥出雲町	円墳	〃	〃	Ⅲ－A	b	土坑１	
〃 ２号	〃	〃	〃	〃	Ⅰ－A	b	土坑１	
上野２号	松江市	方墳	〃	〃	Ⅱ－A	a	土坑１	
〃 ４号	〃	〃	〃	前期末?	Ⅱ－A	b	土坑２	
足頭３号	〃	円墳	〃	中期	Ⅰ－A	c ?	土坑３	

規　模　小　20ｍ以下　　中　20ｍ～40ｍ　　大　40ｍ以上
主体部の掘り込み　Ⅰ　地山　　Ⅱ　盛土・地山　　Ⅲ　盛土
盛土方法　A　普通の盛土　　B　水平盛土　　C　ブロック止め　　D　土堤状盛土
盛 土 率　a　50%以上盛土　　b　33%盛土　　c　33%以下盛土

イプの古墳には、前方後円墳の大寺１号墳（18）、廻田１号墳（19）、円墳状の上野１号墳（20）、釜代１号墳（21）、五反田１号墳、方墳の奥才６号墳がある。これらは、奥才６号墳を除きいずれも20ｍ以上の墳丘規模を持ち、五反田１号墳、上野１号墳、釜代１号墳で土堤状盛土が見られ、上野１号墳では、土止め用と思われる円形の溝が存在している。このように盛土の多い古墳は、斐伊川中流域の前期古墳で出現し、前期末になって円墳が造られるようになって出雲全体に広がっている。さらに、盛土が流失しないよう端に土堤状盛土を施しているものが古い段階から存在し、多くの古墳に採用されているのは注目される。なお、土堤状盛土は、西日本の古墳で多く採用されていることが知られている（22）。

中期古墳の墳丘築造

前期古墳では、大形古墳に盛土の多いものが見られたが、中期になると小形古墳の大半がａないしｂタイプになり、盛土方法も多様化してくる。Ａ～Ｄ以外の盛土方法が前方後方墳の古曽志１号墳の前方部で見られる（23）。ここの土層は、「く」の字形を呈しており、下方は、後方部方向に約25度の傾斜を付けて土を盛り、その上方は、逆に前方部の方向に約25度の傾斜つけて盛っている。さらに、この時期になると、盛土の流失防止のため地山を加工したものが出てくる。奥才１号墳は、斜面の低い部分の地山を「Ｌ」字形に段切りを行っており、長砂８号墳、岩屋５号墳（24）、敷居谷３号墳では、墳丘中央部基部が凹むようにカットされている。その他、金崎１号墳（25）や鍛冶屋谷１号墳のように、主体部下方の基部を台状に地山をカットしたものもある。５世紀中葉になると小規模な方墳から成る古墳群が盛んに造れるようになるが、これらの古墳のほとんどが１／３以上の盛土を持ち、盛土中に主体部が設けられている。盛土方法は、Ａの普通盛土が半数あまりを占め、次に多いのが土堤状盛土のＤで、ブロック状土留めのＣ、水平盛土のＢが続く。ＣはＤやＢと併用されているものが多い。南外２号墳のＣ盛土は、伝宇牟加比命御陵で顕著に見られ、（26）他に、中山２号墳（27）、八色谷４号墳（28）、論田４号墳（29）、金崎１号墳等がある。このように中期になると、盛土比率が高くなり、盛土が崩壊しないよう色々な工夫が施こされている。

以上、古墳時代前期から中期にかけての墳丘盛土方法について見てきたが、南外２号墳は、出雲地方の中期古墳に多く見られる盛土方法によって造られており、中期末の具体的な築造方法を知る貴重な古墳である。

2．勝負遺跡の調査

今回の調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡１、弥生時代後期の竪穴住居跡３、古墳時代中期の竪穴住居跡１をはじめ、段状遺構、溝状遺構、土坑等を検出したが、勝負遺跡は昭和56年、平成元年にも松江道路の建設に伴い発掘調査を行っている（30）。この調査地は、今回の調査地の北側に接しているので、過去の調査結果をも踏まえ、遺跡全体の概要を述べる。

勝負遺跡全体の概要

勝負遺跡は３次にわたる発掘調査で約8800㎡あまりを実施し、縄文時代から中世にかけての遺物、遺構が見つかっている。縄文時代の遺構については、今回の調査で西側尾根付近から竪穴住居跡や土坑が初めて見つかった。住居跡は方形を呈する縄文時代後期のもので、きわめて残りがよく、建物の構造が分かるとともに、住居内から土器及び石器、石材がまとまって出土した。平野部における縄文時代の住居については検出例が少なく、当時の生活を知る上に貴重なものである。弥生時代の住居跡については、今回の調査で新たに２棟見つかり計９棟の存在が明らかになった。築造時期は草田１～３期で（31）、２．３期が中心である。これらの住居は、いずれも尾根から若干下がった斜面に造られており、建て替えを行ったと思われるものが２棟ある。建物の間隔は25ｍ～40ｍ離れて馬蹄状に存在しており、弥生時代後期の集落の在り方を知る上に欠かせないものである。一方、古墳時代中期の住居跡は、谷部の緩やかな斜面に密集して造られており、16棟あまりが見つかっている。このように弥生時代後期と古墳時代中期の住居跡が場所を異にして造られていることは興味深い。

また、弥生住居跡の中には甕の出土状況から廃棄時に祭祀を行ったと思われるものが２棟ある他、焼失住居跡１棟、ガラス製の管玉が見つかったもの１棟、斜面の上方に溝を伴う住居跡が４棟あり注目される。古墳時代中期住居跡は壁際に炉跡状の施設を伴うものが２棟あった。そのうち１棟には、玉作工房跡の松江市大角山遺跡で見つかっている（32）方形の土坑が数基存在していた。

その他の遺構としては単独の溝状遺構（古墳時代２，時期不明２）、古墳時代の掘立柱建物１、段状遺構（弥生時代１，古墳時代４，奈良平安時代２、時期不明２）等がある。

次に竪穴住居跡について時代ごとに検討してみたい。

縄文住居跡について

縄文住居から出土した遺物及び築造時期について

縄文住居跡から検出した土器は、３㎝前後の小破片を入れて1223点あまりあるが、その内訳は有文土器21点、精製土器33点、底部片12点、口縁部片24点、胴部の粗製土器片1133点で、粗製土器片が圧倒的に多かった。有文土器には、縁帯文を持つものが４点出土している。それらは肥厚した突起を持つものや、口縁部外側を肥厚させたもので、突起に垂下沈線、円形刺突文、口縁部外側に沈線や刻目文の他、縄文、巻貝による刺突文が施されている。その他の有文土器には緩やかな「Ｓ」字形屈折部に刻目文が廻る浅鉢、口縁部や胴部に縄文を施したものなどがある。

島根県における縄文後期の編年研究は、1930年代に佐々木謙・小林行雄氏によって崎ヶ鼻式が設定され、崎ヶ鼻式→権現山式の編年を提唱されたことから始まる（33）。その後、1980年代後半になって、千葉豊氏が崎ヶ鼻式をⅠ式とⅡ式に細分化し（34）、角田徳幸氏は、ＢＰ3600±75の数値が出ている三瓶太平山降下火山灰の上下にある黒色土から出土した後期の土器が彦崎Ｋ１・福田ＫⅡ・中津と彦崎Ｋ２・福田ＫⅢに分かれることを発表した（35）。さらに柳浦俊一氏は、2000年

に他地域の既存形式を参照して、縁帯文土器を布勢式→崎ヶ鼻式→四元式並行期→彦崎ＫⅡ並行期の４つに編年し（36）、千葉氏は、崎ヶ鼻式と権現山式との間に沖丈式を設定し、権現山式を古、新の２つに分けた（37）。このように近年、縄文後期の土器編年について検討が加えられてきているが、勝負遺跡から出土した縁帯文は器形や突起・文様等からみて崎ヶ鼻式になるものと思われる。

粗製土器について

５㎝以上の粗製土器片373点について調整技法を検討した結果、二枚貝による貝殻条痕を持つ破片は５点あまりしかなく極めて少なかった。それに対し、断面が浅いＵ字形を呈する横ナデが73点、幅1.3㎝前後の断面が平らな帯状のナデが127点あった。勝負遺跡より古い福田Ｋ２の面白谷住居跡でも二枚貝による条痕が0.66％しか存在していない（38）。両遺跡の粗製土器は、特定の工人によって作られた土器片が住居跡内からまとまって検出されたため、かたよった数値がでた可能性もある。そこで、他の遺跡から出土した貝殻条痕を持つ粗製土器を見てみると、面白谷遺跡とほぼ同じ時期である大田市温泉津町中祖遺跡では、条痕率が68％に及び（39）、出雲市三田谷Ｂ区の中津～福田Ｋ２の包含層から出土した粗製土器は60％、彦崎Ｋ２～凸帯文の沢田式が出土したＡ区は17％（40）、凸帯文だけの出雲市保知石遺跡では６％であった（41）。このように福田Ｋ２段階では、松江市の面白谷遺跡を除き、条痕率が50％を越えている遺跡が多いが、この時期から貝殻条痕の減少傾向が出始めるようになると思われる。それが、縁帯文の時期に減少化が加速し、晩期になるとかなりの割合で少なくなっていくようである。

なお、勝負遺跡出土の断面が浅いＵ字形を呈する横ナデは、巻き貝によって施文されたものと思われ、面白谷でも巻き貝によるナデと推測されるものが11.8％ある。また、出雲山間部の奥出雲町原田遺跡２区では、縁帯文～凹線文の時期の土層から巻貝条痕がかなりの割合で出土している（42）ことから粗製土器の器面調整の主体は、二枚貝条痕→巻き貝条痕→帯状平ナデと移っていったものと推測される。後期から晩期にかけての粗製土器の調整には、その他、ナデやケズリ等があり、凸帯文の時期になると弥生土器と同じハケ目もでてくるようになる。このように器面調整は多様化しているが、これは工人によって個性がでやすい作業であることに起因している可能性があり、そのために変化が鈍くなっているとも考えられる。今後は遺跡ごとに詳細な検討をしていくことが必要である。

第９表　ＳＩ０１出土粗製土器一覧表

内面＼外面	巻貝による横ナデ	帯状の平ナデ	二枚貝条痕	横ナデ	不明	計
巻貝による横ナデ	1	3		17	14	35
帯状の平ナデ	11			91		102
二枚貝 条痕					3	3
横　ナ　デ	31	18		37	23	109
不　　明	6	4	2		112	124
計	49	25	2	145	152	373

石器について

勝負遺跡から出土した石器には、石鏃、石錘、扁平打製石斧、磨製石斧、抉り入り石器、石皿、磨石、石錐、楔形石器等があり、生活に必要な石器が揃っていた。出雲地方の縄文時代後晩期の住居跡からは、13遺跡26棟から石器が出土している。その内訳を見てみると石鏃・磨製石斧・石錘が比較的多く、打製石斧、磨石、敲き石、凹み石が続く。勝負遺跡のように生産道具と生活用具が揃っているのは縁帯文土器の時期である五明田遺跡（43)、林原遺跡（44）だけである。五明田遺跡では石鏃、磨製石斧、打製石斧、石錘、スクレーパー、林原遺跡では石鏃、抉り入り石器、石錘、磨製石斧、石錐、楔形石器、磨石が出土している。農耕に関するものと思われる石器は、林原遺跡で収穫具と考えられている抉り入り石器があるが、扁平打製石斧は出土していない。出雲地方における扁平打製石器は、後期前葉に山間部で出現するが、後期後葉には一遺跡から多量に出土するようになり、晩期になると大型化するとともに主に平野部から出土するようになり、水田耕作との関わりが推測される。また、抉り入り石器等の収穫具は、縁帯文土器の時期に山間部で現れ、晩期に出土例が増してくる。

このように、勝負遺跡は平野部で最も古い農耕用の石器が出土した遺跡として注目されるものである。勝負遺跡の縄文住居に住んでいた縄文人は、少なくとも一定の期間、ここで生活することの出来る道具持ち、この住居周辺で農耕を行っていたものと思われる。ちなみに、勝負遺跡下方の低湿地に存在する石台遺跡からは、晩期の炭化米が出土しており（45)、出雲地方の中で最も早い時期に稲作が行われたところでもある。

また、住居跡からは黒曜石の剥片204点、390ｇ、サヌカイトの剥片21点29.1ｇが出土した。黒曜石の剥片のなかには接合できるものが２点あった。その剥片は剥離の方向が一定でないことから、石材を回しながら石材を取っていたものと思われ、この集落で石器を製造していたことを伺わせるものである。

島根県における縄文後晩期の住居跡について

島根県における縄文時代後晩期の住居跡は、15遺跡31棟あまりが確認されているが、それらは山間部12遺跡28棟、平野部３遺跡３棟で、山間部が圧倒的に多い。山間部の住居跡には、掘方がなく、柱列や炉跡で住居跡と推定しているものが５遺跡11棟ある。一遺跡で３棟以上が検出されている奥出雲町下鴨倉遺跡（３棟）（46）・原田遺跡（５棟)、飯南町五明田遺跡（４棟)、邑南町郷路橋遺跡（６棟）（47)、は、五明田遺跡を除き掘り方の持たないものが多い。これらの集落は頻繁に建替えを行っていたものと思われ、一遺跡１・２棟が基本であったと考えられている（48)。遺跡の立地は、山間部が川沿いの河岸段丘に営まれたものがほとんどであるのに対し、平野部では、丘陵の尾根から少し谷部に下がった緩やかな斜面や丘陵先端部に存在している。また、平野部の住居跡は、後期になって初めて現れるが、これらの集落は、海岸部と山間部の距離は20㎞あまりしか離れていないので、季節などによる周期的、回帰的な住居形態も考慮することが指摘されている（49)。ただ、平野部の住居跡は、山間部のものと比べ造りがしっかりしており、生活に必要な石器がそろっている住居跡が存在していることが気に掛かるところである。

住居跡の平面形は、円形ないし不整円形を呈するものが21棟、方形10棟である。その内、掘方を持つものは、前者が約半分の10棟であるのに対し、後者はヨレ遺跡ＳＢ２（50）を除いてすべてである。このように方形の住居跡には、掘方を持っているものが多く、後期なって方形プランの竪穴住居や出入り口を持つ柄鏡型を呈する住居跡が出雲地方で現れてくる。方形の竪穴住居跡は、東

日本からの影響を受けて出現したものと考えられており（51）、柄鏡型を呈する住居跡も関東地方に類例がある（52）。奥出雲地方では、この時期に東日本の文化である土偶、扁平打製石斧、堀の内式土器等が出土していることから見ても、東日本の影響でこのような住居跡が現れてきたものと考えられる。

次に柱について見てゆきたい。後期の建物は６本以上の柱を持つものが大半を占め、掘方のある住居跡は壁に沿って複数あるものと、炉のまわりに多角形に存在するものがある。５ないし６角形を呈する主柱は、後期から出てくるが、東日本では中期になってから類例が増えるようである。また、柱が多角形に存在する建物の屋根構造は、棟木が存在していたのか、テント形の尖ったものか明らかでない。ただ、方形の住居跡は、棟木を持つ構造の屋根であった可能性が高く、面白谷遺跡のように壁に沿って12本以上の柱が方形に廻るタイプと御領田遺跡のように４本柱、家の後Ⅱ遺跡の６本柱になるもがある。炉跡は30例中、室内炉が設けられているものが９件で、その内訳は石囲炉２、地床炉６、掘り込み炉１である。地床炉が多く、後期になっても住居内に炉を設けるものが１／３以下に留まっているのは興味深い。

勝負遺跡の縄文住居跡について

このように島根県下の縄文住居跡は、建物構造についてほとんど検討されていないのが現状である。勝負遺跡ＳＩ０１の住居跡は、方形の掘方に主柱、壁柱、掘込炉が揃っているもので、数少ない建物構造が検討できるものとして注目される。掘方は「コ」の字形を呈し、斜面前方部の壁は存在していなかった。もともと有ったものか無かったものかは明らかでないが、斜面前方には入り口の庇の柱と考えられる２つの柱穴がある。奥壁はやや円弧状に張りだし、両壁は並行で、隅はやや丸い。規模は3.62ｍ×2.6ｍ以上で、奥壁の高さは40㎝あまりである。

床面には９本あまりの柱穴を検出したが、主柱はやや不正形の６角形になるものと思われる。柱間は1.4ｍ～1.8ｍで、角は奥壁中央部と入り口方向にあり、両側は壁とほぼ並行に存在していた。角に当たる２本の柱は、棟木を架けた棟持柱になるものと考えられる。壁柱は径15㎝～20㎝、深さ３㎝前後で、奥壁と西壁に15㎝～35㎝の間隔で並んでいた。この小さな柱痕は、土屋根の垂木尻跡や壁の補強材痕等が考えられるが、土屋根の痕跡が認められなかったことから、壁になる可能性が高い。このことから、この住居跡は、棟持柱を持ち、妻側は梁から垂木が伸び、壁と接している構造を持つ壁立式竪穴住居になるものと思われる。炉跡は、60㎝×80㎝の不整形な掘り込み炉である。この炉は坑を掘った後に、明灰黄褐色砂質土を20㎝あまり埋め、その上に赤橙色粘砂土を敷き、その周辺に灰褐色の粘質土で固めて造っていた。また、竪穴の外側0.4ｍ～1.0ｍと1.3ｍ～1.8ｍのところには、堀方を取り囲むように２重の柱列が廻っていたが、こられは、柵のような性格を持つものと思われる。

また、ＳＴ０１の南側尾根上から７角形につながる柱列を検出した。形状はやや縦長で、規模は3.6ｍ×4.6ｍあまりで、柱間は1.2ｍ～1.8ｍを測る。堀方はないが縄文時代の住居跡になるものと思われ、勝負遺跡では、方形プランの竪穴住居１と多角形の平地住居１の２棟が存在していることが分かった。なお、平地住居は遺物が出土していないが、勝負遺跡では、縄文後期のものしか見つかっていないので、この住居跡も後期のものになると考えられる。

勝負遺跡の建物構造について検討した結果、ＳＴ０１は、壁立式竪穴住居になることが分かった。このような構造をもつ縄文住居は、県内では出土例がなく、中国地方でも類例のないもので貴重なものである。島根県では、福田Ｋ２の時期に方形の竪穴住居が面白谷遺跡で出現し、多角形の主柱を

持つ住居は、縁帯文の時期に家の後Ⅱ遺跡（53）や勝負遺跡で見られるようになる。この時期には、出雲平野部でも住居跡が新たに作られるようになるとともに、扁平打製石器の普及や粗製土器の器面調整の変化・土偶の出現等大きな変化が見られ、縄文社会が大きく変わって行く変換期にあたる。その大きな変換期に重要な役割をはたしているのは農耕である。農耕については、プラントオパール分析結果や石器などから出雲山間部では少なくとも後期中葉には雑穀類の栽培を行っているという論文も発表されており（54）、最近、福田Ｋ２の時期である面白谷遺跡の住居跡から炭化米が出土し注目されている。このように、縄文後期の住居跡が、以前のものと比べ大きく変わってきている背景に農耕の普及が関与しているものと推定できる。

また、近年調査を行った林原遺跡や家の後Ⅱ遺跡では後期の住居跡が見つかるとともに、林原からは７点の土偶も見つかっており、最近になって続々と新しい資料が見つかってきている。今後は農耕の開始や建物構造それに九州ならびに東日本の影響等を総合的に検討し、縄文社会の現状を明らかにすることが必要である。

第10表　島根県における縄文時代後晩期の住居跡一覧表（報告書を参照して作成）

所在地	遺跡名	時期	名称	プラン	住居の根拠	主柱	主柱の形状	掘り込み	屋内炉	備考
出雲市	御領田	後期	竪穴住居址	隅丸方形	掘方・柱穴	2以上	方形？	あり		
飯南町	五明田	後期	SI01	円形	掘方・柱穴	20以上	円形	あり		
〃	五明田	後期	SI02	柄鏡形	〃	7	不明	あり		
〃	五明田	後期	SI03	柄鏡形	〃	8以上	円形	あり		
〃	五明田	後期	SI04	円形	〃	7	不明	あり		
〃	神原Ⅱ	後期	SI01	方形？	柱列・炉	9以上	長方形			
〃	貝谷	後期	SI03	不正形	掘方・焼土		不明	あり	地床炉	
〃	貝谷	後期	SI02	方形	掘方（Ｌ字）焼土		不明	あり	地床炉	
益田市	前田中	後期	SI	柄鏡形	掘方	8以上	不明	あり	？	
奥出雲町	下鴨倉	後期	柱列プラン２	円形？	柱列	4以上	円形			
〃	下鴨倉	後～晩期	柱列プラン３	円形？	柱列	3以上	円形			
〃	下鴨倉	晩期	柱列プラン１	円形？	柱列	7以上	円形			
邑南町	郷路橋	晩期	SI05	円形	柱列	10以上			石囲炉？	
〃	郷路橋	晩期	SI04	楕円形	柱列	4以上	円形			
〃	郷路橋	晩期	SI03	隅丸方形	掘方・柱	4以上	円形	あり		
〃	郷路橋	晩期	SI02	楕円形	掘方		不明	あり		
〃	郷路橋	晩期	SI01	楕円形	柱列	約20	円形			
益田市	水田ノ上Ａ	晩期	方形区画遺構	方形	方形溝		不明	あり		
〃	ヨレ	晩期	SB2	方形	柱列	10あまり	方形			
〃	ヨレ	晩期	SB1	円形？	掘方・柱穴	10あまり	円形	あり		
〃	イセ	晩期	SB03	楕円形	掘方	10以上	不明	あり		
松江市	面白谷	後期	SI07	方形	掘方・炉	12以上	方形	あり	地床炉	
〃	勝負	後期	SI01	方形	掘方・炉・柱	4	方形	あり	堀込炉	
奥出雲町	林原	後期		不整円形	掘方・炉			あり	あり	
〃	原田	晩期	２区SI01	円形	掘方・炉	6以上	６角以上	あり	地床炉	
〃	原田	晩期	２区SI02	円形？	柱列・炉・床	6本	６角形		地床炉	
〃	原田	晩期	２区SI03	長円形	掘方		不明	あり		
〃	原田	晩期	１区ＳＩ０１	円形	柱列	10以上	円形			
〃	原田	晩期	１区ＳＩ０２	円形	柱列	6以上	円形			
〃	林原	後期	SI01	不正円形	掘方		不明		地床炉	
出雲市	家の後Ⅱ	後期	SI01	方形	掘方・炉	6本	５角か６角	あり	石囲炉	

弥生時代の竪穴住居跡

竪穴住居の形態について

勝負遺跡は、３次にわたる発掘調査で弥生時代後期の草田１～３期（55）の竪穴住居跡が９棟検出された。これらは、谷をはさむ二つの尾根下緩斜面に25ｍ～40ｍの間隔で造られていた。草田１期の住居跡は、西側尾根の先端部に築かれている1992年度調査のＳＩ０１で、その他は草田２・３期にあたり、ほぼ同時期である。また、勝負遺跡の西側に存在する石台遺跡からは、弥生時代中期後半～後期初頭の竪穴住居が見つかっており、集落が西の丘陵から東側の丘陵地に移ってきているものと思われる。住居跡の形態は、隅丸方形７棟、五角形１棟、６角形１棟で、竪穴の上方に溝を伴うものが６棟ある。形態については、高橋智也氏が検討しているように中期後葉から古墳時代前期にかけて概ね、円形→隅丸方形・多角形→方形に重複しながら移っていったと思われる（56）が、石台遺跡の円形から勝負遺跡の隅丸方形・多角形への変遷は矛盾するものではなく、後者は弥生時代後期の様相を示しているものである。また、竪穴住居に溝を伴うものは、出雲地方の東部で多く見られ、最も古いものは中期後葉の松江市石田遺跡で（57）、後期なると数が増え、古墳時代に入ると消滅する。いずれも山側に溝が廻り、半円形を呈するものが多い。

集落の形態について

次に集落の形態について検討してみたい。出雲平野では中期中葉から環壕集落が出現し、古墳時代初頭まで続くことが知られているが（58）、ここでは、出雲地方東部および山間部の集落について見てゆきたい。この地域では、安来市塩津丘陵遺跡群及び(59)、雲南市北原本郷遺跡の集落について変遷が検討されている程度で（60）、集落形態については、ほとんど研究されていないのが現状である。それは、住居跡の大半が遺跡の一部から見つかっているとともに、時期不明の住居跡も数多く存在しているためである。ところが、最近、ダム建設等に伴う大規模な調査が行われてきているので、築造時期が明確で、５棟以上が見つかっている遺跡を対象に集落形態を検討する。

この地域では、弥生時代中期～後期の住居跡は、現在、50あまりの遺跡で確認されているが、５棟以上見つかっている遺跡は17遺跡である。これらの住居跡は、いくつかのグループによって形成された集落（Ａ型集落）概ね、15ｍ以上離れて住居が存在する集落（Ｂ型集落）、各住居跡が概ね、15ｍ以内に存在する集落（Ｃ型集落）があり、Ａ型集落のグループには、密集しているもの（ｃ形態）と散在しているもの（ｂ形態）がある。

出雲地方で、もっとも多くの住居跡が検出されている安来市塩津丘陵遺跡群は、42棟の弥生時代住居跡の他、段状遺構、掘立柱建物が数多く見つかっている大規模な遺跡である。この遺跡群では、草田２の時期に、70m～90ｍ離れて３棟が存在しているＢ型集落が最初に造られ、そして、草田４の時期になると５棟のグループと160ｍ離れた１棟が存在するようになる。それが、草田５の時期には、５つのグループからなる計28棟の竪穴住居が造られ、一気に集落が巨大化してくる。グループは、ｂ形態３、ｃ形態２で、それらは、いずれも斜面上に築かれている。そして、不思議なことに古墳時代に入ると集落は、消滅してしまう。このように、塩津丘陵遺跡群では、後期中葉から末期にかけてＢ型集落→小規模なＡ型集落→大規模なＡ型集落に変遷している。

その他、集落形態の変遷が分かる遺跡としては、飯南町門遺跡（61）、雲南市垣ノ内遺跡がある(61)。飯南町門遺跡では、中期後半に８棟からなるＢ型集落が存在し、後期になるとＡ型集落（２Ｇｂ・ｃ形態）に移っている。また、垣ノ内遺跡は６棟のＡ型集落（３Ｇｃ形態）が中期後半に出現し、後期になるとＣ型集落に変遷している。

次ぎに一形態の集落を見てみると、A型集落は、中期前葉～中葉の雲南市北原本郷遺跡（２Ｇｂ・ｃ形態)、中期後半の松江市田和山遺跡（４Ｇｃ形態)、後期後半～末の飯南町板屋Ⅲ遺跡（３Ｇｃ形態)、後期の安来市子汐手遺跡（3Ｇｃ形態）等で存在している（62)。B型集落は、松江市福富Ⅰ遺跡（63）で見られる。この遺跡は草田２の竪穴住居８棟が２つの尾根にまたがって「U」字形に10ｍ～80ｍの間隔で存在していた。密集しているC型集落は、中期後半～後期初頭の松江市石台遺跡、後期前葉～中葉の安来市門生黒谷遺跡、後期前葉～後葉の飯南町森遺跡等がある（64)。なお、後期後葉の松江市野津原Ⅱ遺跡は、２棟が40ｍあまりの間隔で築かれていたが（65)、このような１棟ないし２棟からなる小規模な集落も存在していたものと思われる。

出雲地方における弥生時代の集落跡は、出雲平野の環壕集落の他、A型集落、B型集落、C型集落が中期の段階から存在していることが分かった。弥生前期の住居跡は、寺床遺跡や下山遺跡等からそれぞれ１棟が見つかっているが（66)、本格的な集落は、中期前半に北原本郷遺跡でA型集落が出現し、それが、中期後半になると山間部や平野部でB型集落、C型集落も現れ、各地で集落が造られるようになる。ただ、安来平野における中期の集落は、今のところ明確でないが、笠松遺跡のトレンチ調査で４棟の竪穴住居が見つかっていることから（67)、この地域にも中期段階に本格的な集落が存在しているものと思われる。このように、出雲東部及び山間部では、中期の段階で色々な集落形態が存在しているが、後期後半になるとA型集落に集約される。それは，集落が集中化し、規模が大きくなる傾向を示している。また、山間部では中期後半から後期前半にかけて継続した集落が多くみられるが、平野部では、中期の集落が後期に続くものは少なく、様相を異にしていることは興味深い。中期から後期にかけては、青銅器を使用している弥生共同体の社会から「くに」が現れてくる社会へ変わってくる時期にあたり、それらの社会的要因によってそれぞれの地域毎に異なった集落を形成していったものと推測される。今後は、集落の形態や変遷を詳細に検討することによって、出雲地方における弥生社会の実態が明らかになるものと思われる。

以上出雲東部を中心に弥生時代中期から後期にかけての集落の形態及び変遷を見てきたが、勝負遺跡の弥生後期前葉の集落は、15ｍ以上離れて住居が存在するB型集落に含まれ、松江市福富Ⅰ遺跡と同じ尾根筋に「U」の字形に竪穴住居が存在しているもので、時期的にも福富Ⅰ遺跡と同じである。

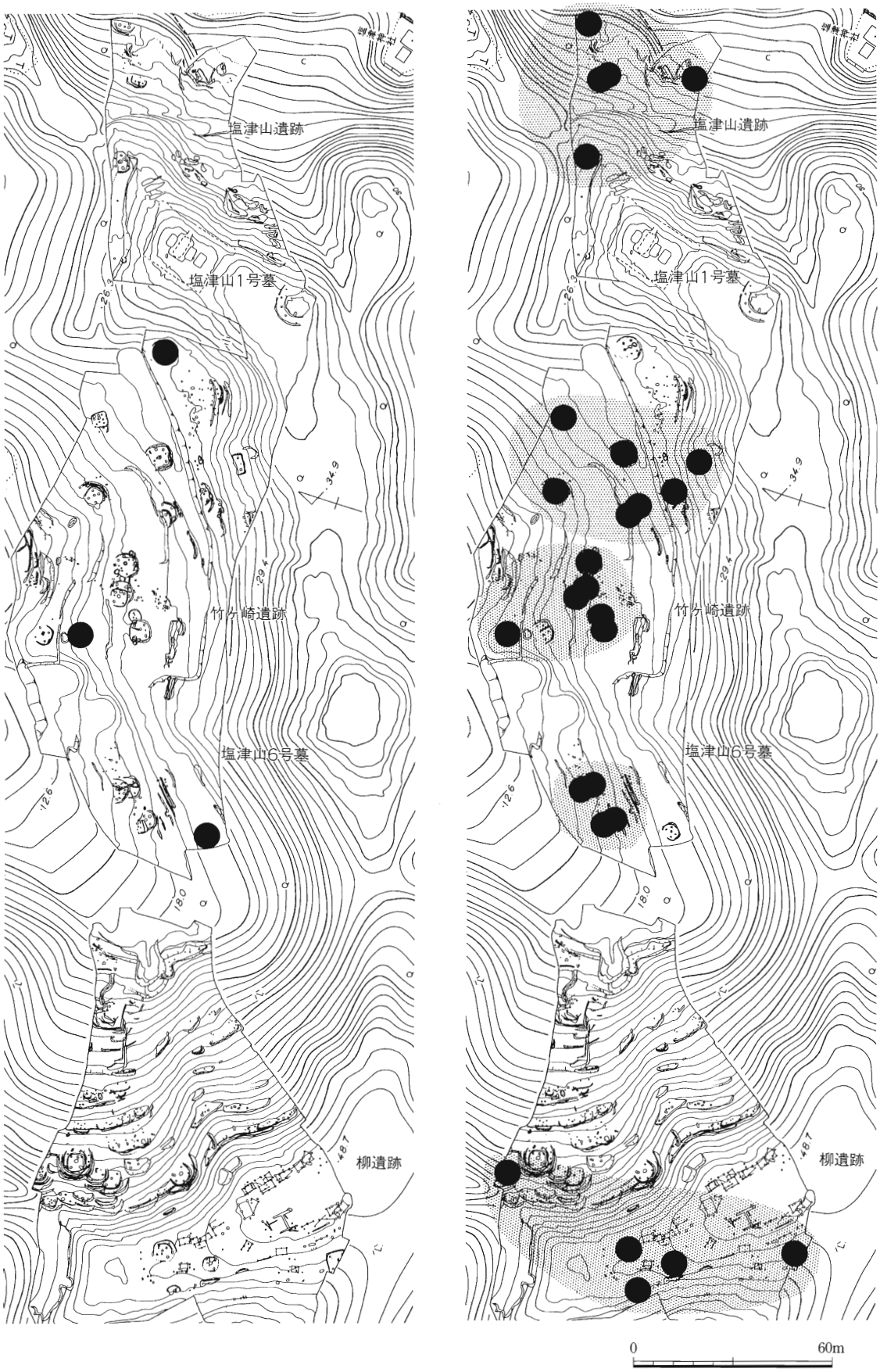
ＳＩ０３から出土した遺物について

ＳＩ０３からは、甕形土器、甑、ガラス製管玉、錐形鉄製品等が出土しているが、注目されるのはガラス製の管玉・鉄製品及び、立った状態で検出した甕形土器である。管玉は、一部を欠いているが残存長0.8㎝､径0.5㎝、孔径0.2㎝で、鮮やかな緑を呈している。今まで、島根県下で出土したガラス製品は、出雲市西谷３号墓から勾玉と丸玉、邑南町順庵原１号墓から管玉、丸玉、それに出雲市姫原西遺跡から丸玉があるだけである（68)。それらは、後期中葉から後葉にかけてのもので、住居跡からの出土は初めてである。九州地方では、弥生時代中期に埋葬の副葬品としてガラス製管玉が出現し、後期になると住居跡でも出土するようになる。ガラス製品は、後期になって急増し、全国的に広がってきているが（69)、勝負遺跡のガラス製品もこのような流れの中で出土したものと思われ、今後、類例が増えるものと思われる。また、同住居跡から見つかった弥生時代後期の錐形鉄製品は、松江市平所遺跡や安来市竹ヶ崎遺跡の玉工房関係の遺構から出土しており注目される(70)。

また、竪穴住居跡の南側壁の近くから甕が垂直に立った状態で見つかった。この住居跡は廃絶後

第11表　出雲東部における弥生時代中期～後期の集落形態一覧表

遺跡名	所在地	立地	棟数	年代	建物間隔	溝	備考
田和山	松江市	斜面	11	中期後半	A型4G　c形態		環壕の外側に住居跡
北原本郷1～3区	雲南市木次	平地	5	中期前～中葉	B型		
			3	後期中～古墳初	②（a）－①18m		
			4	不明	A型2G　b・c形態		
垣ノ内	〃	緩斜面	6	中期後半	A型3G　c形態		
			5	後期	C型		
			5	不明			
石台	松江市	斜面	6	中期後葉～後期初	C型		
福富遺跡	〃	尾根下	8	後期前葉～中葉	B型		Uの字形に存在
門生黒谷Ⅲ	安来市	尾根下	12	後期前葉～中葉	C型	2棟にあり	
門	飯南町	〃	8	中期後半	A型2G　b形態		
		〃	10	後期～古墳初	A型2G　b・c形態		
板屋Ⅲ	〃	緩斜面	10	後期後半・末	A型3G　c形態		1基に祭祀あり
			1	中期後半			
森	〃	〃	7	後期前葉～後葉	C型		
塩津丘陵遺跡群	安来市	斜面	3	後期中葉	B型	2棟にあり	
			28	後期最終末	A型5G　b・c形態		
			6	後期後葉～末	①－⑤（c）		
小汐手	安来市	斜面	5	後期	A型3G　c形態		
陽得	〃	山頂80m	5	後期前葉・末	A型2G　c形態		
越峠　A区	安来市	尾根	3	後期末	②－①60m		
B区		斜面	3	中期末・後期	②－①15m以内		
1区		尾根上	1	中期			
宮内　2区	〃	斜面	2	後期後半	①－①20m以内		
4区		斜面	4	後期前～中	②－①－①各12m以内		
笠松	〃	尾根下斜面	4	中期末	各棟20m以上		
		尾根上	1	後期末～古墳前			
岩屋口北	〃	尾根・尾根下	4	後期末	②－②20m		
平所	松江市	緩斜面	4	後期後葉～末	10m以内	1棟にあり	玉工房1基
山守免	松江市	斜面	4	後期前半	②－①－①各30m以上	3棟にあり	
北ヶ市			2	後期後半	切り合い		
屋敷古墳群(北ヶ市と同じ)	〃	斜面	3	後期前葉～末	10m以内	1棟にあり	
高広　Ⅰ区	安来	斜面	1	後期後半			
Ⅱ区		谷斜面	2	後期前半	10m以内		
小丸	飯南町	平地	3	中期後半	①－①－①各30m以上		
田中谷　1区	松江市	谷	3	後期前葉・中葉・末	②－①30m		
5区			3	後期中葉・末	①－①－①各70m以上		
普請場	安来市	尾根下・斜面	3	後期後葉	②－①38m		
叶谷	〃	尾根	3	後期後半～古墳前	隣接		
臼コクリ	〃	尾根・斜面	3	後期後葉～末	②－①25m		
上野	松江市	尾根下	3	後期後葉	15m以内		
大堤Ⅱ　Ⅰ区	〃	斜面	2	後期前半	28m	1棟にあり	
〃　Ⅱ区			1	後期前半			
折原上堤東	〃	斜面	3	後期末	15m以内	2棟にあり	
潜戸山	安来市	尾根下	2	後期	隣接		
大原	安来市	斜面	2	中期・後期前半	40m		
神原Ⅱ	飯南町	斜面	2	中期後半	20m間隔		
石田	〃	〃	2	中期後葉	20m以内	1棟にあり	
野津原Ⅱ	〃	斜面	2	後期後葉	40m	1棟にあり	
廻田	〃	尾根	2	後期前葉・中葉・末	2基は建て替え		
渋山池	安来市	斜面	2	後期最終末	①－①17m		
柴Ⅲ	松江市	斜面	2	後期後葉～末	10m内		
家の後Ⅱ	雲南市	平地	1	中期後半			
川平Ⅰ　Ⅰ区	〃	緩斜面	1	後期後葉～末			
〃　Ⅱ区	〃	〃	1	中期			垂木ピット
長峯	松江市	尾根	1	中期末～後期初		あり	
北原本郷6区	雲南市	平地	1	後期			
黒井田小林	安来市	裾	1	後期前葉～中葉			
袋尻E	松江市	斜面	1	後期中葉・末			
松江北東部3区	松江市	扇状地	1	後期後半			
〃　的場地区			1	後期			
連行	〃	斜面	1	後期中葉～後葉		あり	
下かい松	〃	斜面	1	後期中葉		あり	
南講武大日	〃	斜面	1	後期末～古墳前			
折原中堤	〃	尾根上	1	後期終末～古墳初頭			

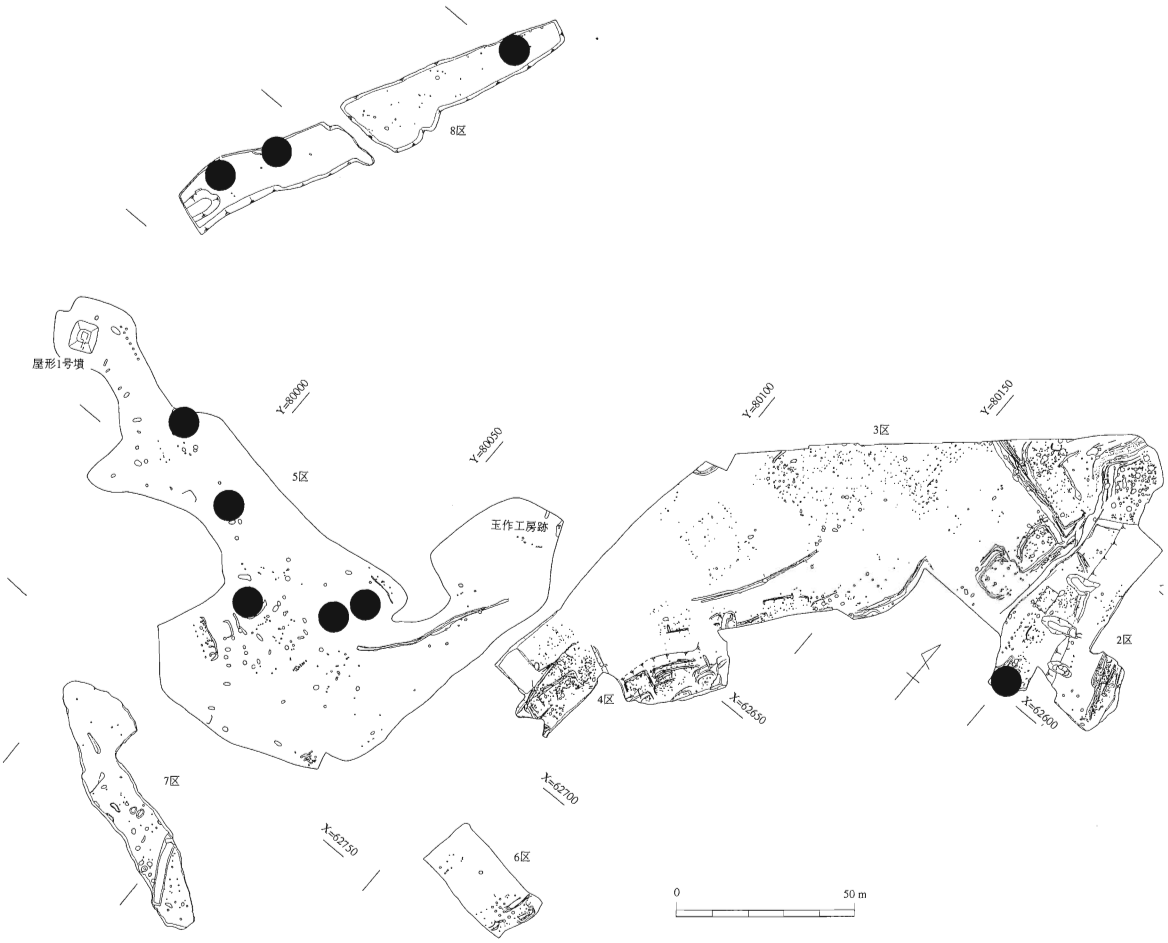


B型　塩津山遺跡群（草田2期）

A型　塩津山遺跡群（草田5期）

第83図　出雲東部における弥生時代中期～後期の集落形態 1

C型　森遺跡（弥生後期）



B型　福富遺跡（弥生後期）

第84図　出雲東部における弥生時代中期～後期の集落形態２

に人為的に埋め戻しているが、この土器は、床面から15㎝のところに据えてあったもので、廃絶に伴う祭祀を行った可能性がある。管見のかぎりでは、島根県下で廃絶時の祭祀遺構は存在していない。だだ、竪穴住居廃絶後に埋葬施設として使用されたものが、奥出雲の板屋Ⅲ遺跡や門遺跡で３例知られている。廃絶に伴う祭祀については、今後類例の増加をまって検討する必要がある。

古墳時代中期の住居跡

今回の調査では谷部から古墳時代中期の竪穴住居跡を１棟検出した。この住居は一辺５ｍのほぼ正方形を呈し、最低でも２回の建て替えを行っている。主柱は４本で、壁際には２本の短い並行する溝の内側に方形のピットを持つ炉跡状の施設を有し、床面には方形のピットが８基あまり存在していた。築造時期は出土している土師器から松山編年の２期～４期にあたる（71)。古墳時代中期の住居跡は、以前の１次・２次調査でも多数見つかっており、合計16棟になる。これらは、尾根から少し下がったところに造られている３棟を除き谷部に集中している。谷部のものは等高線が最も低いところから少し斜面を上がったところに造られており、松山編年の２期の古い段階から４期にかけて集落が形成されている。２期の住居は谷の中央部に集中し、３期から４期になると古い住居跡の外側に広がり、集落が拡大するとともに、同じ場所で２期から４期にわたって建て替えを行っているものが２棟ある。住居の形態は方形が主流で、一部に隅丸方形を呈するものがある。主柱は４本（３次調査のＳＩ０５）と２本柱（２次調査のＳＩ０８）がある。また、壁際の炉跡状の施設は、今回の調査で見つかったもの以外に２次調査ＳＩ０８でも存在していた。また、谷尻は近代に造られた溜め池のため破壊されていたが、この部分にも住居を造っていた可能性があり、本来は大規模な集落であったものと思われる。

この集落で注目されるのは、集落を取り囲むように「Ｕ」字形に溝が廻っていることである。３次にわたる調査で見つかった谷の斜面上方に掘られている５ヶ所の溝は、ちょうど集落を取り囲む形になる。１次、２次の調査で見つかった溝には、まぎれ込みと思われる遺物が出土していたが、今回の調査で溝の時期を考える上に重要な手がかりとなる土器がまとまって出土した。その溝はＳＩ０５の西側斜面に掘られていたもので、２本の溝が切り合っていた。この新しい溝から松山編年４期の底部を欠く甕と完形の高坏が見つかった。このことから集落を取り巻く溝は、住居跡とほぼ同じ時期で、集落を守るための排水施設として掘られたものと思われる。このような溝は現在のところ県内では見つかっていないが、今後、広範囲にわたる調査が増えてくると検出される可能性が大きいと思われる。

ところで、縄文時代及び弥生時代の住居跡が尾根から少し下がった緩斜面に造られているのに対し、古墳時代中期の住居跡は水はけの悪い谷間に築いている。しかも同じ場所で建て替えを行っているなど、この谷間に執着しているようである。この問題を解決するため出雲地方東部における古墳時代中期の集落について見てゆきたい。

古墳時代中期を松山編年２期から大谷編年の須恵器２期までとし（72)、出雲東部で見つかっている住居跡を集計してみた。26あまりの遺跡から見つかっており、安来市と松江市に集中している。10棟以上の集落は２遺跡、５棟以上検出されている遺跡は６遺跡で、その他は５棟以下である。

形態は方形がほとんどで、一部に隅丸方形が見られ、玉の工房跡であるものが６遺跡ある。壁際に炉状の施設を持つものは６遺跡８棟、方形のピットを伴うものは３遺跡あり、玉の工房跡である大角山遺跡のＳＩ０１では３つの方形ピットが検出されている。また、折原上堤東遺跡ＳＩ０２からは45個あまりの臼玉が出土しており注目される（73)。次に５棟以上見つかっている遺跡の立地

を見てみると、いずれも大きな谷から枝分かれした小さな谷部に存在しているものが多い。松江市宍道町矢頭遺跡、松江市乃白町袋尻遺跡、東出雲町勝負遺跡（74）は、細長い谷の奥部に存在し、松江市八雲町折原上堤東遺跡が小さい谷の入り口、松江市西川津町堤廻遺跡、安来市岩屋口南遺跡（75）は短い谷の奥尻、それに、松江市大角山遺跡が小さな谷の中程にそれぞれ集落を営んでいる。住居跡を築造している立地は、勝負遺跡のように丘陵地の谷間（Ａタイプ）の他、尾根から少し下がった緩やかな斜面（Ｂタイプ）、尾根先の緩斜面（Ｃタイプ）、尾根上（Ｄタイプ）に分けられる。

Ａタイプは、安来市岩屋口遺跡のように谷底付近に造られているものと、折原上堤東遺跡、矢頭遺跡のように谷筋から左右に少し上がった斜面に築かれているものがあり、谷底から斜面にまたがって造られた遺跡に山ノ神遺跡、堤廻遺跡がある。Ｂタイプには東出雲町勝負遺跡、Ｃタイプに袋尻遺跡があり、Ｄタイプは安来市大原遺跡の玉工房跡２棟に見られる。このように、出雲地方東部における古墳時代中期の集落は、小さな谷間に存在しているものが多く、今回調査をした勝負遺跡は堤廻遺跡や山ノ神遺跡、岩屋口南遺跡と立地条件が良く似ている。

ところで、古墳時中期の集落は谷部に存在しているものが多いが、なぜそのようなところに住居を構えたのであろうか。斐川町の荒神谷史跡公園整備に伴う調査では、細長い小さな谷の奥部から少なくとも奈良時代以降水田が営まれていたことが判明し（76）、古墳時代中期の水田が谷奥に造られている可能性がでてきた。また、安来市柳遺跡は、小さな谷尻に古墳時代中期の加工段が数基検出されており、同時期のＳＫ０２の土坑からの炭化米が多量に見つかっている。このようなことから、古墳時代中期には小さな谷で水田耕作を行っていたことが推測され、この水田の水の管理を行うため、水はけの悪い谷部にわざわざ集落を構えた可能性がある。ともあれ、水田遺構と集落の両方の検出を待って再検討が必要と思われる。

第12表　出雲東部古墳時代中期住居跡一覧

遺跡名	所在地	立地	棟数	炉状遺構	形態	時期	備考
柳Ⅱ	安来市	山谷尻緩斜面	1		方形	中期後半	
カンボウ	〃	山谷緩斜面	3	１基	〃	中期	
石田	〃	平地	1		〃	中期後半	
得見津	〃	谷奥脇山谷斜面	2		〃	中期末	山手に溝あり
平ラⅡ	〃	山谷尻斜面	3		〃	中期後半	
岩屋口南	〃	山谷尻緩斜面	12		〃	中期後半	
大原	〃	尾根・山谷尻	3	２基	〃	中期前半～後半	玉工房２棟（尾根）
勝負	〃	谷奥尾根下緩斜面	6	１基	〃	前期～中期後半	玉工房１棟　方形ピット
門生黒谷Ⅱ	〃	山谷脇斜面	3	１基	〃	中期中葉～末	
能義	〃	斜面	1		〃	中期	
小汐手	〃	山谷下斜面	1		〃	中期	
臼コクリ	〃	尾根下斜面	1		〃	前期末～中期	
四ッ廻Ⅱ	東出雲町	斜面	1		〃	中期後半	玉工房
田中谷	松江市	山谷斜面	2		〃	中期前半	
杉谷	〃	斜面	1		〃	中期後半	玉工房
折原上堤東	〃	山谷脇緩斜面	5	２基	〃	中期後半	臼玉45出土　方形土坑あり
面白谷	〃	谷脇斜面	3			中期前半～後半	１棟玉工房
大角山	〃	谷脇緩斜面	5		隅丸・方形	中期前半	３棟玉工房　方形ピットあり
本庄川流域条理	〃	扇状地	1		方形	中期後半	
堤廻	〃	山谷尻・脇斜面	21	１基	隅丸・方形	前期～中期後半	
袋尻Ｂ	〃	谷尻尾根緩斜面	7		隅丸・方形	前期～中期後半	
石田	〃	山谷斜面	2		方形	中期後半	建て替えで２棟
寺山小田	〃	谷斜面	2		方形	中期後半	鈴製品・砥石・勾玉出土
南講武大日	〃	斜面	1		〃	中期	
矢頭	〃	谷奥山谷緩斜面	6		〃	前期～中期後半	方形土坑　６棟切り合う
川平Ⅰ　Ⅰ区	雲南市	緩斜面	3		〃	中期後半～末	

註

1 山本清 「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』 1971
2 大谷晃二 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994
3 鹿島町教育委員会 『奥才古墳群』1985
4 松江市教育委員会 『松江圏都市計画事業乃木土地区画整備事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983
5 八雲村教育委員会 『増福寺古墳群発掘調査報告書』1982
6 八雲村教育委員会 『土井13号墳発掘調査報告書』1979
7 松江市教育委員会 『敷居谷古墳群発掘調査報告書』1994
8 松江市教育委員会 『西尾地区農林漁業用揮発油税財源身替農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』1999
9 松江市教育委員会 『喰ヶ谷古墳群』1981
10 島根県教育委員会 『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅳ集1982
11 島根県教育委員会 『一般国道９号（安来道路）建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』14号 1998
12 角田徳幸 『出雲地方における後期古墳の墳丘構造』『『島根考古学会誌』第22集 2005
13 加茂町教育委員会 『神原神社古墳』2002
14 島根県教育委員会 『松本古墳群調査報告書』1963
15 安来市教育委員会 『荒島古墳群発掘調査報告書』1949
16 島根県教育委員会 『島根の文化財』第３集 1963
17 島根県教育委員会 『造山３号墳調査報告』 1967
18 島根県教育庁古代文化センター他 『大寺１号墳発掘調査報告書』2005
19 島根県教育庁古代文化センター他 『松江市東部における古墳の調査』2004
20 島根県教育委員会 『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』9 2001
21 松江市教育委員会 『釜代１号墳外発掘調査報告書』1 1994
22 青木敬 『古墳築造の研究』六一書房 2003
23 島根県教育委員会 『古曽志遺跡群発掘調査報告書』1989
24 島根県教育委員会 『中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』６ 2001
25 松江市教育委員会 『史跡金崎古墳群』1973
26 松江市教育委員会 『伝宇牟加比売命御陵古墳』1993
27 八雲村教育委員会 『中山２号墳中山五輪塔群』1985
28 島根県教育委員会 『国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ 1993
29 松江市教育委員会 『論田４号墳発掘調査報告書』1994
30 島根県教育委員会 『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅳ 1983
〃 『国道９号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書』Ⅸ 1992
31 赤澤秀則 『南講武草田遺跡』1992
32 島根県教育委員会 『大角山遺跡発掘調査報告書』1998
33 佐々木謙・小林行雄 「出雲国森山村崎ヶ鼻洞窟及び権現山洞窟遺跡」『考古学』第８巻第10号1937
34 千葉 豊 「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』72巻６号 1989
35 角田徳幸 「三瓶火山の噴出物と縄文時代遺跡」『島根考古学会誌』第20・21合併号 2004
36 柳浦俊一 「山陰地方縄文時代後期初頭～中葉の土器編年」『島根考古学会誌』第17号 2000
37 千葉 豊 「沖丈遺跡出土縄文後期の編年的意義」『沖丈遺跡』邑智町教育委員会 2001
38 島根県教育委員会 『県道浜乃木湯町線（湯町工区）建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』2006
39 島根県教育委員会 『中祖遺跡範囲確認調査報告書』2007
40 島根県教育委員会 『三田谷Ⅰ遺跡』１ 1999
41 島根県教育委員会 『山陰自動車道鳥取益田線（宍道～出雲間）建設に伴う埋蔵文化財調査報告書』２ 2005
42 島根県教育委員会 『原田遺跡』（２） 2006

43　頓原町教育委員会　『五明田遺跡発掘調査報告書』1992
44　島根県教育委員会が2006年に調査　2007年度中に報告書刊行予定
45　江川幸子・内田律雄「石台遺跡の試掘調査―炭化米を出土した縄文晩期の土坑」『季刊文化財』62　1988
46　仁多町教育委員会　『下鴨倉遺跡』　1990
47　島根県教育委員会　『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ　1991
48　山田康弘　「中国地方の縄文時代集落」『島根考古学会誌』第19集　2002
49　〃　「中国地方の土器埋設遺構」『島根考古学会誌』第17集　2000
50　匹見町教育委員会　『ヨレ遺跡・イヤ遺跡・筆田遺跡』1993
51　森下哲也　「鳥取県の縄文時代の住居址」　『坂詰秀一先生還暦記念論文集』1996
52　宮本長二郎　『日本原始古代の住居建築』　中央公論美術出版1996
53　島根県教育委員会　『家の後Ⅱ遺跡』2　2007
54　35と同じ
55　31と同じ
56　高橋智也　「出雲における竪穴建物跡小考」『近藤喬一先生退官記念論文集』2003
57　松江市教育委員会　『石田遺跡発掘調査報告書』2004
58　出雲市教育委員会　『遺跡が語る古代の出雲』1997
59　島根県教育委員会　『塩津丘陵遺跡群』1998
60　東山信治　「北原本郷遺跡の弥生集落」『八雲立つ風土記の丘』№184　2006
61　島根県教育委員会　『門遺跡』1996　『垣の内遺跡』2003
62　島根県教育委員会　『北原本郷遺跡』1　2005　『板屋Ⅲ遺跡』1998　『板屋Ⅲ遺跡』1998
『陽得遺跡』1995
松江市教育委員会　『田和山遺跡群発掘調査報告1・2』2005　安来市教育委員会　『子汐手遺跡』1999
63　島根県教育委員会　『福富Ⅰ遺跡』1997
64　島根県教育委員会　『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅶ　1988
『門生黒谷Ⅲ遺跡』1998　『森遺跡』1994
65　島根県教育委員会　『野津原Ⅱ遺跡』2000
66　東出雲町教育委員会『寺床遺跡調査概報』1983
島根県教育委員会　『下山遺跡』2002
67　安来市教育委員会　『清瀬地区発掘調査報告書』1999
68　島根大学法文学部考古学研究室「西谷墳墓群の調査（Ⅰ）」『山陰地方における弥生墳丘墓の研究』1992
門脇俊彦　「順庵原1号墳について」『島根県文化財調査報告』第7集　1969
島根県教育委員会　『姫原西遺跡』1999
69　藤田等　『弥生時代ガラスの研究』名著出版　1994
70　島根県教育委員会　『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ　1976
71　松山智弘　「小谷式の再検討」『島根考古学会誌』第17号　2000
72　2及び71と同じ
73　八雲村教育委員会　『折原上堤東遺跡発掘調査報告書』1994
74　宍道町教育委員会　『矢頭遺跡発掘調査報告書』1985　松江市教育委員会　『袋尻遺跡群発掘調査報告書』1998
島根県教育委員会　『勝負遺跡・堂床古墳』1998
75　松江市教育委員会　『堤廻遺跡』1986　島根県教育委員会　『岩屋口南遺跡』1996
76　斐川町教育委員会　『尾田瀬Ⅱ・西谷Ⅱ・西谷遺跡発掘調査報告書』1999

第13表　南外２号墳・勝負遺跡出土土器観察表

挿図番号	遺構	種別	器種	寸法(cm) 口径	器高	底径	胎土	焼成	調整 外面	調整 内面	色調	残存度	備考
14-1	南外２号墳	須恵器	蓋	14	5.4		砂を少し含む	良好	天井部：回転ケズリ 口縁部：回転ナデ	天井部：ナデ 口縁部：回転ナデ	外：淡灰色 内：白灰色	完形	
14-2	南外２号墳	須恵器	蓋	14	5.4		砂を少し含む	やや不良	天井部：回転ケズリ、沈線 口縁部：回転ナデ	天井部：ナデ 口縁部：回転ナデ	外：淡白灰色 内：緑灰色	完形	
14-3	南外２号墳	須恵器	蓋	14	5.2		砂を含む	良好	天井部：回転ケズリ 口縁部：回転ナデ	天井部：ナデ、横ナデ 口縁部：回転ナデ	外：淡灰色 内：灰灰色	完形	外面自然釉付着
14-4	南外２号墳	須恵器	坏	12.7	5.4		砂を少し含む	良好	口縁部：回転ナデ 底部：回転ケズリ	口縁部：回転ナデ 底部：横ナデ	外：淡白灰色 内：茶灰色	完形	
14-5	南外２号墳	須恵器	坏	12.3	5.5		砂を少し含む	良好	口縁部：回転ナデ 底部：回転ケズリ	回転ナデ	外：灰褐色 内：淡灰色	完形	
14-6	南外２号墳	須恵器	坏	12.3	5.5		砂を少し含む	やや不良	口縁部：回転ナデ 底部：回転ケズリ	回転ナデ	白灰色	完形	
14-7	南外２号墳	須恵器	壷				密	やや不良	回転ナデ	回転ナデ	薄緑灰色	小片	
14-8	南外２号墳	須恵器	甕				小粒の砂を含む	良好	回転ケズリ	回転ナデ	淡灰色	小片	一部自然釉付着
14-9	南外２号墳	須恵器	高坏			(13.4)	小粒の砂を含む	不良	回転ナデ	回転ナデ	白茶灰色	小片	
14-10	南外２号墳	須恵器	壷				密	不良	カキメ	同心円当て具痕	茶褐色	小片	
14-11	南外２号墳	須恵器	壷				密	不良	カキメ		淡茶褐色	小片	
14-12	南外２号墳	須恵器	壷				密	不良	カキメ		淡緑灰色	小片	
14-13	南外２号墳	土師器	甕	(12.5)			砂を多く含む	良好	横ナデ、ナデ	ナデ、ケズリ	暗茶褐色、淡褐色	小片	
14-14	南外２号墳	須恵器	坏			(9.0)	若干の砂を含む	良好	ナデ 底部：糸切り	回転ナデ 底部：ナデ	濃青灰色	底部1/4	石棺付近
14-15	南外２号墳	須恵器	坏	(13.7)	4.8	(9.1)	大粒の砂を含む	良好	回転ナデ 底部：糸切り	回転ナデ 底部：ナデ	淡青灰色	口縁部1/4	石棺付近
14-16	南外２号墳	須恵器	坏				小粒の砂を含む	良好	ナデ 底部：糸切り	回転ナデ 底部：ナデ	外：青灰色 内：茶灰色	小片	石棺付近
23-1	SI01	縄文	深鉢	(34.0)			砂を多く含む	良好	口縁部：刺突文 胴部：ナデ	ナデ	暗茶褐色	口縁部1/4	突起部中央に沈線 19-2と同一個体か？
23-2	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	良好	口縁部：沈線、刺突文 胴部：ナデ	横ナデ	灰茶褐色	小片	突起部中央に２本の沈線で突起をつくる。 19-1と同一個体か？
23-3	SI01	縄文	深鉢				小粒の砂を含む	良好	RL縄文,沈線(溢巻文?)、巻貝圧痕、ナデ	ナデ	茶褐色	小片	
23-4	SI01	縄文	深鉢				砂を含む	普通	沈線、凹点	不明	外面：赤橙色 内面：黄褐色	小片	
23-5	SI01	縄文	鉢				砂を含む	良好	沈線、ミガキ	ナデ	外：暗茶褐色 内：暗黄褐色	小片	
23-6	SI01	縄文	浅鉢	(16.0)			砂を多く含む	やや不良	刻目文、ミガキ?	ミガキ?	茶褐色	小片	19-8と同一個体か？
23-7	SI01	縄文	浅鉢				密。砂を含む	良好	刻目文、ミガキ?	ミガキ	茶褐色	小片	
23-8	SI01	縄文	浅鉢				砂を多く含む	普通	刻目文、ミガキ?	ミガキ?	茶褐色	小片	19-6と同一個体か？
23-9	SI01	縄文	深鉢	(22.0)			密，砂を含む	良好	LR縄文。横ナデ	ヘラ状工具による横ナデ	淡茶褐色	小片	
23-10	SI01	縄文	深鉢	(20.0)			砂を含む	良好	RL縄文	ヘラ状工具によるナデ	暗茶褐色	小片	
23-11	SI01	縄文	深鉢	(22.0)			砂を多く含む	良好	RL縄文。ミガキ	ミガキ風横ナデ	茶褐色	小片	
23-12	SI01	縄文	深鉢				大粒の砂を含む	普通	RL縄文	不明	茶褐色	小片	
23-13	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	やや不良	RL縄文	横ナデ	茶褐色	小片	
23-14	SI01	縄文	深鉢				小粒の砂を含む	やや不良	RL縄文	ミガキ風ナデ	外：淡褐色 内：茶褐色	小片	
23-15	SI01	縄文	深鉢				大粒の砂を含む	良好	RL縄文	横ナデ	茶褐色	小片	
23-16	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	RL縄文	横ナデ	外：茶褐色 内：暗茶褐色	小片	
23-17	SI01	縄文	深鉢				砂を含む	普通	RL縄文	横ナデ	外：黄褐色 内：褐灰色	小片	上方に段をもつ
23-18	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	RL縄文	ナデ	外：暗茶褐色 内：茶褐色	小片	上方に段をもつ
24-19	SI01	縄文	鉢	6.1	4.6		大粒の砂を含む	普通	横ナデ、ナデ	ナデ	茶褐色	完形	手捏ね
24-20	SI01	縄文	浅鉢	(36.5)			砂を多く含む	良好	ミガキ(ヘラ状工具)	ミガキ	茶褐色	口縁部1/6	
24-21	SI01	縄文	浅鉢	(23.6)			砂を含む	良好	ミガキ	ミガキ	外：淡黄褐色 内：灰褐色 断面：黒色	小片	20-23と同一個体か？
24-22	SI01	縄文	浅鉢	(33.2)			小粒の砂を多く含む	良好	ミガキ	ミガキ	茶褐色	口縁部1/8	
24-23	SI01	縄文	浅鉢	(19.0)			砂を含む	良好	ミガキ	ミガキ	外：淡黄褐色 内：灰褐色 断面：黒色	口縁部1/6	20-21と同一個体か？
24-24	SI01	縄文	浅鉢				密	良好	ミガキ	ミガキ	外：淡茶褐色 内：暗茶褐色	小片	
24-25	SI01	縄文	浅鉢				砂を含む	良好	ミガキ	ミガキ	外：灰褐色 内：濃茶褐色	小片	
24-26	SI01	縄文	浅鉢				砂を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	茶褐色	小片	
24-27	SI01	縄文	浅鉢				砂を多く含む	良好	沈線、ミガキ	ミガキ	茶褐色	小片	
24-28	SI01	縄文	浅鉢				小粒の砂を含む	やや不良	横ナデ	横ナデ	茶褐色	小片	
24-29	SI01	縄文	浅鉢				砂を含む	良好	ミガキ	ミガキ	淡茶褐色	小片	
24-30	SI01	縄文	浅鉢	(14.0)			砂を多く含む	やや不良	不明	不明	外：茶褐色 内：灰褐色	小片	
24-31	SI01	縄文	深鉢	(18.0)			砂を多く含む	良好	丸ナデ	平ナデ	外：淡黄褐色 内：白褐色、暗茶褐色	口縁部1/4	
24-32	SI01	縄文	深鉢	(22.0)			砂を多く含む	普通	丸ナデ	丸ナデ(線条痕)	外：暗茶褐色 内：淡暗茶褐色	口縁部1/8	
24-33	SI01	縄文	深鉢	(38.0)			砂を多く含む	良好	丸ナデ	横ナデ	外：茶褐色 内：黄褐色	口縁部1/8	
25-34	SI01	縄文	深鉢	(36.0)			砂を多く含む	やや不良	不明	丸ナデ	外：赤褐色 内：茶褐色	口縁部1/6	
25-35	SI01	縄文	深鉢	(34.0)			砂を含む	普通	ヘラ状工具によるナデ(擦痕)	平ナデ	黒灰色	小片	21-36と同一個体か？
25-36	SI01	縄文	深鉢	(34.9)			砂を多く含む	良好	ヘラ状工具によるナデ(擦痕)	平ナデ(ハケメ状の線条痕)	外：茶褐色 内：黒灰色	口縁部1/8	21-35と同一個体か？ 補修孔あり
25-37	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	良好	丸ナデ	平ナデ	外：茶褐色 内：淡茶褐色	小片	
25-38	SI01	縄文	深鉢				砂を含む	普通	ナデ	ナデ	外：黄茶褐色 内：黄褐色	小片	
26-39	SI01	縄文	深鉢	(20.2)			小粒の砂を含む	良好	横ナデ(先端丸いヘラ状工具)	平ナデ	外：淡褐色 内：淡茶褐色	小片	
25-40	SI01	縄文	深鉢	(17.0)			大粒の砂を含む	普通	横ナデ	横ナデ	淡黄褐色	小片	
25-41	SI01	縄文	深鉢	(18.0)			砂を多く含む	良好	丸ナデ(擦痕)	丸ナデ	茶褐色	小片	
25-42	SI01	縄文	深鉢				砂を含む	良好	平ナデ	平ナデ	茶褐色	小片	
26-43	SI01	縄文	深鉢	(33.6)			砂を多く含む	良好	平ナデ(擦痕)	平ナデ	外：明茶褐色 内：淡暗茶褐色	小片	
26-44	SI01	縄文	深鉢				大粒の砂を含む	普通	横ナデ(先端丸いヘラ状工具)	横ナデ	暗茶褐色	小片	
26-45	SI01	縄文	深鉢				大粒の砂を含む	良好	横ナデ(先端丸いヘラ状工具)	横ナデ	茶褐色	小片	
26-46	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	良好	横ナデ(先端平らなヘラ状工具)	横ナデ(先端平らなヘラ状工具)	外：黒灰色 内：淡茶褐色	小片	
26-47	SI01	縄文	深鉢	(31.3)			砂を多く含む	やや不良	平ナデ	不明	外：茶褐色 内：淡黄褐色	口縁部1/6	補修孔？あり
26-48	SI01	縄文	深鉢	(19.7)			砂を多く含む	普通	ナデ	ナデ	外：赤褐色 内：黄褐色	口縁部1/6	
26-49	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	良好	横ナデ(ヘラ状工具)	二枚貝条痕	外：茶褐色 内：暗茶褐色	小片	
26-50	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	良好	横ナデ	二枚貝条痕	茶褐色	小片	
26-51	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	良好	不明	二枚貝条痕	外：赤褐色 内：暗茶褐色	小片	
26-52	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	二枚貝条痕	不明	外：暗茶褐色 内：赤褐色	小片	
26-53	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	二枚貝条痕	不明	外：赤褐色 内：暗茶褐色	小片	
26-54	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	良好	丸ナデ(擦痕)	平ナデ(ハケメ状の線条痕)	淡茶褐色	胴部径1/4	

挿図番号	遺構	種別	器種	寸法(cm)			胎土	焼成	調整		色調	残存度	備考
				口径	器高	底径			外面	内面			
27-55	SI01	縄文	深鉢				砂を含む	普通	丸ナデ	平ナデ	外：濃茶褐色 内：黄褐色	小片	
27-56	SI01	縄文	深鉢				砂を含む	普通	丸ナデ	平ナデ(線条痕)	外：茶褐色 内：淡茶褐色	小片	
27-57	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	平ナデ→丸ナデ	平ナデ(線条痕)	外：淡茶褐色 内：黒灰色	小片	
27-58	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	平ナデ→丸ナデ	平ナデ	外：淡茶褐色 内：黒灰色	小片	23-59と同一個体？
27-59	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	平ナデ→丸ナデ	平ナデ	外：淡茶褐色 内：黒灰色,淡茶褐色	小片	23-58と同一個体？
27-60	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	平ナデ→丸ナデ	平ナデ(線条痕)	外：淡灰褐色 内：黒灰色	小片	
27-61	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	平ナデ	平ナデ	外：明褐色 内：淡茶褐色	小片	
27-62	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	平ナデ	平ナデ(擦痕)	淡茶褐色	小片	
27-63	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	良好	平ナデ(巻貝条痕?)	ミガキ	茶褐色	小片	
27-64	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	平ナデ	ナデ	外：赤褐色 内：黄灰色	小片	
27-65	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	平ナデ(擦痕)	平ナデ(線条痕)	淡茶褐色	小片	補修孔
27-66	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	やや不良	不明	平ナデ(線条痕)	外：褐色 内：淡黄褐色	小片	
27-67	SI01	縄文	深鉢				砂を多く含む	普通	不明	不明	淡茶褐色	小片	
28-68	SI01	縄文				(8.0)	砂を多く含む	普通	不明	ナデ	外：淡茶褐色 内：黄褐色	底部1/4	低平高台
28-69	SI01	縄文				6.2	砂を多く含む	やや不良	不明	不明	外：赤黄褐色 内：黄褐色	底部完形	低平高台
28-70	SI01	縄文				9.1	砂を多く含む	良好	ナデ	ナデ	外：淡黄褐色 内：淡茶褐色 断面：黒色	底部完形	20-21,23と色調が類似 低平高台
28-71	SI01	縄文				9.8	砂を多く含む	良好	ナデ	ナデ	赤褐色	底部完形	低平高台 中央に2cm程のくぼみ
28-72	SI01	縄文				(9.0)	砂を多く含む	普通	不明	不明	茶褐色	底部1/4	低平高台
28-73	SI01	縄文				6.6	砂を多く含む	良好	胴部：ミガキ 底面：条痕	ミガキ	外：暗茶褐色 内：黒灰色	底部90%	低平高台
28-74	SI01	縄文				(6.6)	砂を含む	良好	横ナデ、指圧痕	ミガキ	黄褐色	底部1/6	低平高台
28-75	SI01	縄文				7.4	砂を多く含む	普通	ナデ	横ナデ	外：赤褐色 内：黒褐色	底部1/4	低平高台
28-76	SI01	縄文				(7.9)	砂を多く含む	普通	不明	不明	茶褐色	底部1/4	平底
28-77	SI01	縄文				(10.6)	砂を多く含む	普通	不明	不明	外：茶褐色 内：灰褐色	底部1/4	平底
28-78	SI01	縄文				(6.0)	小粒の砂を多く含む	普通	不明	ナデ	外：茶褐色 内：暗茶褐色	底部1/3	平底
28-79	SI01	縄文				(7.5)	砂を多く含む	やや不良	不明	不明	外：赤褐色 内：暗茶褐色	底部1/3	平底
28-80	SI01	縄文				(6.6)	砂を多く含む	普通	不明	ナデ	外：茶褐色 底面：黒灰色 内：黄褐色	底部1/8	平底
28-81	SI01	縄文				(6.8)	密	良好	ミガキ	ミガキ	黄灰褐色	底部1/4	平底
28-82	SI01	縄文				6.4	小粒の砂を含む	やや不良	不明	ナデ	外：茶褐色 内：黒灰色	底部90%	平底
28-83	SI01	縄文					砂を多く含む	普通	不明	不明	外：赤褐色 内：黒灰色	小片	
28-84	SI01	縄文					砂を含む	普通	不明	不明	赤褐色	小片	
28-85	SI01	縄文				(4.0)	砂を多く含む	普通	不明	ナデ	茶褐色	底部1/3	
35-1	SI02	弥生	器台			(15.3)	小粒の砂を含む	良好	擬凹線文 横ナデ	受部：横ナデ 脚部：ケズリ	淡黄褐色	脚部：1/3	
35-2	SI02	弥生	器台				砂を多く含む	普通	擬凹線文	不明	淡黄褐色	小片	
35-3	SD01	弥生	甕	(18.8)			小粒の砂を含む	良好	口縁部：横ナデ 肩部：刺突文	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：黄褐色 内：淡灰褐色	口縁部1/3	
35-4	SI02	弥生	甕	(21.8)			大粒の砂を多く含む	良好	横ナデ	不明	外：淡茶褐色 内：黄褐色、茶灰色	小片	
35-5	SI02	弥生	甕	(18.0)			砂を多く含む	普通	擬凹線文	横ナデ	黄褐色	小片	
35-6	SI02	土師器	甕	(13.8)			細かい砂を含む	普通	ナデ	横ナデ	外：灰褐色 内：黄褐色	小片	
35-7	SD01	土師器	甕	(17.8)			大粒の砂を含む	普通	横ナデ	不明	外：黒色 内：茶褐色	小片	
40-1	SI03	弥生	甕	19.2			細かい砂を多く含む	良好	口縁部：凹線 肩部：刺突文 胴部：ハケメ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	淡茶褐色	80%	
40-2	SI03	弥生	甕	(26.5)			小粒の砂を多く含む	良好	口縁部：凹線文 肩部：刺突文 胴部：ハケメ、ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：黄褐色 内：茶灰色	口縁部1/3	
40-3	SI03	弥生	甕	28.5			砂を多く含む	普通	口縁部：凹線文 肩部：刺突文 胴部：ハケメ、ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：淡褐色 淡茶褐色 内：淡褐色	3/4	
40-4	SD02	弥生	甕			6.6	大粒の砂を含む	良好	ハケメ、ナデ	ケズリ	茶褐色	底部完形	
40-5	SI03	弥生	甕?			(25.0)	細かい砂を含む	やや不良	不明	横ナデ	外：淡赤黄褐色 内：黄褐色	小片	
44-1	SI04	弥生	甕	(26.0)			砂を多く含む	良好	口縁部：擬凹線文 肩部：波状櫛描文 胴部：ハケメ	口縁部：横ナデ 頸部：ハケメ 胴部：ケズリ	外：黄褐色 内：淡茶褐色	口縁部1/3	
44-2	SI04	弥生	甕	(32.0)			砂を多く含む	やや不良	口縁部：擬凹線文 横ナデ	横ナデ	外：茶褐色 内：黄褐色	口縁部1/4	
44-3	SI04	弥生	甕	24.4			砂を多く含む	普通	口縁部：擬凹線文 肩部：押引文 胴部：ハケメ→ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：黄褐色 内：淡褐色	80%	
44-4	SI04	弥生	甕	(21.0)			砂を多く含む	普通	口縁部：擬凹線文 肩部：刺突文 胴部：ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：黄褐色 内：淡茶褐色	口縁部1/4	
44-5	SI04	弥生	甕	(18.0)			砂を多く含む	普通	口縁部：擬凹線文 横ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：茶褐色 内：淡茶褐色	口縁部1/6	
44-6	SI04	弥生	甕	(18.2)			砂を多く含む	普通	口縁部：擬凹線文 横ナデ	横ナデ	赤褐色	小片	
44-7	SI04	弥生	高不				砂を若干含む	良好	縦方向のナデ	しぼり痕	黄褐色	脚部1/3	
47-1	SI05	土師器	甕	(18.2)			小粒の砂を含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ	口縁部：横ナデ 頸部：指圧痕 胴部：ケズリ	外：黄褐色 内：黄褐色 灰褐色	口縁部1/4	Pit8出土
47-2	SI05	土師器	高不				小粒の砂を多く含む	良好	横ナデ、ナデ	不明	外：褐色、暗茶褐色 内：黄褐色	小片	Pit8出土
47-3	SI05	土師器	甕				小粒の砂を含む	やや不良	不明	不明	白褐色	小片	Pit9出土
47-4	SI05	土師器	小形丸底鉢	(7.9)			砂を含む	良好	横ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：淡茶褐色,黄褐色 内：淡茶褐色	口縁部1/3	Pit9出土
47-5	SI05	弥生	甕				小粒の砂を含む	やや不良	口縁部：擬凹線文 頸部：横ナデ	横ナデ	外：淡黄褐色 内：淡茶褐色	小片	Pit5出土
47-6	SI05	土師器	坏	(13.0)			密	普通	不明	不明	赤褐色	口縁部1/4	Pit14出土
47-7	SI05	土師器	甕				密 雲母を含む	良好	横ナデ	指圧痕 ケズリ(面取り?)	外：赤彩 内：黄褐色	小片	床面出土
47-8	SI05	土師器	壺				小粒の砂を含む	良好	横ナデ	指圧痕、ケズリ	外：赤褐色,淡黄褐色 (一部赤彩) 内：灰褐色	小片	床面出土
47-9	SI05	土師器	高不	(19.4)			砂を含む	普通	口縁部：ミガキ 坏部：横ナデ、ハケメ	坏部：ミガキ	外：赤褐色 内：淡褐色	坏部1/2	床面出土
47-10	SI05	土師器	甕	(22.0)			大粒の砂を含む	やや不良	ハケメ	ハケメ	外：赤褐色、黄褐色 内：赤褐色	口縁部1/6	床面出土
47-11	SI05	土師器	甕	16.0			砂を多く含む	普通	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ	口縁部：横ナデ 頸部：指圧痕 胴部：ケズリ	外：赤褐色 内：黄褐色	口縁部完形	
47-12	SI05	土師器	甕	16.0			密。砂を含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ	口縁部：不明 胴部：ケズリ	外：黄褐色、赤褐色 内：淡褐色	60%	

挿図番号	遺構	種別	器種	寸法(cm)			胎土	焼成	調整		色調	残存度	備考
				口径	器高	底径			外面	内面			
47-13	SI05	土師器	甕	(15.2)			密 小粒の砂を含む	良好	横ナデ	横ナデ	外：茶褐色 暗茶褐色 内：茶褐色、淡褐色	小片	
47-14	SI05	土師器	甕	(16.0)			密 砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ	外：茶褐色 内：茶褐色、淡褐色	小片	
47-15	SI05	土師器	甕	(17.5)			小粒の砂を含む	やや不良	横ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	白褐色	小片	
48-16	SI05	土師器	甕	16.2			密 砂を含む	良好	ハケメ→ナデ	口縁部：横ナデ 頸部：指圧痕 胴部：ケズリ	外：赤褐色 内：赤褐色、黄褐色	口縁部2/3	
48-17	SI05	土師器	甕	(22.0)			小粒の砂を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	外：黒色、灰黄褐色 内：淡茶褐色	小片	
48-18	SI05	土師器	甕	(16.0)			密 小粒の砂を含む	普通	横ナデ	横ナデ	外：茶褐色 内：黄褐色	小片	
48-19	SI05	土師器	甕	(14.0)			砂を多く含む	やや不良	横ナデ	横ナデ	白褐色	小片	
48-20	SI05	土師器	甕	(16.0)			蜜 小粒の砂を含む	良好	横ナデ	横ナデ	外：淡茶褐色 内：黄褐色	小片	
48-21	SI05	土師器	甕	(16.0)			砂を多く含む	やや不良	不明	不明	外：黄褐色 内：緑褐色、黄褐色	口縁部1/8	
48-22	SI05	土師器	甕	(10.0)			蜜 小粒の砂を含む	やや不良	横ナデ	不明	白褐色	小片	
48-23	SI05	土師器	甕	(16.2)			砂を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	外：淡茶褐色 内：黄褐色	口縁部1/4	外面スス付着
48-24	SI05	土師器	甕	(25.9)			小粒の砂を多く含む	やや不良	不明	横ナデ	外：淡黄褐色 内：黒褐色	小片	内面スス付着
48-25	SI05	土師器	小形丸底壷	(6.8)	(7.2)		小粒の砂を含む 雲母を含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ→ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ナデ	暗灰色、茶褐色	完形	
48-26	SI05	土師器	直口壷	(12.6)			小粒の砂を多く含む	普通	横ナデ	横ナデ	外：淡褐色、黄褐色 内：黄褐色	口縁部1/3	外面スス付着
48-27	SI05	土師器	壷				密	普通	底部：ヘラ状工具による面取り	横ナデ、ケズリ	黄褐色	胴部2/3	
48-28	SI05	土師器	高坏	23.0			砂を多く含む	良好	横ナデ、ハケメ	ミガキ(暗文)	外：茶灰色、黄褐色、淡褐色 内：黄褐色、淡褐色	坏部完形	
48-29	SI05	土師器	高坏	17.3	14.2	10.9	密	良好	坏部：横ナデ 脚部上半：縦方向の箆削 脚部下半：ナデ	坏部：横ナデ、ナデ 暗文 脚部：ヘラ状工具の箆取り、ナデ	淡褐色、淡茶褐色	90%	
48-30	SI05	土師器	高坏	(18.6)			小粒の砂を含む	良好	横ナデ	横ナデ	外：淡褐色 内：茶褐色、黄褐色	口縁部1/4	
48-31	SI05	土師器	高坏	17.3			やや大粒の砂を含む	やや不良	横ナデ	横ナデ	外：赤褐色、黄褐色 内：黄褐色	坏部完形	
48-32	SI05	土師器	高坏	18.2			密。砂を含む	やや不良	不明	不明	赤褐色	坏部完形	
48-33	SI05	土師器	高坏				小粒の砂を含む	普通	横ナデ	不明	外：赤彩 内：黄褐色	小片	
48-34	SI05	土師器	高坏				密。砂を含む	普通	横ナデ	不明	外：淡茶褐色 内：淡褐色	小片	
49-35	SI05	土師器	高坏	(19.0)			小粒の砂を多く含む	やや不良	不明	不明	淡褐色	小片	
49-36	SI05	土師器	高坏	(25.0)			砂を含む	やや不良	ミガキ	ミガキ(暗文)	外：赤褐色 内：黒灰色、黄褐色、淡褐色	坏部1/4	
49-37	SI05	土師器	高坏	(16.5)			小粒の砂を含む	普通	不明	不明	淡褐色	小片	
49-38	SI05	土師器	高坏				密	普通	横ナデ	横ナデ	赤褐色	小片	
49-39	SI05	土師器	高坏				小粒の砂を含む	普通	不明	ハケメ	外：淡褐色 内：黄褐色	小片	
49-40	SI05	土師器	高坏	(15.2)			密。 金雲母を含む	普通	不明	不明	赤褐色	坏部1/4	
49-41	SI05	土師器	高坏	(13.2)			密	良好	ミガキ、ハケメ	口縁部：横ナデ 坏部：ミガキ	外：淡褐色、黄褐色 内：淡褐色、黄褐色、茶褐色	坏部1/2	
49-42	SI05	土師器	高坏				砂を含む	普通	不明	不明	外：淡茶褐色 内：淡褐色	小片	
49-43	SI05	土師器	高坏				密。 小粒の砂を含む	普通	坏部：ナデ 脚部：ヘラ状工具によるナデ	坏部：ナデ→ハケメ 脚部：ヘラ状工具によるナデ	淡赤褐色、黄褐色	1/3	
49-44	SI05	土師器	高坏				雲母、小粒の砂を含む	やや不良	坏部：ハケメ 脚部：縦方向のケズリ		不明	淡褐色	1/3
49-45	SI05	土師器	高坏			12.0	密	やや不良	縦方向のミガキ	不明	淡褐色	脚部2/3	
49-46	SI05	土師器	高坏			11.7	小粒の砂を多く含む	やや不良	縦方向のミガキ	不明	外：淡褐色、黄褐色 内：淡褐色	脚部90%	3方向の透かし
49-47	SI05	土師器	高坏			13.3	小粒の砂を多く含む	良好	縦方向のミガキ	ハケメ→横ナデ	淡褐色、灰褐色	脚部90%	3方向の透かし
49-48	SI05	土師器	高坏			(9.5)	密	良好	ナデ	ナデ、横ナデ	赤褐色	脚部1/4	
49-49	SI05	土師器	高坏			(9.5)	小粒の砂を含む	普通	ナデ	不明	淡褐色、黄褐色	小片	
49-50	SI05	土師器	高坏			7.8	密	良好	不明	しぼり痕	外：淡褐色 内：淡褐色、灰褐色	底部1/2	
49-51	SI05	土師器	高坏			9.5	密	普通	ナデ	ヘラ状工具による面取りナデ	赤褐色	底部1/2	
49-52	SI05	土師器	高坏			(19.0)	砂を多く含む	良好	ナデ	ヘラ状工具による横ナデ ナデ	赤褐色、褐色	底部1/4	
50-53	SI05	土師器	坏	(12.0)			密	良好	不明	横ナデ	茶褐色	小片	
50-54	SI05	土師器	坏	(12.5)	4.7		密。 小粒の砂を含む	やや不良	不明	横ナデ、ナデ	淡褐色	1/4	
50-55	SI05	土師器	坏	11.7	5.5		密	良好	横ナデ、ヘラ状工具によるナデ	横ナデ、ナデ	外：灰褐色、黄褐色 内：淡褐色	2/3	
50-56	SI05	土師器	坏	(12.0)	4.0		密	普通	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	外：赤褐色、黄褐色 内：赤褐色	口縁部1/6	
50-57	SI05	土師器	坏	(11.7)			密	やや不良	横ナデ	横ナデ	淡褐色	口縁部1/6	
50-58	SI05	土師器	坏				密	普通	横ナデ、ヘラ状工具による横ナデ	横ナデ、ナデ	赤褐色	1/4	
50-59	SI05	土師器	坏	(12.0)	4.2		密	やや不良	不明	不明	赤褐色	1/4	
50-60	SI05	土師器	坏	(12.0)	(5.4)		密	やや不良	不明	横ナデ、ナデ	赤褐色	口縁部1/6	
50-61	SI05	土師器	坏	(12.0)	(4.0)		密	やや不良	不明	横ナデ	外：赤褐色 内：赤褐色、黄褐色	口縁部1/3	
50-62	SI05	土師器	坏	(9.8)	(3.6)		密	普通	ナデ、ヘラ状工具による面取り	横ナデ、ナデ	外：黄褐色 内：淡褐色	1/4	
50-63	SI05	土師器	坏	(12.0)	(3.8)		密	普通	ナデ	横ナデ	赤褐色、黄褐色	1/4	
50-64	SI05	土師器	坏	(11.5)			密	普通	不明	横ナデ	赤褐色	1/3	
50-65	SI05	須恵器	高坏	18.3	13.0	12.0	大粒の砂を含む	やや不良	坏部：回転ナデ、カキメ、ケズリ 脚部：回転ナデ	坏部：回転ナデ、ナデ 脚部：回転ナデ、面取り	外：白灰色、淡灰色 内：淡青灰色、白灰色	完形	4方向の透かし。半分は上器溜り2と接合。
50-66	SI05	須恵器	坏	12.0	4.7		密	良好	回転ナデ、ケズリ	回転ナデ	淡灰色	1/2	
50-67	SI05	須恵器	坏	(11.5)			密	良好	回転ナデ	回転ナデ	口縁部：淡青灰色 坏部：緑灰色	小片	
50-68	SI05	須恵器	蓋				大粒の砂を含む	良好	回転ナデ	回転ナデ	淡青白灰色	小片	
54-1	KD02	弥生	甕	(16.0)			砂を多く含む	やや不良	擬凹線文？、横ナデ	不明	茶褐色	口縁部1/8	
54-2	KD02	土師器	甕	(14.0)			小粒の砂を多く含む	普通	横ナデ	横ナデ	外：淡褐色 内：黄褐色	口縁部1/4	
54-3	KD02	土師器	甕	(14.5)			砂を若干含む	普通	横ナデ	不明	外：白茶褐色 内：黄褐色	口縁部1/4	
54-4	KD02	土師器	甕	(16.0)			密	普通	横ナデ	横ナデ	外：淡茶褐色 内：白茶色	小片	
54-5	KD02	土師器	壷	7.4	(12.0)		砂を多く含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ナデ、一部ハケメ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ、一部ナデ	外：黒灰色、黄褐色 内：黒灰色	90%	
54-6	KD02	土師器	小形丸底壷	(5.0)			密	普通	口縁部：横ナデ 胴部：ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：不明	外：黄褐色 内：灰褐色	1/4	
54-7	KD02	土師器	高坏				砂を多く含む	やや不良	不明	不明	外：黄褐色、淡褐色 内：淡褐色	小片	
54-8	KD02	土師器	高坏			(20.5)	砂を多く含む	普通	不明	ヘラ状工具による横ナデ、ナデ	外：茶褐色 内：赤褐色	底部1/4	

挿図番号	遺構	種別	器種	寸法(cm)			胎土	焼成	調整		色調	残存度	備考
				口径	器高	底径			外面	内面			
54-9	KD02	土師器	高坏			(24.0)	砂を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	外：淡茶褐色 内：茶褐色	底部1/4	
54-10	KD02	土師器	高坏			(8.5)	密	良好	ナデ	ヘラ状工具による横ナデ、ハケメ→ナデ	外：淡褐色 内：淡紫褐色、淡褐色	底部1/4	
54-11	KD02	土師器	高坏				密	普通	面取り、横ナデ	ヘラ状工具による横ナデ	外：淡白茶褐色 内：淡茶褐色	小片	
54-12	KD02	土師器	高坏				密	やや不良	不明	不明	淡褐色	小片	
54-13	KD02	須恵器	蓋				密	良好	回転ナデ	回転ナデ	外：濃灰色 内：白灰色	小片	
54-14	KD02	須恵器	甕	(7.0)			密	良好	回転ナデ	回転ナデ	淡青灰色	口縁部1/4	
54-15	KD04	土師器	甕	(15.5)			密。 砂を若干含む	普通	口縁部：横ナデ 胴部：不明	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：淡褐色、黄褐色 内：淡褐色、灰褐色	口縁部1/8	
54-16	KD04	土師器	甕	(14.0)			密	やや不良	不明	不明	淡黄褐色	小片	
54-18	KD05	土師器	甕	(13.5)			密。 砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ、ケズリ	外：黄褐色 内：淡褐色	口縁部1/8	
54-19	KD05	土師器	高坏				砂を多く含む	普通	ナデ	ハケメ	外：黄褐色、赤彩 内：黒色	小片	
56-1	KD06	土師器	甕	(16.0)			密。 砂を若干含む	普通	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：暗茶褐色、淡褐色 内：黄褐色、淡茶褐色	口縁部1/6	外面スス付着
56-2	KD06	土師器	甕	(17.3)			大粒の砂を含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ→ナデ	口縁部：横ナデ 頸部：指圧痕 胴部：ケズリ	外：淡褐色 内：淡茶褐色	小片	外面スス付着
56-3	KD06	土師器	甕				細かい砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ、ケズリ	外：白黄色 内：白黄色、淡褐色	小片	
56-4	KD06	土師器	高坏	(20.0)			砂を多く含む	普通	横ナデ	横ナデ	外：赤褐色、赤彩 内：淡褐色	小片	
56-5	KD06	土師器	高坏	(17.0)			砂を若干含む	やや不良	不明	不明	外：淡茶褐色 内：黄褐色	小片	
56-6	KD06	土師器	高坏				小粒の砂を含む	やや不良	不明	不明	外：淡褐色、暗茶褐色 内：淡褐色	小片	
56-7	KD06	石器											
58-1	KD08	弥生	甕	(15.5)			砂を多く含む	良好	擬凹線文、横ナデ	ケズリ	外：茶褐色 内：黄褐色	小片	
58-2	KD08	土師器				6.0	密	普通	横ナデ、回転糸切り	ナデ	赤褐色	底部完形	
58-3	KD09	須恵器	甕				密	良好	タタキ	タタキ	外：灰褐色 内：淡青灰色	小片	
60-1	SD03	弥生	甕				砂を若干含む	普通	擬凹線文	不明	淡茶褐色	小片	
60-2	SD03	弥生	高坏				小粒の砂をやや多く含む	普通	ミガキ	不明	外：赤褐色(赤彩) 内：淡茶褐色	小片	
61-1	SD05	土師器	甕	13.0	21.7		密。 大粒の砂を含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ→ナデ	口縁部：横ナデ 肩部：ヘラ状工具による横ナデ 胴部：ケズリ→ナデ	外：淡茶褐色 内：黄褐色	90%	底部打ち欠き？
61-2	SD05	土師器	高坏	15.0	11.0	8.7	密、雲母を含む	良好	坏部：横ナデ 脚部：ミガキ、ナデ	坏部：横ナデ、ナデ 脚部：ヘラ状工具によるナデ	淡茶褐色	80%	
64-1	SK01	縄文	壺形土器	(9.3)	(12.9)	3.1	石英、長石、砂を多く含む	やや不良	不明	口縁部：横ナデ 胴部：ナデ	外：黄褐色、茶褐色、黒灰色 内：黒褐色	60%	凹底
64-3	SK03	縄文?					砂を多く含む	やや不良	不明	板状工具によるナデ	外：茶褐色 内：暗茶褐色	小片	
65-5	SK04	縄文	深鉢			(6.3)	砂を多く含む	やや不良	不明	不明	外：茶褐色 内：黒灰色	底部1/6	
65-6	SK04	縄文	深鉢	(32.0)			小粒の砂を多く含む	普通	板状工具によるナデ	板状工具によるナデ	外：茶褐色 内：黒灰色、茶褐色	口縁部1/6	
66-1	土坑・ピット群	弥生		(16.5)			大粒の砂を含む	良好	擬凹線文、横ナデ	ナデ	外：灰褐色 内：黄褐色	小片	
66-2	土坑・ピット群	弥生					大粒の砂を含む	良好	沈線、刺突文	ケズリ	外：灰褐色 内：黄褐色	小片	
66-3	土坑・ピット群	弥生					大粒の砂を含む	良好	刺突文	ケズリ	外：灰褐色 内：黄褐色	小片	
67-1	土器溜まり1	土師器	甕	14.8	17.7		大粒の砂を含む	普通	口縁部：横ナデ 胴部：ナデ、ハケメ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ、ケズリ→ハケメ→ナデ	外：淡茶褐色、黒色 内：淡茶褐色	90%	伏せた状態で出土
67-2	土器溜まり1	土師器	甕	(16.5)			密。 砂を若干含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ→ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：黒褐色、淡褐色 内：淡褐色	口縁部1/6	
67-3	土器溜まり1	土師器	甕	(16.0)			密。 小粒の砂を含む	普通	横ナデ	横ナデ	外：茶褐色、黒色 内：茶褐色	口縁部1/4	
69-1	土器溜まり2	土師器	甕	(12.5)	(21.0)		密。 砂を若干含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ→ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	淡茶褐色	40%	
69-2	土器溜まり2	土師器	甕	16.0			小粒の砂を多く含む	普通	口縁部：横ナデ 頸部：ハケメ	口縁部：横ナデ 頸部：指圧痕 胴部：ケズリ	外：黄褐色、茶褐色 内：淡黄褐色	口縁部完形	
69-3	土器溜まり2	土師器	甕				密	普通	ハケメ→ナデ	ナデ、ケズリ	外：淡褐色 内：灰褐色	胴部底1/4	胴部片を5枚程重ねた状態で出土
69-4	土器溜まり2	土師器	甕	(13.7)			密。砂を含む	普通	不明	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：淡茶褐色 内：淡褐色	小片	
69-5	土器溜まり2	土師器	甕	(12.0)			密。砂を含む	良好	横ナデ	横ナデ	黄褐色	小片	
69-6	土器溜まり2	土師器	甕	(13.0)			小粒の砂を含む	普通	横ナデ	不明	淡褐色	小片	
69-7	土器溜まり2	土師器	甕	(15.8)			砂を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ	黄褐色	小片	
69-8	土器溜まり2	土師器	甕	(16.0)			小粒の砂を含む	やや不良	不明	不明	外：明茶褐色 内：黄褐色	口縁部1/4	
69-9	土器溜まり2	土師器	甕				密	普通	横ナデ	横ナデ	外：黄褐色 内：白褐色	小片	外面の一部にスス付着
69-10	土器溜まり2	土師器	直口壺	8.8	14.0		密	普通	口縁部：横ナデ 胴部上半：横ナデ 胴部下半：ナデ	口縁部：横ナデ 胴部上半：指圧痕 胴部下半：不明	外：赤褐色 内：灰褐色、淡褐色	90%	赤色粘土使用
69-11	土器溜まり2	土師器	甕				砂を多く含む	良好	ナデ	指圧痕	淡茶褐色	底部完形	外面にスス付着
70-12	土器溜まり2	土師器	高坏	13.5	10.6	7.8	密	良好	坏部：ハケメ→ナデ 脚部：ヘラ状工具で面取り、ナデ	坏部：横ナデ、ナデ 脚部：ナデ、しぼり痕	赤褐色	90%	赤色粘土使用
70-13	土器溜まり2	土師器	高坏	12.8	10.3	8.4	密	良好	不部：ハケメ→一部ナデ 脚部：ヘラ状工具痕、ナデ	坏部：横ナデ、ナデ 脚部：ナデ、しぼり痕	茶褐色、淡褐色	70%	
70-14	土器溜まり2	土師器	高坏	(18.7)			砂を多く含む	良好	横ナデ	横ナデ、暗文	外：赤彩、淡褐色 内：淡褐色	小片	
70-15	土器溜まり2	土師器	高坏	(20.0)			密	良好	横ナデ	ハケメ	外：赤褐色、黒灰色 内：赤褐色	口縁部1/6	赤色粘土使用
70-16	土器溜まり2	土師器	高坏	(23.5)			密。 小粒の砂を含む	普通	横ナデ	横ナデ	外：茶灰色、茶褐色 内：赤褐色、茶褐色	小片	
70-17	土器溜まり2	土師器	高坏			(9.0)	密	良好	ミガキ	ヘラ状工具による横ナデ	赤褐色	脚部70%	赤色粘土使用
70-18	土器溜まり2	土師器	高坏			5.7	密	普通	横ナデ、ナデ	ナデ	外：淡茶褐色 内：淡茶褐色、茶褐色、黒灰色	脚部完形	
70-19	土器溜まり2	土師器	高坏				密	普通	横ナデ、ナデ	ナデ	外：淡褐色 内：淡黄褐色 脚内面：黒色	脚部50%	
70-20	土器溜まり2	土師器	高坏				密。 小粒の砂を含む	やや不良	不明	ヘラ状工具による横ナデ	赤褐色、黄褐色	脚部1/2	3ヶ所の透かし
70-21	土器溜まり2	土師器	高坏				砂を若干含む	普通	不明	不明	外：淡褐色、黄褐色 内：淡褐色	小片	
70-22	土器溜まり2	土師器	高坏				大粒の砂を含む	普通	ナデ	ナデ	黄褐色	小片	
70-23	土器溜まり2	土師器	高坏				砂を多く含む	やや不良	不明	不明	外：淡褐色 内：黄褐色	小片	

挿図番号	遺構	種別	器種	寸法(cm)			胎土	焼成	調整		色調	残存度	備考
				口径	器高	底径			外面	内面			
70-24	土器溜まり?	土師器	坏	11.1	5.1	2.8	密	やや不良	体部：ナデ 底部：指圧痕	横ナデ、ナデ	赤褐色	80%	赤色粘土使用
71-1	1区包含層	弥生	甕	(26.0)			砂を多く含む	良好	擬凹線文、横ナデ	横ナデ	外：淡褐色 内：赤褐色	口縁部1/8	
71-2	1区包含層	弥生	甕	(18.7)			砂を多く含む	普通	擬凹線文、横ナデ	口縁部：不明 胴部：ケズリ	外：淡黄茶褐色 内：淡褐色	小片	
71-3	1区包含層	縄文	深鉢			(10.0)	砂を多く含む	普通	ナデ	不明	淡褐色	底部1/3	
71-4	2区包含層	縄文	深鉢	(29.5)			小粒の砂を含む	普通	凸帯（縄文）、横ナデ	ナデ	外：暗茶褐色 内：淡暗茶褐色	小片	
71-5	2区包含層	縄文	深鉢	(26.5)			小粒の砂を多く含む 黒雲母を含む	普通	凸帯、横ナデ	不明	外：濃茶褐色 内：淡茶褐色	口縁部1/8	鐘ヶ崎式
71-6	2区包含層	縄文	深鉢	(17.5)			小粒の砂を含む	良好	RL縄文、横ナデ	横ナデ、ヘラ状工具による横ナデ	茶褐色	小片	
71-7	2区包含層	弥生	甕	(16.0)			砂を多く含む	普通	不明	不明	黄褐色	小片	外面スス付着
71-8	2区包含層	弥生	甕	(21.0)			砂を多く含む	普通	擬凹線文	不明	黄褐色	小片	
71-9	2区包含層	土師器	短頸壺	(13.5)			砂を若干含む	良好	ナデ	ナデ、ケズリ	外：淡茶褐色、赤彩? 内：黄褐色	小片	
71-10	3区包含層	縄文				(10.0)	大粒の砂を多く含む	良好	ナデ	ナデ	外：茶褐色、黄褐色 内：茶褐色	底部1/6	
71-11	3区包含層	縄文				(8.0)	砂を多く含む	良好	胴部：横ナデ 底面：ケズリ	横ナデ、ケズリ	外：黄褐色 内：灰褐色	底部1/4	
71-12	3区包含層	弥生		(31.5)			大粒の砂を多く含む	良好	凹線、横ナデ、沈線	横ナデ、ハケメ	淡黄茶褐色	小片	
71-13	3区包含層	弥生	甕	(15.5)			砂を含む	良好	横ナデ、刺突文	ナデ、ケズリ	外：淡黄褐色 内：淡茶褐色	口縁部1/4	
71-14	3区包含層	弥生	甕				砂を多く含む	普通	擬凹線文、横ナデ	横ナデ、ケズリ	淡褐色	口縁部1/4	
71-15	3区包含層	弥生	甕	(15.0)			砂を多く含む	良好	凹線、横ナデ	横ナデ	淡白褐色	口縁部1/8	
71-16	3区包含層	弥生	器台?				砂を多く含む	良好	擬凹線文、横ナデ	ナデ	黄茶褐色	小片	
71-17	3区包含層	土師器	甕	(21.5)			砂を多く含む	普通	横ナデ	不明	黄褐色	口縁部1/8	外面スス付着
71-18	3区包含層	土師器	甕	(16.0)			密	良好	横ナデ	横ナデ	淡茶褐色	口縁部1/8	
71-19	3区包含層	土師器	甕	(11.5)			砂を若干含む	普通	ハケメ→横ナデ	ハケメ	茶褐色	小片	
74-1	4区包含層	弥生	壺	(21.5)			密	やや不良	凹線、凸帯	不明	黄褐色	口縁部1/6	
74-2	4区包含層	弥生	壺				密。 砂を若干含む	良好	口縁部：沈線、刺突文 頸部：ハケメ→横ナデ	ハケメ→波状文	口縁部：黒灰色 頸部：淡茶褐色 内：暗茶褐色	小片	
74-3	4区包含層	弥生	甕	(20.5)			密	良好	横ナデ、ナデ	ナデ	淡茶褐色	口縁部1/3	
74-4	4区包含層	弥生	甕				砂を少量含む	普通	擬凹線文	不明	淡茶褐色	口縁部1/8	外面スス付着
74-5	4区包含層	弥生	甕	(21.5)			大粒の砂を含む	良好	擬凹線文、横ナデ	横ナデ	外：淡赤褐色 内：淡褐色	小片	KD07上層出土
74-6	4区包含層	弥生	把手				大粒の砂を多く含む	良好	ナデ		茶褐色		
74-7	4区包含層	弥生?				7.0	砂を多く含む	普通	不明	横ナデ、ナデ	外：黄褐色、灰褐色 内：灰褐色	底部完形	
74-8	4区包含層	弥生				(5.0)	小粒の砂を多く含む	良好	ナデ	ナデ	外：黄褐色、黒灰色 内：黄褐色	底部1/4	底部穿孔?
74-9	4区包含層	弥生?				(6.0)	小粒の砂を多く含む	普通	ナデ	ナデ、指圧痕	外：暗茶褐色 内：黄褐色、黒灰色	底部完形	
74-10	4区包含層	弥生				(6.0)	大粒の砂を含む	普通	ナデ	ナデ	淡褐色	小片	KD07上層出土
74-11	4区包含層	弥生?				3.5	密	普通	ヘラ状工具で面取り、ナデ	横ナデ、ナデ	外：淡褐色、暗茶褐色 内：暗茶褐色	底部2/3	赤色粘土使用
74-12	4区包含層	弥生?	蓋?				密。 大粒の砂を含む	普通	横ナデ	ナデ	淡褐色、黒灰色	つまみ90%	2ヶ所穿孔。ミニチュア高坏の脚の可能性もある。
74-13	4区包含層	土師器	甕	(22.5)			密	良好	横ナデ	横ナデ	外：淡褐色、茶褐色 内：黒灰色、淡褐色	小片	
74-14	4区包含層	土師器	甕	(17.5)			密。 砂を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	暗茶褐色、淡茶褐色	小片	
74-15	4区包含層	土師器	甕	(14.0)			砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ	茶褐色，淡褐色	小片	外面スス付着
74-16	4区包含層	土師器	甕	(16.0)			砂を若干含む	良好	横ナデ	横ナデ	茶褐色、黒灰色	口縁部1/8	
74-17	4区包含層	土師器	甕	(13.0)			密	良好	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	外：黄褐色 内：茶褐色	口縁部1/4	
74-18	4区包含層	土師器	甕	(13.0)			砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ	黄褐色、茶褐色	口縁部1/8	
74-19	4区包含層	土師器	甕	(17.0)			密	普通	横ナデ	横ナデ	灰褐色	小片	
74-20	4区包含層	土師器	甕	(15.0)			密	普通	ナデ	横ナデ	外：黒灰色 内：淡茶褐色	口縁部1/8	外面スス付着
74-21	4区包含層	土師器	甕	(13.5)			砂を少量含む	普通	ナデ	横ナデ	淡褐色	小片	KD07上層出土
74-22	4区包含層	土師器	甕	(15.0)			砂を若干含む	普通	横ナデ	不明	外：黒色 内：淡灰色	小片	
74-23	4区包含層	土師器	甕	(18.0)			密。 砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ	黒灰色	口縁部1/8	
74-24	4区包含層	土師器	甕	(15.8)			砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ	赤褐色	小片	
74-25	4区包含層	土師器	甕	(13.8)			密。雲母を含む	良好	横ナデ	横ナデ	外：赤褐色 内：茶褐色	小片	
74-26	4区包含層	土師器	甕	(13.4)			砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ	外：淡褐色 内：茶褐色	小片	KD07上層出土
75-27	4区包含層	土師器	甕	(14.0)			密	良好	口縁部：ハケメ 頸部：横ナデ 肩部：ハケメ	口縁部：ハケメ 頸部：面取り 肩部：ケズリ	外：淡灰褐色、黄褐色 内：灰褐色	小片	
75-28	4区包含層	土師器	甕	(15.5)			砂を多く含む	普通	口縁部：横ナデ 胴部：ナデ、一部ハケメ	口縁部：横ナデ 頸部：指圧痕 胴部：ケズリ	外：茶褐色 内：淡褐色	口縁部1/8	
75-29	4区包含層	土師器	甕	(17.0)			密	やや不良	横ナデ	横ナデ、ナデ	黄褐色	口縁部1/8	
75-30	4区包含層	土師器	甕	(16.0)			砂を若干含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ハケメ	口縁部：ナデ 頸部：ハケメ→ナデ 胴部：ケズリ	黄褐色	口縁部1/6	
75-31	4区包含層	土師器	甕	(17.5)			密。 砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ、ケズリ	淡茶灰色	口縁部1/6	
75-32	4区包含層	土師器	甕	(16.0)			密	良好	ハケメ→横ナデ	口縁部：横ナデ 頸部：指圧痕 胴部：ケズリ	淡茶褐色	小片	
75-33	4区包含層	土師器	甕	(16.0)			大粒の砂を多く含む	普通	口縁部：横ナデ 胴部：不明	口縁部：横ナデ 頸部：ナデ 胴部：ケズリ	茶褐色	口縁部1/8	
75-34	4区包含層	土師器	甕	(14.5)			大粒の砂を含む	良好	横ナデ	ナデ	茶褐色	口縁部1/6	
75-35	4区包含層	土師器	甕	(17.0)			小粒の砂を多く含む	普通	横ナデ	横ナデ	外：茶褐色、淡褐色 内：淡赤褐色	口縁部1/3	外面スス付着
75-36	4区包含層	土師器	甕	(17.5)			砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ	黄茶褐色	小片	
75-37	4区包含層	土師器	甕	(17.0)			密。 小粒の砂を含む	良好	口縁部：ハケメ 頸部：ハケメ→横ナデ 肩部：ハケメ	口縁部：ハケメ 頸部：ハケメ→横ナデ、ヘラ状工具で面取り 肩部：ケズリ	外：茶灰色、暗茶褐色 内：茶褐色、茶灰色	口縁部1/6	
75-38	4区包含層	土師器	甕	(14.0)			密	良好	横ナデ	ハケメ→ナデ	外：淡茶褐色 内：黄褐色	口縁部1/8	外面スス付着
75-39	4区包含層	土師器	甕	(18.0)			密。 砂を若干含む	普通	口縁部：ハケメ→横ナデ 肩部：横ナデ、刺突文	口縁部：ハケメ→横ナデ 肩部：ケズリ	外：淡黄灰色 内：灰褐色、淡灰色	口縁部1/8	
75-40	4区包含層	土師器	甕	(13.5)			密	普通	横ナデ	横ナデ、一部ハケメ ケズリ	外：淡褐色 内：暗茶褐色	口縁部1/6	
75-41	4区包含層	土師器	甕	(10.5)			砂を若干含む	普通	横ナデ	横ナデ、ケズリ	黄褐色	小片	
75-42	4区包含層	土師器	甕	(11.5)			密	良好	横ナデ	口縁部：横ナデ 頸部：ナデ 肩部：ケズリ	淡茶褐色	口縁部1/8	
75-43	4区包含層	土師器	甕	(22.7)			砂を多く含む	良好	横ナデ、ナデ	横ナデ、ケズリ	暗茶褐色，茶褐色	口縁部1/8	
76-44	4区包含層	土師器	小形丸底壺	(9.5)			砂、雲母を若干含む	良好	口縁部：ハケメ→ナデ 頸部：ハケメ 肩部：ハケメ→ナデ 胴部下半：ハケメ	口縁部：ハケメ 頸部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：黒色，黒灰色 内：淡茶褐色	口縁部1/8	
76-45	4区包含層	土師器	小形丸底壺	8.5	7.4		密	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ナデ	口縁部：横ナデ 頸部：ケズリ→指圧痕 胴部：ケズリ	外：茶褐色、暗茶褐色 内：黒灰色、淡茶褐色	90%	

挿図番号	遺構	種別	器種	寸法(cm)			胎土	焼成	調整		色調	残存度	備考
				口径	器高	底径			外面	内面			
76-46	4区包含層	土師器	鉢	(12.0)			密。 砂を若干含む	良好	口縁部：横ナデ 胴部：ナデ	口縁部：横ナデ 胴部：ケズリ	外：黒灰色、黄褐色 内：淡褐色、黄褐色	口縁部1/6	KD07上層出土
76-47	4区包含層	土師器					小粒の砂を含む	良好	荒いハケメ	ミガキ	外：茶褐色 内：淡褐色		KD07上層出土
76-48	4区包含層	土師器					密。 金雲母を含む	良好	ミガキ	ミガキ	赤褐色		KD07上層出土
76-49	4区包含層	土師器	高坏	(24.0)			密。 雲母を含む	普通	横ナデ	横ナデ、一部ハケメ	赤褐色	口縁部1/8	赤色粘土使用
76-50	4区包含層	土師器	高坏				小粒の砂を多く含む	普通	不明	不明	淡褐色	小片	
76-51	4区包含層	土師器	高坏	(18.0)			密	良好	横ナデ	横ナデ	外：暗茶褐色 内：淡褐色	小片	KD07上層出土
76-52	4区包含層	土師器	高坏	(19.7)			密。 砂を若干含む	普通	不明	不明	淡褐色	小片	
76-53	4区包含層	土師器	高坏				雲母、若干の砂を含む	普通	横ナデ、ハケメ	横ナデ	外：淡褐色 内：淡褐色、黄褐色	小片	
76-54	4区包含層	土師器	高坏				小粒の砂を含む	良好	ミガキ	ミガキ	淡黄褐色	小片	KD07上層出土
76-55	4区包含層	土師器	高坏				小粒の砂を含む	普通	不明	不明	淡黄褐色	坏部径の1/3	KD07上層出土
76-56	4区包含層	土師器	高坏				砂を若干含む	良好	暗文、ナデ、横ナデ、 ハケメ→ナデ	横ナデ、ナデ	淡褐色	坏部径の1/3	
76-57	4区包含層	土師器	高坏				密	やや不良	ハケメ	不明	淡茶褐色	小片	
76-58	4区包含層	土師器	高坏				砂を若干含む	良好	ミガキ、指圧痕	ナデ	外：淡褐色 内：淡褐色、黄褐色	坏部底	
76-59	4区包含層	土師器	高坏	(19.6)			砂を多く含む	普通	口縁部：横ナデ 体部：ハケメ→ナデ、 ナデ	ナデ	外：淡茶褐色 内：黄褐色	小片	KD07上層出土
76-60	4区包含層	土師器	高坏	(19.0)			砂を若干含む	良好	縦方向のナデ	ナデ	淡茶褐色	坏部1/3	
76-61	4区包含層	土師器	高坏				大粒の砂を若干含む	やや不良	不明	不明	黄褐色	坏部1/4	
76-62	4区包含層	土師器	高坏	(18.8)			砂を若干含む	良好	横ナデ	ナデ	外：暗茶褐色 内：淡褐色、黄褐色	小片	KD07上層出土
76-63	4区包含層	土師器	高坏	(14.2)			密。雲母を含む	良好	横ナデ、ナデ	横ナデ、ナデ	外：灰褐色 内：淡褐色	口縁部1/6	
76-64	4区包含層	土師器	高坏				密	良好	坏部：ナデ 脚部：ヘラによる面取り、ナデ	坏部：ナデ 脚部：ヘラ状工具によるナデ	外：茶褐色、黒灰色 体部内：淡赤褐色 脚部内：茶褐色	1/4	
77-65	4区包含層	土師器	高坏				密	良好	ミガキ風のナデ、ヘラ状工具による面取り	暗文	外：暗茶褐色 内：淡褐色	坏部底	赤色粘土使用
77-66	4区包含層	土師器	高坏				砂を多く含む	良好	ナデ、ハケメ	ナデ	外：茶褐色、赤褐色 内：黄褐色、灰褐色	坏部底	
77-67	4区包含層	土師器	高坏				砂をやや多く含む	やや不良	不明	不明	淡褐色、茶褐色	坏部底	
77-68	4区包含層	土師器	高坏				密	良好	ナデ、ハケメ→ナデ	ミガキ風のナデ	黄褐色	坏部底	
77-69	4区包含層	土師器	高坏				砂を多く含む	普通	不明	横ナデ、ナデ	外：淡褐色、茶褐色 内：黒灰色、灰褐色、 淡褐色	坏部底	
77-70	4区包含層	土師器	高坏				密	普通	ミガキ風のナデ	ミガキ風のナデ	淡褐色、黄褐色	坏部底	
77-71	4区包含層	土師器	高坏				砂を若干含む	普通	ハケメ	ナデ	淡褐色	小片	
77-72	4区包含層	土師器	高坏				密	普通	ナデ、ハケメ	ナデ	赤褐色	坏部底	赤色粘土使用
77-73	4区包含層	土師器	高坏				密	やや不良	坏部：不明 脚部：ナデ	坏部：不明 脚部：ナデ	外：赤褐色 内：黄褐色	1/3	
77-74	4区包含層	土師器	高坏				密	良好	ナデ、ヘラ状工具による面取り	ハケメ	赤褐色	不部底	赤色粘土使用
77-75	4区包含層	土師器	高坏				砂を若干含む	やや不良	不明	不明	外：淡黄褐色 内：黄褐色	1/3	
77-76	4区包含層	土師器	高坏				密。砂を若干含む	やや不良	坏部：不明 脚部：ヘラ状工具による面取り	坏部：不明 脚部：ヘラ状工具による横ナデ	淡褐色	1/4	3方向に透かし
77-77	4区包含層	土師器	高坏				密	良好	ナデ(器面凸凹)	放射状のハケメ	赤褐色	坏部底	赤色粘土使用
77-78	4区包含層	土師器	高坏			11.4	密	普通	ミガキ	しぼり痕、横ナデ	淡黄褐色	脚部90%	KD07上層出土
77-79	4区包含層	土師器	高坏			9.5	密	普通	ヘラ状工具で面取り、刺突、ナデ	しぼり痕、横ナデ	淡褐色、茶褐色	脚部70%	KD07上層出土
77-80	4区包含層	土師器	高坏			(15.0)	密	良好	ヘラ状工具で面取り、ミガキ風のナデ	しぼり痕、ヘラ状工具による横ナデ	淡褐色	脚部60%	
77-81	4区包含層	土師器	高坏			(13.8)	密	普通	ヘラ状工具で面取り、ナデ	しぼり痕、ナデ	赤褐色、黄茶褐色	脚部40%	
77-82	4区包含層	土師器	高坏			(10.7)	砂を若干含む	普通	ハケメ、ナデ	ヘラ状工具による横ナデ、ハケメ→ナデ	茶褐色	脚部60%	
77-83	4区包含層	土師器	高坏				密	普通	ヘラ状工具による面取り、ナデ	ヘラ状工具による横ナデ	茶褐色	脚部50%	
77-84	4区包含層	土師器	高坏				密。 砂を若干含む	やや不良	ヘラ状工具による面取り、ナデ	ヘラ状工具による横ナデ	淡黄褐色		円形透かし
77-85	4区包含層	土師器	高坏				密	普通	ヘラ状工具による面取り、ナデ	ヘラ状工具で横ナデ、しぼり痕	外：淡茶褐色 内：黒灰色	脚部70%	内面黒色化
77-86	4区包含層	土師器	高坏				砂を多く含む	普通	不明	ヘラ状工具による横ナデ	外：淡茶褐色 内：黒灰色	脚部40%	内面黒色化
77-87	4区包含層	土師器	高坏				密	良好	ヘラ状工具による面取り、ナデ	ヘラ状工具による横ナデ	茶褐色	脚部50%	
77-88	4区包含層	土師器	高坏				密	やや不良	不明	ケズリ、ヘラ状工具で横ナデ	淡褐色	脚部50%	
77-89	4区包含層	土師器	高坏				密	良好	ミガキ？	しぼり痕	淡黄褐色	脚部50%	KD07上層出土
78-90	4区包含層	土師器	高坏				小粒の砂を含む	良好	ミガキ	しぼり痕	赤褐色	脚部40%	KD07上層出土。 3方向に透かし。
78-91	4区包含層	土師器	高坏				密	普通	ヘラ状工具による面取り	しぼり痕	淡黄褐色	脚部50%	3方向に透かし
78-92	4区包含層	土師器	高坏				密。 砂を若干含む	普通	ヘラ状工具による面取り	しぼり痕	茶褐色	脚部40%	
78-93	4区包含層	土師器	高坏				密。 砂を若干含む	普通	ナデ	ヘラ状工具で横ナデ、ナデ	外：茶褐色、黄褐色 内：淡褐色	脚部30%	
78-94	4区包含層	土師器	高坏			7.3	大粒の砂を含む	普通	横ナデ	坏部：ナデ 脚部：指圧痕、横ナデ	淡褐色	50%	
78-95	4区包含層	土師器	坏	(13.9)			密。砂を若干含む	普通	横ナデ、ハケメ	板状工具でナデ	外：淡褐色、灰褐色 内：淡褐色	小片	KD07上層出土
78-96	4区包含層	土師器	坏	(11.9)	3.1		密	やや不良	不明	不明	赤褐色	口縁部1/4	
78-97	4区包含層	土師器	坏	(13.5)			密	やや不良	不明	横ナデ、ナデ	外：黄褐色、茶褐色 内：黄褐色	口縁部1/6	
78-98	4区包含層	土師器	坏	(13.9)			密	普通	不明	横ナデ	外：淡茶褐色 内：淡褐色、淡茶褐色	口縁部1/4	
78-99	4区包含層	須恵器	甕				密	良好	波状文	ナデ	外：青灰色 内：茶灰色	小片	
78-100	4区包含層	須恵器	蓋坏	(12.0)	3.8		密	良好	天井部：回転ケズリ 口縁部：回転ナデ	回転ナデ	外：淡黒灰色 内：淡灰色　断面：紫	小片	
78-101	4区包含層	須恵器	高坏				密	良好	回転ナデ	ナデ	外：青灰色 内：茶灰色 断面：淡紫色	小片	
78-102	4区包含層	土師器				5.8	密。 小粒の砂を含む	普通	横ナデ 底面：糸切り→ナデ	回転ナデ	外：淡褐色、淡茶褐色 内：淡茶褐色	底部90%	高台
78-103	4区包含層	土師器				6.7	密	やや不良	不明	不明	外：黄褐色 内：淡暗茶褐色	底部80%	高台
78-104	4区包含層	土師器				6.6	密	良好	横ナデ 底面：糸切り→ナデ	ナデ	淡茶褐色	底部90%	高台
78-105	4区包含層	土師器				6.0	密。 砂を若干含む	良好	横ナデ 底面：糸切り→ナデ	横ナデ、回転ナデ	外：暗茶褐色、茶褐色 内：暗茶褐色	底部90%	高台
78-106	4区包含層	土師器	碗	13.3	6.1	6.1	大粒の砂を含む	普通	口縁部：横ナデ 体部：不明 底面：ナデ	口縁部：横ナデ 体部：ナデ	黄褐色	90%	
78-107	4区包含層	土師器	碗	15.8	5.3	5.3	小粒の砂を含む	普通	横ナデ 底面：糸切り	横ナデ、ナデ	淡黄褐色	90%	
78-108	4区包含層	土師器				(5.8)	砂を若干含む	普通	横ナデ 底面：糸切り	回転ナデ	外：淡褐色 内：暗茶褐色	底部1/4	

挿図番号	遺構	種別	器種	寸法(cm)			胎土	焼成	調整		色調	残存度	備考
				口径	器高	底径			外面	内面			
78-109	4区包含層	土師器				5.0	砂を多く含む	普通	横ナデ 底面：糸切り	回転ナデ	外：黄褐色 内：淡茶褐色	底部完形	
78-110	4区包含層	土師器				(6.2)	密	やや不良	ナデ 底面：糸切り→一部ナデ	不明	外：淡褐色 内：黄褐色	底部1/4	
78-111	4区包含層	土師器				(6.2)	小粒の砂を若干含む	普通	底面：糸切り	ナデ	外：黄褐色 内：淡茶褐色	底部1/4	
78-112	4区包含層	土師器				5.7	砂を若干含む	普通	底面：糸切り	不明	淡褐色	底部1/2	
78-113	4区包含層	土師器				4.8	密	普通	回転ナデ 底面：糸切り	回転ナデ	外：茶灰色 内：淡褐色	底部1/2	
78-114	4区包含層	土師器				4.6	砂を若干含む	良好	ナデ 底面：糸切り	回転ナデ	淡黒灰色	底部完形	
78-115	4区包含層	土師器				(4.7)	密	良好	横ナデ 底面：糸切り	ナデ ヘラ状工具でナデ	淡灰色	底部1/6	
78-116	4区包含層	土師器				4.7	砂を若干含む	良好	横ナデ 底面：糸切り	横ナデ、回転ナデ	外：茶褐色、黄褐色 内：茶褐色、淡褐色	底部完形	
78-117	4区包含層	土師器				6.0	砂を若干含む	良好	横ナデ 底面：糸切り	回転ナデ	外：茶褐色、黒灰色 内：暗茶褐色	底部90%	
78-118	4区包含層	土師器				4.7	砂を多く含む	普通	不明 底面：糸切り?(風化)	横ナデ、回転ナデ	外：黄褐色 内：黄褐色、茶褐色	底部完形	
78-119	4区包含層	土師器				(6.2)	小粒の砂を若干含む	普通	横ナデ 底面：糸切り→一部ナデ	横ナデ、ナデ	暗茶褐色	底部1/4	
78-120	4区包含層	土師器				(4.8)	密	良好	横ナデ 底面：糸切り	回転ナデ	外：淡褐色 内：茶褐色	底部1/4	

第14表　南外２号墳出土古銭観察表

挿図番号	遺構	種別	径(cm)	備考
14-17	南外２号墳	古銭	2.4	元豊通宝
14-18	南外２号墳	古銭	2.4	寛永通宝
14-19	南外２号墳	古銭	2.5	寛永通宝
14-20	南外２号墳	古銭	2.2	寛永通宝
14-21	南外２号墳	古銭	2.4	寛永通宝
14-22	南外２号墳	古銭	2.3	寛永通宝
14-23	南外２号墳	古銭	2.3	寛永通宝
14-24	南外２号墳	古銭	2.4	寛永通宝
14-25	南外２号墳	古銭	2.2	寛永通宝

第15表　勝負遺跡出土鉄製品観察表

挿図番号	遺構	器種	寸法(cm)			重さ	備考
			長さ	幅	厚さ		
41-6	SI03	錐状鉄製品	(4.3)	0.65	0.5	3.53	
54-17	KD04	袋状鉄斧	10	3.9	0.9	144.46	刃部が斜めになっている。

第16表　勝負遺跡出土玉類観察表

挿図番号	遺構	種別	器種	材質	寸法(cm)		重さ	備考
					長さ	幅、径		
41-7	SI03	玉	管玉	ガラス	(0.8)	0.45	0.31	鮮緑色
50-69	SI05	玉	臼玉	滑石	(0.2)	0.4	0.03	欠損
50-70	SI05	玉	臼玉	滑石	0.25	0.6	0.11	

第17表　勝負遺跡出土石器観察表

挿図番号	遺構	器種	石材	寸法(cm)			重さ(g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
29-1	SI01	石鏃	黒曜石	1.5	1.0	0.25	0.23	凹基
29-2	SI01	石鏃	安山岩	1.6	1.4	0.25	0.37	凹基。Pit7出土
29-3	SI01	石鏃	黒曜石	2.0	1.4	0.4	0.79	
29-4	SI01	石鏃	黒曜石	(0.65)	1.8	0.3	0.32	石鏃破片か？
29-5	SI01	石鏃	黒曜石	(1.8)	1.5	0.35	0.81	石鏃破片もしくは使用痕のある剥片
29-6	SI01	石錐	黒曜石	2.5	0.9	0.6	1.72	
29-7	SI01	石錐	黒曜石	3.4	1.2	0.7	2.71	自然面を大きく残す
29-8	SI01	抉り入り石器	黒曜石	3.7	5.3	1.3	22.45	被熱か？自然面を残す。両側に抉りをもつ。刃部は摩滅している。
29-9	SI01	石匙	安山岩	(3.2)	(6.4)	1.2	19.83	石匙破片か？
30-10	SI01	楔形石器	黒曜石	1.4	0.8	0.5	0.43	下端、右側縁につぶれ
30-11	SI01	楔形石器	黒曜石	1.9	1.1	0.6	0.92	両端につぶれ。
30-12	SI01	楔形石器	黒曜石	3.3	1.2	0.6	2.46	下端につぶれ
30-13	SI01	楔形石器	黒曜石	3.6	1.4	1.1	3.68	下端につぶれ
30-14	SI01	楔形石器	黒曜石	2.6	1.4	0.6	2.27	下端につぶれ
30-15	SI01	楔形石器	黒曜石	3.4	2.7	1.1	7.98	両端につぶれ。
30-16	SI01	楔形石器	黒曜石	3.2	3.5	1.0	9.24	自然面を残す。両端につぶれ。
30-17	SI01	楔形石器	黒曜石	1.9	1.9	0.7	2.16	両端につぶれ。
30-18	SI01	楔形石器	黒曜石	2.4	2.6	1.4	11.05	自然面を残す。下端につぶれ
30-19	SI01	楔形石器	黒曜石	2.6	1.6	0.9	2.26	下端につぶれ。被熱？
30-20	SI01	楔形石器	黒曜石	2.5	1.8	1.5	5.67	両端につぶれ。
30-21	SI01	楔形石器	黒曜石	2.7	2.3	1.0	4.23	両端につぶれ。
30-22	SI01	楔形石器	黒曜石	1.2	3.3	0.8	2.52	下端につぶれ。
31-23	SI01	使用痕のある剥片	黒曜石	1.9	1.7	0.2	0.56	左側縁に微細剥離
31-24	SI01	使用痕のある剥片	黒曜石	1.5	1.6	0.3	0.38	左側縁に微細剥離
31-25	SI01	使用痕のある剥片	黒曜石	2.2	1.3	0.5	0.94	下端、右側縁に微細剥離
31-26	SI01	使用痕のある剥片	黒曜石	2.4	2.3	0.65	2.28	右側縁に微細剥離
31-27	SI01	使用痕のある剥片	黒曜石	2.0	2.8	0.8	4.62	石核を転用。下端、右側縁に微細剥離。自然面を残す。
31-28	SI01	加工痕のある剥片	黒曜石	2.2	2.8	0.6	2.82	下端に微細剥離
31-29	SI01	石核	黒曜石	3.6	1.9	1.5	10.6	自然面を残す。
31-30	SI01	石核	黒曜石	2.9	3.9	1.3	16.86	
31-31	SI01	石核	黒曜石	3.0	4.5	1.7	15.91	Pit2出土
31-32	SI01	石核	黒曜石	4.0	4.0	1.1	18.53	
31-33	SI01	使用痕のある剥片	玉髄	5.1	6.1	1.9	40.33	右側縁に微細剥離。自然面を残す。
31-34	SI01	剥片	玉髄	4.2	6.7	1.9	38.27	自然面を残す
31-35	SI01	剥片	玉髄	7.0	6.7	2.1	83.96	自然面を残す
31-36	SI01	剥片	玉髄	3.7	3.5	0.8	6.9	自然面を残す
31-37	SI01	剥片	玉髄	3.0	3.2	1.4	9.77	
32-38	SI01	打製石斧	安山岩と流紋岩の間	(6.8)	5.2	1.5	53.85	刃部磨耗
32-39	SI01	打製石斧	流紋岩	(3.6)	5.3	0.6	10.42	破片。28-40と同一個体か？
32-40	SI01	打製石斧	流紋岩	5.0	6.1	0.95	43.99	破片。28-39と同一個体か？
32-41	SI01	磨製石斧	塩基性片岩	(14.1)	5.5	4.1	462.72	刃部破損
32-42	SI01	磨製石斧	安山岩と流紋岩の間	10.5	(1.2)	(1.9)	30.57	破片。
32-43	SI01	磨石・敲石類	安山岩	10.6	7.9	5.4	723.27	下端は顕著に磨り減っている。
32-44	SI01	磨石・敲石類	安山岩	10.9	10.2	4.7	716.1	検出面で28-45とともに中央に並んで出土
32-45	SI01	磨石・敲石類	安山岩	10.1	8.3	4.9	543.61	検出面で28-44とともに中央に並んで出土
33-46	SI01	石皿		20.3	11.2	7.2	1010.15	ピット1、2出土のものが接合。下側破片がPit1出土。一部スス付着。
33-47	SI01	石皿		16.6	12.8	4.6	952.34	両面使用。左側縁被熱。
33-48	SI01	石錘？	流紋岩	3.1	2.7	1.1	5.63	
33-49	SI01	石錘？	安山岩と玄武岩の間	3.1	3.0	0.9	7.74	
33-50	SI01	石錘？	安山岩と玄武岩の間	5.1	3.5	1.1	18.01	
32-51	SI01	打製石斧の素材剥片？	流紋岩と安山岩の間	10.7	6.1	1.6	124.38	

挿図番号	遺構	器種	石材	寸法(cm)			重さ(g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
33-52	SI01	剥片接合資料	黒曜石	4.1	4.2	2.0	18.04	接合資料
(52-1)		剥片	黒曜石	2.7	2.6	1.0	6.23	接合資料
(52-2)		剥片	黒曜石	2.5	3.0	0.8	5.96	接合資料
(52-3)		剥片	黒曜石	3.4	2.3	1.0	5.85	接合資料
33-53	SI01	剥片接合資料	黒曜石	3.4	5.0	1.1	19.13	接合資料
(53-1)		剥片	黒曜石	3.4	5.0	0.95	17.68	接合資料
(53-2)		剥片	黒曜石	2.8	2.3	0.25	1.45	接合資料
41-8	SI03	台石		22.7	31.5	12.6		被熱
41-9	SI03	台石		22.3	12.6	9.2		浅く凹む。スス付着。
51-71	SI05	石鏃	黒曜石	1.85	1.5	0.3	0.8	凹基式
51-72	SI05	楔形石器	黒曜石	1.8	1.7	0.7	1.96	
51-73	SI05	楔形石器	白瑪瑙	1.9	3.5	1.1	6.11	下端、左側縁につぶれ
51-74	SI05	石匙	安山岩	3.2	6.7	0.6	12.07	下端右側は顕著に磨耗
51-75	SI05	磨製石斧		15.8	5.1	3.9	563.48	
51-76	SI05	砥石		13.8	10.2	11.0	1314.45	刃物痕が残る。
51-77	SI05	台石		26.3	18.1	8.0		被熱のため側縁は赤色化
55-20	KD02	石鏃	黒曜石	1.5	1.0	0.25	0.28	凹基式
55-21	KD02	石鏃	安山岩	1.7	1.2	0.2	0.29	未製品
55-22	KD02	加工痕のある剥片	黒曜石	3.6	3.1	1.1	6.19	自然面が残る。左側縁に微細剥離。
55-23	KD02	石核	黒曜石	2.8	2.9	0.9	6.57	自然面が残る。
55-24	KD02	石核	黒曜石	2.0	2.9	1.4	5.2	自然面が残る。
55-25	KD02	磨石・敲石類		9.6	9.0	6.3	764.08	両面に磨面。側面に敲打痕。
55-26	KD02	砥石		7.1	4.8	3.9	233.96	若干被熱。
56-7	KD06	砥石		13.9	6.7	2.0	252.39	両面に擦痕。
61-3	SD04	楔形石器	黒曜石	1.9	1.0	0.6	0.83	下端につぶれ。
64-2	SK02	石皿	花崗岩	20.1	14.2	5.4	1519.3	中央が凹む。
65-4	SK04	石鏃	黒曜石	2.2	(1.4)	0.3	0.5	凹基式。
70-25	土器溜まり2	石錘	凝灰岩	7.3	5.5	1.2	61.72	
70-26	土器溜まり2	砥石	凝灰岩	7.2	4.9	4.6	278.76	表、右側面使用。
70-27	土器溜まり2	砥石	安山岩	9.1	5.2	1.0	36.37	表面使用。多数の擦痕。
70-28	土器溜まり2	砥石		10.9	8.0	6.2	653.59	全面に無数の刃物痕。
72-20	2区包含層	石鏃	黒曜石	2.3	1.5	0.6	2.13	平基式
72-21	2区包含層	楔形石器	黒曜石	3.2	2.5	0.9	6.44	両端につぶれ
72-22	2区包含層	磨製石斧		13.0	5.1	4.0	383.09	刃部再生。
72-23	3区包含層	石鏃	安山岩	(1.6)	1.8	0.4	1.07	平基式
72-24	3区包含層	石鏃	黒曜石	(2.0)	1.9	0.2	0.73	凹基式
72-25	3区包含層	加工痕のある剥片	黒曜石	6.1	3.3	1.4	24.57	表面中央、両側縁につぶれ。
72-26	3区包含層	磨石・敲石類		(4.4)	7.9	6.9	272.82	破片
79-121	4区包含層	石鏃	黒曜石	2.1	1.7	0.6	1.65	
79-122	4区包含層	石鏃	黒曜石	1.6	1.0	0.4	0.8	未製品。被熱？
79-123	4区包含層	石錐	黒曜石	2.1	1.6	0.6	1.38	一部に自然面が残る。
79-124	4区包含層	スクレイパー	安山岩	3.2	5.4	1.1	16.29	
79-125	4区包含層	楔形石器	黒曜石	2.4	1.4	1.4	4.17	両端につぶれ。
79-126	4区包含層	楔形石器	黒曜石	2.3	2.1	0.8	4.03	両端、左側縁につぶれ。
79-127	4区包含層	使用痕のある剥片	黒曜石	2.5	3.1	0.7	3.88	下端に微細剥離。
79-128	4区包含層	使用痕のある剥片	玉髄	4.6	2.3	0.9	7.41	両側縁に微細剥離。
79-129	4区包含層	加工痕のある剥片	黒曜石	2.4	2.0	0.5	2.51	両側縁に微細剥離。
79-130	4区包含層	剥片	白瑪瑙	3.1	2.2	1.0	4.24	楔形石器の削片？
79-131	4区包含層	勾玉状に整形した剥片	瑪瑙	2.6	1.9	1.0	5.47	
79-132	4区包含層	石核	黒曜石	3.0	3.1	1.6	13.36	自然面が残る。
79-133	4区包含層	石核	黒曜石	2.5	2.8	1.1	5.64	
79-134	4区包含層	石核	黒曜石	1.9	4.5	1.3	9.61	自然面が残る。
79-135	4区包含層	石核	黒曜石	2.0	2.8	1.4	5.3	
79-136	4区包含層	石錘	流紋岩	6.8	6.3	1.4	70.93	
79-137	4区包含層	石錘	流紋岩	9.3	5.1	1.4	80.98	
79-138	4区包含層	砥石	凝灰岩	7.0	3.5	2.2	85.55	全面に細かい擦痕。
79-139	4区包含層	砥石	凝灰岩	10.9	3.6	3.6	139	右側面に深い刃物痕。4面使用。
79-140	4区包含層	砥石	安山岩と玄武岩の間	10.5	10.7	3.0	1198.82	一部に擦痕。
79-141	4区包含層	凹石	安山岩	(5.7)	8.2	2.6	131.43	

第18表　南外２号墳・勝負遺跡遺構一覧

掲載遺構名	遺物	時期	平面規模(長×幅) m	深さ・高さ(m)	備考
南外２号墳	須恵器、古銭	古墳中期末	12.5×12.5	1.0～2.2	
主体部	須恵器		(2.75)×0.8	(0.4)	深さは墳丘上層から推定
箱式石棺	なし	古墳？	0.9×0.5m 内部面積0.6×0.2	0.19	
SI01	縄文土器、石器	縄文後期中葉	3.6×(2.9)	0.34	主柱穴４本、支柱穴10本以上。 壁沿いピット多数 掘込地床炉。
SI02	弥生土器、土師器	弥生後期	5.4×(4.5)	0.24	前回調査SI14の続き。 主柱穴４本？、中央ピット。 主柱間に２本の支柱穴(?)
SD01	弥生土器	弥生後期	幅約1.4	0.24	SI-02に伴う溝
SI03	弥生土器、石器、ガラス玉、鉄器	弥生後期	6.1×(6.0)	0.52	主柱穴４本、中央ピット。
SD02	弥生土器	弥生後期		0.4～0.55	SI-03に伴う溝
SI04	弥生土器	弥生後期	4.65×(2.5)	0.45	焼失住居、主柱穴４本
SI05	土師器、須恵器、臼玉、石器	古墳中期	6.0×5.5	0.65	上方に土器溜り２
KD01	土器片	弥生？	(3.85×1.35)	0.13	不整形ピット２基
KD02	土師器、石器	古墳中期	(4.1×1.9)	0.3	
KD03	土師器	古墳中期	1.7×0.9	0.24	
KD04	土師器、鉄斧	古墳中期	1.5×1.7	0.4	前回調査SI18の続き。 規模は今回調査分のみ
KD05	土師器	不明	(2.4×2.1)	0.7	前回調査SD01の続き。 水路？
KD06	土師器、石器	古墳中期	3.5×4(壁の残存規模) 4×7(柱穴範囲も含む)	0.2	検出面に焼土2箇所。 柱穴４本並ぶ。
KD07	なし(上層から土師器)	不明	8.7×0.8	1.1	加工段の上層に整地土？
KD08	弥生土器、土師器	奈良・平安	(4.4×2.5)	0.5	KD09に切られる
KD09	須恵器	奈良・平安	4.05×(1.85)	0.25	SI04を切る
KD10	なし	不明	6.26×(2.0)	0.6	SI02を切る。幅広の壁帯溝がめぐる。
SD03	弥生土器	弥生後期	4.55×1.45	0.2	SI01を切る
SD04	石器	不明	(9.1)×0.6	0.17	SD05に切られる
SD05	土師器	古墳中期	7.08×1.1	0.2	
SD06	土器小片	不明	3.5×0.5	0.1	L字形。上面に土器溜り１。
SD07	土器小片	不明	7.8×0.85	0.15	
SK01	縄文土器	縄文後期中葉	0.61×0.56	0.14	上面に石２つ伴う。
SK02	石皿	縄文	0.58×0.44	0.25	
SK03	土器	縄文？	0.74×0.52	0.2	
SK04	縄文土器、石器	縄文	1.25×11.5	0.21	
SK05	なし	縄文？	1.82×1.7	1.4	落とし穴
SK06	土器小片	縄文？	1.62×1.5	1.68	落とし穴
ピット群	弥生土器	弥生後期	(5.7)×(3.75)	0.1	L字形の溝。住居跡か？
土器溜まり1	土師器、石器	古墳中期	1.1×0.7		SD06の上面
土器溜まり2	土師器、須恵器、石器	古墳中期	0.9×0.8		SI05の上層

(　)は残存値

第19表　勝負遺跡出土石材数量表

		1区	2区 (SI01除く)	3区	4区	試掘	SI01	計
黒曜石	製品	0.5g(1)	9.4g(3)	0.73g(1)	15.07g(8)		83.9g(20)	109.6g(33)
	石核				45.68g(6)		61.9g(4)	107.58g(10)
	UF,RF			24.57g(1)	12.58g(3)		11.6g(6)	48.75g(10)
	剥片	4.35g(4)	26.51g(11)	11.87g(5)	187.61g(86)	8.5g(2)	232.7g(177)	471.54g(285)
	計	4.4g(5)	35.91g(14)	37.17g(7)	260.94g(103)	8.5g(2)	390.1g(207)	737.47g(338)
サヌカイト								
	製品			1.07g(1)	28.65g(3)		20.2g(2)	49.92g(6)
	剥片				6.22g(6)		8.9g(19)	15.12g(25)
	計			1.07g(1)	34.87g(9)		29.1g(21)	65.04g(31)

(　)は点数

第20表　ＳＩ０２ピット・土坑計測表

旧番号	ピット名	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
	中央ピット	1.46	1.12	0.58			前回調査検出分。二段掘り。 ２本の溝がのびる。
	P1	0.48	0.39	0.71			前回調査検出分。主柱穴。
	P2	0.5	0.3	0.68			前回調査検出分。主柱穴。
	P3	0.74	0.31	0.09			前回調査検出分
	P4	0.57	0.56	0.84			前回調査検出分。主柱穴。
P1	P5	0.4	0.39	0.29	20.51	20.22	
P2	P6	0.34	0.31	0.38	20.54	20.16	主柱穴？
P3	P7	0.29	0.29	0.25	20.6	20.35	

第21表　ＳＩ０３ピット・土坑計測表

旧番号	ピット名	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
	中央ピット	1.03	0.8	0.64	20.93	20.29	二段掘り。
	P1	0.46	0.42	0.53	21.07	20.54	柱痕跡径18cm。
	P2	0.37	0.34	0.48	20.98	20.5	根撹乱が入る。深さは撹乱部分除く。 柱径約20cm。
	P3	0.45	0.41	0.4	20.96	20.56	柱痕跡径19cm。
	P4	0.4	0.36	0.58	21	20.42	柱痕跡径21cm。

第22表　ＳＩ０４ピット・土坑計測表

旧番号	ピット名	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
	P1	0.55	0.54	0.78	15.89	15.11	柱痕跡径22cm。
	P2	0.5	0.44	0.78	15.94	15.16	柱痕跡径25cm。
	P3	0.44	0.4	0.31	15.92	15.61	
	P4	0.3	0.27	0.2	15.36	15.16	
	P5	0.42	0.35	0.22	15.5	15.28	

第23表　ＳＩ０５ピット・土坑計測表

旧番号	ピット名	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
P6	P1	0.43	0.35	0.43	11.31	10.88	主柱穴
P3	P2	0.35	0.31	0.38	11.44	11.06	主柱穴
P1	P3	0.3	0.3	0.44	11.47	11.03	主柱穴
P2	P4	0.3	0.26	0.5	11.45	10.95	主柱穴
P11	P5	0.98	0.7	0.53	11.47	10.94	両脇に溝をともなう
P11	P6	0.68	0.59	0.18	11.47	11.29	
P12	P7	0.79	0.54	0.31	11.5	11.19	方形ピット。
P7	P8	1.19	0.87	0.54	11.3	10.76	方形ピット。底面より台石出土。
P8	P9	0.88	0.66	0.32	11.36	11.04	方形ピット。底から多量の炭化物。
P5	P10	0.95	0.54	0.3	11.36	11.06	方形ピット
		0.25	0.23	0.17	11.06	10.89	P10内の円形ピット
P14	P11	1.04	0.56	0.15	11.45	11.3	
P15	P12	0.65	0.45	0.52	11.4	10.88	
		0.28	0.23	0.21	10.99	10.78	P12内のピット
P10	P13	0.72	0.42	0.55	11.4	10.85	
		0.44	0.2	0.06	10.88	10.82	P13内のピット
P4	P14	0.29	0.28	0.34	11.45	11.11	
P21	P15	0.26	0.25	0.22	11.43	11.21	
P18	P16	0.2	0.19	0.09	11.44	11.35	

第24表　ＫＤ０６ピット計測表

旧番号	ピット名	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	検出面標高(m)	底面標高(m)	備考
P4	P1	0.29	0.26	0.17	13.38	13.21	
P3	P2	0.28	0.25	0.14	13.3	13.16	
P2	P3	0.32	0.26	0.37	13.27	12.9	
P1	P4	0.42	0.29	0.38	13.2	12.82	
P5	P5	0.33	0.29	0.43	13.05	12.62	
P6	P6	0.35	0.26	0.39	13.07	12.68	
P7	P7	0.21	0.19	0.16	13	12.84	

写　真　図　版

南外２号墳・勝負遺跡　遠景（南から）

南外２号墳・勝負遺跡　遠景（南東から）

図版２

南外２号墳・勝負遺跡　遠景（北西から）

南外２号墳・勝負遺跡　遠景（真上から）

南外 2 号墳墳丘（南から）

南外 2 号墳墳丘土層（北西から）

図版４

南外２号墳墳丘南北土層（北西から）

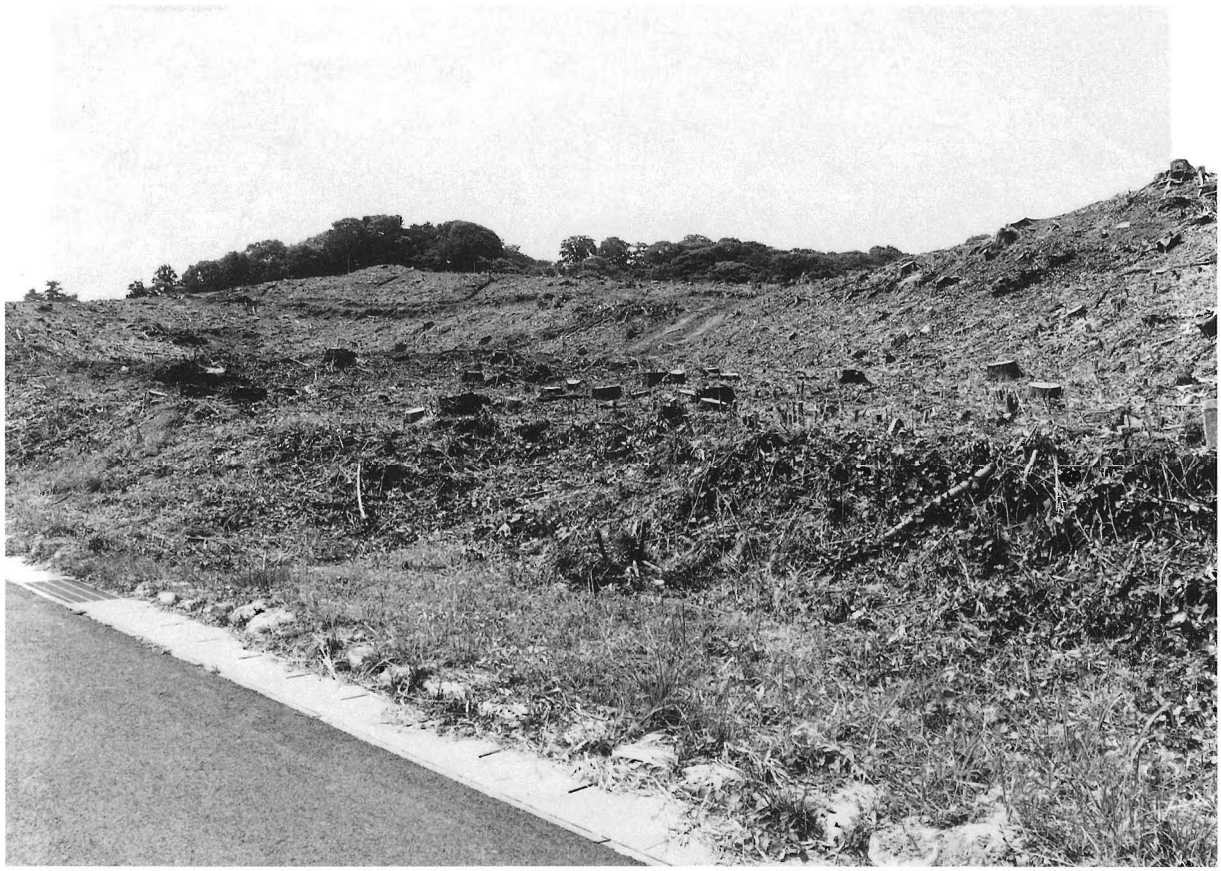
南外２号墳墳丘東西土層（南から）

勝負遺跡ＳＩ０１炉跡検出状況遠景（北東から）

勝負遺跡ＳＩ０１炉跡土層（北から）

図版 6

南外２号墳・勝負遺跡　遠景（北西から）



南外２号墳・勝負遺跡調査前近景（北から）

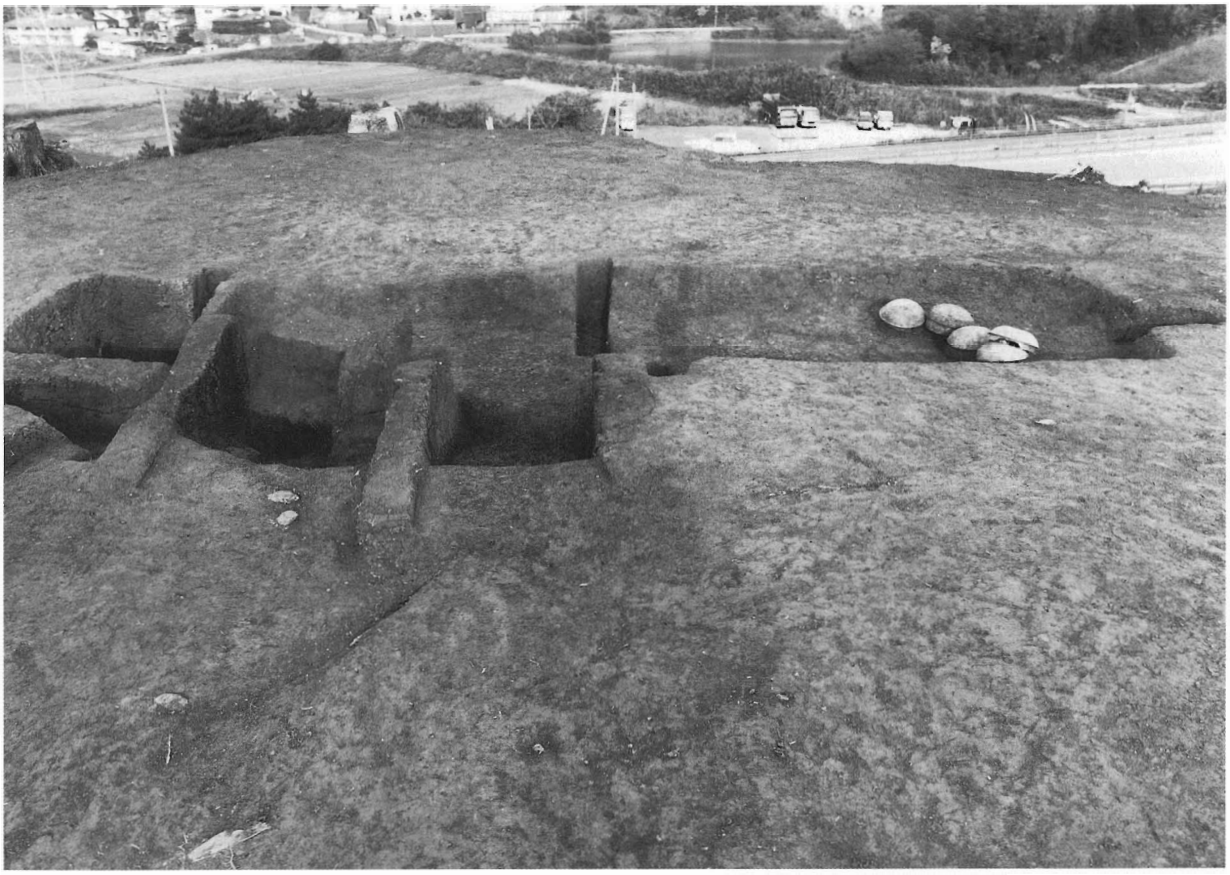
南外 2 号墳調査前近景（北から）

南外 2 号墳墳丘（南から）

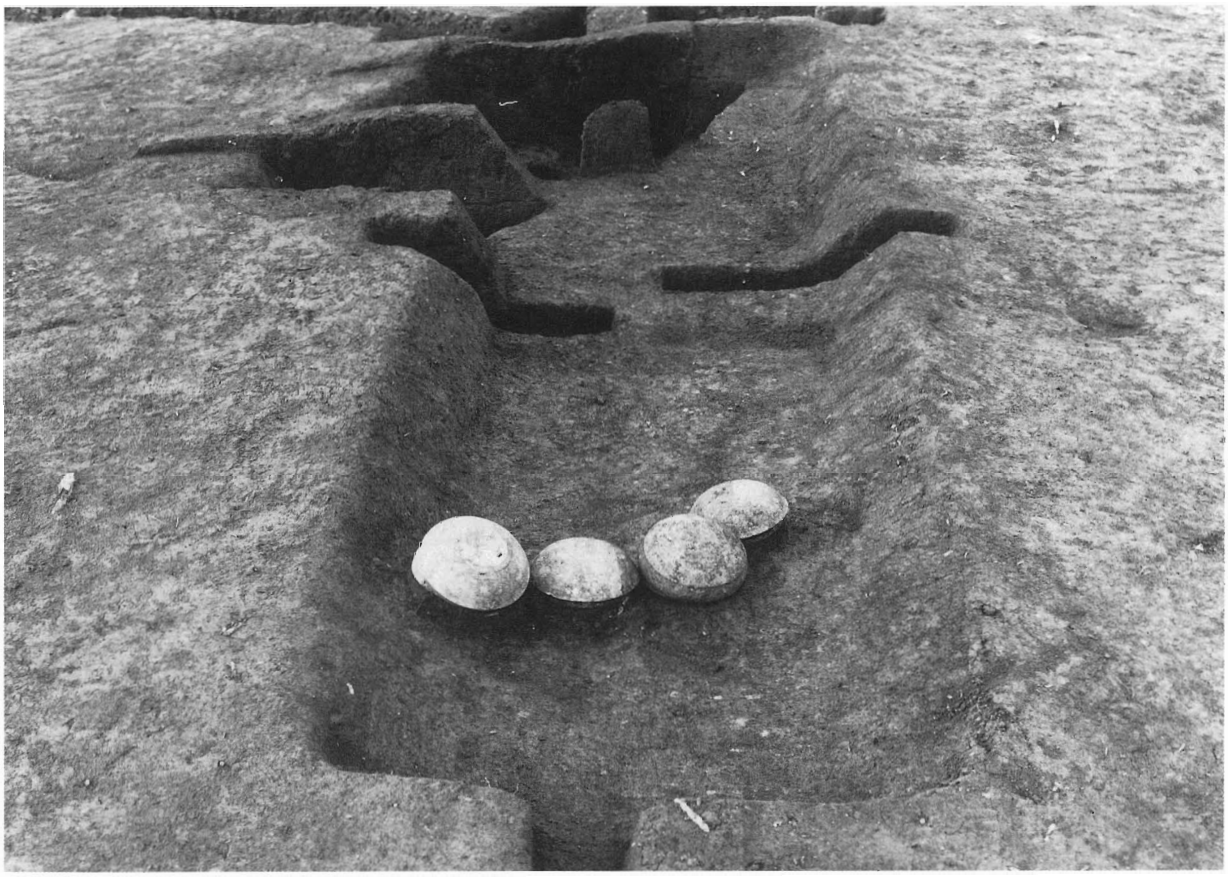
図版 8

南外 2 号墳主体部検出状況（南から）

南外 2 号墳主体部内須恵器出土状況　遠景（南から）

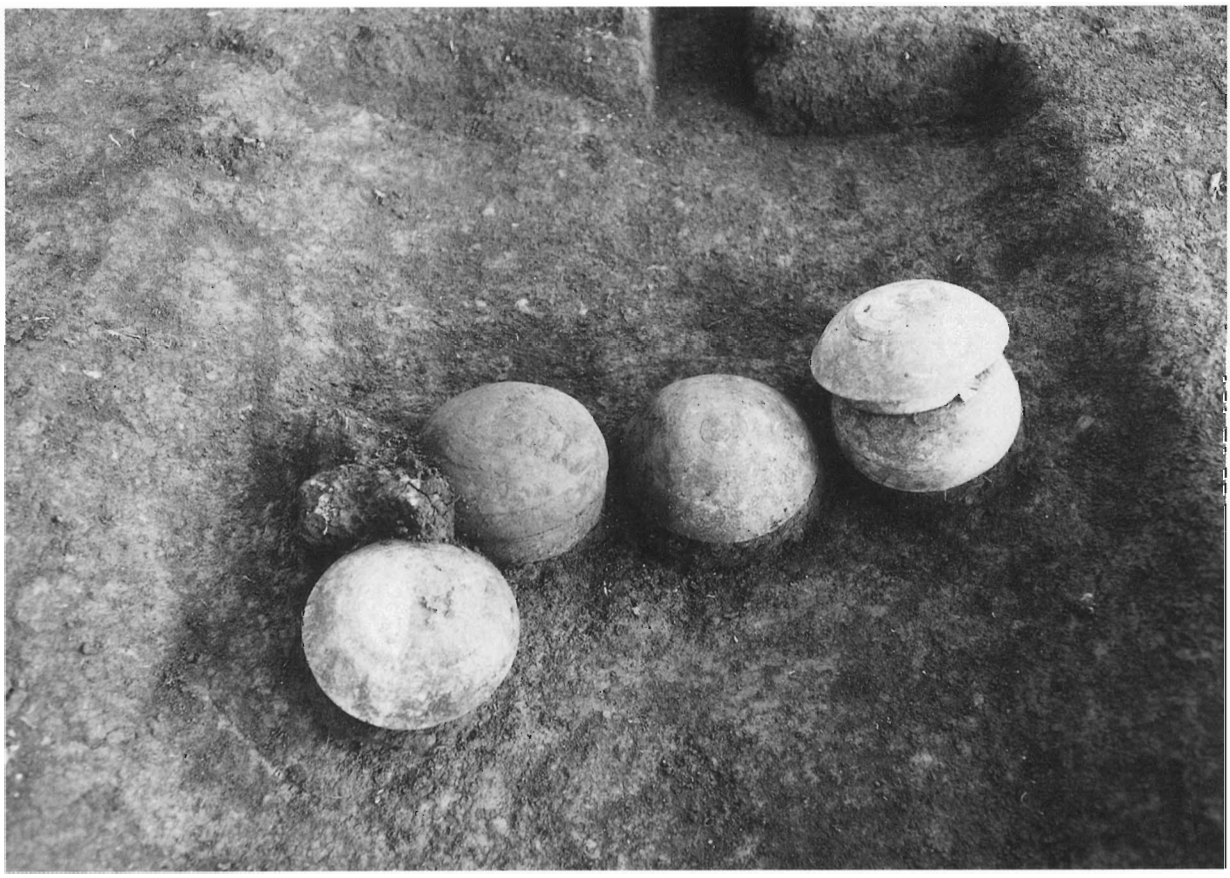


南外 2 号墳主体部内須恵器出土状況（西から）



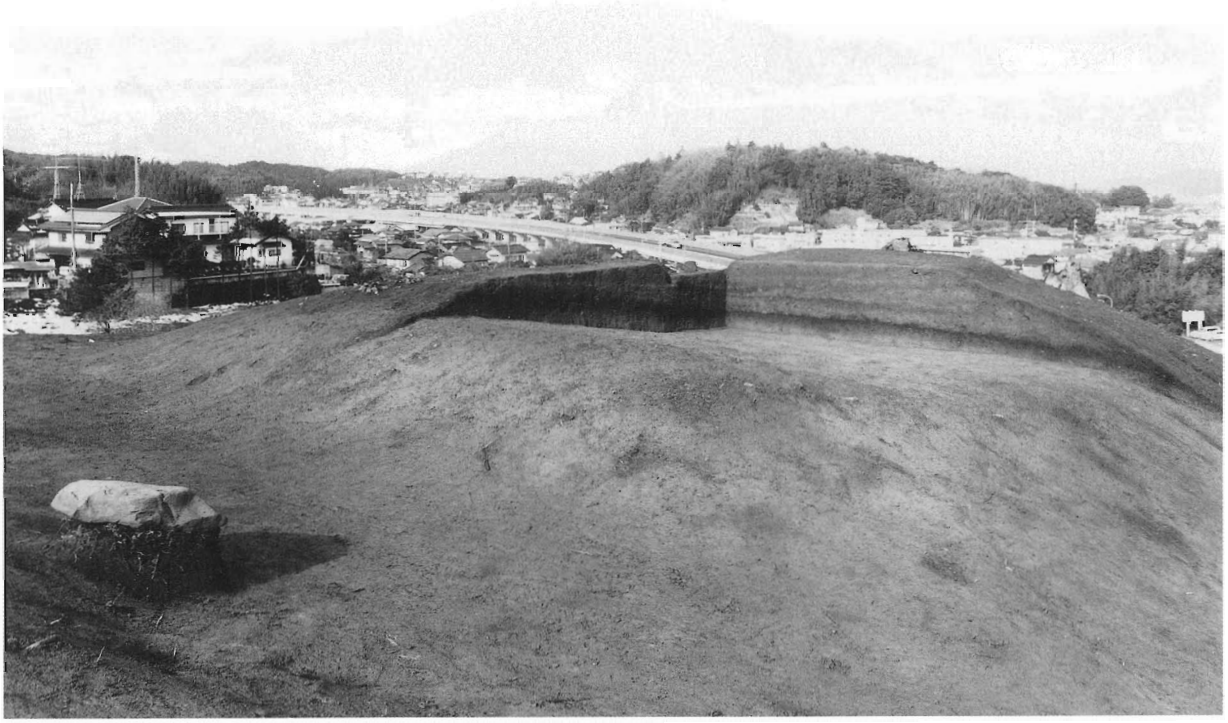
南外 2 号墳主体部内須恵器出土状況（南から）

図版10



南外２号墳主体部内須恵器出土状況　近景

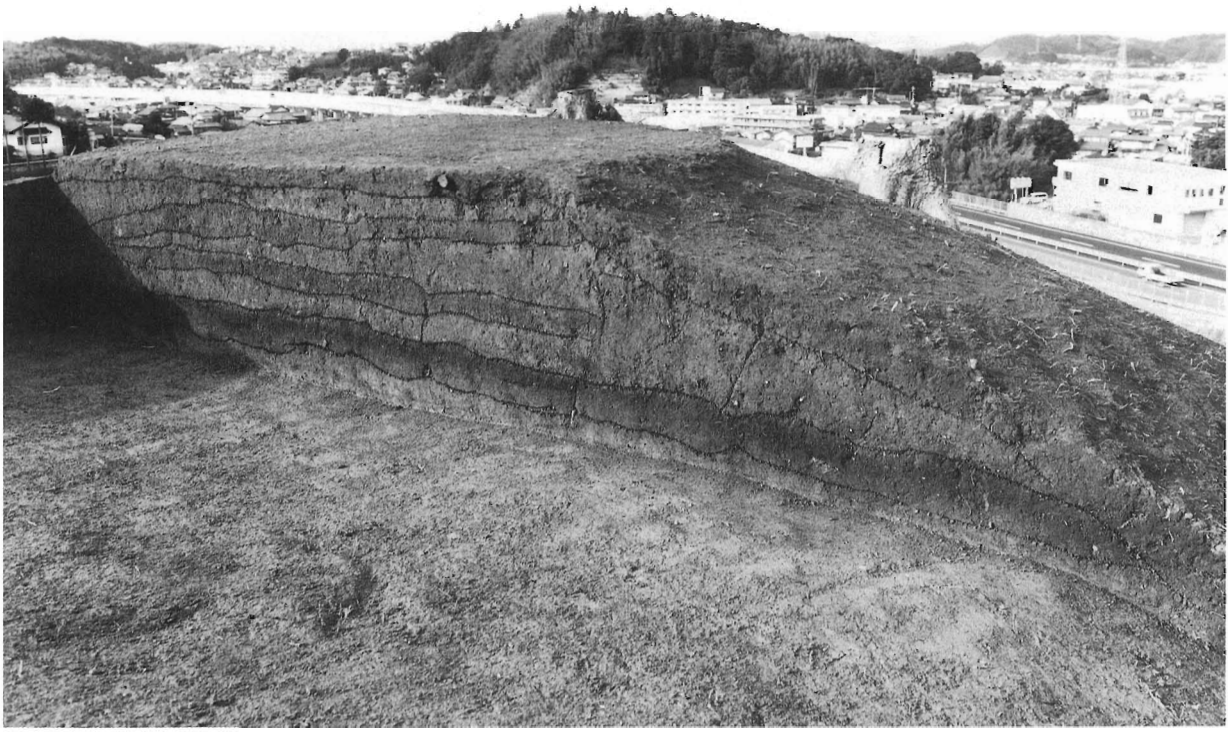
南外２号墳墳丘土層（南東から）



南外２号墳墳丘土層（北西から）

南外２号墳墳丘南北土層（北西から）

図版12



南外２号墳墳丘東西土層（南から）

南外２号墳墳丘東西土層（北から）

南外２号墳南側墳裾土層（東から）

南外２号墳西側墳裾土層（北から）

図版14

南外２号墳東側墳裾土層（南から）

箱式石棺（北から）

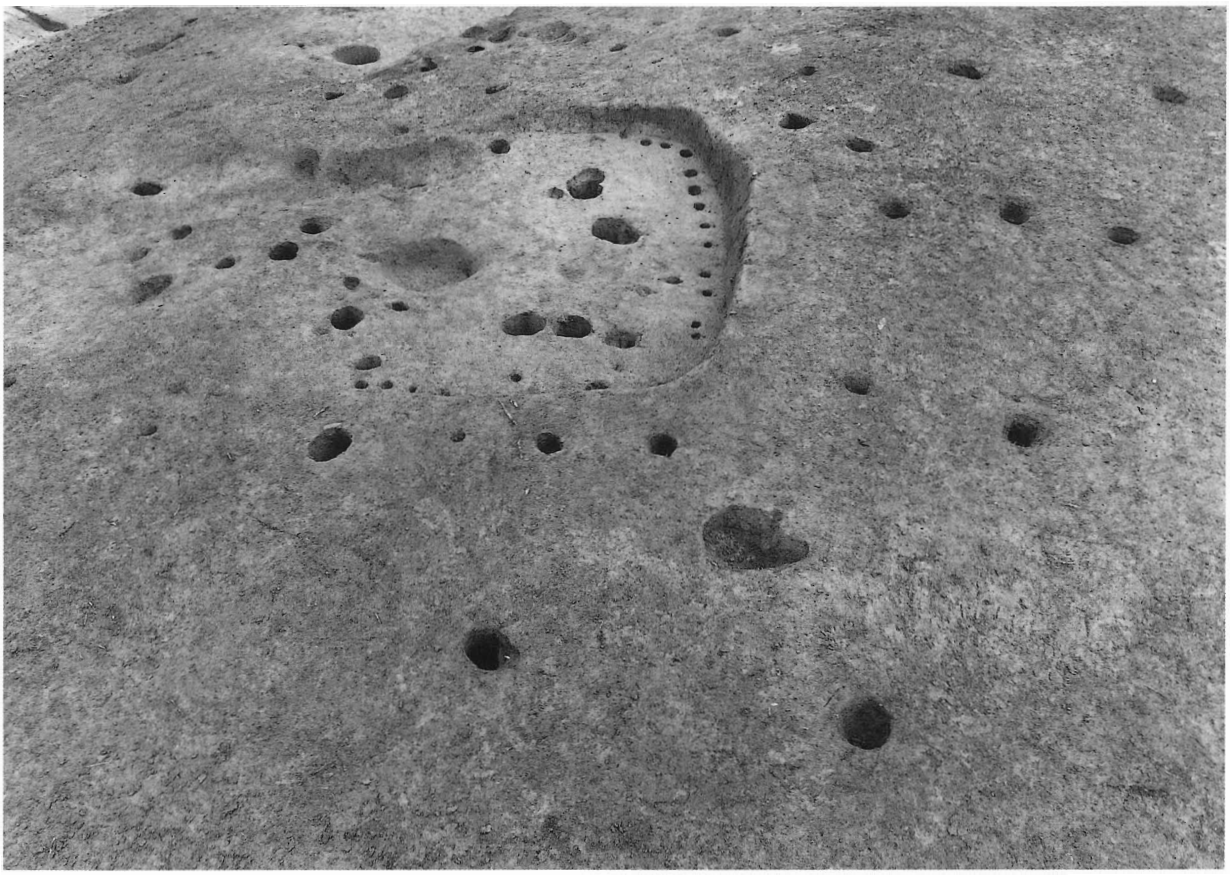
勝負遺跡３区完掘状況（西から）

勝負遺跡３区完掘状況（北西から）

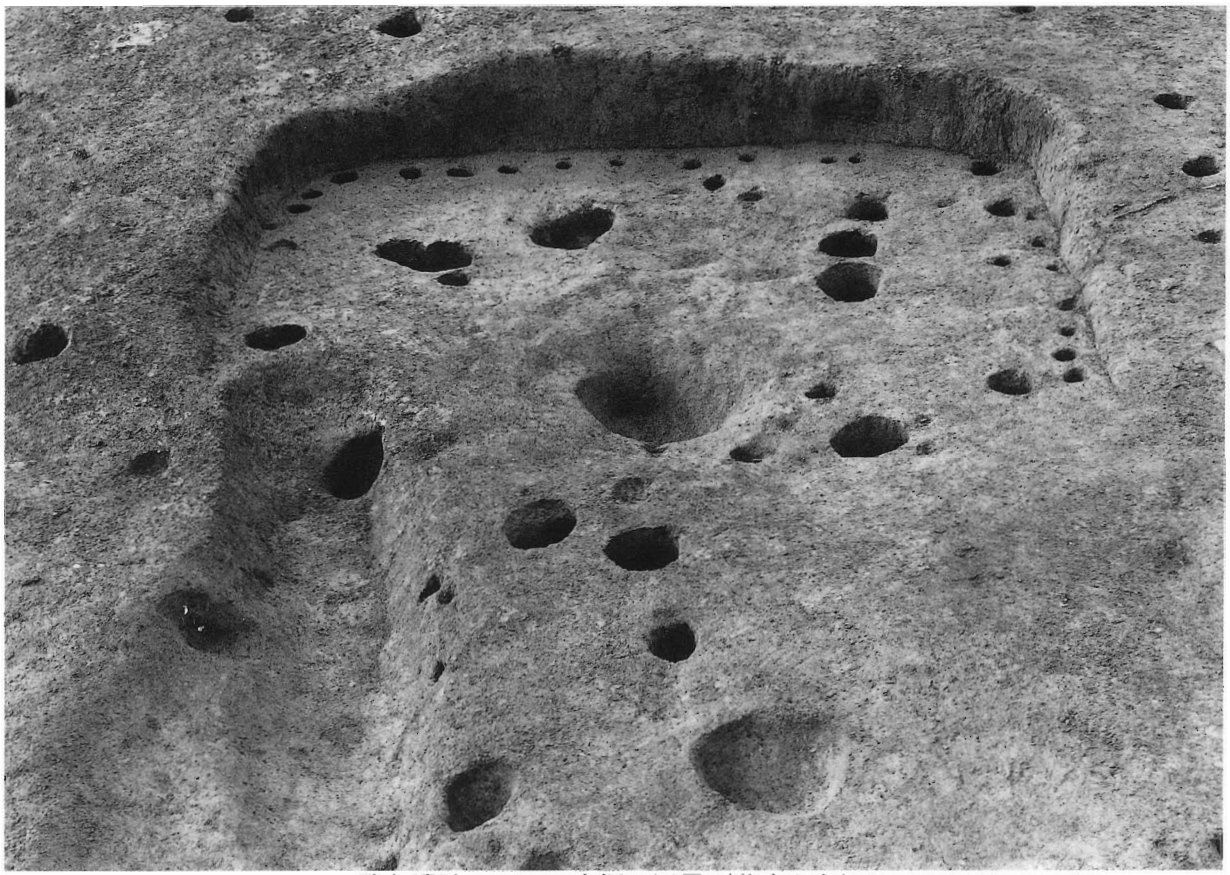
図版16

勝負遺跡４区完掘状況（東から）

勝負遺跡２区完掘状況（南から）



勝負遺跡ＳＩ０１完掘（北西から）



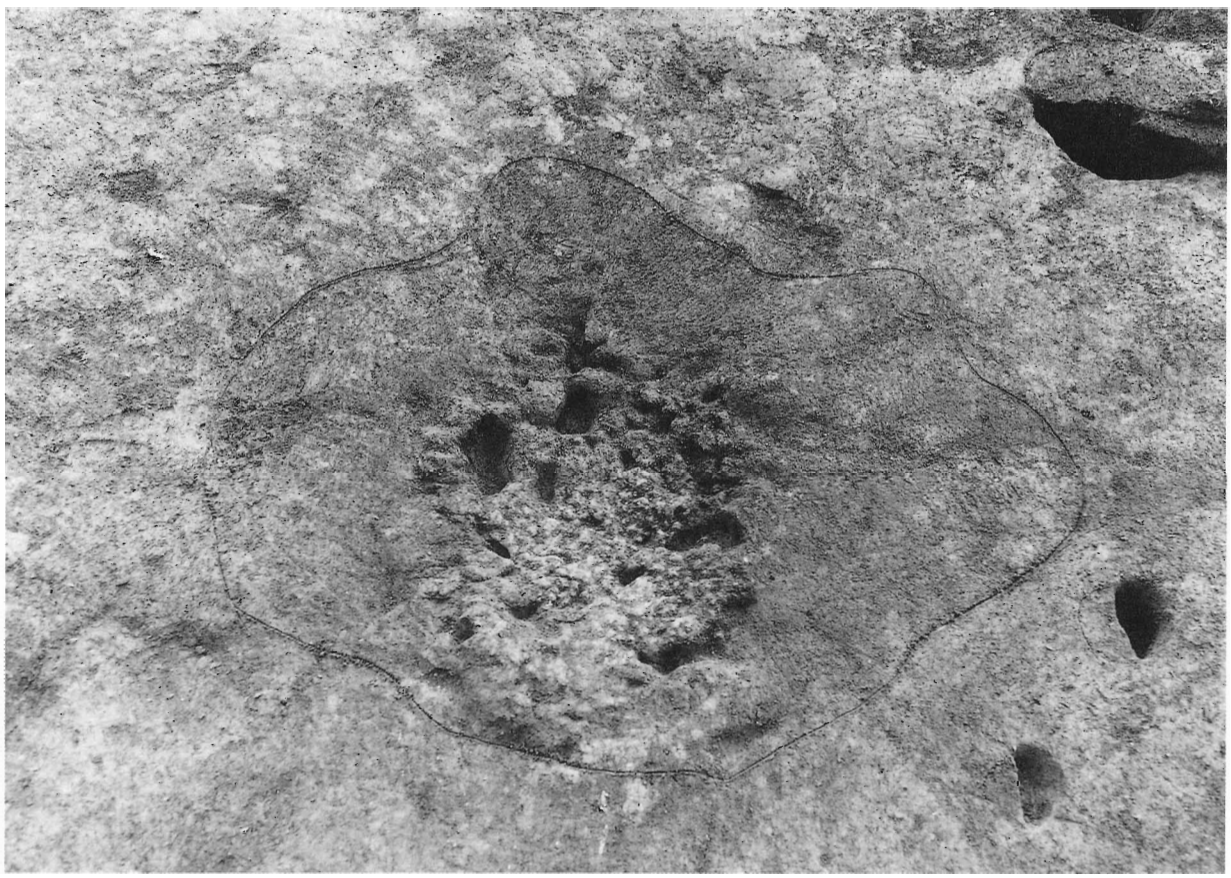
勝負遺跡ＳＩ０１完掘　近景（北東から）

図版18

勝負遺跡ＳＩ０１遺物出土状況（北東から）

勝負遺跡ＳＩ０１土層（東から）

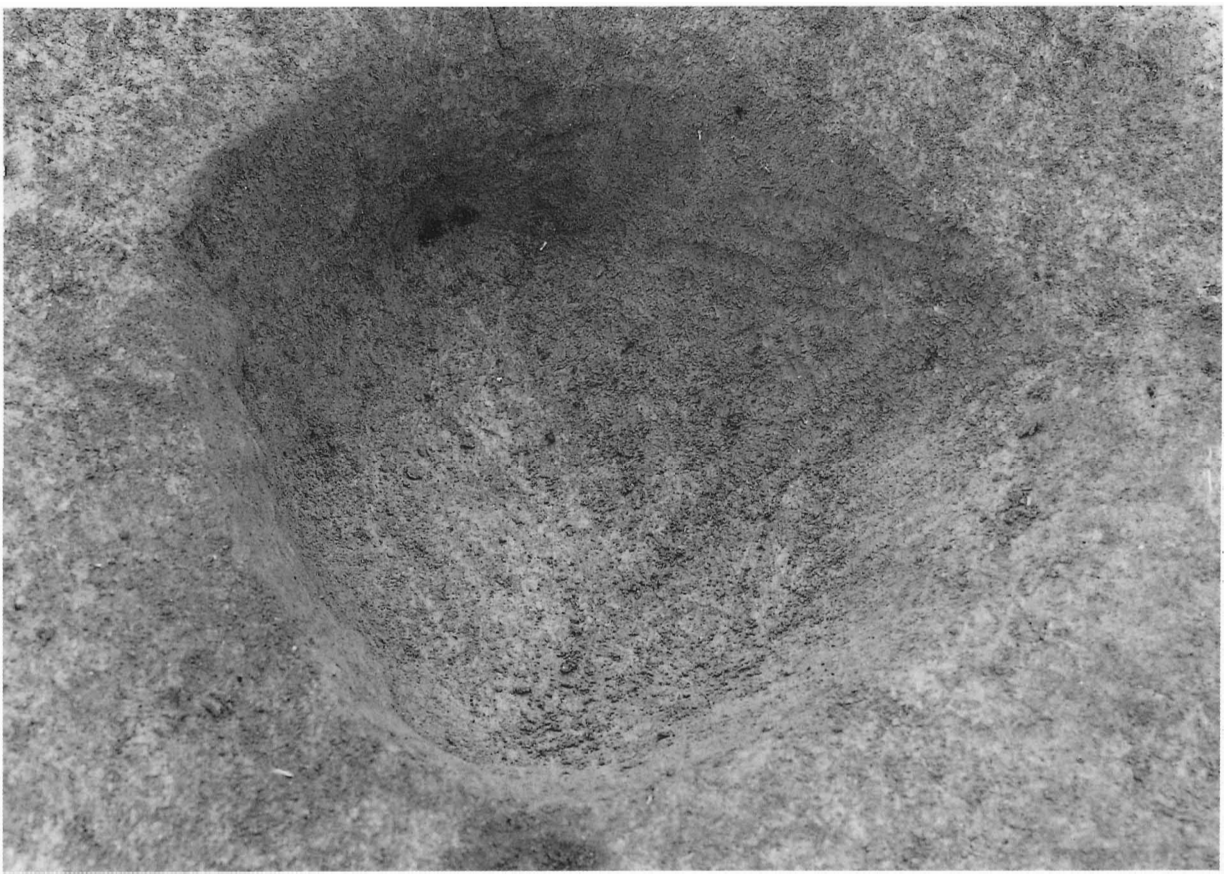
勝負遺跡ＳＩ０１炉跡検出状況遠景（北東から）



勝負遺跡ＳＩ０１炉跡検出状況近景（北東から）

図版20

勝負遺跡ＳＩ０１炉跡土層（北から）



勝負遺跡ＳＩ０１炉跡完掘状況（北東から）

勝負遺跡ＳＩ０２完掘状況（北西から）

勝負遺跡ＳＩ０２遺物検出状況（北西から）

図版22

勝負遺跡ＳＩ０２遺物検出状況　近景（南から）

勝負遺跡ＳＤ０１土層（西から）

勝負遺跡ＳＩ０３完掘状況（北西から）

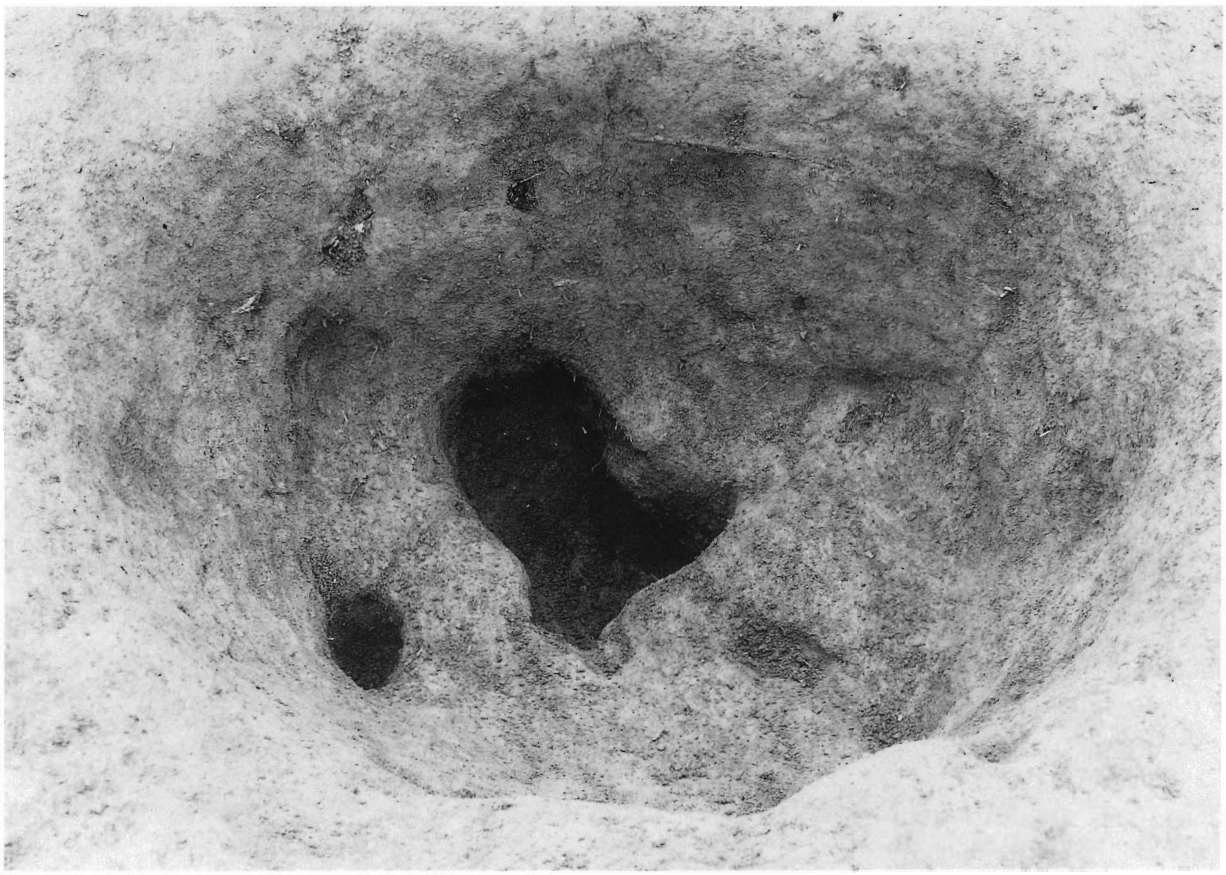
勝負遺跡ＳＩ０３東西土層（南から）

図版24

勝負遺跡ＳＩ０３南北土層（南東から）

勝負遺跡ＳＩ０３中央ピット遺物出土状況

勝負遺跡ＳＩ０３中央ピット土層



勝負遺跡ＳＩ０３中央ピット完掘状況

図版26

勝負遺跡ＳＩ０３土器出土状況（北西から）

勝負遺跡ＳＩ０３壁際土器出土状況　近景

勝負遺跡ＳＩ０３鉄器出土状況

勝負遺跡ＳＤ０２土層（東から）